

幻想怪奇目録 一人と天狗の奇妙な関係一

ガーヘル313

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「良かったら家に来る？」

全てはそんな一言から始まった。

ひよんなことから幻想郷に迷い込んでしまった記憶を無くした男〈箕作サンカ〉は、そこで出会った烏天狗の少女〈姫海棠はたて〉に拾われ、行動を共にするようになる。

彼は幻想郷の創造主と交わした契約によつて、あらゆる場所で発生する事件や怪異を、幻想入りした際に得た力で解決していく。だが、彼の能力と記憶には、とある大きな秘密が隠されていた――

初めて書く作品となります。お見苦しい所は多々あると思います
が、よろしく願います。

また、タグが増えたりする可能性もありますのでご注意ください。

目次

第一章 幻想入り

1話 事の始まり | 1

2話 遭遇 | 5

3話 名前 | 9

4話 片鱗・前編 | 14

5話 片鱗・中編 | 18

6話 片鱗・後編 | 22

第二章 活動

7話 変な奴 | 28

8話 開花 | 33

9話 会敵・前編 | 38

10話 会敵・後編 | 44

11話 企み | 49

12話 条件 | 54

13話 提案 | 58

14話 面倒な依頼は唐突に | 62

15話 前触れ | 66

16話 千夏 | 70

17話 共闘 | 74

18話 内緒事 | 79

19話 八目鰻 | 83

20話 たわいもない用事 | 87

21話 掃除屋 | 92

22話 ガキ | 97

23話	短い休みの終わりに	102
24話	動かない大図書館	107
25話	弾幕ごっこ	112
26話	まがい物達	119
27話	外界散策	124
28話	探し物	129
29話	悪しき物	134
30話	モヤモヤの答え	138
第三章 飢食		
31話	一休み	144
32話	月夜の大宴会	150
33話	戦術と力技	155
34話	存在	160
35話	過去	165
36話	信頼	170
37話	輝く	174
38話	狩り	179
39話	黒い粉	183
40話	夢	187
41話	閑話	191
42話	嫉妬	196
43話	魔女と、餓鬼と	200
44話	色	203
45話	不穏	208
46話	対決	212

47話 もう一つの存在

48話 名案

49話 不器用な心

50話 ささやかな平穏・1

51話 ささやかな平穏・2

52話 悪夢の果てに

53話 記念写真

54話 物忘れ

55話 急変

56話 アイノカタチ

57話 共依存

58話 最悪の再会

59話 兄様

60話 和解、そして

第四章 無血異変

61話 終わりの始まり

62話 贖罪と罰

63話 玉散る剣

64話 怪奇なる生命・前編

65話 怪奇なる生命・後編

66話 意識

67話 開戦

68話 外道

69話 怪物対怪物

70話 深層

313 309 305 301 297 293 289 285 281 277 273 270 266 262 257 253 249 245 240 235 231 226 221 217

71話	未知との遭遇	318
72話	回り出す歯車	322
73話	選択	326
74話	コルリ	331
75話	サンカノ秘密と子守歌	335
76話	アケビ	339
77話	旅は徒然	344
78話	季節外れの蛍火	348
79話	修羅の如く	352
80話	汝は鬼神なりや	356
81話	舶来の剣	360
82話	はたての駄々	364
83話	落日の下に	368
84話	返り討ち	372
85話	裁きの鉄槌	377
86話	夜明けの里、新しい日常にて	381
87話	博麗の巫女	385
88話	新たな出会い	389
89話	蝗軍	393
90話	兄弟喧嘩	397
91話	痛み	401
92話	忌むべき物	405
93話	現世への帰還	409
94話	戦闘	413
95話	一人の英雄	417

96話	希望の明星	421
97話	逆転	425
98話	終戦	429
最終話	まどろみにて	434
おまけ	奇妙な話の裏側	438

第一章 幻想入り

1話 事の始まり

とある夏の日。大きな農家の前で道を尋ねる奇妙な出立の男と、目が白く濁った老婆がいた。

男は夏場なのに長袖の白いシャツを着ており、腰には異国の外套を括り付け、黒い中折れ帽を深く被っていた。足元には、これまた黒いスーツが被せられた大型のリュックサックが置かれ、倒れないように男が手で支えている。

端から見れば怪しさ満点の格好だが、老婆は臆する事も、不審がることもなく親切に道を教えてくれた。

「ありがとうございます。初めての土地なものでして」

「困ったときはお互い様だよ」

老婆はニコリと笑みを浮かべたが、男は少し不思議に思っていた。この老婆、なぜこれ程暑いのに汗一つかかないのだろうか。自分は格好のせいもあって息も絶え絶えといった具合で、できれば今すぐにも川なり池なりに飛び込みたいくらいだった。

初めて訪れたこの地域は、盆地の為か想像以上に暑く、替えの服を購入するだけの資金も無かったため仕方なくこの服を来ているのだが、長袖の服を着ているのは老婆も同じであるため、条件はそう変わらない。

なにか暑さを耐える秘訣でもあるのだろうか？それとも昔から住んでいる事からくる、ただの慣れなのだろうか？そんな事を考えていると、もう一つ、聞きたいことを思い出した。

「そういえば、この近辺で変わった事が起きると聞いたんですが……」

男が唐突に切り出すと、にこやかな表情を浮かべていた老婆の顔が強張った。

聞いてはまずかっただろうか。老人は何をきっかけに機嫌を損ね

るかわからない。怒鳴り散らされ叩き出されるかと男は少し身構えたが、それは思い過したようで、暫しの沈黙の後、聞きたいのはこれか?といった態度と共に語りだした。

「天狗攫いの事だね?昔はよくあつたよ」

天狗攫い、というのはこれまでの旅で聞いたことのないタイプだった。大抵は土地神様やその地にいる何にも当てはまらない、所謂得体のしれない物の話だったりするのだが、今回は有名な妖怪、それも天狗である。

大当たりだと心の中でガツポーズをした男は、更に情報を引き出そうと、老婆に質問した。

「よくあつた、という事は実際に起きていたという事ですね?言い伝え等ではなく?」

「そうだよ。私も不思議な物を見たものさね」

男は目に見えて色めきだった。

「本当ですか?」

急いで手帳を取り出し、先ほどの内容を慌てて書き込んで、老婆に続けるよう促すと、老婆はゆっくりと話し始めた。

「昔とある里に迷い込んでしまつてねえ。そこには黒い羽の生えた人が大勢いたんだよ。その人達は私に気づくと、早く帰れと言つて追い出してしまった。その後もう一度そこに行こうと何度も出向いたけれど、何故かたどり着けなかったねえ」

男は食い入るようにその話を聞いていた。様々な土着のオカルト話を聞いてきたが、実際に【見た】という人が居て、そして【見た】本人が目の前にいるというこの状況はなかなかにおいしい。これは是非聞きださなくては。

「なるほど……それは一体どのあたりで?」

新たに質問すると、老婆はうーん……と黙り込んでしまった。実体

験だというなら猶更聞き出したい。のんびりと日本各地を放浪しながら生活する彼は、そういった地域でしか聞けない昔話や怪談が一番の楽しみなのである。

「ここから東へ行つた処に昔からあるトンネルがあるんだよ。そこを抜けた先で見たね」

「トンネル……」

男は東の方角を見やり、陽炎に揺らぐそれを見つめた。

あまり目は良いほうではないが、薄ボンヤリと浮かぶそれはかなり古い代物に見える。

「お婆さん、それって何年前のお話になります?」

「そうだねえ……私が坊ちゃんより少し歳下くらいの時だねえ」

(大分昔の話だな)

それだけ古い記憶だと夢やなにやらが混ざりこんで、実際に有つた事のように思い込むことがある。期待して聞いてみたが、これはハズレかもしれない。

どうしたものかと思っていると、家の方から小さな女の子が水鉄砲を片手に走ってくるのが見えた。

5〜6歳くらいだろうか。白いワンピースに麦藁帽を被るその姿は、小動物の様な可愛さがある。

「お婆あちゃん!」

「あらハルちゃん。どうしたの?」

「お母さんがスイカ切ってくれたの!一緒に食べよ!」

女の子はキャツキャとはしゃぎながら、老婆の手をぐいぐい引つ張っている。これ以上此処には邪魔になるだけだ。暇を告げさせていただく。

「お時間を取らせてしまつてすみません」

「気を付けて歩いてね。熱中症にならないようにするんだよ」

「お気遣いありがとうございます」

老婆が女の子に連れ添われながら屋敷の方へ消えていくのを見送ると、男はトンネルへ行くかどうか考えた。

幸い特に今日は予定もない。例えば老婆の記憶違いだとしても、ちよつとした散歩程度に考えればいいだけの事だ。時間は腐るほどあるし、田んぼ道を歩けば少しは涼しいかもしれない。

「散策してみるかあ……」

緩んできた異国の外套を腰にきつく巻き付けると、男は帽子を浅く被り直し、リュックとスーツを持って、のんびりと田舎道を歩き出した。

2話 遭遇

「あつついなあ」

蝉が忙しなく鳴いている中、小さな山の麓にたどり着いた男は汗をぬぐいながら呟いた。

(死にそうだ。蝉はうるさいし汗で気持ち悪いし)

ついさつきまで散歩程度と考えていた自分を殴りたい、と男は思った。田んぼ道を歩くので少しは涼しいと思っていたが、その予想は大きく外れていたのだ。

刺すような夏日を身に受け、帽子を手に取ってパタパタと扇ぐ。少しでも涼しくなればと願ったが、くたびれた帽子からは熱風が送られてくるのみだった。

ふと近くの木に蝉が止まり、けたたましく鳴き始める。

「なにがミーンだこの野郎」

馬鹿にされている気がして怒声を投げ掛けると、蝉は殺気を感じ取ったのか一声鳴いて飛んで行ってしまった。

男は急に冷静になり、ため息について汗ばんだ頭をワシヤワシヤと搔く。そして蝉相手に何を怒っているんだと呟きながら、彼は視線を前に向けた。

「おばあさんの言うトンネルって、これ……だよな？」

目の前のトンネルは一人が如何にか通れるような大きさだった。入り口はレンガ作りだが中は手掘りらしく、ゴツゴツとした岩肌が見てとれる。

更には灯りの類は無く、苔むしている上に蜘蛛の巣も張っていて、暫く使われていないのは明白だ。

「ここを通るのか……」

げんなりしながら蜘蛛の巣を払い中へ足を踏み入れる。

トンネルの中は風が吹いていて肌寒く、天井から染み出た水が地面に落ちる音が響いていた。足元には水溜りが点々とできており、時折そこに踏み込んでザブザブと飛沫を上げる。

あまり長居はしたくないので足早に抜けると、そこには人の手が入っていない森が一面に広がり、鳥のさえずりが聞こえるなんの変哲もない山の上からの風景が広がっていた。

先へ先へと続く獣道と大差ない道は、遠くに見える黄金色に染まった地域（恐らく向日葵畑）へ向かっているようだ。

「なんだ、何も無いじゃないか」

あの老婆、やはり記憶は不正確だったようだ。分かっていた結果ではあったが、男は今来た道を引き返そうと、気を落としながら振り返った。

トンネルがない。

5秒くらい思考が止まっていたが、すぐにトンネルのあった場所へ駆け寄り、岩肌を撫でた。硬くひんやりした感触が手に伝わってくるので、紛れもない現実である事が分かる。

「嘘だろ……」

男は自身を落ち着かせるため、冷静さを欠きながらも思考を巡らせて現象への理由付けを試みたが、納得の行く説明は思い付かず、とうとう頭を抱えて踞ってしまった。

よく考えてみれば、トンネルの中は坂道でもなかったのに、麓から入って山の上に出るのもおかしい。ならばここは老婆の証言した異界である可能性がある。

老婆はすぐに帰されたと言っていたが、周りには誰もいない。土地勘も無い上に人に遭遇出来るかも分からないこの場所から、一体どうやって帰れば良いのだろうか。

怖いもの見たさでとんでもない事をしてしまったと、男は後悔を募

らせた。

「そこで何をしている！この場所は人間の来る場所ではないぞ！」

不意に頭上から声がした。今度は何だと見上げると、白い山伏服に黒いロングスカートを着た小さな少女が、木の上から此方を睨んでいた。一枚歯の下駄を履いているのにどうやって上ったのか不思議だが、枝の上で器用に立っている。

(こんな山の中に女の子?)

理解が追いつかずに見上げていると、少女は木から目の前に飛び降り、威圧するように大刀を向けてきた。

(この娘……人間じゃない?)

その姿に、男は息を呑んだ。

にわかには信じがたいが、彼女には狼のような白い耳と、フワフワの尻尾が生えていたのだ。それらは時々本物のようにピョコピョコと動いて見せ、男の視線を釘付けにする。

状況からするに、彼女こそが異界の住人なのだろう。老婆が遭遇した異形とは大分姿形が違うが、少なくとも言葉は通じそうな相手である。男は対話を試みた。

「あの、トンネルを潜ったら此処に着いてしまって、僕はこっちの住人じゃないと言うか、その……」

「……こっちの住人? トンネル?」

的を射ない男の言動に、少女は怪訝そうに眉を潜めた。男は自分のおかれた状況を要点を纏めつつ、少女から矢継ぎ早に繰り出される質問に身振り手振りを交えて応えていく。

「なる程。つまり貴方は、不思議なトンネルを通って外界から幻想郷に迷い込んで帰れなくなってしまった、と」

「は、はい」

「……そうでしたか。そういう事情なら仕方ありませんね。私にも仕事があるので持ち場から離れられませんが、下山するまではお供します」

警戒こそ解いて貰えなかったが、事情を理解した少女は幾分か穏和になつてくれた。

幻想郷という聞きなれない地名は気になつたが、一先ず安全は保証されたと考えて良いだろう。

少女は大刀を腰に下げた鞆に仕舞うと、さあと手を差し伸べた。男も起き上がろうと手を伸ばそうとした―その時である。

「どうしたの？ 椀？ なんか面白そうな事してるじゃないの。その男をどうするつもり？」

不意に鈴を転がすような声が聞こえ、頭上から降り注ぐ木漏れ日が遮られた。それと共に強い風が吹き荒れ、木々が騒々しく揺れる。

「はたて様！ いいえ、違います。彼は―」

少女は驚愕した表情で、何者かへの言い訳を始めた。男も光を遮っている物が何なのか気になつて恐る恐る見上げると、上空を軽やかに羽ばたく少女と目が合った。

紫を基調とした現代的な衣装に、色素の薄い整った顔立ち。癖のなかった茶髪をツインテールに分けた少女は、一見すれば極普通の女の子にしか見えない。

しかし背中から伸びる烏を連想させる一對の黒い翼が、彼女が人ではない別種の生物である事を強く主張していた。

(夢でも見てるのか？ 僕は……)

あまりにも現実離れした光景をみた男は、考えるのを止めた。

3話 名前

「成程ね。トンネルを潜って此処に来た君が、椀に案内されて妖怪の山から下山しようとした、と」

「は、はい」

数分後。男は何故か正座をさせられていた。

事情の説明を代わってくれた少女……名を犬走椀というーは、魍魎が群雄割拠する山、通称妖怪の山を警備する白狼天狗という種族であるとの事だった。山に立ち入った人間を追い出すのがその主たる仕事らしく、最初に敵対的な態度をとったのもそのせいらしい。

一方で退屈そうに携帯を操作する黒い羽の生えた少女は椀の上司に当たるらしく、終始尊大な態度を崩さない。

「ふーん……椀、お疲れ様。この男は私に任せて、仕事に戻って良いわよ」

「えっ、しかしー」

「任せてって言うてるでしょ？ほらほら、他の天狗からサボってると思われるわよ」

椀は何か言いたげだったが、口をへの字に曲げると、刀と盾を手に取り駆けだして行った。

それを見送った男は、目の前で仁王立ちしている少女に向き直り、頭の前から爪先までざっと流し見た。

紫と黒をメインとした色調は中々派手で、椀と違って露出の多いミニスカートやハイソックス、薄い桃色のブラウスと、現代っ子らしい格好をしている。

彼女も天狗らしいが、天狗らしさを出しているのは頭に被った紫色の頭巾くらいなものである。

「なに？私に何かついてるの？」

「椀さんは白狼天狗って言ってましたけど、貴方も天狗なんですか？」

恐る恐る疑問に思っていた事を尋ねてみる。空から舞い降りて来たのがどうも信じられないがための質問だが、少女は

「そうよ、私は烏天狗。見てわからないの？まあそうよねー、幻想郷の外じゃ中々見られないから仕方ないよね」

と、さも当然のように言い放ち、大きな欠伸をしてみせた。

天狗というのは顔が赤く鼻が長い物の怪といった風貌で、山伏らしい恰好をした者を指すのだと思っていたが、目の前にいるのは翼が背中から生えている事を除けば、その辺にいる極ごく普通の少女であった。

男は更に質問した。

「幻想郷って、何です？」

「ここ？妖怪やら神やら人間やらが共存する、貴方が元居た外来に一番近くて遠い処って言われている場所。神隠しって知ってるでしょ？あれの行き先が此処」

彼女は再び欠伸をすると、多少面倒くさそうに説明してくれた。

幻想郷と呼ばれるこの地は、100年（正確な年は覚えていないらしい）程前にとある賢者によって作り出された、幻想として消えゆく者達や忘れ去られた者たちが集う場で、天狗以外にも様々な種族が暮らしているのだという。

それを聞いた男は得体の知れない環境への恐怖心は何処へ行ったのか、天狗だけでなく河童や土蜘蛛なんかもいるのか、と顔には出さず色めき立ち、そして冷静になれと感情を押し殺した。

考えてみれば帰り方が分からない事を失念していたのだ。

老婆は黒い翼の生えた天狗と思わしき人々に帰されたと言っていたので、きつとこの少女も元いた世界への帰り方を知っている、或いは知る人物を紹介してくれる筈である。

それさえ知っておけば、後は心行くまま怪異の観察が出来る夢のような環境に変化するのだ。

希望を見いだした男は、再度質問する。

「最後に一つ、此処から帰る方法を教えてください」

そう言うと、彼女は携帯を操作するのを止め、少し考える素振りをし、男の顔を舐め回すようにジツと見て来た。更には背後に回り込んだり、左腕や足を軽く触れてみたり、挙句には匂いまで嗅いできた。流石に不気味に感じて半歩後退ったが、彼女はじつと目線を合わせたままで微動だにしない。その目つきは商品を物色するような、あまり良い気のしない物だった。

そして暫くの沈黙の後、少女から語られた現実には、あまりにも酷な物だった。

「ないわよそんなの」

「へ?」

思わず間抜けな声を出してしまう。

「無い?」

「うん」

「本当に?」

「ええ。アンタはもう外には出れないわ」

「そんな馬鹿な……だってお婆さんは此処から帰って」

「そのお婆さんは神か強力な呪術でもついてたんじゃないの? 大体、アンタが此処に来たって事は外の世界の連中に忘れられてるって意味よ? 戻ってなんの特があるの?」

男は落胆したが、同時に絶望する必要はないと思った。

確かに少女の言う通り、元いた世界を今まで通り放浪した所でなんの特もない。放浪生活を一度止めて居を構えるのも悪くないだろうし、妖怪も見放題なら、話題にも事欠かないだろう。

それならどこで生活するか、それが問題だ。本当に妖怪等がいるなら、野宿しようものなら翌朝には骨になっていそうである。

とすれば人里に行くしかないのだろうか、果たして外から迷い込んだ何処の馬の骨とも知れない男を受け入れてくれる程、懐深いだろうか?

早くも手詰まりになった気がしないでもない。

「どうしたのー？黙り込んでさあ」

「いや、別に」

思考を一旦止めて顔を上げると、天狗少女は携帯電話を取り出して何やら文字を打ち込んでいた。

数百年間外と隔絶されていたこの地域にも携帯があるのかと感心したが、その携帯も濃淡のある黄色で構成されており、持ち主に負けず劣らずで派手だ。ストラップにミニチュアの筆が付いているのが、なんだかおもしろい。

男は立ち上がると、行く当てもなく歩き出した。足が痺れているせいで生まれたての小鹿のように震えるのが情けない。

「どこに行くの？」

「生活できる処を探さないと。帰れないなら猶更ー」

「なら私のところに来る？」

何を言ったのか一瞬理解できず、男は少女に聞き返す。

「今何て？」

「私の家に来る？って言ったの。頼る当てもないでしょ？」

「いいんですか!？」

渡りに船である。自称烏天狗の少女が家に来るかと言っているのは、上手くいけば天狗の生活というのも見れるかもしれないし、住みかを得られる事を意味しているのだ。

匂いを嗅いできた時点で彼女は普通ではないかもしれないが、天狗とはいえ少女の見た目である。いざとなれば倒すのも難しくは無いだろうし、この際は目を瞑る事に決めた。

「お邪魔できるならっ!？」

言い終える前に少女が素早い動きで距離を一瞬で詰め、男を抱えるようにして空へと飛び立つ。

そして息つく間も無く雲の上まで上昇し、音が遅れて聞こえてくる程の驚異的な速度で飛行を始めた。

男は人一人を軽々と持ち上げる筋力や飛行能力を見て、彼女を正真正銘の天狗であると認め、自身が抵抗した所でどうこうできると相手ではない事を瞬時に理解した。

雲の切れ目から現れる大地を見て叫ぶ。

「飛んでる!?!」

「あんまり暴れないでよねー。滑って落とすかもしれないわよ?」

「ヒッ……」

「そういえば、アナタ名前は? 同棲するんだから、それくらい教えてよね」

「名前!?!」

空中で自己紹介するのは生まれて初めてだし、ましてや宙ぶらりんである。

男は声を絞り出すようにして、その問いに答えた。

「み、箕作サンカ!」

少女は呆気にとられたように目を丸くすると、みるみる表情が明るくなり、心がときめいたのが見て取れた。

その表情はまるで、恋する乙女そのものだった。

「私は姫海棠はたて。よろしくね、サンカ!」

4話 片鱗・前編

「ねえねえサンカ、今の外の世界はどんな風なの？」

高速で空を飛翔しながら、はたてが興味津々に話しかけてくる。出会った当初の傲慢不遜そうな態度は何処へ行ったのか、急に心の距離が近づいた気もしたが、好奇心旺盛な今時の子供らしくて安心できた。

聞けば彼女は幻想郷ができる以前の風景しか知らないとの事だったので、サンカは帽子が飛ばないように押さえながら、現在の外界の風景や文化、日常を軽く教えた。

「そんな便利な世界になったのねー。一度見てみたいなあ」

「外の国の文化も入ってきてますし、違う国へ旅行に行けるんです。空を飛べる乗り物だってあるんですよ」

この服装も隣の国で手に入れたんだ、とサンカが話す。するとはたては興味深そうに聞きながら、彼女なりに気になったことを事細かに尋ねてくる。

隔離されたこの世界では、外の様子は全く分からない。外界から入ってきたサンカから話を聞いたがるのは、至極当然なのであろう。

「それで……ええと、いつまでこのままなんでしょう?」

「うーん、もうちよつとの辛抱よ。それとサンカ」

「何ですか?」

「私に敬語は禁止。良い?」

「……わ、わかった。他に聞きたい事はあるかい?」

「そうねえ、じゃあー」

はたては未知との遭遇に喜々としていたが、サンカは周囲の景色が目に入る度に身震いし、神に祈るような気持ちでいた。落ちれば即死の高さを宙ぶらりんにされて飛んでいるので無理も無いのだが、この先どうなるのだろうかとその身を案じている。

救いと言えば、おしゃべりをしている間は注意が散漫になり、恐怖

心が薄れるくらいだろうか。

そうこうしていると、話すネタも無くなってお互い無言になってしまい、気まずい空気が流れ始めた。時間だけが無駄に進む。

(き、気まずい……しかし人とマトモに談笑するなんて何時以来だろう？ああ、考えてたら頭が……)

「……ねえねえ」

「な、何？」

俄かに訪れた頭痛に苦悶の表情を浮かべると、不意に声を掛けられた。帽子を気にしつつ見上げると、はたてはサンカの顔をじっと見ていて、何故か頬が顔が赤らんでいる。まさか腕の負荷が限界に近いのだろうか。

「サンカってき、その……彼女はいたの？」

「彼女？」

いきなり何を言い出すのだ。あまりに突拍子のない質問に対して呆気にとられていると、はたてが慌てたように続ける。

「ほら、幻想郷に入って来ちゃって出れなくなっちゃったでしょ？だから外界に彼女が居たら二度と会えない訳だし、きつと可哀そうだなーって」

若干早口になりながら言うと、はたては押し黙ってしまった。突然何を言い出すのだと思っていたが、沈黙に耐えられなくなったのだとすぐに理解した。

「いないよ。居たことも——」

「じゃあ好きな人は？」

「そういう人もいないね。今のところは」

「本当に!？」

「あ、ああ」

引き気味に頷くと、不安げだったはたての顔が一瞬で明るくなる。

人の恋模様を聞きたがるのはなんとも微笑ましいが、19〜20の男の恋愛経験を聞いて面白いのだろうか。婦女子の嗜好は男では理解できない側面もあるのだなど、サンカは思う。

と、ここで悪戯心が湧いてきた。こちらが質問に答えたのだから、同じことを聞いてみる権利はこちらにもあるはずだ。

「君も好きな人とかいるのかい？」

「え？」

彼女は返答に困ってしまったらしく、暫く目を泳がせてからかそっぽを向いた。そして沈黙の後、口をパクパクさせながら声を絞り出す。

「わ、私は……私は、いい」

そこまで言いかけた時、ガクンと振動を感じて支えられている感覚が消え去った。体が反転して上を向くと、呆然とした顔のはたてと、雲一つ無く澄み渡る青空が見え、全ての物が一瞬だけ停止した。

「え？」

「あ……」

状況が理解されると共に、時間がゆっくり流れ始める。

これは落ちてるのだ。下に引っ張られるような、体が浮くような、不思議な感覚を味わいながら落ちているのだ。

解決できそうにない状況で合っても頭は解決策を探しているのか、辺りの風景がやけにゆっくりに見える。地面は刻々と迫って来ていて、瞬きを終えた直後には彼岸に立っている事だろう。

「まいったなあ」

走馬灯のように様々な光景が廻ったのち、ようやく口から出た言葉だった。短い人生だったと諦めた気持ちになると、サンカは全てを受け入れて目を瞑った。

(……あれ？止まったぞ?)

強い力が体にかかつて落ちる感覚がピタリと止んだので、ゆっくり目を開けてみると、地面すれすれで体が浮いていた。

どういうことだ？高空から落ちれば、地面に叩きつけられてバラバラになるのが普通なのではないのか。それとも誰か支えてくれているのかと思つて振り返るが、そこには誰もいない。

「ぶっ!!」

完全に単独で浮いていると認識すると、急に力が抜けて顔から地面に落ちた。痛みはするが死ぬほどではない。むくりと起き上がって顔を触ると、鼻は折れていないようだった。

「いてて……」

「何事ですか騒がしい！もうすぐ日暮れなんですから、子供は……あれ？貴方はさっきの？一体どこから……」

痛む場所をさすつていると、つい最近見た覚えのある人物が目の前に現れた。その遙か後方からはたてのように黒い翼の生えた男達が武器を持ち、何やら騒ぎ立てながらこちらに向かって見えている。

周囲を見渡すと、大通りに沿つて立派な屋敷が立ち並んでおり、やはりはたてと同じような姿の子供達や女性がこちらをじつと見ていた。

(ひよつとしてここがその……)

サンカの予想は的中していた。落ちた場所は噂に聞く天狗の里だったのだ。

5話 片鱗・中編

「何奴だ人間！……ここはお主の様な者が来る場所ではない！」

天狗の里のド真ん中。またかと思いつつ上空を見上げると、はたてが申し訳なさそうに降りてくるのが見えた。

視線を戻すと、男らは線が太く、赤くないのと鼻が高く無い処を除けば想像上の天狗そのものであった。その数6人、皆中々屈強そうである。

「落ち着いてください！……この人は——」

椀が場を鎮めようとするが、興奮状態にある男天狗達は聞く耳を持つとうとしない。その様子からすると、あまり立場は偉くないのだろう。

しかしこのまま争いが始まれば、サンカはたちまちに血祭りに上げられてしまうので、はたてが降りてくるの待ちながら、対話を試みる事にした。

「僕は箕作サンカと言います。 姫海棠はたてさんのご厚意により、此方に居候させていただくことになりました。 武器を下げてください」

「姫海棠、はたてだと？」

男らは顔を見合わせてから再度サンカを見、一笑した。

「嘘も大概にしておけ。 貴様がはたて様に施しを受けるなどあり得ぬ話だ！あの方の名を騙るとは言語道断、即刻切り捨ててくれる！」

なぜここの住人はこう血気盛んなのかと、サンカは毒づく。

既に天狗たちは仕込み刀を取り出し始めており、殺し合いを始める気は満々であった。 椀が頼りなく説得を繰り返す。

「ちよつと待って！」

もう駄目かと諦めかけたその時、はたてが天狗達とサンカの間以降り立った。 男天狗たちはどよめき、平伏する。

「痛くなかった!?怪我は無い!?!」

「あ、うん。別に平気だけど……」

心配そうな顔をしながらサンカの体の彼方此方を触れ、痛みを感じているわけではない事を確認すると、彼女はいきなり抱擁した。良い香りがする。

「良かったあ……死んじやったかと思ったよお」

息が止まるくらい強く抱きしめられ、モガモガと言葉を上手く出せない。

顔には柔らかい胸がある。大きくも小さくもない彼女の胸は、人によつては至福に感じるだろう。しかしサンカはそれを意識している暇はなかった。

(息の根が止まる!)

早く引きはがさないと窒息してしまう。そういうプレイは趣味でないし、興味もない。そこで、彼女の背中をポンポンと叩いて息がでない事を伝えると、腕の力が弱まり、離れることができた。

空気を大きく吸い込んで咳き込む。

「ゲホッ!」

「サンカ!?ごめん、苦しかった?」

「ま、まあ……」

「あの、はたて様。彼らに事情の説明をお願いしたく……」

ドン引きした様子の子の椀が距離を置きつつはたてに懇願すると、はたてはハツとした様子で我に返り、コホンと咳払いを一つしてから、困惑する天狗達へと話した。



「そういう事でしたら……」

天狗達は2、3言話すと、渋々納得したと言わんばかりの表情を浮かべ、サンカを見る。彼らは仕込み刀を仕舞うと、苦虫を噛み潰した顔のまま、一人、また一人と家々へ消え、椀も安堵して何処かへ歩いていった。

「驚かせてごめんね。私の方からきつちり言っておいたから、安心していいよ」

「あ、うん。はたてってさ、此処だとそんなに偉い人なのかい？さつきも……」

その事か、とはたては説明をしてくれた。

「私、こう見えてもこの天狗の里の長である大天狗、天魔様直属の部下だから」

聞けばはたての他にもう一人、文という人物もいるとの事である。彼女らは天狗たちを纏める、言わば幹部の様な役割を持つ立場なのだそう。だ。「何かされたら私に言ってね」とは、はたての談である。

「さ、行きましょ。案内するわ!」

一段落すると、彼女はサンカの手を引いて上機嫌に歩き出す。サンカは御伽噺の世界を目に焼き付けるべく、瞬きすら惜しんで周囲を見渡した。

(思っていたより大きいところだな)

建築物はどれもしつかりした作りとなっており、予想よりは近代的であった。

ただ、通りに面した家が窓に蓋をして、中がわからないようにする所を見る度に、思わず嫌な顔をしてしまう。歓迎されないのは当たり前だろう。よそ者、ましてや人間なのだから。

(得体が知れない、か……うん?)

と、無数の気配が背後から近づいてくるのが分かり、足を止めてみる。振り向くと、丁度子供達が水瓶等の物陰に隠れるところだった。

「あの、ちょっと待っててくれ」

「え？うん、いいけど」

思い出したように背負っていたリュックサックを降ろして中を漁ると、外の世界で買ったばかりのドロップ缶を取り出して、硬貨を使いつつ開封する。

缶には色とりどりの果物が描かれており、はたては幻想郷にはないその不思議なものを良く見るために、隣に座って目を輝かせた。

「それは何？」

「飴だよ。ドロップとも言う」

「どろっぷ？」

カラカラと振って見せると、隠れている子天狗達においでおいでと手招いた。子天狗達が恐る恐る寄ってくると、子供達に手を出すように指示し缶を傾ける。

そしてカラフルなドロップが手の上に転がり出ると、わあつと声が上がった。残念ながらハツカ味はお気に召さないらしく、大量に手元に残った。

「これあげるね」

「いいの？」

「うん。いっぱいあるから」

「ありがとう！人間のおじちゃん！」

「おじちゃんって……」

子供は悪気なくお礼を言ったつもりだろうが、サンカはおじさんか、と思わず苦笑いする。何気ない風景なのだが、はたてはそんな彼の横顔を、一人複雑そうな面持ちで見ていた。

6話 片鱗・後編

はたての家に到着した頃には日の光は傾き始めており、辺りは薄暗くなっていた。

彼女の家は一人で暮らすには広々としており、とても片付いていた。縁側からは幻想郷を一望でき、所々明かりの灯っている場所も見取れる。あの場所は人里だろうか。

「ありがとう。助かるよ」

「いいのいいの。さ、ゆっくり寛いでね！」

案内された部屋に荷物を置いて楽な姿勢をすると、彼女はお茶を注いで出してくれた。茅葺屋根で天井の高い室内は涼しく、熱いお茶がとても美味しく感じられる。

(今日は随分と忙しかったな)

一日に起きた出来事を纏めて整理しようとしたが、やはり自身の常識という点では理解しがたいのもあって、頭は思考の途中で一点の疑問に集中し始めた。

それは、落ちれば即死の高度から落下したのに、何故無傷でいられたのかだ。はたてが何かした訳でもなさそうだし、そもそもあの奇妙な現象は自分自身で発生させたような気がしてならないのだ。

人間の脳は現状では半分程度しか力を発揮していないとどこかで読んだ本に書いてあった覚えがあるが、果たして空中浮遊が可能な程の力があるのだろうか。気になりはしたが、残念ながら超能力の類には疎いので答えが出てこない。

「夕ご飯作ってくるから、サンカは少し待っててね」

はたてが考え込む彼に言う。見ると浮足立った様子で割烹着を着こんでおり、その姿はどこか初々しさが感じられる。心なしか嬉しそうだ。

だが、家に住まわせてもらうなら家事の一つや二つ手伝わなければ

いけないだろう。全て家主の彼女に押し付ける程凶々しくはない。

サンカは口を尖らせる彼女を説得すると、サイズの合わない割烹着を中途半端に着て、調理場へと向かった。

「さてと。献立はどうしようかな」

釜土の前に立って、軽く伸びをする。自炊は何度もしているので、幸いにも料理には自信があるのだ。流れるような動作で米を炊き、丸々と太った川魚を調理する。

折角なら彼女が食べた事の無いであろう料理にしてあげようと、リュックサックから調味料を取り出し、炊事場へと持っていく。

「美味しそうな匂いね。何を作っているのかしら？」

「ああ、これは――」

つい質問に答えそうになったが、この声ははたてではない。どこからだ、と声の主を探したが見つからない。空耳だろうか。

「こつちよ。こつち」

また聞こえた。場所は米を炊いている釜からのようだ。まさかと思いつつ蓋を取ると、

「初めまして」

西洋人形のような美しい金髪の女性が居た。咄嗟に窯の蓋を音を立って閉め、落ち着こうと深く息を吐く。なぜ窯の中に女がいるのだ。ひよつとすると見間違いかもしないと判断し、再び窯の蓋を開けると、そこには綺麗に炊けた御飯があるのみである。女性はどこにも見当たらない。

「気の……せいか。気のせいだよな、うん」

疲れて幻覚を見た、そうに違いない。サンカは自分に言い聞かせながら、作業へ戻った。



「お待ち遠さま。ご飯できたよ」

「わあ！人が作ったご飯って何年ぶりだろ〜」

「口に合うと良いんだけど」

「美味しそう……なんて料理なの？」

食事を膳に並べて運ぶと、はたては既に座って待っていた。一つ一つ丁寧に説明すると、彼女はそれを聞きながら手元にあった紙に料理の名前を書き込み、食事に手を付ける。

瞬間、目が輝き、驚きの声を上げる。

「こんなに美味しい食事初めて食べたわ！どこで覚えたのこれ!?!」

「海を跨いだ向こう側の国だよ」

どうやら気に入ってもらえた様だ。かなり早いペースで食べ進めている。

サンカはそれを見ていると、どうしてか心に空いた穴が埋まって行くのを感じ、自然と笑みが零れた。

「あ、初めて笑った」

「え？そっかな……」

笑たのは何年振りだろう。自身も食事に手を付けつつ見つめていると、後ろの空間から女が音も立てずに現れた。サンカは窯の中の女だと認識した瞬間、後ろへ飛びのく。

「うおっ!!」

「?どうしたの?」

「う、後ろ……」

振り向くと、少し驚いた顔をした後、何かマズい物を見た表情へと変わる。

「ゆ、紫」

「久しぶりね。はたて」

顔見知りのようだ。紫と呼ばれた女は空間に開いた隙間から上半身を乗り出してフワフワと浮いている。

「最近また誰か隙間を通って入ってきたみたいだから見に来てみれば、貴方が匿ってたのね」

「な、何の用よ」

「別に？ちよつと様子を見に来ただけよ」

「は、はたて、誰なんだこの人は？」

サンカの問いにはたてではなく、女が答える。

「私は八雲紫。この幻想郷を作った賢者の一人よ」

彼女が話聞いたこの地の創造主なのか、とサンカは納得した。それならこの怪奇な能力にも納得がいく。とすれば、この世界からの出かたも何かヒントに生り得る事を知っているのではないだろうか。

「八雲さん」

「紫でいいわ」

「では紫さん。貴方はここを作ったんですね？ここから出る方法は何か知っていたりしませんか？」

「出る？それは――」

そこまで言いかけた時、はたてが紫の口を押え、奥の間へと連れて行った。暫くして二人が戻ってくる。

「出る方法だったわね。それは存在しないわ」

やはり出ることは不可能なのか。落ち込んでいると、紫は話しを繋げた。

「完全に出ることは出来ないわ。でも時間制限付きで、一時的であれば外界に帰れる」

「本当ですか!？」

思わず立ち上がると、紫はサンカに小さな御符を渡した。蠟燭の光

に当ててみると、相当古い物らしく、字が掠れて読めない。

「それがあれば1日程度出ることができるわ。でもそれを過ぎた場合、貴方は体が風化し死に至る。幻想の者になった宿命よ」

死亡するリスクはあるが、一時的に外へは出られるのだ。これを調べつくせば、完全に外へ出る方法も見つかるだろう。

「そ、そうだ。お風呂沸かしておいたのよ。良かったら入ってきて」

「え？ああ、それはありがたいけど、紫さんにお礼を――」

「入ってきて」

殺気を感じ、サンカは若干たじろいだ。相手は少女といえど天狗である。大人しく従った方が無難だろう。

「な、ならお言葉に甘えて」

サンカは着替えを取りに、走るようにして自身にあてがわれた部屋へと消えて行った。それを見送ったはたては一際大きなため息を吐いて、紫を睨む。

「アンタ、私の邪魔をするわけ？」

「そんな事無いわよ？でも、こんな強引なやり方じゃあの子は振り向いてくれないかもしれないわね」

はたては歯を食いしばった。仮にも幻想郷の創造主でもある紫に歯向かえば、存在を消されてしまう。そのことは彼女が一番知っていた。それを見透かしたように、紫は気味の悪い笑みを浮かべる。

「まあ、貴方がこの100年間彼を探してようやく引き込んだ訳だけれども、彼は貴方どころか、自分が何であったかも忘れているみたいね」

「……………うるさい」

「私の張った結界まで歪めて……………何故そこまで彼に執着するの？」

「うるさい!!」

家が揺れ思える程の大声で怒鳴る。その形相は、先ほどまで幸福そうな表情を浮かべていた少女と同一とは思えなかった。

「……まあ、私は貴方が彼をどうしようかと気にも止めないけれど。精々気を付けなさい。彼は唯一の生き残りよ」

紫は空間に隙間を作り出すと、影と同化するかのように消えて行った。

「……」

一人残されたはたては、サンカが使った箸を手に取り、火の光に当てる。まだ少し唾液が付いている箸は、光が反射しキラキラと光を放っていた。

「やっと見つけた。サンカは私の物よ……誰にも渡さないわ」

誰もいない居間で、はたては静かに、しかし不気味に笑った。

第二章 活動

7話 変な奴

朝だ。

首を動かして時計を見ると、針は7時を指している。顔を搔きつつ欠伸をしながら起き上がると、昨日のはたての冷たい視線と声を思い出して、肌寒くも無いのに身震いした。

あれは何だったのだろうか。自分に聞かれてはまずいことだったのか、それとも単に二人で会話しなかったのか。どちらにせよ、彼女は紫との仲があまり良くないようだ。

(顔洗ってこなきや)

サンカは丁寧に布団を畳むと、縮こまった体をほぐして顔を洗い、着替えを済ませて居間へと向かった。先程から良い香りがしており、空になった胃がひもじさを訴え始めている。

「おはよう」

「おはよー！よく眠れた？」

まあそこそこ、とサンカは返す。はたては既に朝食を用意しており、味噌汁を椀へよそっている所だった。

促されるまま用意された膳の前に座ると、こっそりとはたてを観察した。だが、上機嫌な彼女に昨日の冷たさは無く、寧ろ愛らしさを感じる笑顔を振りまいている。サンカはあまり深く考えない事にし、食事の手を付けた。

「ん、旨いな」

「本当?!お代わりもあるから、沢山食べてね！」

「朝から沢山は食べられないよ」

はたてが作った料理は格別であった。現在の味になるまで計り知れない努力を重ねたらしく、どれをとっても一級品なので朝から贅沢

をしている気分になれる。

「あ、ご飯粒付いてる」

「え？あ、本当だ。ありがとう」

「待って、私が取るわ。もう、可愛いんだから〜！」

「よしてくれ。可愛くなんてないから……」

恥ずかしさに顔を赤らめると、そっとはたての手が頬に触れ、くっついた米粒を取ってくれた。彼女をお嫁に貰った男はさぞ幸せ者だろう。そう思いながら、サンカは引き続き食事を楽しみつつ、はたてとの談笑に花を咲かせた。



「本当に行っちゃうの？」

「うん。人里も見てみたいしね」

食事が終わった後、サンカは出かける準備をしていた。理由は単純で、幻想郷内を探検したいが為だ。はたては危険だと出かけるのを止めさせようとしていたが、危険な場所は行かない、お昼前には帰ると約束したことで外出を許可してくれた。

特に昨日見た神社には行っていけないと念押しされている。なんでも強力な妖怪がいるらしい。

靴を履いて中折れ帽を被り、外に出る。弱い風が吹いており、気温は昨日より快適だ。

「それじゃ、行ってきます」

「いってらっしゃい」

小さくなっていくサンカの後ろ姿を見送ると、彼女はすぐさま携帯を取り出してキーをタイプした。入力された文字はサンカの名前で、ロードが完了すると現在の彼の姿が表示される。

「大丈夫。ちゃんと見てるから」

はたてはフフツと静かに笑うと、先日のような冷たさを覚える表情へと変わっていた。

山は広く深かったが、幸いなことに麓へ降りる道があった。獣道を抜けて建物が見えた方角を目指す。

(快晴だな。これなら夏も悪くない)

空は雲一つない晴天で、蝉が騒がしく合唱し続ける中、サンカは鼻歌混じりに歩く。田んぼが広がっているのは外界と同じだが、天狗の暮らしが江戸後期から明治初期の水準だったのは驚かされた。ここに住む人間もそれくらいの文化様式なのだろうか、想像が膨らんでいく。

「うん、悪くない場所だな。いつそこちちに永住してしまおうか」

「良い案だと思いますよ。それ」

「やっぱりそう思う……ん？」

見ると隣を一人の少女が歩いていた。少女ははたてと同じ年ほどで、髪型は黒髪ショート、服装は白いブラウスに黒いショーツスカート、そしてこの天狗の特徴を有していた。手には微妙に型落ちらしいカメラを携帯している。

「なんだい、君は？」

「あや？ 案外驚いてませんか？」

「もう変な物を見るのも慣れた」

少女は変なものは失礼な、とムツと頬を膨らませた。

「へえ、こっちでも新聞があるんだね」

肩掛けの茶色いバッグから飛び出た新聞の束を見て、サンカが意外そうな声を漏らす。

「あ、そうなんですよ。良かったら購読しませんか？」

「間に合ってるんで」

「あやや？」

変わった言葉使いで残念そうにすると、彼女は気を取り直し、ペンをマイクに見立てて顔に向けてきた。少女はニカツと笑う。

「私、射命丸文って言います。早速なんですけど、はたてとの関係を教えてください!!」

射命丸文、時間はかかったが、その名を聞いてはたてから教えられた偉い立場の天狗だと思い出し、帽子を取って適当に会釈する。

文は答えが帰ってくるのを期待しているのか、目をランランと輝かせている。押しが強いのはどうも苦手だ。

「……別に、僕はただの居候だよ」

「あやや？ 本当にそうなんですかあ？」

「そうけど……」

「本当ですかあ？ 本当に本当ですかあ？」

しつこい。一体どんな回答を待っているのだろうか。

はたてに拾われて居候しているだけと強調しながら説明すると、文はつまらないですね、と心底残念そうにする。

「じゃああなたの事教えてくださいよ。きっと良い記事が書けます」

「覚えてない」

そう言うともたもやしつく絡んで来た。

覚えてないというのは半分は本当であり、幼少期の記憶どころか、過去の記憶は一切合切がすっかり抜け落ちていた。覚えている範囲と言えば3年前くらいからであり、その頃には一人で放浪生活を送っているので期待されるような話は出来ないのだ。

こちらにも本当に知らないと伝えると、彼女はフムフムと頷き、取り出したメモ帳になにやら書き込み、ついでに写真を懇願してきた。

「写真もダメだよ」

「いいじゃないですか減るもんじゃありませんし。次の新聞の特大スクープにしますので、お願いしますよお」

「……見出しは何?」

「記憶を失った青年の真実! 実はツチノコだった!!」

とんでもない出まかせを書き込もうとしていることを知った彼は、帽子を顔に押し付けて顔を見せなくした。文は冗談と笑っているが、胡散臭い雰囲気のせいであまり信用できない。

「勘弁してくれ。時間が無くなる」

「むう、仕方ないですね。では今回はこの辺にしておきます」

文は口を尖らせて、

「それじゃ」

と言つて消えた。紫のように空間に消えたのではない。超高速で飛んで行ったのだ。強い風に帽子を飛ばされそうになり、慌てて抑え込む。

「面倒なのに目を付けられたなあ」

また遭遇しないように気を付けよう。彼は一人頷くと、再び風景を楽しみつつ歩き出した。

8話 開花

サンカは小川の傍に立っていた。里に行く予定だったが、今はそれどころではない。

「おい、大丈夫か!?しっかりしてくれ!」

新聞が散らばっている中、周囲を警戒しつつ近づき、血まみれで今にも力尽きようとしている文の様態を見る。外傷は全身に広く出来た打撲婚に切り傷、そして刺し傷。特に刺し傷は動脈近くまで届いているらしく、一際出血が酷かった。

手当てをするための道具一式は手元にあるが、簡単な怪我しか対応しておらず、治療するにもこれ程膨大な量の血を止血し、大きな傷口を埋めるには量も技術も足りない。

「直ぐに救急車を……」

言いかけて、幻想郷にそんな物はない筈だと気づいて思い留まる。動転しているのもあって頭が真っ白になってしまい、何をするのが最善なのかが分からず、冷静な判断が出来なくなっていた。

(どうすればいいんだ?ええとー)

死に物狂いで思考を続ける。苦手なタイプではあるが、だからと言って瀕死の重傷を負った者を見捨てるほど非道ではないのだ。

引き続き呼びかけを行うが、彼女は呻き声をあげるだけで反応がなかった。肌は徐々に青白くなり始めており、何もできない己の未熟さと弱さをひたすら呪いそうになる。

「ゲホッ!」

「……准^{じゆんてい}胝!」

文が咳き込んだと同時に彼女の体へ両手を当てると、口をついてその言葉が出た。体は勝手に指先から気を放出するように力を込め、意思に反してある単語を静かに、そして力強く宣言する。

「不空羅索!!」
ふくうけんじやく

瞬間、手から薄い膜を形成していくかのように青い光が放たれて彼女の全身を覆うと、体に出た無数の傷に塵の様な物が集積し、徐々に傷口を埋めて跡形も無く治癒していく。

サンカは何が起きているのか理解できずに混乱したものの、助けたい一心で我武者羅に能力を使い続け、やがて全ての傷が消えると共に能力が解除された。

同時に凄まじい疲労感を感じ、その場に倒れてしまう。文に目線をやると、血色も良く呼吸も安定しているようだ。一先ず安心といった所か。

(僕は何を……)

「得体のしれない力を感じるとは思ったけど、まさかこれだったとはね。流石は生き残りといったところかしら」

紫の声が聞こえる。遠のく意識の中でその声を聞いたサンカは、激しい頭痛に襲われて視界が暗転した。



夢を見た。人間とそう変わらない姿をした妖怪達を、小さな子供が殺していく夢を。

悲鳴を上げて逃げ回る彼らをその子供は追いかけて、一人、また一人と血祭りに上げていく。そして場面が変わり、今度はその子供が死屍累々と積み重なった死体の上に座り、何かを呟いていた。

これ以上は見たくない。サンカは必死に目を覚まそうともがくと、子供がこちらを向いた。その顔は泣いている。

「殺してください、先生……お願いします……」

景色が暗転し、意識が覚醒する。最初に視界に入ったのは天井で、布団に寝かされていると一呼吸置いてから分かった。隣にははたて

が座ったまま寝ている。

「目は覚めましたか？」

襖を開けて文が入ってくる。彼女は桶の中に入った手ぬぐいを絞り、額の上に載せてくれた。冷たさが心地よく、目を軽く瞑る。

「ここはどこなんだ？それに君の怪我は？」

「私の家です。怪我の方も大丈夫ですよ。おかげで良くなりました」

サンカが胸を撫で下ろすと、文は助けられちゃいましたね、と言いつつはたてを揺すり起こした。

彼女は起きると、すぐさまサンカに飛びつく。

「サンカ!!」

「ごめん、面倒かけちゃって……」

「馬鹿！心配したのよ!？」

そのやり取りを見ていた文はニヤニヤしていたが、はたてとの会話がひと段落するとすぐに真剣な面持ちになり、深々と頭を下げた。

「あの時貴方が居合わせなければ、私は死んでいたかもしれません。改めてお礼申し上げます」

少々強引ではあるが根はしっかりした人のようだ。これは彼女の評価を変えなければいけないだろうと、口角を少しだけ上げた。

「良ければ何があったのか聞かせてくれないか？」

ふとなぜあんな事になっていたのかと尋ねてみると、彼女は少し考え、貴方に話してどうにかなる事でもありませんが、と前置きしながらも教えてくれた。

「実はですね、通り魔に会っちゃいました」

「通り魔？」

「はい」

曰く、上から突然襲われたのだという。飛行に集中していた彼女は抵抗する間もなく体中をめった刺しにされ、バランスを失い墜落、倒れていたところをサンカに助けられたのだった。

かなり高い高度を飛んでいたと思われるが、直接的な攻撃以外の負傷は打撲程度で済むのだから、やはり天狗は人より頑丈だな、と内心思った。

「私としたことが油断していました」

「嘘でしょ？文がやられたっていうの？」

はたての反応を見る限り、文の戦闘力もかなり高いようだ。彼女は屈辱です、と手にギュツと力を込める。

「犯人は恐らく、最近巷を騒がせている人物でしょう」

差し出された新聞の一面を見ると、連続殺傷事件の見出しで書き出されていた。遺体の傷からすると、刃物によってできたと推測されるとの事である。

「博麗の巫女と白黒魔女は別件でこっちに当たれないのよね？」

「ええ。また犠牲者が出る前に対処してほしいものだけど、目星もないのに私達じゃね」

はたてと文の会話から、こちらにも警察組織に似たような物はあるようだ。しかし人手はまるで足りていない様子でもある。

「サンカは解決するまで外出をやめた方がいいわ。天狗の里……ううん、私の家から出ないようにしてね」

かこつけて外出を禁止されてしまったが、名指しされた本人は上の空だ。彼は文の状態を思い出し、考察を始める。

「サンカ？」

「……はたて、僕を人間の里まで連れて行ってくれないか？何か出来る気がするんだ」

「え？」

制止を振り切って布団から起き上がると、よろけながら上着を探し、傍にあつた帽子を被った。まだ若干だるさを覚えるが、歩けない事はない。ふらつく体を後ろからはたてが支える。

「安静にしてて。それに出ちやダメって言つてるじゃん」

「どうって事ないよ。僕は平気だ」

「でも……」

「大丈夫だ。心配だったら僕が君と離れなければ良いだけの事だろう？」

「……わかったわ」

「ごほん」

文はわざとらしく咳ばらいをすると、二人に聞こえないように羨まし気に小さく呟く。それは今の彼女が出来る最大限の茶化しだった。

「まるで夫婦ね」

9話 会敵・前編

「行ってしまった……しかし、外界にただの人間で能力を使えるのがいたとは。私もまだまだ知らない事が多いわね」

文は二人を見送ると、作業部屋に入って起こった出来事の特集するべくペンを手に取り、ふと考察をしてみる。というのも、サンカの能力を身をもって体験した彼女は、その力を強く警戒していた。

これまで外界からやって来た者は能力持ちが大半だったが、それは神職だったり、霊感が高かったりと所謂、普通の人間とは違う。文字通り、普通の人間が幻想入りし、能力を発現させたのは、記憶の中では今回が初の事例だ。

幸いにも本人の様子を見る限りでは能力の制御は出来ていないらしいが、あれはこれまで見たことがない異質なタイプだった。もしも彼が完全に力を支配下に置いて異変を引き起こせば、幻想郷最強である博麗の巫女でさえも勝てる可能性は低いだろう。

しかしそれ以上に心配なのは親友でもあるはたてである。文が倒れたサンカを家に運び込んだ時、彼女は直ぐにやって来て、文を見るなりサンカを返せと怒鳴ってきたのだ。その場は彼をどうこうするつもりはないと納得させたが、彼女はサンカが目覚めるまで片時も離れようとはせず、文が部屋に立ち入る度に強く警戒していた。数少ない友人である文を、だ。

(何もなければいいけど……)

原稿にペンを走らせながら空を見上げると、その心中を表すかのよう
うに、暗く重い雲が広がり始めていた。



「さあ、着いたわ」

そう言って降ろされたのは里の端だった。彼女は、天狗だと分かる

と追い出されてしまうとサンカに説明しながら翼を折り畳み、上着を着込む。

(どこでも同じか)

ここでも差別があるのか、とサンカは少し残念な気持ちになった。妖怪も妖怪なら、人間も人間である。自分を受け入れてくれたはたてのように、お互いが仲良くできればどれ程良い事なのだろうか。

「行きましょ。自分で歩けるの?」

「うん。大丈夫だよ」

「本当に?無理はしないでよね?」

はたては歩くスピードをサンカに合わせてくれた。四肢はまだ少しだけ動かしにくかったが、運んでもらっている間に暫し眠っていたおかげか、幾分かマシになっている。

「あんまり歓迎されないか。まあ無理もないわよね」

それを他所に、落胆気味にはたてが呟いた。時折すれ違う人々は皆、見かけない二人組を警戒している素振りを見せていた。とても心外であるが、噂の通り魔と疑われているのかもしれない。

よそ者が歓迎されないこの土地でマトモに聞き込みできるだろうか。不安要素は強いが、無理を言って連れて来てもらった以上、用事は達成しなければならぬ。

「すみません」

「なんだ?何か用か?」

最初に尋ねたのは店前で掃き掃除をしている恰幅の良い男だった。事情を話し情報を聞き出そうとする。

「ああ知ってるよ。隣に住んでた奴だ」

「本当ですか?」

詳しく話してくれと頼むと、男は快く話してくれた。

「あの日は釣りに行くつて言つてたな。で、あんまりにも帰りが遅いもんだから見に行つてみれば……」

「死んでたと?」

「そうそう、刃物で切つたみたいにスツパリと。おつかないもんだよ」

男は怖い怖いと言いながらブルつと震えた。サンカは成程と相槌を打ち、今度は犠牲者の性格について尋ねた。

「大分粗暴なやつだったね。酔っぱらうと手がつけられなくなつて、大分困つてたんだ。おまけに喧嘩を売つて歩いてるときたもんだ」

「喧嘩を売る?」

「男4人をのしたつてんで、調子に乗つたんだらうな。自慢して歩いてたよ」

「へえ」

一体どんな奴だったのだろうか。生きていたなら顔を見てみたかつたと、サンカは思った。

礼を言つと、他の犠牲者についても尋ね歩いた。犠牲者は共通して、取っ組み合いでそこそこ強かつたという評価がつけられているらしい。また性格もあまり人に好かれていないらしく、厄介がらわれていたようだ。

腕試しをしたいが為に襲うのか、若しくは無害な妖怪をも殺傷する正義感溢れる通り魔だと言うのか。何にせよ、死に様からすると人の所業では無いのだが。

「厄介払いできて助かる、か……あれ?はたては?」

気がつくと、隣にいたはたてが居ない。考え事をしていてはぐれてしまったようだ。人里の中なら安全かもしれないが急いで探しにいかなければ。

「やめてくださいー!」

「いいじゃねえか、少しくらい相手しろよ」

路地裏から声が聞こえた。その声に惹かれるようにして見物しに行く、うら若き少女が男二人に絡まれているところだった。どこにでもこういう輩はいるのだなと思いつつ、足元にあった石ころを男に向かって投げる。

「なんだてめえ」

「その子を離せ。嫌がってるだろ」

「てめえにや関係ないだろうが！」

やめるよう説得するべく注意を向けさせる。よく見ると手元に鈍く光るものが見えたので若干後悔したが、ひるまず彼らを見据え、新たな石を拾い上げた。

「コイツ外来人じゃねえか？」

「金目の物持ってるかもしれないねえなあ」

二人はサンカの傍に寄ってきた。酔っているのか酒臭く、体臭がキツイのもあつて思わず呼吸を止める。

「おい兄ちゃん、今気分が良いんだよ。金目の物出せば見逃してやつからさっさとよこしな」

「お前らに渡す金はない。早く家に帰れ」

次の瞬間、目に飛び込んできたのはこちらに向かってくるナイフの刃先だったが、サンカは自身の命の危機よりも絡まっていた少女を案じていた。姿が見当たらないので、上手く逃げられたらしい。

(逃げれたか。良かった)

安堵すると腹部へ刃がめり込み、激痛が走った。せめて防御はするべきだったと後で思いはしたが、どの道難しかっただろう。男等も意表を突かれたのか、ナイフを手放した。

「ぐうっ!!」

「なんだコイツ、避けねえぞ」

「面白くねえな。殺しちまえ」

玉のように吹き出る汗を滴らせながら刺さったナイフを引き抜くと、鮮血が傷口から溢れてきた。思わずうずくまって手で押さえるが、その程度で止まる筈がない。

視線を戻すと、男らは目障りな相手を殴ろうと手を振り上げている所だった。

(カッコ悪いなあ……僕は)

「スペルカード。遠眼・天狗サイコグラフィ!!」

女の声が響き、大量の光弾の雨が男達を射抜く。彼らは断末魔を上げる間もなく肉塊へと姿を変え、それすらも光の奔流によつて消え去った。

「サンカ!!」

はたてだ。彼女は持っていた紙袋を落とし、サンカの両手を握る。

「しつかりして!」

「はたて……どうしてここに」

「女の子が教えてくれたのよ。どうして私の傍から居なくなったの? ……」

さつきの子か。と彼は察した。腹部を刺されたことをはたてに伝えると、彼女は血相を変えながら患部を見、そして不思議そうな顔をする。

「?どこにも傷はなさそうよ?」

「え?」

そんな筈はないと触れるが、確かに痛くもなければ傷口もない。それだけでなく血が出て服に染みたま後も無いときた。

一体どういうことだろうか?確かに刺され筈と抜き捨てたナイフを見ると、しつかり自分のものと思わしき血が付いている。夢ではないようだ。

「と、ともかく急ぎましょ。騒ぎを聞いて人が集まってくるわ」

「あ、ああ。わかったよ」

さっきの光弾はなんだったんだろうか。聞きたいことは多かったが、今はそれどころではない。起き上がるのを手伝ってもらおうと、はたては手を引いて走り出した。

10話 会敵・後編

集まってくる野次馬達を避けるようにして人里を出ると、はたては窮屈な上着を脱いで伸びをした。そんな彼女に先ほどの光景を尋ねると、驚いた反応をされる。

「貴方も能力が使えるんでしょ？」

「能力？」

「あら？文から聞いたんだけど……まあいいわ。一部の人間や妖怪は、何かしらの能力を持っているの。例えば私は――」

額に携帯を当てて何やら念じ始める。時間がかかりそうなので大人しく遠くの風景を眺めながら待っていると、数十秒くらいしてから肩越しに携帯の画面を見せてきた。

そこには胡座をかいて座るサンカと、背中にくっついて画面を見せているはたてが映っている。どうやったのか知らないが、今現在の二人の様子を真後ろから撮影したものだ。

気の良い第三者に撮影してもらったのかと振り向くが、それらしい人影はいない。もう一度画面を覗き込むと、画面の中で振り向いたサンカがやや遅れて正面を向いた。

どうやって撮ったんだ？慌てふためいて再度振り返るが、やはり力メラらしき物はない。はたてはその様子を見てクスクスと笑う。

「念写よ」

「念写？」

「ええ。それが私の能力。文が貴方も能力を使っただけで言っていたから、てつきり知っているんだと思った」

文の傷を治し、そして自身の傷を塞いだのは、この能力という概念のおかげなのか、とサンカは半分納得した。もしこの場が幻想郷で無ければ、そう言われても信じなかっただろう。彼は続けてもう一つの質問を試みる。

「ええと、スペルカードって？綺麗な光の幕だったけど……」

「スペカは私達の弾幕を契約書的に記載した紙の事よ。決闘の時に宣言すると技の行使が可能になるの。気分も上がるわよ？」

綺麗と褒められたのが嬉しいらしく、せつかくだからとポーチから無地の紙を数枚取り出し、サンカに渡した。決闘―弾幕ごっこなる遊びにも使えるため、持っていて損はないという。しかし当のサンカは技が使えないのは勿論、自身の能力の特性すら知らないのだ。暫くはただの紙切れとして過ごしてもらおう事になるだろう。

はたては説明を終えて伸びをして、その体勢のまま固まる。目は何かを凝視しているらしく見開かれており、釣られて視線の方を向くと一人の娘が静かに立っていた。先ほど男二人に絡まれていた娘だ。

「さっきの娘か。どうしたんだい？」

「少しお礼がしたくて」

妙に無機質な声だ。先ほど会った時と比べ、色もヤケに白い。彼はその少女に対し少なからぬ不信感を抱き、帰るように促した。

「お礼はいいよ。早く帰りなさい」

「そういう訳にもいきませんので……」

相変わらず能面の様な顔をしたまま、少女はゆつくりとした動作で此方へ歩いてくる。なんとなく近寄らせてはならない気がして、距離が詰まるとその分の距離を置く。

一方のはたては異常性に気づいていないのか、何故か憤慨しながら逆に少女の方に歩み寄ろうとしている。

「何よアンタ。彼は私と話してるんだから余所者はさっきと失せて。調子乗ったらタダじゃ済まないわよ」

嫌な予感がする。咄嗟にはたての手を引っ張って少女から引き離すと、シユパツと裂ける音を伴いながら何かが掠めた。頬に痛みが走り、生温かい物が垂れてくる。触れてみると、それは血だと分かった。はたては依然として状況が呑み込めていない。

「ちよ、ちよつと何？」

「あれは……あれは駄目だ。危険すぎる」

再び何かが迫ってくるのを感じる。はたてを突き飛ばしてその場から避難させると、サンカはリュックサックを盾にして防御した。リュックは簡単に真つ二つにされ、中から物が散乱する。

「君が噂の通り魔か？」

「……二度も攻撃を躲すとは」

少女の姿が醜く膨れ上がって弾け飛ぶと、中から何とも形容しがたい生物が現れた。凶体はかなり大きく、両腕の肘から先にかけて刀状になっている。左腕は右腕と比較して短い。

全体的な印象はカマイタチと呼ばれる妖怪に似ていたが、どうにも生き物らしからぬ継ぎ接ぎ感があり、全体的に不自然な印象を与えてくる。サンカは異質な生物を相手に、騒動を起こした理由を尋ねる。

「何故人や文を襲った？」

「強いと評判の者達を腕試しに襲ったまでの事。もつとも、どれも期待外れでは有ったがな」

「逃げてサンカ！貴方じゃ勝てないわ！」

はたてが声を張り上げると、物の怪は彼女に向かってその凶器的な腕を振り下ろした。彼女は即座に反応できず、笠懸に斬られて倒れ伏す。

「はたて！」

「案ずるな。即死しない程度に斬つてある。貴様は中々殺し甲斐がありそうだ」

はたては痙攣しながら血を流しているが、物の怪の言う通り致命傷ではないようだ。うわ言のように弱弱しくサンカの名前を繰り返している。

人智を超えた異形を前にすると尻込みして逃げたくなるが、恩人で

あるはたてを放っておく訳にはいかない。もし逃げれば、アレははたてに止めを刺し、新しい獲物を探さだろう。それだけは絶対に阻止しなければ――

(やるしかない！)

倒すまでいなくなるとも、能力を使えるようになった今の自分なら、この場から退かせるくらいはできる筈だ。サンカは散らばったスペカの一枚を拾い上げて物の怪の方へ向けると、緊張を和らげるべく息を整える。

物の怪の方は瞬時に間合いを詰めて斬りかかってくるが、サンカは動こうとはしない。

「スペルカード！ 修羅・百鬼若松の構え！」

スペカが呼応して攻撃を防ぐと共に、速度の遅い光弾を一発だけ打ち出した。物の怪は攻撃が弾かれてバランスを崩し、光弾を受けて高く吹き飛ばされる。そこへ追い打ちをかけるように、若松葉の様に青く、鋭い弾幕が襲い掛かった。

「この程度！」

物の怪は弾幕を躲してサンカに肉薄する。人間風情には絶対に負けないという自負も勿論だが、動きが幼稚で遅い弾幕を見て油断した方が大きい。

「貴様も食らうてやるぞ！ あの天狗と一緒になあ!!」

勝利を確信して咆哮を上げたが、躲したはずの弾幕が直撃して我に返った。通り過ぎた弾幕が、再び物の怪を目指して飛来・急降下したのだ。目標を見定めた弾幕達は、まるで群としての意識があるような挙動を見せた後、それを皮切りに弾幕の速度が増し、追い打ちをかけていく。

「なっ!?!」

パンツと音を立てて手を合わせると、左右から更に弾幕が現れた。はたての弾幕と比べると隙が無い分極めて合理的だが、美しさの欠片もなく、正しく修羅の如く猛威を振るう力は、相手の自信を打ち砕くに十分だった。

「沈めええ!!」

弾幕が容赦なく全身を打ち付け、物の怪は息絶える。それでも収まることのない弾の雨は、その亡骸を原型を留めないまでに破壊しつくした。

11話 企み

「倒せた……のか？」

一度能力を使うだけでかなり消耗したが、どうにか倒すことができた。ふらつきながらも傍に寄ると、物の怪は使い古した雑巾のようになっっており、とても生きているとは思えない。加えて焦げた肉と掃除をしていない犬小屋を混ぜた様な異臭を放っており、思わず顔をしかめてしまう。

(一応死んでるか確認を……)

顔だったと思わしき部位を力いっぱい蹴り飛ばすが、反応はない。完全に絶命しているようだ。

能力が無ければ死んでいたのは自分の方だったのだろう。こんなのが他にもいるのであれば、案外幻想郷は恐ろしい場所らしい。今となっては、はたてが人間であるサンカを必要以上に心配するのも分かる気がする。

(それにしても、腹が減ったな)

戦闘で体力を消耗したせいとか、彼はとても強い空腹感を覚えていた。朝方に食べきれない物量を食べさせられたのだが、昼下がりのなもあつてか胃がひもじさを訴えており、なにかねじ込んでおかなければ歩くのも困難になりそうだ。

確かにリュックの中に乾パンと金平糖があつたなど死骸とは反対方向を向くと、真つ二つにされたりリュックが無残にも転がっていた。残念な事に入っていた食料品は木っ端微塵になっており、蟻も集まっているので食用には向かないだろう。

—死骸を横目で見る。

(いやいや。流石に得体の知れないのを食べるわけには……)

当たり前の事だ。鹿やイノシシならまだしも、目の前にあるのは物の怪の、それも泥や毛まみれになった生肉である。こんな生ゴミも良

い所の代物を食べようなんて、気が振れているとしか考えられない。彼にも人としての尊厳というのが多かれ少なかれあるのだ。

だが・・・彼は口にしてしまった。口にせざるを得なかった。耐えがたい空腹感を押さえるために、本能が食べと訴えて止まないがために。

物の怪の肉はとても硬く、血生臭くマズい。しかし二口、三口と進めるにつれ、我を忘れて死肉を漁る畜生のようにむさぼり始めた。肉を一通り食い尽くすと、今度は内臓をも食そうと手を伸ばし固まり、その場で嘔吐する。

「う、うおえ……」

不思議なことに胃からは何も出てこなかった。空腹感は収まりはしたが、口の中は血の味で満たされている。今日はこれ以上はない厄日だ。

後悔の念に苛まれながらも立ち上がると、妙に体が軽い事に気がついた。頬に付けられた傷も埋まっているらしく、怪我らしい怪我も全てが綺麗に治っている。これは死肉を食べたせいだろうか？はたまた能力とやらが関係しているのだろうか？

「……そうだ、はたては」

口の周りに付いた血を拭い取ってはたてに駆け寄ると、彼女の様態を確認をした。息は荒いものの傷は塞がり始めているので治療らしい治療は必要ないと判断したが、念のため能力を行使して治りを速めておく。

「ええと確か……准胝・不空羅索」

以前唱えた言葉を呟きながら両手に力を籠めると、文の時と同じように青い光がはたてを包み込んだ。たちまちはたての意識が回復し、目を開ける。

「サンカ……」

「動かないでくれ。治療中だ」

「……あれは？」

あれとはなにかと聞こうとしたが、直ぐに物の怪の事だと思い直した。サンカははたての目を見ながら、安心できるように優しい口調で語り掛ける。

「大丈夫。僕が倒した」

「サンカが？」

「うん。もう脅威はないよ」

はたてが安堵の息を吐くと共に、能力を解いた。また疲労感に襲われると思ったが、その様な状態は待てど暮らせど起きなかつたので、やはり物の怪の肉を食べたことが原因だろう。

「ごめん。私が怪我しなければ、サンカが余計な力を使わずに済んだのに……迷惑だったよね？」

いつに無く落ち込んでいるらしいので、どうかして元気づけたい。

首を横に振って手を取ると、潤んだ彼女の目がこちらを捉えた。光の当たり具合によっては紫色にも見える薄茶色の瞳が、とても美しい。

「そんなことはないよ。僕は君に助けてもらった身だからね。むしろ、僕がここに来たいなんて言わなければ君が傷つくこともなかった。謝るべきなのは僕の方だ」

「……」

「それに、僕は君が好きだからね。これくらいの事なら易いよ」

「！」
勿論変な意味ではない。人（天狗）としてである。はたてはその言葉をどう受け止めたのか、顔を赤くした。動揺しながらもサンカに確認する。

「す、好き？！本当に!？」

「え？うん。そうだけでも……」

「本当に!? 本当なの!？」

「う、うん」

「そっかあ……好き……好き……フフフツ」

はたての反応がおかしい。まさか攻撃された際に雑菌が入って熱を出しているのだろうか。

不安になっていると、ポツンとなにか冷たい物が落ちてきた。どうやら夏の風物詩こと夕立らしい。此処にいてはさぶ濡れになってしまうだろう。

サンカは散らばった荷物の中で使えそうな物だけ回収すると、その中であつた雨合羽を広げてはたての方を見た。

「なんてタイミングの悪い……急いで帰ろう。雨だ」

「好き……好き……」

「はたて？」

ボソボソと同じ言葉を繰り返しているようだ。近づいて聞こえる様にもう一度声をかける。

「は・た・て!」

「!!……な、なに?」

「雨が降ってきたよ。急いで帰ろう」

「あ……そう。そうね」

体を引き起こすと、彼女は少しよろめいた。どうやらこの能力では傷は回復しても、体力までは回復できないようだ。この状態で一人を抱えて飛ぶのは無茶だろうが、幸いな事に天狗の里はそう遠くもないので歩いて行ける。

サンカは合羽をはたてに着させると、彼女を背負う。

(随分と軽いな)

歩き出すと、本格的に雨が降り始め、あつという間に道に小川がで

きた。雷も鳴っているが、なんとかなるだろう。

不意にすうすうと寝息が聞こえた。顔を覗き込むと、はたては安心しきった顔で眠っている。

(かわいいもんだな)

サンカは寒さからか、彼女を起きないよう小さくくしゃみをした。



「紫様。あの者の能力が本格的に覚醒したようです」

ある屋敷の中、そこには美しい女性が居た。その女性はキツネの耳と9本の尾を持ち、凜とした表情で紫に報告している。紫は手に持っていた扇を閉じると、その女性を見据えて、少々どうでも良さに扇を振って見せた。

「そう」

「よろしいのですか？あれは幻想郷の脅威にもなりえます。即刻地獄に送るべきでー」

「大丈夫よ。自分の事はなにも覚えていないようだし、放っておいても害はないわ」

「しかし……」

「藍、心配するのは分かるけれど、彼の能力は外界からここを守る切り札にもなり得るのよ。うまく利用すれば私達にとって利になるわ」

藍と呼ばれた女性は紫の答えに納得したように返事をする、紫はよろしいと頭を撫で、本音を見え隠れさせながら不気味に笑った。

12話 条件

這う這うの体で何とか里に辿り着いた頃には雨が止んでおり、日没が近い茜色の空の下、水たまりで遊ぶ子供達が目に映った。

はたても移動中に全快したらしく、自力で歩き回ることが出来るようになった。それどころか走っている。どうやら天狗の回復速度は非常に高いらしく、多少羨ましくも思えた。

「本当に大丈夫か？良ければ家までおぶって行くぞ？」

「いいの。もう歩けるし、サンカも疲れたでしょ？」

「あやや？思ったよりも早かったですねえ」

「文！」

何気ない会話をしながら階段をゆっくり登って行くと、文がカメラを片手に待ち構えていた。彼女は明るく手を振るはたてを素通りしてサンカの前で立ち止まり、目にも留まらぬ早さでカメラのシャッターを切ったが、何をするか大体予測がついていた被写体は即座に顔を隠し、なんとか撮影を免れた。文の悔しそうな舌打ちが聞こえる。

「おかえりなさい！なにか収穫はありましたか？」

「頼むからもう写真は撮らないでくれ……通り魔事件は解決したよ」

「本当ですか!?早速その時のことを詳しく聞かせてください!!」

「悪いけども、今は見ての通り濡れ鼠なんだ。また今度なら少し——」

「あ、此処じゃ往来の迷惑になりますもんね。なら、私の家でじっくり取材と行きますか！ささ、どうぞこちらへ！」

話を全く聞いていない。どうにもこの天狗少女がいると調子が狂うと、サンカは改めて思う。

そこで、顛末を簡潔に教えて切り抜けようと試みると、隣から殺気が混じったはたての視線が送られているのに気づき、思わず開けかけた口を閉ざした。それは文に送られているらしいが、当の本人は全く気付いていない。

ふと、はたてが視線を文からサンカに移す。その目からは光が消え

て瞳孔が開ききっており、表情は冷ややかだ。

蛇に睨まれたカエルのように硬直していると、彼女に腕を強く引つ張られた。鋭い痛みが走り、悶絶する。

「っ!!」

「？」

「文、サンカは今疲れてるの。構わないでもらえる？」

「そうなの？じゃあまた今度にするわ。サンカさん、お邪魔しました」
文が軽く会釈をして階段を下つていくと、直ぐにはたてがすり寄ってきた。動作は愛らしさもあるが、何か裏があるように思えて仕方がない。そんなはたての目には光が戻っている。

「ねえねえ、今日あった出来事を記事に纏めていい？」

「いてて……記事？」

「そう！私も新聞を書いているのよ。でも、あまり購読者が多くなくて……だから、文の新聞には載ってない内容を書いて、新しさを出せないかなーって」

嫌だとは口が裂けても言えなかった。またあの光のない目で見られたらと思うと、大人しく、お願いに従うしかない。二つ返事で構わないと伝えると、彼女はとても喜び、サンカを置いていく勢いで家へと駆けて行った。

「元気だな……」

無意識に掴まれた腕を摩る。そこには、はたてが掴んだ痕がくつきりと残っていた。



「終わったー!」

「お疲れ様」

はたての新聞製作が終わったのは、完全に日が落ちてからだった。

お茶を注いで彼女に持っていくと、お礼を言って受け取ってくれた。その様子を見て少し考えたが、意を決したようにはたてへ話しかける。

「あの、話があるんだけども」

「何?」

「……僕は、ここから出て行こうと思うんだ」

これがいけなかったらしい。はたては持っていた湯呑を落とすと、素早くサンカに掴みかかった。壁に追いやられる格好となり、手首を拘束されてピクリとも動くことが出来ない。

彼女は見てくれこそ少女であるが、男であり大人であるサンカが、本気で抵抗する事すら許さない膂力を備えている。その気になれば骨を粉々に砕くのも容易い筈だが、絶妙な力加減で自由を奪っているのは、相手が格下の弱い生き物だと弁えているからだろうか。

「……して」

「は、はい?」

「どうして?なんで出て行かない言うの?ねえ?」

「ちよ、ちよつと少し落ち着いー」

ヒュツと思わず声が出た。彼女は暗く澱んだ目を見開いており、頬に溢れた涙が伝っている。

その形相はサンカにとって、これまで相對した誰よりも恐ろしく見えた。はたては壊れた機械の如く同じ単語を繰り返し、段々と声を大にしていく。

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで」

「はたて、お、落ち着いて……」

「好きって言ってくれたのは嘘だったの?それとも私に悪い処があるの?それならすぐに直すし、幾らでも貴方の好きな私になるわ。だから出ていくなんて言わないでよ?それとも……他に好きな女が出来

たの？」

何か結論が出たらしく、遠慮する必要が無くなったのか、腕に込めた力が徐々に増している。動脈を圧迫されて血の巡りが悪くなっているせいもあって指先の感覚がぼやけて来ており、このままでは殺されてしまうと確信した。

なんとかこの状況から脱出しなければならないと、サンカは声を絞り出すようにして理由を話す。

「ぼ、僕は……僕は君を死なせかけてしまった。あんな事を言ったせいで危険な目に遭わせたし、それなのに此処に居据わるのもどうかと思うんだ。それに僕はまだ君に何もしてやれていないし……」

「……」

自分でも何を言っているのかわからないし、最後の方は消え入りそうになってしまったが、言わんとする事は伝わったらしく、はたての動きが糸の切れた人形のようにピタリと止まった。

相変わらず目に光はないが、本当か？と聞かれているような気がしたため、サンカは首を何度も縦に振る。するとはたては拘束を解き、徐々に冷静さを取り戻していくのが分かった。サンカはそんな彼女の涙をハンカチで丁寧に拭き取り、好転させるために取り計らう。

「で、出て行かなくても良いのなら、僕が出来る事であれば遠慮なく言っしてほしいんだ。罪滅ぼしを望むんだったら何でもやるよ。だから——」

「……」

「でしたら、私から提案があります」

はたての背後に隙間が開き、狐らしい耳と尻尾が生えた、奇抜な服装の女性が現れた。その女性は鋭い目つきで威圧しながら二人を一瞥し、間に割って入った。

13話 提案

「初めまして。私は八雲紫の式、八雲藍と言います。以後お見知りを」
丁寧な挨拶ではあるものの、言葉の節々に隠すつもりのない不遜な態度が現れている。まるで嫌々でも来てやったのだから有難く思えと言わんばかりのその態度は、はたての怒りの矛先を向けられるのに時間はかからなかった。

「紫の式が私の家に勝手に上がり込むなんて、どういう了見？常識がなっていないんじゃないの？」

はたては挨拶も無しに突然割り込んで来た狐を睨む。藍はと言えば全く動じておらず、九尾狐という天狗と比べれば格上の妖怪であるが故か、寧ろ見下しているのが良く分かる。

藍はふん、と一笑に付すと、殺意を向けるはたてを無視し、呆け顔をしたサンカと話を始める。

「役に立ちたい、との事でしたね？」

「ま……まあ、はい」

曖昧な二つ返事を聞くと、彼女は懐から一枚の紙切れを取り出し、投げるように手渡して来た。若干癩に障りはしたが、読めという事だろう。

「さっさと出て行ってくれない？なんなら、今ここで弾幕を撃ち込んでやってもいいのよ？」

気に食わなくとも狭い部屋で喧嘩はしないでくれ。サンカは折りたたまれた紙を開きながらはたての肩を軽く叩くと、彼女は藍に聞こえるよう舌打ちし、手に収められた紙切れへと注意を向けた。

彼は上から下へと流し読みするが、書かれている字はミミズがのた打ち回っているようで、まるで解読不能であった。一体何が書かれているだろうかと首を傾げると、はたても同じように首を傾げた。

「あの、不躰で申し訳ないのですが、これは？」

「それは私の式、橙が書いたものです。まだ小さいのにそんな立派な文字が書けるんですよ」

「あ、はい。そうですか……」

藍が凄いだらうと言いたげに胸を張った。どうやらこの狐、相当な過保護のようだ。自分の子供のように式を扱っているのは良い事かもしれないが、それを差し引いてもなお親馬鹿さが有り余る。それに加え、長くなりそううちの子自慢を始めた彼女は、もはや主に頼まれた用事すら忘れていゝらしい。

「なによこの字。全然読めないわ」

はたてが思っていたことをそのまま口に出してしまった。一瞬、藍のこめかみがピクツと動いた。癩に障ったらしく、尻尾が不機嫌そうに揺れている。

サンカは窘めて止めさせようとするが、彼女の悪態は止まらない。

「突然こんな紙を持ってきて、貴方がしたいの？サンカが困ってるじゃない。ほんと、アンタはどこまでも親バカだわ」

今にもとびかかりそうなのはたてを押さえ、藍に話を続けるように促した。なにやら強い力を放っている彼女にヘソを曲げられたら、後々面倒な事になりそうだからだ。

「ふん。どうやら貴方方の様な鳥頭には、橙の崇高な字を読めないようですね。仕方ない、説明して差し上げます」

嫌味を言いながらも、藍は説明を始めてくれた。

紙に書かれていたのは幻想郷各地で起きた怪異の一覧で、その中でも将来的に異変となる可能性がある、もしくは博麗の巫女が動くまでもない異変の類であり、早い段階でこれを解決するのが望ましいとの事だった。

怪異の解決の何故がはたての役に立つのか、とサンカが質問すると、はたてがその答えをくれた。

「異変の芽を潰せば、幻想郷の安定を保てる。それにサンカの活動を私が記事にすれば、購読者も増やせるかも……」

「はたてが良ければ僕はやろうと思うけど、どうする？」

「紫からの指示で動いてるなら、私は拒否できないわ。でもサンカの身になにかあったら……」

「生きるか死ぬかはサンカさん次第です。我々から指示を出しますので、それを黙ってこなしていれば良いんです」

重要な事をかなりアツサリ言われた気がする。どうやらサンカ一人にやらせるだけやらせて、支援をする気は更々ないようだ。

拒否権はないそうなので渋々承諾すると、藍は隙間を開いてさつきと出て行ってしまった。できれば黄金色に輝く9本のモコモコ尻尾を触り、あわよくば埋まってみたかったが、あの様子では許可してくれないだろう。

（触りたかったなあ。尻尾）

「サンカ、さつきは……」

はたてが声をかけてきたので、ビクリと小さく体が跳ねた。見るとすっかりしおらしくなっており、詰め寄った事を反省しているようである。

加えて彼女が少し上目遣いでこちらを見ているせいか、抱いた恐怖心もどこかへ行ってしまったので、怖がる必要も失せた。

「その、なんだ。なんにも言わなくていいよ。言いたいことは分かるから」

「……」

「……僕が出て行くって言った時、あんな風に引き留めてくれたのは君だけだったな。寧ろ嬉しい、かな？」

「！そっか、良かったあ……えへへ」

どこか悲し気に見えるはたての笑みは、まるで高名な絵画のような美しさを覚え、つつい目目を奪われてしまう。

暫し惚けていると、彼女は思い出したように声を上げた。

「そういえば、まだお風呂を沸かして無かったわね。今準備してくるわ！」

「いや、僕がやっておくよ。はたては休んでて」

「良いの？ありがと〜！」

落とした湯呑を拾い雑巾で床を拭くと、サンカは火種を片手に風呂場へと向かった。

はたては手を振って彼を送り出すと、自室に入って明かりを灯す。

瞬間、天井までビッシリと貼られたおびただしい数のサンカの写真が映し出された。その中には外界にいた頃の写真も含まれており、食事をとっている処、寝ている処、散歩している処などと細かく分けられ、一日の行動が余すことなく飾られている。

「もう、突然出て行くって言うから慌てちゃったじゃない。サンカはそんな事絶対にする人じゃないのに、私ったら」

壁が見えなくなるほどに貼られた写真の一つを手にとって抱きしめると、はたては恍惚とした表情を浮かべて、ニヤリと口角を上げた。まるで悪魔のように。

「嬉しいって言ってくれた……ああ、やっぱり彼に一番相応しいのは、この私しかいないんだわ。フフッ」

14話 面倒な依頼は唐突に

「号外！号外ですよ！」

戦闘から数日後の事、サンカは投げ込まれた文の新聞を広げていた。そもそも彼女の新聞を取った覚えはないのだが、何故か毎日欠かさず文が持つてくるのだ。はたて曰く、私の書く新聞よりも優れていると喧伝したいのだろう、との事である。そんな彼女を、サンカは少し疎ましく思っていた。

問題は記事の内容である。大概は鼻で笑えるようなレベルのねつ造記事が書いてある事が大半だが、今回は様子が違う。

「なんだこれ」

そこには弾幕ごっこになるべく耐えられるようにする為、スペカの練習を行うサンカの写真がデカデカと掲載されていた。見出しには、『外来からの刺客、幻想郷侵略を計画!?!』

と書かれており、影で盗撮していたと窺い知れた。サンカは眉間に皺を寄せて新聞を握り潰すと、背後からでも感じ取れる程の憤怒を露にする。

「アイツめ……」

許可も取らずに盗み撮った挙句、これまた許可も取らず、偽りありの文字を添えて一大スクープにするという手法は、外の世界に溢れているゴシップ記事を思い出して不快になる。

良い妖怪と少しでも思ったのが間違いだった。次に顔を会わせたら、スペカを叩き込んでやろう。

「サンカー！」

「はたてか。どうしたんだ」

はたてが壁の向こうからヒョッコリ顔を出すと、眩しい笑顔を見せて駆け寄り、サンカの隣へと密着して座った。

能力に気づいたあの日から、ずっとこんな調子である。幻想入りし

て彼女に会ってからまだ一週間も経っていないのに、言葉を交わす距離も急に近づき、まるで何年も前から一緒だったと錯覚してしまうくらいだ。

サンカは長い間独り身でいたせいか、ベタベタされるのは好きではないのだが、はたてにされるのは不思議と苦ではない。

ただ、文がどこからか見ているかもしれない疑いがある以上、いつまでもこうしてはられないのだ。はたてを優しく振りほどいて少しだけ距離を置くと、彼女は残念そうな顔をした。

「どうしたのさ」

改めて聞くと、はたてはキラキラした目でサンカを見た。

「あのね、あのね、この近くに温泉が出来たらしいの！一緒に行かない!?!」

こちらにも温泉があるのか。特に断る理由がないので快諾すると、彼女は入浴に必要な荷物一式を纏めた手提げを渡して来た。どうやら断られても連れて行くつもりだったらしく、承諾されるのが前提だったようだ。サンカは頬を掻くと縁側から立ち上がって、荷物を受け取ろうと手を伸ばす。

だが荷物を受け取る直前、音もなく足元に隙間が開き、サンカは吸い込まれるように落下した。

「うわあ!?!」

「サンカ!?!」

隙間の中で神経を直に触られるような不快な感覚を味わうと、彼は良く耕された畑のご真ん中に着地した。良く熟した赤いトマトと、突如として現れた男に驚いて固まっている老爺が視界に入る。被服からすると、ここは外来ではなく幻想郷の何所かのようだ。

折角のノンビリした時間を台無しにされたサンカは顔を上げ、隙間の中から覗き込んでいる紫に怒鳴った。

「紫さん！前振りもなく放り出さないてくださいよ！」

「あらごめんなさい。でも急用だったから許していただけないかしら？」

紫はヘラヘラと笑う。悪いとは全く思っていないようだ。

はたてはどうしたのかと聞くと、彼女はサンカが突然消えたことによつてパニックになっており、藍が必死でなだめているらしい。早く彼女の元に帰らなくては。

サンカは苛立ちながら頭をワシヤワシヤと搔き、紫に今回やるべき事を尋ねる。

「それで？僕はどうすれば？」

「今回はその地域で発生している怪異の解決をお願いしたいのよ」

詳しく聴くと、最近得体の知れない物の怪が人間を襲い、攫つてしまふ事案が多発しているので、その調査と物の怪の討伐をしてほしい、と言われた。実力を見る為にも、丁度良いらしい。

「私も忙しいし、博麗の巫女達も異変解決でドタバタしてるから、誰も止める人がいないの」

「ようするに今手空きが居ないから、僕を代わりに引つ張り出したと？」

「察しが速くてよろしいわ。早く片付けてきちちゃって、多分この辺りにいるから」

紫は扇を広げると、楽しみにしているわ、と付け足して消えた。

（本当に忙しいのか？あの人）

話している間、寝癖だらけの髪を見ていたサンカは、紫の言っている事がどこまで本当なのか疑問だった。どう見てもついさつきまで寝ていた風で、とても忙しいとは思えない。

気を取り直し、ポケットからスペカを一枚取り出して目を通すと、振り向き、まだ固まっている老爺に最近変わったことがないか、と尋ねた。

「何？」

「いや、最近不思議な事はありませんでしたか？」

「何？」

耳が遠いのだろうか。今度はなるべく傍によると、大きな声で尋ねた。これなら嫌でも聞こえるだろう。

「何？」

聞こえなかったようだ。これでは2・3度繰り返したところで同じ問答になってしまう。他を当てることにしよう。

(日没まで帰れるかなあ……うん?)

ふとトマトが目に入った。そういえば今日は朝食もまだだったので、お茶しか飲んでいない。

サンカは老爺の顔を見ながらトマトと自分の口を交互に指差し、貰ってもいいか、とジエスチャーを送る。すると老爺は意味がなんとなく通じたらしく、うんうんと首を縦に振ってにっこりとした。

(ありがとうおじいちゃん)

熟して大きい物を一つ選んでもぎ取ると、彼は一礼して探索を始めた。

15話 前触れ

はたては藍に宥めてもらい、落ち着きを取り戻しつつあった。

そんな彼女の前に、サンカと話を終えた紫が、寝起きでボサボサになっっている髪の毛を整えつつ現れる。

「確かに突然の事で驚くかもしれないけど、条件を呑んだのは貴方たちよ？これくらい的事、慣れてもらわないと困るわ」

「幾らなんでも無茶苦茶すぎるわ。私から彼を引きはがすなんて、彼を奪うつもり？」

発想が飛躍しすぎだ、と藍はため息をつく。こんな女に拾われたあれも苦労しているのだろう。憎むべき対象にあまり同情はしたくないのだが、これではせざるをえない。

紫は薄笑いを浮かべつつ、明後日の方向を見ながら、二人の耳にも良く聞こえる声量で独り言を述べた。

「まあ、あの子がこのまま罪を背負って生きて、地獄のような苦しみを味わい続けるのも見ものね。案外悪くなさそう」

「このっ！」

怒りを再度曝け出したはたてを取り押さえようとするが、細身の体の何所にそんな力があつたのか、藍は弾き返されてしまった。

この行動は想定内だったのか紫の余裕ある表情は崩れず、彼女は隙間を作って手をつ込み、はたての足首を掴んだ。

「きゃー！」

はたてはバランスを崩したことで床へ前のめりに倒れる。再度襲ってくるのを予想しているのか、相変わらず紫の手は足首をがっちり掴んでおり、解放する気配はない。

髪の毛を整え終えた紫が隙間から出てくると、地に伏したまま顔を上げて睨むはたての耳元で、低く、威圧するように言い放つ。

「協力しなさい。あの子を殺したくないのならね」

薄っぺらな笑みには悪意が滲んでおり、はたての体から冷や汗がブワツとあふれ出たのが見て取れる。

用も済んだことだし、と紫は悪意を引つ込めると、帰ることを藍に伝え、隙間へと入っていった。藍も追いかけるように隙間へ入ると、はたてへと振り返り、哀れみの表情を浮かべて消えて行った。

(……そうだ、能力で――)

隙間が閉じると共に自由になったはたては、直ぐに携帯を取り出してサンカの名前を入力し、彼がどこにいるのかを探す。今は数秒でも離れてはいたくない。また独りぼっちになるのは嫌なのだ。

彼女はサンカの安否を確認すると、自身を頼ってくれるその人物の居場所を知る為、有用な能力を持つ権を呼び出しに外へ飛び出した。



どうしたものか。もう大分歩いてはいるが、あの老人以外人に会えてない。この近くには村はないのだろうか。

地面がアスファルトではないため照り返しは少ないが、相変わらず日差しは強く、このままでは熱中症になるのは時間の問題だろう。

と、滲む夏景色の向こうに、建物が幾つか建っているのを見つけた。思わず浮足立つ。

例え無人だったとしても一度涼む事ができるし、人がいるなら願ってもいい。

今回はいつもの異国情緒あふれる(中折れ帽とマオスーツ、アフガンマント)服装ではなく、はたてに貰った甚兵衛を着ているため、誰がどう見ても現地の人間だ。追い返されることも恐らくはないだろう。

「すみませーん。誰かいませんかー？」

入口にあつた建物に声をかけるが、返事は帰ってこなかった。どう

やら留守にしているらしく、その他の家々も回ってみるが、人っ子一人いない。

村はよく手入れされており生活感もあるので、まだ何人が暮らしているのは間違いないのだが、静まり返った様子は、多少の気味の悪さを伴っている。

「よつと……」

勝手に上がり込んで泥棒と間違われるのも嫌なので、木陰の下に座り込んで一息つくことにした。人の気配が無いのは気がかりだが、変な物もないのでゆっくりできる。空を見上げれば雀が飛んでいるし、周りは蝉が騒がしく鳴いていて、平和その物だ。

(はたてが心配だ。なんだか無駄足になりそうな気がするし)

いつそ片付けた体にして帰ろうかとも思ったが、ここが幻想郷のどの辺りなのか見当もつかない。もし端っこだったら、徒歩で戻るのには一日はかかるはずだ。それにもし紫に嘘がばれたら、五体満足でいられる保証もないだろう。

「空を自力で飛べればなあ」

ぼやき、ぐつと伸びをして休憩を終わらせると、木に体重を預けながら起き上がった。

(誰だ?)

誰かに見られている気がして息を殺す。妖怪・物の怪ではないのは確かだが、では人なのかと言われれば少し違う。その視線は一か所から向けられているので、とりあえず声をかけてみる事にしよう。もし怪異なら探す手間も省ける。

「だれかいるんですか?」

返事はなかったが、代わりに物陰から小さな女の子が現れた。上質で小綺麗な着物を着ている。

意外な者が出てきた事に驚いたサンカは、少女に恐る恐る近寄ると、屈んで彼女の顔を見た。その子の目は焦点が合っておらず、何かに怯えているようだった。

「ああ……ビツクリさせちゃったみたいだね。僕はこの辺りで変わったものを見たって聞いて来たんだけど、なにか知らないかな？」

子供から得られることは大人より多く、子供ならではの柔軟な発想は、時に思いもよらない恩恵を与えてくれる。高い頻度で嘘や空想が入ってしまうのが難点だが、それを判別するのは容易い。メモ帳を取り出し様子を窺う。

「飴は要る？ チョコレートもあるよ」

落ち着かせようとしたが、女の子は距離を取るように離れて行ってしまった。見知らぬ人間がお菓子をあげると言ってくれば、警戒して避けるのは当たり前だろう。それにしても女の子一人しかないのは何故なのか。

と、その子が再度物陰からじつと視線を送り始めた。近寄るとまた一定の距離を開ける様に歩き、こちらを見て……というのを繰り返している。ついてこいという事だろうか？

(口で言わなきやわからないよ)

サンカはその女の子に誘われるように、トボトボと歩きだした。

16話 千夏

小さな女の子は、村の裏に広がる山へと入って行った。自分より遙かに歩きにくいであろう着物を着ているのに、気づけば女の子はかなり先の方を歩いており、サンカは少なからず怪しんだ。

推定で齡4〜5歳。はたてよりも幼い子供―それも女の子が、歩きにくく重たい着物を着用し、獣道と呼んで差し支えない藪の中を、大人よりも早く動けるなんて信じがたい。幾ら山で鍛えられているからと言えど無理があるのだ。

疑念を抱きながら藪をかき分け、襲来する大きな蚊を潰して進むと、目的地までの案内を終えたのか、彼女はサンカをじっと見つめ佇んでいた。こちらが息も絶え絶えなのに対し、呼吸が乱れた様子も無く、益々人間かどうかも怪しく思えた。

「まったく……何がしたいんだ君は」

女の子は問いを無視し、見てこいと言わんばかりに鬱蒼と茂った草木を指差す。試しにかき分けてみると、まるでなにかが腐敗したような悪臭を嗅ぎ取り、顔を背け、咳を一度する。こんな山の中まで案内しておいて、狐か狸の死骸でも見せようという魂胆か。

サンカはしかめっ面で一気に草木をかき分け、臭いの元を見る。

「うおっ!?!」

広がっていたのは凄惨な光景だった。確かに死体はあったが、それは狸でも狐でもなく、人間の、それも大人から子供までの10から13体程の大量の遺体だ。散らばった肉片や脳髓と思しき物からはウジが湧きだして蠢き、羽化した蠅の群れが黒い霧のように形を変えている。

「うっ……」

何故今まで感じなかったのかと思う程の凄まじい悪臭だ。吐き気を覚えたサンカは女の子を置き去りにしてその場から離れ、新鮮な空

気を肺一杯に吸い込む。まだ少し臭うが、あの近くで長時間臭いを嗅ぐよりマシだ。

(くそっ、なんて物を見せるんだ!!)

息を整えて吐き気が引くのを待つと、手で鼻と口を覆って先ほど見た遺体の状態を頭に浮かべる。

白骨化している物もあれば、肉片がまだこびり付いている物もあり、腐敗度からしても死んだ時期はバラバラらしい。臓器は丸々なくなっており、無理やり引きちぎったらしい事が窺える。骨の大きさから推定すると、女子供が多いようだ。肉質が柔らかく力も弱いので優先的に襲っているのだろうが、野生動物であんな真似が出来るのは熊くらいしかいないだろう。

「あれ? あの子は?」

冷静に分析する自分自身に引きつつ、先ほどまで一緒に居た女の子がいなくなっているのに気づく。目を離してまだ数秒しか経っていない。辺りは開けており、足音も無く走ったとしても、あの派手な着物ならすぐ見つけられる。それなのに、最初から誰も居なかったように、忽然と消えたのだ。

(やっぱり人外か?だとすれば留まるのは危険か)

一旦麓に戻ろう。背筋に寒い物を感じ、サンカは先ほど歩いてきた獣道を下り、麓へ急いだ。

先ほどと変わって、村には数えるくらいの人が屯していた。彼らは皆憔悴しきっており、中には怪我をしている者もいた。サンカは死人のようにぐったりしている彼らから長と思わしき人物に近づき、何があつたのかを尋ねる。

「なんだ? アンタは」

男は疲れ切った顔で返した。警戒されていると思ったサンカは事

情を話し、再度何があったのかを問うと、男はボソボソと聞き取りにくく言葉を発する。

曰く、最近現れるようになった見た事の無い異形が、山に踏み入った村人を攫ってしまうのだと言う。立ち寄った際に誰も居なかったのは、その異形を討伐するべく総出で山狩りをしていたためで、今こうして戻って来たのは、待ち伏せしていたその奇襲に会い、命から逃がら逃げかえってきたから、という事らしい。

「どこに行っちゃったんだか、皆山に入ったつきり帰ってこねえ。このままじゃあ全員いなくなっちゃう。そうなる前にあれを退治しねえと」

「……それ、僕に任せていただけませんか？」

自分にはスperlや名も知れぬ人智を超えた能力がある。練習には天狗である文や椀に付き合ってもらったため、どんな相手であってもそれなりに戦える力もついてきている自信はあった。

男は何を馬鹿など怪訝そうにしていたが、サンカは対抗できる証拠を見せようと、深手を負った何人かを能力を行使して治癒してみせる。急速に癒えていく傷口を目にして彼らは驚いていたが、たちまち目つきが厳しい物へと変わり、厳しい口調で、

「その力……お前妖怪か？」

村人らに緊張が走る。サンカは慌てて否定し、外界から来た人間であると伝えると、彼らは納得したように頷いた。

外界からきた人間は皆能力が使えると思っっているのか。外から来た人間の前例として守矢の巫女とやらがいるらしく、彼女もそういう能力を持っているのだそうだ。

「では決まりで？」

「……ああ、アンタに任せるよ。女房と娘の仇をとってくれ」

娘？　そいえば、あの女の子は誰の子供なのだろうかと思ひ出し、男にこんな事があった、と話してみる。すると、

「そりゃ千夏じゃねえか？」

「間違いねえ、千夏だ」

「千夏？」

「村長の一人娘だったんだが、一年前の七五三の時にフラフラッと出て行ったつきりで、未だに返ってこねえんだ。きっとあの化け物に食われたに違いねえ」

一年前となるとあの女の子はやはり人ならざる者だったのだろう。サンカは冥福を祈りつつ、村人達に更なる情報を与える。

「あの子が僕をあの山のある場所に連れて行ってくれたんです。そこに遺体は何体かありました」

「本当か!？」

「はい。案内しましょうか？」

「頼む！」

男らは鍬や鉋を手にとると、サンカの後に続いた。

17話 共闘

「此方です」

遺体のあつた場所まで案内すると、村人達は無惨に殺された者たちを目の当たりにして嘆き、憤慨した。サンカと会話をした男も力なくへたり込み、呆然として遺体の一つ一つを手繰り寄せては、もう二度と光の宿る事の無い相貌を覗き込み、涙を流す。

「必ず、必ず仇を取ってくれ」

「勿論です……さあ、此処は危険です。引き揚げましょう」

村の人々には単独で討伐を行うと伝え、夜間は家の外に出ないように固く釘を刺すと、彼らは頷き、遺体の回収作業を始めた。大きい物は簀巻きにして運び、小さい肉片などは極力拾い集めて頭陀袋に詰め、広場で纏めて茶毘に付すらしい。

大切な誰かを亡くした悲しみは計り知れない。肉親や親友といった存在を知らないサンカには一生縁はないのだろうか、その気持ちは痛い程伝わってきた。

「お主」

「はい？なんででしょうか？」

「儂も力になれると思うのだが、若者よ、どうか討伐の手伝いをさせていただけないかな？」

とある老人が一緒に仇を討たせてくれと頼んできた。束ねた白い長髪に緑の紋付袴を着たその老人は、一振りの太刀を背中に背負っており、好々爺とした雰囲気とは裏腹に、眼光は冷徹なまでに冷たい。ただ者ではなさそうだ。

「よしとけよ隠居爺さん。アンタももう歳なんだ、そっちの兄ちゃんに迷惑かけちまうだろ」

聞くに、老人は魂魄妖忌という名前で、隠居目的で最近定住して来たのだそうだ。妖忌は怪物騒ぎの度に討伐を名乗り出てはいたもの

の、かなりの老体という事もあり、半ば軟禁される形で止められていたらしい。

サンカもその老体では危険だと忠告するが、妖忌は鞘から太刀を抜き、近場にあつた枯れ木を鮮やかに両断してみせた。中々の腕前だ。

「儂にも弟子を取つて師範もしていたくらいの腕はある。これでも頼めないかの?」

「……わかりました。ですがご自身の身はご自身でお守りください。良いですか?」

「承知した」

他の村人達は反対していたが、サンカは妖忌の殺気だった気配に二つ返事で承諾した。

この老人はまだ闘い方を忘れてはいないのだろう。一人よりは二人、それも幻想郷で生活している人間がいる方が有利に立ち回れるし、もし役に立たなかったとしても、自分が陽動すれば逃げる時間くらいは確保できると彼は履んだのだ。

遺体の回収が終ると、村人達は別れを告げて下山し、二人で怪物が来るのを待った。

「ここはよく冷えますね。夏とは思えない」

「山越えした風が勢いを増して吹き降ろしておるからの」

日はとつくに沈んでおり、時折吹く強風が木々に反響して不気味な音を立てる。麓に見える村に灯った灯りを見て少し安心感を得られたが、その明かりが遺体を燃やしている炎かもしれないと思い、複雑な心境になる。

妖忌は刀を取り出して刃の具合を確かめると、暇つぶしに思い出話を聞かせてくれた。

昔はとある高名な人物に仕えていたが、その人物は大食いで手を焼いていた事、本来は庭師の仕事をしていた事など、聞いていて面白い話だった。

「その時に剣の指導もしていたのだが、指導相手が儂の孫娘でな。立派な剣士に育てるつもりが、少し頭が固くなり過ぎた」

「ははは……」

和やかに会話をしつつ、松明に火を付ける。寒くていられないのもそうだが、明かりが無ければ敵も見えないくらい、暗いのだ。

「ん？」

不意に血なまぐさい臭気と生暖かさを感じた。空気も重たいもの変わっていて、巨大な野生動物と相対した時の独特な圧迫感を覚える。

(来たか)

かなり近くに、それ、はいる。サンカはスペカを取り出し、いつでも行使可能な状態にしておく、妖忌も気づいたらしく、手入れを止めて刀を構えた。

「来ましたよ。覚悟はいいですか？」

「とつくに出来ている。お主は敵を恐れていないか？」

「……少しだけ」

こうして軽口を叩いていられる余裕はあるのだから、お互い大丈夫そうだ。目前の藪がガサガサと揺れ、黒い塊のようなものが現れると共に、血の匂いが濃くなった。松明の明かりが、その姿をしつかりと映し出す。

「君は確か……」

現れたのは、昼間に案内してくれた女の子だった。だが、異形と呼んでも差し支えないくらい、昼とは似ても似つかぬ姿で、ぼつかりと開いた眼孔から血の涙を流し、人の物とは明らかに異なる鋭い牙の隙間から涎をボタボタと垂らす、おぞましい見た目をしていた。

体をブルリと震わせ、踊る様な動きで駆け、高く跳躍する。黄ばん

だ牙をむき出しにして飛び掛かってくるそれは、もはや醜い怪物そのものだ。

やられる前にやらなくては。サンカはスペルを宣言する。

「スペルカード！すいか衰禍・せんぐんじゆうそう千軍獣葬！！」

二人の前に小さな光弾が壁上に展開されると、光弾達は辺りが昼間のように明るくなる程の青白い光をまき散らしながら、群れたムクドリの声にも似た音を立てて怪物に殺到した。

怪物は避ける動作が欠落しているのか、そのまま弾幕に突っ込んで自分から攻撃を浴びたものの、決定打とは成り得ていないらしく、想定内ではあるが依然として動き回っている。

それもその筈、千軍獣葬は本来攪乱や威嚇等に用いる弾幕であり、見た目が派手なのと速度が速い割には威力が低い。例えすべての攻撃を当てたとしても、倒すのは厳しいであろう。

ではなぜこの弾幕を使ったのかと言えば、他はどれも威力が高すぎるため、不用意に使って妖忌を巻き込まない保証が無いためだ。

(妖忌さんは?)

隣に目をやると、彼の姿がない。どこへ行つたと探していると、ぎやあつという男とも女とも解らない悲鳴がし、血濡れの頭が転がって来た。どうやら妖忌が切り落としたようだ。サンカは反射的に蹴り飛ばし、頭は闇夜へと消える。

「どうやって討伐するのかと思えば、弾幕を使えるとはな、若者よ」
「まあ、はい。練習中ではありませんが」

他愛も無く討伐を終え、緊張を解いた妖忌が刀を鞘に納め、怪物の死骸に背を向けた――

「ぐうう!!」

斬り落とした怪物の首から新たに頭が生成され、油断している妖忌の利き腕に食らいつく。彼は苦悶の表情を浮かべつつ、刀を再度抜刀

しようとするが、利き手を封じられた上に長い刀身が仇となり、鞘から引き抜けないでいる。

「儂ごとコヤツを討て！」

「そんな事をしたら、妖忌さんが！」

「多少の攻撃は耐えられる！早く討て！」

迷っている暇はない。サンカはスペカをもう一枚取り出し、再度宣言した。

「スペルカード！冥撃・黄泉御霊！」

18話 内緒事

全力ではいけない。サンカは能力を最小まで絞り、手中に赤黒く光る針を一つだけ作ると、妖忌の体が見計らって投擲した。

針は分裂して正確に標的を穿つ。着弾箇所がボコボコと膨れ上がり、異形は爆発して赤い霧になった。妖忌は衝撃波で吹き飛ばされると、老体とは思えぬ俊敏な動きで上手く着地し、利き手とは逆の手で太刀を抜き放ち、降ってくる肉片を文字通り細切れにする。

「不覚だ。まさか一撃貫うとは」

「仕方ありませんよ。あれでは誰もが勝ったと思います」

怪物の肉はまだ少し動いてはいるが、プラナリアでないのだからまさかここから増えたりはしない筈だ。

「う……かはっ……」

後ろの鬱蒼とした草むらから空気の漏れる音がした。昼の女の子の物のようで、蹴り飛ばした頭から鳴っているようだ。妖忌を座らせると、草むらに松明をかざし、頭を探す。

頭はすぐに見つかった。不思議な事に切断面からは血が出ておらず、顔は昼間に見た人間の顔に戻っていた。頭は声帯諸共切断されているため声が出せないものの、ゆっくりとではあるが、口を動かして何か喋ろうとしている。その為サンカは、おおよその口の動きから言っている事を予測していく。

(……ありがとう?)

ありがとう。確かにそう言っている。首はその一言を伝えると、虚空を見つめたまま反応を示さなくなり、完全に死亡したことをサンカに知らせた。表情はどこか明るく、喜んでいられるようにも見えた。

わからない。サンカは感謝されたのが理解できないまま首を茶毘に付し、座っている妖忌の元へ戻る。

「立てますか？」

「どうにかの。しかし、お主は本当に人間なのか？随分と霊力が多いようだが……」

「は？」

「……いや、気にするな。さて、お主に頼みが――」

「いた！」

妖忌の声を遮り、聞き覚えのある声が耳に入る。見上げると影が二つあり、うち一つは高度を急激に下げて降りてきていた。見覚えのある黒と紫を基調にした服を纏った少女と、白い髪に狼の耳と尻尾が生えた少女だ。あれは哨戒天狗の椀と――

「はだッ!!」

言い終わる前にはたての頭突きを腹部に受け、数m吹っ飛ばされて倒れる。

胃酸が上がって吐きそうになるのを堪え、体にしがみ付いているはたてを引き剥がそうとするが、力が強すぎて離れてくれない。それどころか離そうとすればするほど、離れまいと爪を肉に食い込ませて抵抗してくる。

「はたて……苦しいし痛いよ」

「やっと見つけた……やっと……」

ふと小さく嗚咽しているのに気づき、胸元に湿り気を覚えた。泣いているのだろうか。そつと抱き寄せると、サンカの背中に回された彼女の腕に力が入り、嗚咽がより激しくなっていく。

(心配させすぎたか。予定よりもかなり遅くなったし)

頭を撫でて落ち着かせようとするが、中々収まる心配がない。

以前にも一声かけず数分ほど出歩いた時、彼女はパニックを惹き起こし、サンカを探し回って傷だらけになっていた事があった。たかが居候にそこまで依存する理由は知らないが、それからは極力一緒に居る様に気を使っている。

だが、やはり単独で行動できないのは困ったものだ。サンカはなんとかしなければと、宥めながらいい案を模索した。

「まさか天狗と知り合いとはの」

「知り合いと言うより、はたて様にとっては知り合い以上かもしれないせん」

妖忌はサンカ達の様子を見ながら、隣に降り立った権と会話をしていた。

彼女ははたてにお願いと言う名の強要で、仕方なしに自身の能力である《千里先まで見通す程度の能力》でサンカを探し出し、此処まで来たのだ。はたての能力では何所に居るかまで分からないからこそ引つ張り出されたが、折角の休日で惰眠を貪っていた所を叩き起こされたのだから、迷惑千万、煮え湯を飲まされた気分である。

妖忌は権の含みを持たせた発言に片眉を上げるが、意図を掴んで納得とも驚きともとれる表情をした。

「人と天狗がか……奇妙な関係だな」

「ええ……あ、そうだ。妖忌さん、次回の対局ですが、明後日に如何でしょうか？」

「うむ、よかろう」

二人は以前から面識があり、時折将棋をする仲である。そんな将棋の実力は妖忌の方が勝っていて、340戦中330敗北という有様ではあるが、次の対局まで戦略を練って挑むのが、権の数少ない楽しみだった。

申し込みを受け入れた妖忌に対し、権は疲れた笑みを浮かべ、はたての元へと歩み寄り、彼女を諭す。

「はたて様、一度離れましょう。サンカさんが嫌がってますよ？」

「大丈夫だよはたて。僕は自分からは何所にもいかないからさ」

嫌がっているつもりはないのだが、そろそろ背骨が悲鳴を上げ始めており、体の彼方此方が痛み始めているのがはつきりと分かる。下手すると一生離れ離れになる可能性もあるので、解放してもらわないと

まずいのだ。

二人に促されたはたては、真っ赤になった潤んだ目でサンカを見つめ、一つの条件を提示する。

「あと1分だけ……あと1分だけでいいから、こうさせて……」

「はいはい」

それで放してくれるなら安い物だ。撫でるのをやめて、今度はしっかりと抱擁し返す。

月夜に照らされる彼女の髪は、艶やかな光を反射しており、少し動くたびに石鹸の良い香りがする。

「……落ち着いた？」

「うん。ありがとう」

「終わったかの？」

時間ピツタリに抱擁を終えると、妖忌の声でハッと我に返った。顔を両手で覆ってふさぎ込み、人前でこんな事をするなんて馬鹿にも程があるだろうとサンカは赤面して呟くが、気にしているのは椀だけで、妖忌はなんとも思っていないらしく、話しを続ける。

「続きだが、もし儂の孫にあつたとしても、儂が何所にいるかは教えな
いでほしいのだ」

「何故です？お孫さんの顔を見たくないんですか？」

「見たいところだが、これも修行の一環でな。もし教えたなら、会いに
来てしまうかもしれないからもう」

「そういう事でしたら、まあ」

会うとは思えないが、懇願されたら断れない質なので一応承諾はし
ておく。サンカは妖忌に別れを告げ、はたてに抱えられて夜空へと飛
び立った。

19話 八目鰻

少しお腹が空いたかな。満月が大きく見える雲一つない夜空の中で、サンカははたてに運ばれながら空腹を訴えていた。

カマイタチモドキを喰らって以来、能力を使うと猛烈に何か食べたくなる衝動に襲われるようになった。今回も空腹の余り討伐した異形を食べようかと思案したくらいだが、妖忌やはたての前で、それもウゾウゾと蠢く肉片を見れば食指も失せてしまい、こうして宙ぶらりにされながら申告するに至った。

因みに、はたて達天狗を含むすべての妖怪から危険視されてしまうので、妖怪を喰らった事はまだ誰にも教えていない。

「小腹が空いたの？うくん……それじゃ、ちよつと寄り道してく？いいお店知ってるから」

「！ひよつとして、あそこですか!？」

いいお店という単語を聞いた途端、権は目を輝かせ、普段の落ち着きっぷりからは想像もつかない調子で尻尾を振る。反応からするに、さぞ美味な一品を共する店なのだろう。

「そんなに良いお店なのかい？」

「屋台なんだけど、そこで出す料理がとっても美味しいの。きつと気に入るわよ！」

権は早く早くと急かし、少し先の方に行く。少なくとも彼女はサンカより遥かに年上なのだが、言動は幼っぽさがあり（そしてフカフカの尻尾も）、彼は妹のように接していた。

しかし、一言二言会話をするだけでも、はたてから刺すような殺意と視線を絶え間なく送られており、あまり気は休まらない。それに、権と会話を終えて話題をはたてに向けると、鳥餅の如くベタベタとくっついてくる始末だ。最近では文と話していても同様で、意図の見えない行動に少なからず恐怖心を抱く事もあった。

そうして思案している間に霧の立ち込める湖と紅い屋敷を越える

と、二人は何かを探すように地表を見渡し、目を凝らす。件の屋台を探しているのだろ*9う。一緒になって探してみると、山の中腹に薄ボんヤリした明かりが見えた。

「いたいた。今日はおそこでお店開いているのね〜」

「まだ始まったばかりだと良いんですけど」

「なにか問題があるのか?」

心配そうにする権に質問すると、彼女は恥ずかしそうに

「いえ、その・・・目当ての物が無くなってるかもしれないので」

と答えた。意外と食い意地を張っている。権は待ちきれないらしく、先に急降下していく。

はたてもサンカに負荷をかけないようにゆっくり降下し、屋台の前に降り立つ。

屋台は牽引式の小型の代物で、使い古された椅子に八目鰻と書かれた赤い提灯が目を引く。奥では奇抜な格好をし、異形の翼に小さな羽らしき耳が特徴の女性が、なにやら熱心に焼いていた。うねうねのたぐった形で串に打たれた鰻(?)からタレが炭に落ちて爆ぜ、香ばしい香りと共に食欲を刺激する。権の姿もあり、既に席について一杯始めている。

「いらっしや・・・あら、はたてさんこんばんは。人間のお連れ様は珍しいですね」

「最近一緒に暮らし始めたの。ミステイア、注文は二人分の鰻と冷酒でお願いね」

「ああ待ってくれ。僕はお酒飲めないんだ・・・ごめん」

冷酒と聞いてサンカは慌てて断った。彼は酒類にめっぽう弱く、ビールでも一口飲み込めば吐き気と悪寒に襲われてしまうのだ。はたては酒が飲めないなんて損をしていると言うが、飲めなくても生きていけるのでなんて事は無い。

「わかりました。少々お待ちくださいね」

ミスティアと呼ばれた女性は水の入ったコップをサンカの前に出すと、新しい鰻を取り出して手際よく焼き始める。鰻なんて久しく食べていないので楽しみにしていたが、焼いている物をまじまじと見て、楽しみが不安へと変わっていく。

鰻とは言うが、今焼いているそれは本家鰻とは似ても似つかぬ八目鰻だ。昔食べた覚えがあるが、硬くてとても食べたものでなかったと記憶している。本当にそんな物が美味しいのだろうか？

疑問をミスティアに投げかけつつ見ていると、視線に気づいた彼女は微笑み返して来た。どうやら自信はあるらしく、任せてくださいと言おう。

「そういうえば、サンカさんって人間換算で二十代でしたよね？それなのに、その……失礼なんですけど白髪が目立ちますし、時々歳以上の風格というか、私達天狗くらい生きてきたような気がしてならないんですよね」

椀が話しかけてきた。既に軽く酔っている。

「んー、もしかしたらそうかもしれないね。二十代って言うのも周りの人から見た評価を加味した結果だし、本当は三十路かもしれないし、四十路かもしれない」

「え!?! そうだったんですか!?!」

「僕には数年前くらいの記憶しか残っていないんだ。自分が誰だったか、何をしていたのか……本当に自分が何者なのかわからないんだ。そもそも人ですらないかもしれないし」

何気なく明かりに手をかざしながら答えを返す。白髪が目立つのはそれだけ気苦労が絶えなかったのだろうし、歳以上の風格とやらも、それだけ修羅場を潜って来たという意味なのだろう。

と、ミスティアがコンガリ焼けた八目鰻と冷酒を三人に差し出した。上手く焼けてはいるが、色合いも相まって蛇のようにも見え、食べるのを少し躊躇する。

「冷めないうちに頂きましょう！これを食べに来たんだから！」

「じゃ、じゃあ、いただきます……」

「どうぞ、召し上がってください」

恐る恐る齧ると、甘辛い味付けにコリコリした食感で中々悪くなかった。あの時は下処理せずただ焼いただけだったので、不味く感じられたのかもしれない。

食べ進める速さが増すのを見たはたては嬉しそうに、

「ね？美味しいでしょ？」

と言った。これははたてが食べたがるのも頷ける。サンカはもう一本注文し、サービスで用意してくれた白飯を掻っ込む。

(あれ？サンカさんの髪……)

椀は酒を含みながら、食事を取るサンカを見て違和感を感じ取った。心なしか白髪が減り、若返っている気がしないでもない。

(……まあ、いっか)

違和感があるように感じるのは酒のせいだろう。椀はそう決めつけると、空になった酒のお代わりを頼んだ。

20話 たわいもない用事

どうしてこうなった。

雀の鳴く声で目が覚めると、すぐ隣ではたてが寝ていた。記憶にある限り、昨日は家まで帰った後、酔っ払った彼女を自分に宛がわれた寝室に寝かせ、サンカは作業部屋で外套を被ってごろ寝した筈だ。それなのに、この部屋は作業部屋ではなく寝室であり、しかも同じ布団で仲良く並んで寝ているのである。

時計を見ると、時刻は7時42分。もうすぐ文が新聞を配達しにやって来る時間だ。こんな状況を彼女に見られたら、どうせ録な事にならない。その前にここから抜け出さなければ。

はたてを起さないように、非常に緩慢な動作で布団から這い出て立ち上がると、欠伸をして土間の方へと歩き出す。

「待つて……」

「ひよ!?!」

前触れ無く右足を掴まれて変な声を出してしまった。振り向くと、寝ぼけ眼を擦りながらはたてが起き上がる場所だった。

「おはようサンカ。どこに行こうとしてるの?」

「お、おはよう。ちよつと顔を洗いに行こうと……」

「だめ」

ガバツと一気に起き上がり、サンカを掴んで押し倒す。後頭部を強く打つが、幸いな事に畳の上だ。痛みはするが傷にはならない。

「ちよ、はたて」

「どこにもいかないで……」

彼女は体の上でうつらうつらとしており、今にも寝入りそうだ。

と、土間の方から戸をガラリと開ける音が聞こえた。文が来たのだ。

「おはようございま……あれ? いませんね? とするとこつちかな〜」
ドタドタと靴を脱ぎ、此方へ走ってくるのが分かる。寝室の中は中途半端にはだけた服の男女がそろって寝ている状態―非常にまずい。すぐに止めなければ。

「待つ―」

遅かった。襖がなんの遠慮も無く開き、文が満面の笑みで新聞を掲げる。

「おつはようございまーす!! 清く正しい射命丸の、文々。新聞で―」
声のトーンが下がり一気に真顔になると、新聞をパサリ、と落とした。

最悪だ。この状況を他人に、それもよりにもよって文に見られるとは。

「あ……お、お邪魔でしたね。失礼します」

「違う誤解だ!! そのカメラをこつちに向けるんじゃない!! やめろ!!」
その日の朝は、雄鶏の鳴き声よりも先にサンカの悲鳴が響き渡った。



「河童に会いたい?」

文の誤解を解いて追い出した後、ようやく目が覚めたはたてに打診すると、彼女はうーんと考え、二つ返事で承諾してくれた。

「河童になんか会ってどうするの?」

「ちよつと頼み事をしたくてね。一人で……」

言いかけて口を閉ざす。そういえば昨日、一人でどこにもいかない約束したのだった。早速それを破っては約束の意味がない。

はたてと一緒に行きたいと言い直すと、彼女は何故かとても喜んだ。目はキラキラと輝き、少しだけ跳ねている程だ。

ただの居候相手とそんなに一緒に居たいものなのだろうか。やはりはたては何処か不思議なところがあるなど、サンカは改めて思う。

「そうと決まれば早速行かないと。あ、昨日言ってた温泉も行きましょ!!」

「あ、うん」

どうしても温泉に連れて行きたいのかと思ったが、昨日は風呂に入っていないので体がべた付いて気持ち悪い。彼女の提案を呑み、風景を見ながら入浴するのも悪くはないだろう。

荷物一式を差し出されたので受け取ると、はたてはサンカを抱えて飛び立った。流石に数回も飛んでいると慣れてくるもので、今では笑談もできる。

「なあはたて。こっちの河童ってどんな感じなんだい?」

「うーん、多分サンカの想像する河童とは違うと思う。人間に近い格好してるし。それにしても、それ何? 妙に重いんだけど。腕が疲れちゃうわ」

「これ? キュウリ」

河童と言えばキュウリという安直な発想で山ほど調達したが、想像と違うのであれば不要になるかもしれない。そうなったら暫くは主食がキュウリになる事を意味しており、頭が重くなった。

(いざとなれば近所に配るか)

折角購入したのだ。幾らなんでも捨てる訳にはいかない。

「そろそろ着くわ」

「ん、わかった」

ふわりと着地した先は、森に囲まれた大きな沢だった。深い新緑の香りと沢のせせらぎは落ち着きを与えてくれる。人の喧騒も良いが、たまにはこういう場所も悪くない。

周囲を一瞥していると、はたてが手を振った。目を細めると、ゴツ

ゴツとした崖の下に人影があり、はたてに反応して手を振り替えしている。

暫くして無人の船が流れて来た。船はよく河辺に見かけるような小さな木製の物だが、船尾に大仰なモーターとアンテナが付いている。

「ほら、乗って」

促されるがまま船に乗り込むと、何もしていないのに船首を崖に向けて進み出した。モーターから聞こえる音は小さく、サンカはその技術力の高さに感嘆の声を漏らす。

やがて船が崖下にたどり着くと、緑のキャスケットを被り、青で統一された服を着た少女が迎えてくれた。

「どうやら彼女が河童らしく、初めましてと握手を求めると素直に応じてくれた。どうやら人間とは友好的らしい。」

「初めまして。河城にとりだよ」

「にとりさんですね。僕は箕作サンカって言います」

「サンカ？ああ、最近噂の人ね。よろしく!!」

噂になるような事をなにかしただろうか。思い出そうとしてみるのが、覚えになかった。

「まあ気にしなくて大丈夫だよ。さき、着いてきて!」

客人を作業場まで案内してくれるらしいので、二人は船を降りて後を付いていく。

崖は下部が大きくくり抜かれており、内部は崩落防止に鉄骨で補強されていた。簡素な足場を渡っていると、にとりと同じ格好をした数人の河童たちが、工具を片手に作業をしているのが確認できる。

「いやあ盟友が直接訪れるなんて珍しいね。で、何の用だい?」

人数分の暑いお茶をちゃぶ台に置くと、にとりは切り出した。盟友(人間)の頼みなら出来る範囲で何でも協力すると言質を得たので、遠

慮なく要件を伝える。

「実は飛行装置を作っていたかと思ひまして」

河童は非常に高い技術力があるとはたてから聞かされており、話だけでも人間の持てる技術以上の物を作り出し出している事が窺えた。そこでサンカは、空を飛べる機械をも作れるのではと考え、態々依頼をしに来たのである。

「飛行装置？空を飛びたいのかい？」

「はい。今は長距離をはたてに運んでもらっている分際です……」

何故そんな事と言いたげに、はたてが此方を見た。反応を予想していたサンカが理由を話す。

「いつまでもはたてを頼ってばかりじゃ悪いよ。移動くらい自分で出来る様になりたい」

「でもそれだと私がサンカにしてあげられる事が……」

「はたては家に僕を居させてくれているじゃないか。それだけで十分だよ」

「……わかった」

渋々同意してくれたが、何故か罪悪感を感じた。にとりは話を聞いていたのかいないのか、仲間内で話し合いをしている。

暫くするととりが戻ってきた。彼女は両手に抱えた靴の様な物を、湯呑がひっくり返るのも構わずちやぶ台に置いた。

21話 掃除屋

「これでどうかな。まだ試作だけど飛行は問題なくできる筈だよ」

提出された装置は両足に装着するブーツの形状をしており、金属質に赤く輝く外見は中々重そうだが、持ってみると思いのほか軽い。なんでもヒイロカネと呼ばれる素材を元にして作ってあるのだと言う。

履いてみると促すので装着してみると、足を包むように周囲の外装が閉じた。少し冷たさがあるが、意外と履き心地は悪くない。

「それは重力を操作して飛行を行うモデルなんだ。使い方はまず浮く事を考えた後、重心を移動させる。以上だよ」

「それだけですか？」

「それだけ。簡単でしょ？」

考えろと言われたので浮くことに専念してみる。暫しの格闘の末、如何にかイメージが浮かぶと、それに連動して紫の燐光が足を取り巻くように現れ、ふわりと音もなく宙に浮いた。

はたては驚きの様子で見上げており、にとりも何故か驚愕の表情を浮かべていたが、慌ててガッツポーズを見せた。

「おお、浮いてる」

「そ、そうだね……次は重心を移動させてみて」

言われるがまま重心を前方に傾けると、シュッと音を立てて前進した。今度は重心を後ろにやると、徐々に速度を落として停止する。

成程、重力を操作するだけあって、飛ぶと言うより落ちる感覚に近い。

「これは凄いですよー！」

思考を止めると、ガシヤリと金属音を立てて着地する。サンカは興奮気味に感想を伝えると、にとりは気を良くしたのか、

「そうでしょそうでしょ？中々作るのが大変だったんだ。折角だから

「それ、タダであげるよ」

「良いんですか!?!ありがとうございます!?!」

「タダで良いにとりは言っていたが、これ程の物を貰えるのに無償でというのも申し訳ない。」

サンカは何かないかと思案した後、手土産にキュウリを山ほど携えて来たのを思い出した。安直なイメージで怒られそうだが、恐る恐る伝えると、

「何!?!キュウリ!?!」

にとりがすぐによこせと迫ってきたので、風呂敷に包んだキュウリを明け渡すと、彼女は中身を確認して恍惚の表情を浮かべ、ありがとうねとバシバシ叩いてきた。お気に召していただけただけの様だ。

「あ、そうだ。これって色は変えられますか? 黒にしたいんですけども……」

「それくらい朝飯前だよ!?!すぐにやってくるね!!」

「お願いします」

(早く温泉行きたいなあ)

はたては盛り上がる二人をよそに、水面を流れてくる紅葉を指でクルクルと回した。

「今日はありがとうございます。お洒落な模様までつけていただいて」

「いいって事よ! 盟友の頼みは断れないからね。それじゃ、また遊びに来てね」

「はい。それでは」

サンカがはたての補助を受けながら飛び立ち、遠退いていく。二人の姿が見えなくなると、眼鏡をかけた河童がにとりの隣に来て、レンチで肩を叩きながら不安げに尋ねた。

「それにしても、あれ渡して大丈夫だったの？」

「まあ問題ないんじゃない？今まで飛行できた試しがないけど」

にとりは黒い笑みを浮かべると、キュウリを齧りながら呟いた。

「どうって事ないだろうさ。隙間妖怪の便利な掃除屋なら」



「調子良さそうね。それ」

「うん。河童って凄いなだね。こういう物も作れるなんて」

両足から紫の燐光を放ちながら、サンカははたてに遅れまいと飛翔していた。操作は難しいと思っていたが、案外簡単に扱う事が出来ている。

外装の色と推進力を生み出す光は、はたてとお揃いの黒と紫だ。彼女も気に入っているらしく、塗装が完了した時には笑顔を見せていた。

(しかし、な)

はたての横顔をチラリと見る。飛ぶ事に専念している彼女は凛々しく、普段感じる愛らしさはない。自分を運んでいる時、いつもこんな表情をしていたのだろうか。

(こうして見ると可愛いだけじゃなく凄い美人だな……いや、何を考えてるんだ、僕は)

頭をブンブンと振り、邪念を追い払う。出会ってから数日たった今、彼には複雑な感情が芽生え始めていた。こちらに笑顔を向けられるとドキリとする、これまでに感じたことのない、しかし決して不快というわけではない感情だ。一体これは何なのだろうか。

自問自答をしていると、煙が無数に立ち上っている場所が見えてきた。

微かにする温泉特有の臭気に思わず顔をしかめると、はたてが急降下したので、サンカも後に続こうと足の角度を変えて重心を下に向け

る。

「あれ？」

突如として装置が停止した。

推力を失ったサンカははたてを追い抜いて真つ逆さまに落下を始め、慌てふためきながら状況の解決に努めた。装置は短い間隔で煙を吐いており、再起はできなさそうに思えた。

どうやらとんでもない不良品を渡されたようだ。今となつては人間が盟友という河童の言い分が本当なのか疑わしい。

直下にはボコボコと湧いている泥水が刻々と迫っている。

「動け!!動けよこのポンコツ!!」

罵倒したのが吉と出たのか、沈黙していた装置が動き出した。煮えたぎる湯に浸かりそうになりながらも体制を立て直し、陸地まで移動して着陸すると、両足の装置を外して膝をつく。

外套を落としてしまったが、熱湯には潜れないので諦めるしかないだろう。引き換えに助かったと思えば安いものだ。

「危なかった……」

「大丈夫!?怪我は!?!」

はたてが血相を変え、跪くサンカの前に降り立つ。

「大丈夫、何ともないよ」

心配しているので無事だと伝える。その言葉を聞いたはたては安心した後、表情に怒気と殺意がみるみる表れ、般若の形相となった。

「あの河童共、サンカに怪我させようとするなんていい度胸ねえ?安心してサンカ。アイツらは後で3枚に下して干物にするから」

「い、いや、そんな事しなくていいからさ。これ試作品って言っていたし、無理言っって引き取ったようなものだし……」

はたては聞く耳を持たない。本当に止めなければ有言実行されてしまう気がする。サンカははたての肩を掴むと、揺すりながら大声で

言い聞かせた。

「大丈夫だって！怪我はしてないし、いたって元気だから！ほら！」
「……わかった。今は止めとく」

今は、か。

とりあえず幻想郷から河童が絶滅する事は多分無くなったが、彼女は
はまだ少し不機嫌そうだ。

「それより、温泉だっけ？ここからは近いのか？」

「うん、すぐそこ」

話題を逸らすために当初の目的を尋ねると、彼女は後ろを指さした。最初は湯煙で見えなかったが、強めの風が吹いたことでその全貌が現れる。

「おお……」

光景を目にし、感嘆の声を上げる。温泉は幾多の岩に囲まれており、とても広々とした湯船は快適そのものだ。透き通った湯も河からの水が入り混じっている事もあり、手を入れると丁度良い塩梅に保たれている。更には露天のため仕切りを除けば非常に開放的で、美しい山の景観を一望できた。夏だけでなく、春や秋もさぞ綺麗な風景が間違いなく見れるだろう。

脱衣所も完備されていたので、早速着替えるべく向かうと、何故かはたても同じ脱衣所に付いてきた。混浴かと思っただが、男女別で区切られているので出て行って貰った。

被服を脱いで持ってきた大きなタオルを体に巻くと、湯船に浸かる。真夏ではあるが、風が心地よく幾らでも入っていられそうだ。

サンカはホツと一息着くと、顔の半分までお湯に沈めた。

22話 ガキ

(この仕切りさえなければ一緒に居られるのに……)

申し訳程度に作られた仕切りを見上げながら、はたては湯船に口を付けブクブクと泡を出していた。

異変によつて出来たこの温泉は元々混浴だったのだが、それに絡んだ騒動が起こったせいだ。男女別となっていた。予定していた事はできなかつたが、薄い壁一枚を隔てた向こう側に彼がいると思うと、胸が高鳴る。

サンカが同じ布団で寝ていたのは、彼が寝ぼけて入り込んだのが原因ではない。彼が眠つたのを見計らい、はたてが布団に運び込んだのだ。出来る事なら色々したい所だったが、起してしまつては元も子もないので寝顔を堪能する程度に留めておいた。

(……サンカ。なんで私の事を忘れちゃつたの?)

彼が記憶を無くしていたのはショックだった。約束も思い出も、自分のことでさえ何も覚えておらず、無意識に過去の言動を取る彼を見て複雑な気持ちになった。

だからこそ、はたてはサンカの消失した記憶を埋める為に敢えてしつこく接し、少しでも”姫海棠はたて”という存在を刻みこもうとしていたのだ。

また離れ離れにならないように、また自分を置いて居なくならないように、彼女の永年の恋を叶える為に。

(いけない、あんまり悪く考えちゃ駄目。もっと良いことを考えないと……そうだ、この後はどうしようかな。里に行つて買い物デートも良いし、その後あんな事やこんな事を……ああ!お風呂上がりの彼を想像したら!!)

「二人妄想を広げるのは楽しい?」

湯の流れる音に混じつて声がした。サンカではない。間違いなく女の声だが、紫でもない。何者だろうか。はたては警戒し、声を張り

上げる。

「誰?!」

「どうしたはたて? なにかあったのかい?」

仕切りの向こうからサンカの不安そうな声が聞こえた。こうして心配してくれるのだから、やはり彼は優しい。

はたては気のせいだったと返すと、改めて声の主を探した。今は身一つな上に、取材道具でもあり武器でもある携帯を所持していないので、襲われればひとたまりもない。

「別に襲いはしないわ。そう警戒しないで」

また声が聞こえた。それに口ぶりから思考を読まれているような気もする。

周囲を警戒していると、湯煙に紛れて接近する何者かの気配が、明確に感じ取れるようになってきた。はたては何時でも飛び立てるよう、翼を広げて睨みを効かせる。

「見慣れない天狗ね。ここに来るのは初めてかしら?」

姿を現したのは小さな少女だった。桃色の髪を短く整えた彼女の裸体には、巻き付くように赤い血管らしき物が付いており、禍々しい一つ目玉がギョロギョロと動いていた。

(この女、相当な力を持つてる……一体何者?)

「私が誰か? そうね、自己紹介がまだだったわ。私は地霊殿の主、古明地さとりよ」

やはり思考を読まれている。はたては警戒を解かずに、さとりの発した地霊殿という単語を自身の記憶から探し出す。

暫くして答えが見つかった。地霊殿とは地底の旧地獄に存在する屋敷で、この温泉が出来る切っ掛けとなった異変の際に、博麗の巫女が乗り込んだ場所だ。

そして、仮にこの少女の言うことが正しければ、彼女は地霊殿の主

で、^{サトリ}覚と呼ばれる妖怪になる。地底の管理を任される大物がこんな辺鄙な温泉まで来るとは信じがたいが、覚は心を読むらしいので、あながち嘘では無いのだろう。

「そこまで知っているのね」

また心を読まれた。はたてはさとりを睨みつける。

「地霊殿の主様が一体何の用？」

「貴方の連れに関して言いたい事があるの。安心して。どうこうする気はないから」

嘘は言っていないようだ。はたてが警戒を解く。

「貴方の連れ、なんて言ったかしら……そう、サンカだったわ。彼つて餓鬼よね？まだ生き残っていたなんて」

「！」

それを知っているのは自分と紫だけの筈だと、はたては酷く動揺した。一体どこからその情報を手に入れたのだろうか。

「紫が教えてくれたの。彼は本来閻魔の管轄下に居なければならぬ存在。地上に野放しにしておくべきではないわ」

「何？サンカを殺せてわけ？」

「そうは言っていないわ。彼が何も知らない状態で能力が使える今は良いけれど、自分が何者だったかを思い出したら周りにどんな影響があるか、そのリスクも考えて欲しいの」

何を言い出すかと思えばと、はたては一笑に付す。

たとえ幻想郷が滅びようとも、サンカさえ居れば私は幸福なのだ。彼は私を愛してくれているのだから、他人がどうなろうとどうでも良い。そんな歪んだ心情が、はたての中にあつた。

さとりはそんなはたての思考を読み取ると、諦め気味に頭を抱えた。

「何を言っても無駄なようね。わかったわ」

「……」

「彼の秘密は守るわ。約束よ」

さとりが、

「のぼせたわ」

と湯から上がって脱衣所へと消えると、再びはたてだけになった温泉を静寂が包んだ。

服を着て外に出ると、サンカはさとりと似た少女と会話をしていた。どうやら揉めているようだ。はたてはサンカに飛びついて、二人の注意を逸らす。

「サ〜ンカー！」

「はたてか。丁度いい所に来てくれた」

彼の体から里で購入した石鹸の香りが漂ってきた。プレゼントした物をすっかり使うのも、彼の良い処だ。

憎悪の籠った視線を少女にやると、少女は頬を膨らませていた。

薄緑色の髪の毛の奇抜な格好の少女には、さとりの体に巻き付いていた物と同一の青い目が付いている。

「ごらごいし、困ってるじゃないの」

「えー」

どこからともなくさとりが現れて注意すると、こいしと呼ばれた少女は不服そうに頬を膨らませ、ジタバタと駄々をこねた。

「あのねこいしちゃん、僕は――」

「いいじゃんいいじゃん！この子がほしい！」

「我儘言わないの。それにガキの面倒なんて、ウチじゃ見れないわよ」

「ほらお姉さんもこう言って……何だって？」

「あ、ああもうこんな時間なのね！サンカ、早く帰らないと、明日の朝

刊が書けなくなっちゃうわ！」

はたてが古明地姉妹とサンカのやり取りに割って入り、別れを一方的に告げ、サンカを抱えて妖怪の山へと飛び立った。

これ以上あの二人と一緒に居るとこちらのペースもおかしくなる。はたては小さくなっていくさとりを見、小さく舌を出した。

さとりが胸を撫で下ろす。サンカと呼ばれていた生物の心を覗いてみたが、彼自身の声は聞こえず、代わりに無数の叫び声とうめき声が聞こえてきた。

あの男は危険すぎる。近いうちに何らかの方法で処分しなければならぬだろう。

「お姉ちゃん、あの子の事がキツて……」

こいしが頭に疑問符を浮かべている。さとりはその疑問には答えず、微笑んで彼女の頭を優しく撫でた。

「気にしないでいいのよ。さ、私達も帰りましょう」

23話 短い休みの終わりに

「ねえサンカ。あの子と何を話してたの?」

妖怪の山上空を飛行しながら、はたては尋ねる。

彼女は威圧しないようにと精一杯笑みを浮かべてこそいたが、目は笑っておらず、苛立ちを抑えられていないのが丸わかりだった。

それに加えて、答えによつては今ここで撃ち落とすと言わんばかりの殺気も出している。サンカは何故彼女が苛立っているのか腑に落ちないまま、ありのまま起こった事を話す。

「それがさ、はたてが出てくるまで世間話をしていただけで、突然うちに来ないかって言われたんだ」

はたての顔が強張る。サンカは基本的にお願いや提案を拒否することが出来ない性格で、面倒な仕事すら引き受けてしまうのだ。もしかしたら今回も承諾してしまったかもしれない。彼女が恐る恐る聞くこと、

「行かないよ。あの子、僕をペットとして飼うって言うんだもの。そもそも僕には居場所があるし」

と一笑に付し、風圧で飛びかけた帽子を手で押さえた。はたては安堵すると共に、さつきまで頭を悩ませていた自分が馬鹿らしく思え、クスクスと笑う。

(そうよね。彼が私から離れるわけないものね)

「何かおかしいかい?」

「ううん。なんでもない!」

いつもの明るい感じに戻る。一体何だったのだろうか、サンカは不思議そうに首を捻った。



家に到着すると、サンカははたてに甘い物を食べないか、と持ち掛けてみた。今日は不機嫌そうな言動を取ることが多かったので、おやつ時にも丁度良いと判断し、機嫌を直す一環として提案したのだ。

女子は甘いものを好むという法則は人外と言えど適用されるようで、はたては甘味と聞いた途端、すぐに食いついてきた。

「それじゃあすぐに作るから、座って待っていてくれ」

「分かったわー！楽しみ〜」

期待は大きいので答えなければなるまい。里で幾つか購入した有り合わせの材料と、霧の湖の畔で遭遇した氷精に（無理やり）作らせたアイスクリームを保冷容器から取り出し、手際よくあんみつを作り上げていく。

本当は個人で食べようと思っていたのだが、やはり人が多いほうが楽しく食べられると判断しての事だ。夏の暑い時に食べる冷たい物は、格別に旨い。

「最後にこれを盛りつけて、と」

頂点に果物の砂糖漬けを載せ、はたての元へ運ぶ。予想通り、彼女はアイスを見た事がないようで、しげしげとそれを見つめている。聞けば、夏の甘味と言えば糖液を削った氷にかけた高級品か、白玉を砂糖水に入れた冷や水という物くらいしかないらしい。

「豆が入ってるのね、これ。黒蜜をかければいいの？」

「うん。まあ食べてみてください。冷たくて美味しいよ」

「それじゃあ、いただきます」

木の匙でアイスを掬い口に運ぶと、直後に顔の周りに花が咲いたと思えてしまうくらいに輝き、至福の声を漏らした。喜んでいただけただようだ。

サンカも腑抜けたニヤケ面にならないように堪えつつ、未知の美味に悶えるはたてを見つめながら餡子を掬い、口へと運ぶ。

「!?」

不快な味と、餡子とは思えないジャリジャリした食感を覚え、はたてには見えないように懐紙の上へ吐き出した。餡子は砂状になっており、食品だったとは思えない様子を呈している。

口腔で食品が砂になる現象が信じられないサンカは、もう一度確認するように、今度は寒天を掬って食べる。

「うっ……」

「どうしたの?」

再度吐き出すと、やはり風化して砂になっていた。

これは夢だろうか?それとも、氷精から怨みを買ったせいであろう。いや、これは紛れもない現実であり、ましてや氷精の怨念でもない。

落胆しながら匙を置き、どうしたものかと口をへの字に曲げる。

「食べられない?」

「うん。折角作ったのに、残念だよ」

「ちよっと食べさせて」

やめておいた方が、という一言を無視し、はたてはサンカのあるみつを食べる。特になんともなさそうで、咀嚼の後、嚥下してみた。彼女も不思議そうに首を捻る。

「不思議ね。私は平気なのに」

はたては指を自らの額にトントンと当てる。そしてなにか思っていたように声を上げると、妙にニコニコしながら頬杖をついた。

「ねえ、私の食べてみない?」

「いや、いいよ。どうせ砂になっちゃうだろうし」

「私の分は平気かもしれないわ。物は試しよ。ね!!」

少し考え、その言葉通り試してみる事にした。だが、はたてのあんみつを受け取ろうと器に手を伸ばすと、彼女は制止させ、一口分のア

イスが乗った匙を差し出す。何を考えているのだろうか。

「私が食べさせてあげる。良いでしょ？」
「え」

食べられるかどうか試すというのは建前で、本当の狙いはそこにあるらしかった。困惑し、何と言えば良いのかを熟考する。

「ええと、ほっほら、こういうのは恋人同士でやるもので……」

「ほら、あーん」

はたてはまるで聞いておらず、小動物を愛でるような呆けた笑顔を浮かべている。

拒否しようかとも思ったが、機嫌を悪くされるのも嫌なので、サンカはおずおずと差し出された匙をくわえた。

「ん、甘い」

しつかりと甘みとアイス特有の滑らかさを感じる。どうやら食べられたようだ。一体どんな法則があるのだろうか。

「美味しい？」

「う、うん」

「良かったあ。ねね、次は何を食べたい？寒天？それとも白玉？」

「えっと、じゃあー」

「スcoop!!」

考えを巡らせていると、戸が勢いよく開き、カシャリとシャッターが切られる音が響いた。また文が来たようだ。

(なんで何時も間の悪い時に来るんだ!!)

この光景の写真を撮られてしまったからには、タダで返すわけにはいかない。それ相応の対価を払ってもらおう。

サンカは匙を咥えたままの態勢でスペカを取り出し、文に向けて宣言した。

「スペルカード。天獄符・呪縛じゆばく転生てんせい」
「えっ」

天狗の里に木霊する文の悲鳴と、対して涼しげな音色を立てる風鈴。これは、暑い夏の昼下がりの出来事だった。

24話 動かない大図書館

蟬の騒がしい昼下がり。サンカとはたての姿は、湖の畔に建つ巨大な洋館に在った。

血を想起させる紅い煉瓦で造られた館はとても広く、幻想郷では珍しい凝った作りの噴水や迷路のような庭園、豪華な装飾が施された手摺や煌びやかなシャンデリア等、贅の限りを尽くしているのがそこかしこに窺える。二人を案内するメイドも含め、複数の使用人を雇っているのを加味すると、この主は相当な財力と人望があるのだろう。

「どれも初めて見る物だらけで新鮮ね！記者魂が燃えるわ〜！」

「燃えるのは良いけど、館の人達に迷惑はかけないでね」

写真を撮りまくるはたてに、サンカがやんわりと釘を刺す。二人が何故この場に居るのか、それは数時間程前に遡る。



「紅魔館？」

はたてに作ってもらったきつねうどんを食べながら、紫の発したその単語を復唱した。

あんみつの一件から色々試してみて、他者が彼の為に作った食事なら喫食可能である事が判明した為、炊事担当は交代制からはたてで固定となっていた。

そして当の彼女はと言うと、紫の後ろで苦虫を噛み潰したような顔をして立っている。

(そんな怖い顔をしないでくれ、話に集中できない)

念を送ると、彼女は頬を膨らませてふいっとそっぽを向いてしまった。後で機嫌を直さなければ。

「それでその紅魔館とやらに、何の用があるんです？」

食べ終わった器と箸を置くと、紫の目を見て訊ねる。今回も都合よく使われるのは分かっているが、これも新聞のネタのためだ。

事実、以前の活躍をネタにした記事は反響を呼び、購読者数が数倍に跳ね上がっている。紫の方も異変の種を潰す作業を押し付けられるため、お互いに得をしている訳だ。

紫は待つてましたと言わんばかりに、懐から一枚の写真を取り出して見せる。

「これは？」

サンカは呈示された写真を受け取り、目を細めた。

縁に表示された年数を見る限り、これは文が撮影したもので間違いないだろう。写真には布で包まれた人間大の大きさの何かと、それを運び入れる複数のメイド、指示を出しているらしい紫色の衣装を着た少女が写っている。

「数日前、紅魔館にこれが運び込まれたわ。正体は分からないけれど、異様な雰囲気があるし、幻想郷にとって危険な物かもしれない。貴方はこれが何なのか確かめて、害を振りまく物なら持つてきてほしいの」

はあ、と気の抜けた返事をする、カチャカチャと硬質な物を忙しなく動かす音が聞こえてきた。

写真から顔を上げてみると、紫はどこから拾ってきたのか、ルービックキューブで遊び始めている。どう考えても忙しそうには見えないし、暇なのであれば自分でやってほしいが、サンカを送りたがるには相応の案件なのだろう。サンカは写真に目を戻し、指示を送る少女の人相を確認しようと凝視する。

「あそこの住人は前科があるし、もし変な物を運び込まれたら面倒なのよ。お願いできるかしら？」

「……わかりました。ただし条件があります」

紫の眉がピクリと動く。条件を出されたのが癪に障ったようだが、

一つだけならと渋々承諾してくれた。流石この世界を作っただけあつて懐が深い。

サンカは臆せず、堂々とその条件を口にした。

「はたてを同行させてください」



「それで、お二人はどのような用件でいらつしやつたのでしょうか？
そちらの女性の方は取材が目的の様ですが、貴方様は？」

銀髪のメイドが口を開き、反射的に気が引き締まった。何故なら此処に来た際、居眠りをしていた門番を中華鍋で力任せに叩き回していたので、彼女に少なからず恐ろしい印象を持っていたからだ。紫の使いであるとなげると快く中に入れてくれたが、対応や言葉を間違えようものなら、例え客人であっても容赦はしないだろう。

「紫さんに査察をして来て欲しいと言われまして。此方にいらつしやるこの方とお話しがしたいのです」

「……そうですか」

写真を見せると、銀髪のメイドは何かを察したらしく頷いた。

念のため運び込まれている荷物についても聞いてみたが、彼女は関与していないらしく、自分では分からないと首を横に振られてしまった。

だが、写真に写っている少女は知っているのです、彼女の元まで案内する、とは言ってくれた。

メイドは大図書館と呼ばれる部屋に繋がる廊下に二人を案内し、直進するように指示すると、パツと一瞬で消えた。はたては特段気にする様子もなく、サンカの手を引いて、赤いカーペットが敷かれた長く広い廊下を歩く。

「なあ、はたて」

「なくあくに?」

笑顔で上機嫌に返事をしたのを見て、ご機嫌とりに同行をお願いして正解だったなとサンカは思った。同じ建物内であれば、別行動をしても念写で位置を特定してすぐに合流できるだろうし、何より權に迷惑をかけずに済むのが良い。

とは言え、例え一人で紅魔館に向かったとしても、はたてはストーカーのように後を着けてきただろうし、紫も常に監視している訳では無いだろうから、態々条件として吞ませる必要は無かったかも知れないが。

なんでもないと適当にはぐらかし、サンカは重厚な扉を静かに開けた。

「お〜!すごい本の数!!何冊くらいあるのかしら!」

はたてが目を輝かせながらカメラを連写し、一足先に踏み入る。扉の先で目にしたのは、天井まで高く伸びた本棚に、隙間無く詰められた大量の書物。それが手前の壁から奥の壁まで永遠と続いており、サンカも思わず感嘆の声を漏らした。

「……さて、目的の人はどこかな?」

「いらつしやい。咲夜から話は聞いているわ」

声を聞いて上階を見ると、写真と同じ紫色のゆったりした服を着た少女が、山積みされた本の上で眠た気に手を振っていた。少女はゆつくりとした動作で本の山から降りると、二階から飛び降り、目前にふわりと着地…しようとした。

「むぎぢゅ!」

見事に失敗した。磨き上げられた大理石の床に滑り、手をワタワタさせながら派手に転倒しただのだ。

彼女は面食らうサンカを余所に何事もなかったように起き上がると、咳払いを一つし、彼と対面する。

「私の名前はパチュリー・ノーレッジ。今椅子とテーブルを用意するから」

指を振ると床に魔法陣が形成され、テーブルと椅子が現れる。便利な能力だなと感心していると、騒ぎを聞き付けたはたてもやっつて来て、パチュリーと名乗った少女にカメラを向ける。

「お待たせしました。こちら紅茶とチーズケーキになります」

促されるままに座ると、パチュリーの隣に先ほどのメイド（咲夜と言おうらしい）がティーセットとケーキをお盆に乗せて現れた。咲夜はそれらをテーブルに配膳し終わると、一礼し、瞬きをした途端に消えてしまう。彼女も何らかの能力を持っているらしいが、紫並みに神出鬼没だ。

「それで、今時の念写記者と、外界から来た不条理がそろって何の用かしら？」

不条理とは自分の事だろう。他人からそう呼ばれているのは酷く心外ではあるが、事実能力が文や権、はたてから見ても特殊な様なので仕方がないのかも知れない。

はたてはケーキに舌鼓を打っているので、サンカは要件を簡潔に、しかし直球で伝える。

「貴女方がここに運び込んだものを見せて頂きたいのです」

25話 弾幕(ごっこ)

「本当にお外に出られるの?」

暗く狭い部屋の中。鮮やかなクリスタルの翼を持った少女は、人も人外でもない相手と対峙していた。

『ああそうだよ。ついでにおじさんが魔法をかけてあげよう。とっておきの魔法だ』

真っ黒な影は少女の問い掛けに答えると、自身の一部を彼女の中へと潜り込ませた。



「運び込んだ?」

「これ、見覚えありませんか?」

紫から受け取った写真を見せると、パチュリーは思い出したのか、近くにいた髪の赤いメイドを呼び出して二、三言交わし、件の物を持ってくるよう命じた。

サンカは椅子に深く腰掛けながら、彼女らの言動に不審な点がないか注意深く窺う。

(動揺はしてないか。とりあえず、やましい物ではないみたいだな……あの娘は何をしてるんだ?)

チラリとはたてを見る。彼女はケーキを食べ終えて撮影に戻ったのだが、図書館の更に奥にある扉がどうしても気になるらしく、下駄を鳴らしながら周りを行ったり来たりしている。錠前が取り付けられているので、貴重な本を収蔵する倉庫だと思うが、それにしても重たく、暗い感じがした。

「聞いている? 貴方に質問しているのだけど」

パチュリーに声をかけられ、意識を彼女に向ける。無視されていた

のが不服らしく、少しだけ不機嫌そうだ。

「は？ああ、すみません。何でしょうか？」

「無視するなんて随分と礼儀知らずね。まあ良いわ。聞きたいのだけど、貴方って人間なの？死体とかじゃ無くて？」

礼儀知らずはどっちなんだ。眉を潜めるが、なるべく平常を装って答える。

「血色が悪いかも知れませんが、一応は人間です」

「そう……尚更変ね。人間ならもつと……」

ぶつぶつと何言か呟き、パチュリーはティーカップに手を伸ばした。

「ぎやあああああ!!」

突如として悲鳴が上がる。二人は驚きつつ同時に顔を向けると、はたてが半壊した扉の前で倒れていた。

顔を殴られたのか鼻血が溢れ、頭を打った衝撃のせいで意識が朦朧としているらしい。

「はたて!?大丈夫か!」

「う……」

抱え上げてテーブルの傍へ急ぎ足で運ぶと、後を追って扉の向こうから異形の存在が現れる。深紅の衣装を着用した小柄な体格や、あどけなさが残る顔つきは子供らしいが、翼から生える7色のクリスタルと狂気に満ちた表情が、彼女が人ならざる者であると物語っている。

「フラン!!貴方をしているの!」

パチュリーが叫ぶ。フランと呼ばれた少女は来訪者を見るなり、喜々とした様子で小さな手を握りこむ。

「ぐっ!!」

サンカが胸に痛みを覚えると、突然鮮血を吐き出して片膝をついた。フランは苦悶に歪んだ表情が面白いのか、悪魔のような笑い声を上げ、背後から迫る。

「魔法が効かない!?!」

魔方阵を幾つか展開していたパチュリーが、誰に言うでもなく驚愕の声を上げる。その慌てっぷりから察するに、普段なら動きを封じられたのだろう。

(やられる!)

サンカは棒立ちするパチュリーを突き飛ばし、はたてと自分の体が隠れるようにテーブルを盾にするが、手刀がそれを容易く切り裂き、なおも鋭い爪を眼窩に突き立てんと進んでいる。

「このっ!!」

子供に手を上げるのは許されませんが、状況が状況なので致し方ない。鉄拳をフランの頬に叩き込んで殴り飛ばすと、彼女は轟音を立てて本に埋もれた。

「……どうして死なないの?目を潰したのに」

人間に反撃されたのがショックだったのか、立ち上がった後も動こうとせず、赤く腫れた頬をさすりながら放心している。

この子は普通じゃない。サンカは倒すべき敵を認識すると、血糊で汚れた上着をグツタリしたはたてに掛け、邪魔な中折れ帽を投げ捨てて殺意を向けた。

「パチュリーさん、はたてを連れて下がってください」

「あの子は吸血鬼よ!人間の貴方が太刀打ち出来る相手じゃー」
「下がれ」

同一人物と思えない程の威圧的な声に、パチュリーは気圧され、おぼろげと従う。サンカははたての治療を終えると、ケタケタ笑うフラ

ンを睨みつけ、スペカを手取る。

「かかってこい。お灸を据えてやる」

「人間さんが弾幕ごっこで遊んでくれるの!? それじゃあ、いっぱいいっぱい遊びましょ!!」

両者同時に弾幕を展開する。次いで、フランは心底楽しそうに一本の槍を作りだして振り回し、正面に構えた。

「貴方はいつまで耐えられる?」

フランが弾幕を撃ち出すと、サンカも負けじと撃ち返す。サンカの光弾は小さいものの、その威力はフランの光弾に匹敵するだけの力を秘めており、お互いに攻撃を呑み込んで相殺していく。

「凄い凄い!こんなに強いなんて!」

彼女は追尾してくるそれらを縫って避けると、これでどうだとスペルを宣言する。

「スペルカード! 禁忌・フォーオブアカインド!」

効果を発動すると、フランは4人に分身して別々の方向から集中砲火を浴びせた。サンカも初めのうちは回避を続けていたが、次第に動きが鈍くなり、とうとう降り注ぐ光の雨を前に脱力し、膝から崩れ落ちて停止してしまった。

(もう諦めた? 魔理沙の方がよっぽど強いわね)

久しぶりの人間の訪問者が来ると聞いて楽しみにしていたが、期待外れだったらしいと目に見えて落胆している。

彼女は鼻で笑うと、分身達がサンカを肉塊に仕立てる過程を拝むべく、高度を上げた。

「スペルカード、吸武・禍白ノ逆鉦」
まがしらのさかぼこ

スペルの詠唱が聞こえた瞬間、強力な結界が展開され、放った弾幕

の一切がまるでおはじきのように吸収・拡散してしまった。跳ね返ってきた光の弾は分身を消し去り、フラン本体にも牙を剥くが、彼女は戸惑い一つも一つ一つ避けきり、相手の姿を探す。

「どっ!?」

「ここだ」

応答しつつサンカが目の前に現れ、腹部に重く容赦のない蹴りを入れる。人間の脚力とは思えない強い蹴りは、フランの余裕に満ちた表情を崩し、苦痛に歪ませた。

「スペルカード、天獄符・呪縛じゆばくてんせい転生」

サンカが宣言して素早く離脱すると、後を追おうとしたフランの周囲に光の柱が現れ、動きを完全に封じた。それから追い打ちをかけるように、フランを中心として縦横無尽にレーザーと光弾が攻撃を与えてくる。遊びの範疇を超えた攻撃に、彼女はなす術もなく全身を焼かれた。

「っ!!」

攻撃が止んだ頃には、フランは満身創痍で体中が傷まみれになっており、もはや弾幕を展開するだけの力も残されていなかった。

サンカは彼女が力尽きて墜落するのを見計らって静かに歩み寄り、なんの迷いも無く首を締め上げる。

「かつ……はがつ……」

「子供だから許されると思うな。お前はやってはいけない事をしたんだ」

指に力が込められ、首の骨が折れんばかりに音を立てている。今のサンカは明らかに正気ではなく、報復のために動く人形と化していた。フランが弱々しい抵抗をする。

「た、助け……」

涙目になりながら虚空に手を伸ばすと、正氣に戻ったサンカは手から力を抜いた。フランはその場に崩れ落ちて咳き込み、空気を肺へと送り込む。

「だ、大丈夫かい？」

頭上から声が響き、彼女の体がビクリと跳ねた。フランが恐々顔を上げ、彼女のルビーを思わせる紅い瞳と目が合う。

「ごめんね。怖かっただろう？お詫びと言つては何だけど、これをあげるから」

フランは戸惑いながら小さくコクコクと頷くと、彼は安堵し、自身の能力で傷を癒やしつつ、ポケットからドロップ缶を取り出して、残っていた飴を渡す。

そして彼ははたてを指差し、親が子供を叱るように、優しく諭した。

「どうしてこんな事をしたんだ？」

「お客さんが来たって聞いたから、弾幕ごっこがしたくて……」

「そっか、遊びたかったんだね。でも、君がしたのは悪い事なんだよ。遊びたいって気持ちは分かるけど、ちゃんと相手の気持ちを考えて、話し合つて、それから怪我をしないような遊びをするべきなんだ。もうこんな事はしないって、僕と約束できるかい？」

「うん」

「よし、いい子だ」

こうして話している間、サンカはしつかりとフランと向き合い、同じ目線で話しかけていた。フランの表情は怯えきつていていたが、言葉を交わしているうちに幾分か和らいだ。

暫くして、パチュリーに介抱されていたはたてが起きると共に、本と写真に写っていた物を持ったメイドが戻ってきた。メイドには何があったと聞かれたが、パチュリーが弾幕ごっこをしていたと一言伝え、直ぐに下がらせる。

「さて、グチャグチャになった本は小悪魔達に整理させるとして」
パチユリーは新しい椅子とテーブルを作り出すと、椅子に腰かけて
本を開いた。

26話 まがい物達

サンカとはたてが見守る中、パチユリーはお目当てのページを開いて一瞥すると、二人に見えるようにテーブルに置いた。紙面が茶色く変色しているものの、辛うじて何か書かれているのが分かる。

「まずはこれを読んで。興味深いから」

文章の始まりを指差されたが、文字が崩れすぎていて現代つ子のサンカには判読不能だった。思わず目頭を押さえ、項垂れてしまう。

「読めないの？」

「……うん」

「仕方無いわね。私が読んでも良いけど、どうする？」

少なくとも自身よりは長く生きているはたてなら、昔の字も読めるのではないだろうか。サンカは文章の音読を彼女へお願いし、自身は情報の処理にあたる事とした。メモ帳とペンを取り出し、白けた視線を向けるパチユリーの前に、耳を傾ける。

「嘘……この内容……」

一定まで読み進めると、はたてが酷く動揺しながら呟いた。何事かと横顔を見ると、彼女の顔は強張り、徐々に青ざめて行くのが手に取るように分かる。なにかそんなに恐ろしい事が書かれているのかと、サンカは気が気でない。

「驚いた？その本には餓鬼を人為的に造る方法が書かれているのよ」

「餓鬼？」

餓鬼とは地獄に生息する悪事を働いた人間の慣れの果てであり、食事を採る事が出来ず、常に飢えと渴きに苦しみ、醜く膨れた腹や骨と皮だけになった姿が特徴だとされている。そんな餓鬼の製造法とやらが載っているのだ。

サンカは思った疑問をそのままパチユリーに質問する。

「空想上の生き物を造れるんですか？お伽噺じゃあるまいし、餓鬼なんて―」

「それを言ってしまったら、私も貴方のお連れさんも空想上の生き物なんだけど？」

パチュリィは呆れ気味にページを送り、はたての音読に補足で説明を入れていく。描かれている内容によれば、まずオリジナルである本物の餓鬼の細胞を人の細胞に埋め込み、人の体温程度に保温された人工子宮（フラスコのような物らしい）装置で培養して作るのだという。

大まかな作り方自体は、かつて西洋で広く製造されていたホームクルスに近いのだそうだが、聞けば聞く程信じ難い。

パチュリィはサンカのメモ書きが一区切りするのを見計らい、席を立て運ばれてきた件の物品に歩み寄る。それは酷く汚れた布のような物で上から下まで隙間なく包まれていて、カビに似た臭いが微かにした。

「作られた餓鬼達は短期間で成長し、鬼をも超える戦闘力を得ると記されているわ。これは、完全体まで成長できた貴重な一体よ」

少し躊躇した後、彼女は巻かれた布を剥がしてゆく。

「うっ」

外気と隔っていた布が無くなって中身が露わになると、はたては吐き気を催して蹲ってしまった。

「はたて、無理はしなくていいよ。メイドさん、彼女を介抱していただけませんか？」

「え？あ、はい！かしこまりました!!」

はたては口を手で覆うと、メイドに手を引かれて小走りに出て行った。

内包されていたのはミイラ化した死体で、人間と比べると犬歯が鋭く、頭も常人の倍近い大きさだった。額にはもう一つ目が収まっていると思われる窪みがあり、腹部から下は潰され、脊髄で辛うじてつな

がっている有様で、右腕は千切れてしまったのか、肩から先が無くなっている。

「これは……」

「この間、外から流れ着いたの。死体とは言え、まさか実物の検体が手に入るなんて思いもなかったけど」

そこまで言うと、パチュリーは手早く汚れた布で覆い隠し、保管庫へ運ぶよう他のメイドに伝えた。彼女たちは今までそれが何なのか知らなかったらしく、腫物を扱うが如く、気味悪そうに運んで行った。パチュリーは椅子に座ると、紅茶を一口飲んで話を続ける。

「……少なくとも、記録に残されているだけで36体が製造されているわ。作られたのはおおよそ数百年前。貴方には、明治維新の最中と言えはわかるかしら」

あり得ない、とサンカは漏らす。昨今の科学技術は目覚ましい発展を遂げてこそいるが、それでもこういつた新種の生物を作り出すのは容易ではない。莫大な資金は勿論、研究や実験に使う道具も知識も、未だ完全な生き物を作り出せる段階には到達していないからである。彼女が開示した文献や死体が本物なら、技術が発達していない遥か昔にそれを成功させ、あまつさえ戦場で兵器として運用していた事になるのだから、開いた口が塞がらなくなるのも仕方なかった。

と、フランがテーブルの下から顔を出して覗き込んできた。サンカは彼女を椅子に上げると、まだ口を付けていない紅茶を差し出す。

「ありがとう」

「そう恐々しないで、って無理だよな……」

気まずそうに頬をポリポリ搔くと、肝心な事を聞き忘れていたのを思い出し、パチュリーに最後の質問をした。

「パチュリーさん、貴方はあの遺体をどうするんですか？」

「そうね、見つけたから拾ってきただけで、どうするかはまだ考えてい

なかったわ。でもまあ、そのうち解体して研究するかもしれないわね」

「研究？」

「この技術を応用して、無くした手足の再生医療魔法に生かそうと思っているの。完成したらお披露目してあげるから」

「はあ……ありがとうございます」

どんな悪だくみをしているのかと警戒していたが、少し安心した。特に脅威になりうる訳ではなさそうなので、放っておいても大丈夫そうだ。紫に渡すためのメモを書き終えると、サンカは彼女へ再度礼をし、はたてを迎える為に席を立つ。

「お、お兄ちゃん」

サンカの足が止まった。何、と返事をする、飴玉を掌に載せたフランがたどたどしく要件を伝えた。

「あ、あの、また遊びに来てくれる？」

「招待されれば行くけど……僕が怖くないのかい？」

「ちよつと怖いけど、良い人そうだから。ねえ！今度は、今度はお人形さんで遊びましょ!!」

「うん、良いよ。僕も楽しみにしてるから」

フランの見送りに手を振り返して図書館から出ると、急に現れた咲夜に案内されながら、廊下を歩き始める。

（そういえば、お兄ちゃんって呼ばれたのは二回目だな。一回目は……）

今日は疲れたので、はたてを連れ帰ったら寝てしまおう。彼は窓を覗き込む夏の太陽を見上げ、霞みがかった遠い昔の記憶を反芻しながら、目を細めた。



「それにしても……」

フランを自室に戻した後、パチュリーは一人考察を始めていた。サンカとフランの弾幕ごつこの最中、サンカは焦げ茶の瞳ではなく、眩く光る黄金色の瞳をしていた。白目の色が真っ黒に変色していたのも相まって、まるで闇夜に浮かぶ月を思わせる目だった。

加えて、フランが魔法の封印を解いて部屋を出た事も、より高度な封印魔法にもかからなかったのも引つ掛かる。彼女は覚えていないと言うが、何等かの要因が働いていると見て間違いないだろう。

「餓鬼の瞳の色は……ううん、まさかね」

彼女は閉じられた本を手に取りながら、小さな声で呟いた。

27話 外界散策

紅魔館の一件から数日後。サンカは畳の上で暑さに溶けるはたてに、ある思い付きを話した。何気なくだったが、彼女も快諾してくれた上に、紫からの許可も得られた。

実は今回、自分が元居た世界を見てもらおうと、外界散策を試みる事にしたのだ。

制限時間はおおよそ24時間。それを過ぎれば二人揃って消滅してしまう。その間、自由に街の散策をするのだ。

「これが外で流行りの格好なの？・どう？・似合ってる？」

はたては普段の紫を基調とした服ではなく、ふんわりした印象を与える白いトップスに、丈の長い水色のスカート、アクセントの入った黒いサンダルと、清楚な色調で纏められた格好をしていた。

目立つ黒い翼は小さく畳まれているし、髪が普段のツインテールではなく、ポニーテールにしてあるせいもあって、とても新鮮に思える。

「思った通りだ。良く似合ってるし可愛い」

「ほ、本当!？」

はたてはクルリと一回転し、照れ隠しの笑顔を向けた。

被服はサンカが良さげな生地を人里から見繕い、はたてが物欲しそうに読んでいた外界のカタログを参考にして製作した物だ。素人作業なので服のデザインを考えるのは苦労したが、喜んでもらえるなら苦労のかわがあつたと言えるだろう。

「それじゃ、行こうか」

「うん！」

紫から貰った札を取り出して行きたい場所を思い浮かべると、空間が渦をまいて歪み、隙間が静かに開いた。向こう側に見える風景には、はたてが見たことがない人工物が置かれている。

サンカは速足で隙間を通り抜けると、はたてにも来るように促し、

手を差し伸べる。はたては深呼吸をして心を落ち着かせ、未知の世界への期待と不安を胸に、サンカの手を取って、隙間を一気に通り抜けた。

「外界って幻想郷より暑いよね。嫌になっちゃうわ」

「自然が少ないからね。便利になると不便なところも出てくるんだ」

降り立ったのは人気の無い公園だった。隙間から見えたのは飲み水場で、はたてにはその形状が目新しいのか、何枚も写真を撮っては興味深そうに観察していた。

「ねえ、なんでこんな場所に隙間を繋いだの？本に載ってたみたいな場所を想像してたんだけどー？」

拍子抜けしたと、はたてがジト目でサンカに言う。それに対し彼は、

「大丈夫。はたてが行きたい場所には行けるから」

と言いつつ聞かせ、此処では幻想郷の常識が通用しないこと、空を飛んだり能力を使用したりすると人間達に混乱を招いてしまうことを伝え、振る舞いには気を配るよう注意を促す。

はたては大袈裟な笑っていたが、公園から出てそれが事実であると実感すると共に、幻想郷とは隔絶した景観に度肝を抜いた。

「わあ……」

天高く聳え立つ摩天楼に、アスファルトの道を行き交う車、熱中症対策を呼び掛ける電光掲示板。何もかもが幻想郷ではお目にかかれない風景に、はたては目を奪われた。

彼女は呆然と巨大建造物群を眺めていたが、ふと近くに止まっていたタクシーを指し、興奮気味に質問してきた。

「サンカ!!この箱は何!?!」

「それは自動車って言うんだ。馬より早く走れる乗り物だよ」

「外ではこんな物も作っていたのね！あ、こっちは何!?薄い板に人が入ってる！」

「それはテレビ。カメラなんかで撮影した風景を映し出せるんだ。どんなに遠い場所でもね」

「なんだか私の能力みたいね！人間が念写を使えるなんて……こっちは!?」

こちらでは珍しくもない物だが、はたてには新鮮に映ったらしく、興奮しっぱなしで怒涛の質問責めを繰り返す。サンカは良くも悪くも周囲から浮いてしまっている彼女への対応に苦心していたが、気分が高揚してしまうのも仕方ないのだろうと割り切り、一つ一つ丁寧に教えてあげた。尤も、もう少し刺激の少ない場所にしておけば良かった、と少し後悔もしたが。

「あ……」

すれ違う人々に奇異の視線を送られながら歩いていると、はたての足がある店の前で止まった。彼女は物欲しそうにショーウィンドーを覗き込み、釘付けになっている。

何を見ているのだろうかとサンカも背後から顔を出すと、煌びやかな装飾が施されたネックレスや指輪が所狭しと展示されていた。妖怪の山に住む鴉天狗といえど、やはり年頃の女の子らしく、こういった物が気になるらしい。

「はたて」

「ん？何？」

「ちよっとお店に入ってみようか」

「いいの!?!」

宝石に負けず劣らず目をキラキラさせる彼女と共に店に入ると、眼鏡を掛けた妙齢の女性が出迎えてくれた。サンカはその女性にお薦めの品はどれかと尋ね、幾つか持ってきてもらう。

「こちら少し型は古いですが、その分お安くなっています」

トレーに載せられて来たのは、控えめな装飾の指輪だった。はたてが外で見えていたのはその指輪だったらしく、他にも豪華な商品が並んでいるのにもかかわらずに、見向きもしないでいる。

「ちなみにおいくら程……」

女性は電卓を持ってきてパチパチと数字を打ち込んでサンカに見せると、少し高いなと彼が漏らした声を聞き、しよんぼりしながら他の品を見に行ってしまった。

(値切れるかなあ?)

サンカにはその後ろ姿が不憫に思えたのだろう。はたてが離れてからもなお、彼は購入するか否かを考えていた。確かに高いが、決して買えない値段ではない。そこで、物は試しと交渉をして少し値段を下げてもらい、無事購入を決定した。

(喜んでくれるかな)

「お買い上げありがとうございます。ところで、お連れの女性は彼女さんでしょうか?とつても可愛らしー」

「いいえ。ただの連れです」

キツパリと言いつけると、女性はそうですか、と何故か残念そうにながら指輪を箱に収め、丁寧に梱包してくれた。

「お待たせしました。どうぞ」

「ありがとうございます。はたて、気になるものは見れた?」

「うん」

「じゃあ、そろそろ行くこうか」

その言葉を聞くと、はたては名残惜しそうに店を出て、後ろ髪を引かれながらサンカの後に続いた。

—その後、はたての行ってみいたいという要望に答えて、様々な施設を周った。カフェ、ショッピングモール、水族館など、どれも幻想郷

には存在しない物ばかりで、彼女はその光景や食事に一々大げさ気味なりアクションを取り、それをサンカが苦笑いしながら見守るのがお決まりと化した。



「楽しかったー!」

一日を通して外界を満喫した二人は、最初に出た公園へと戻っていた。周辺は薄暗くなり始めており、赤い夕焼けに照らされた遊具や林が、昼間とはまるで違う雰囲気醸し出している。加えて、ヒグラシや秋の虫達が素晴らしい音色を奏でており、夏の終わりが迫っているのが感じられた。

「もうすぐ秋か。早いな」

「ねえねえ、今度はいつ来れるかな?」

「いつでも来られるさ。余裕さえあればね」

そう言いつつポケットの中の札を取り出そうとするが、はたてが購入した商品(衣類や雑貨)で両手が塞がり、上手い事取り出せない。彼女の自腹なので文句は言えないが、幾らなんでも買い過ぎではないだろうかと、サンカは心の中で愚痴った。

「二人とも、旅行は楽しかったかしら?」

札と格闘していると、突撃隙間が開き、紫が日傘を持って顔を出した。嫌な予感がするなどサンカが直感すると同時に、彼女は扇子で口元を覆い、一方的に要件を伝える。

「紅魔館の一件、ご苦労様。今から新しい仕事を頼むわ」

28話 探し物

またか。折角の楽しい雰囲気がぶち壊しになったサンカは、口をへの字に曲げて肩を落とした。休みの日が終わらぬうちにこうして来られては、休まるものも休まらない。

「今度は何ですか？」

「実はね、こここの所幻想郷に入つてこようとする者がいるのよ。幻想郷は来るもの拒まずだけれど、ちよつと嫌な雰囲気がするのよね」

饅頭をモグモグと食べながら、急かす様子もなく頬杖をついて呑気そうに話す。

はたてを連れて外界に行きたいと紫に持ち掛けた際、自分にも友好的な異性が欲しいと愚痴られたが、異性が寄り付かないのは彼女の人を使い走りにする性格と、適当さが原因なのではなからうか。顔やスタイルは決して悪くないのだから、あるとすればそれくらいしか考えられない。

「何か失礼な事考えてないかしら？」

「いいえ、滅相もない」

ジトつとした目で見られたので否定すると、紫はコホンと咳ばらいを一度して話しを戻した。

「ともかく、貴方にはそれが何者なのかの確認と、排除をお願いしたいの」

「……わかりました。やっておきます」

「決まりね。ああそうそう。その前に」

紫は指をパチリと鳴らすと、今まで蚊帳の外だったはたてを隙間に落とした。はたては声も上げる間もなく、吸い込まれるように落ちていく。

「あ……」

「安心して。幻想郷に戻しただけよ」

「ですが彼女は僕が――」

「大丈夫よ。それに今回は外を知っている貴方だけでやってもらわないと困るの。あの娘がいると満足に動けないでしょうから。それじゃ、お願いしたわ」

反応される前に言うだけ言うと、サンカが預けた荷物と共に、彼女は隙間の中に消えて行った。

「探せと言われてもねえ……」

承諾はしたが、どうしたものかとサンカは首を捻った。

当然だが、外界は幻想郷よりも遥かに広いため、しらみ潰しに探すのにも限度がある。今回はヒントになりえる物が全く無く、使える時間もないので、あまり悠長にしていられないのも厳しい。消えてしまふ前に一旦は帰れると思うが、幻想郷に悪影響を与える相手を放置しておく訳にはいかないので、依頼を達成するまで何度も此処へ来させられるだろう。

(やるしかないか。体が消える前に探さない)

とりあえず街の方に行けば何か見つかるかもしれない。はたての身を案じつつ、サンカは静かになった公園から走り出した。



夜の街はタバコや酒の臭いに支配され、その表情を一変させていた。乾いた路面を走る車の走行音、時折聞こえる笑い声は不愉快な雑音として処理され、ギラギラと不自然な色を放つネオン達が、痛い程存在を主張をしている。

(こんなんじゃ、幻想郷の方が住みやすいな)

今まで行く当てもなく放浪していたサンカは、人智の及ばぬ異形達が当たり前のように存在するあの場所こそが、自身が求めていた心の

穴を埋められる唯一の居場所だと考え始めていた。外の便利な生活も確かに悪くないが、不思議とあの不便ながらも温かい暮らしの方が自分には向いている気がするし、はたても傍に居てくれるので今更出ていく理由も無かった。

そういえば、彼女は今どうしているのだろうか。無理矢理別れさせられたが、泣いていたりしないだろうか。脳裏に不安がよぎる。

(大丈夫かな……いや、今はこっちを優先しないと)

不安感とすぐにも帰りたい気持ちを押さえつつ、サンカは鼻先に意識を集中させる。先ほどから妙な臭いが漂っているのが、どうにも気になるのだ。

(酒にタバコ、排ガス、それに――)

非常に僅かだが、錆びた鉄のような臭いと、明らかな腐敗臭が混ざっている。間違いなく腐った人のそれだ。間違えようがない。

(一体どこから?)

こんな場所で後始末が杜撰な人殺しでもしたのだろうか。そう思いながら鼻にこびりついて離れない臭いを辿って行くと、ある店からとても強く臭っているのに気づいた。

(ここは確か……)

昼に指輪を購入した店だった。

蠟燭だろうか、暗くなった店内にはうつすらと光が揺れ動いており、あの女性がなにやら近くでゴソゴソしているが、手元は陰になっていて外からでは見えない。

サンカはガラス越しに窺うのを止めると、意を決し、closedの札がかけられたドアを開け、店内へと踏み入った。

「すみません、今日はもう閉店なんで……ああ、貴方ですか」

女性は振り返ると笑みを見せたが、素早く後ろに何か隠したのをサ

ンカは見逃さなかった。腐臭も先ほどと比べて明らかに強くなっており、発生源は此処で違いないだろう。

サンカは目的を悟られないように、上っ面だけの笑みを見せて警戒を解こうと試みる。

「実はちよつとお聞きしたい事がありました」

「聞きたいこと？何でしょうか？」

「はい。此方で購入した指輪なんですが……」

リュックから包装された指輪を取り出すと、テーブルの上に置いて女性に見える位置に置く。すると彼女はゆっくりとした歩みで近づいてきた。

「忘れていたんですが、これって名前は入れられますか？どうしても渡したい相手がいます」

「名前ですか……ごめんなさい。うちではそういったサービスはしていません」

そうですか、と残念そうな顔をしつつ、隙を見て店内を見渡す。この店はネットクレスや指輪等を取り扱っているが、並んでいる物はどれも統一感が無く、更には商品価値があるとは思えない物も幾つかあった。捨値が付いてこそいたが、ひび割れた宝石を誤魔化しもかけずに売るだろうか。怪しさが徐々に増していく。

「わかりました。どうも夜分遅くにすみませんでした」

此処は一旦退いて、時間をおいてからもう一度来るとしよう。不法侵入になるが、いざとなれば隙間に逃げてしまえば良い。サンカはドアノブに手を掛け、戸を少しだけ空けた。

「……あ、ちよつと待ってください。良ければ何か食べて行きませんか？夕飯はまだです」

外に出ようとする、女性は何を思ったのか突然食事を誘ってきた。中々好都合だが、閉店後に現れた客を夕飯に招くとは、どんな風

の吹き回しだろうか。

(何のつもりだ?)

サンカは多少不審に思いながらも、構いませんが、と承諾した。

29話 悪しき物

「さあ、此方へ」

促されるまま店の奥に案内されると、古ぼけたテーブルと椅子が置かれた、薄暗く狭い部屋に通された。女性はサンカを座らせると、コンロのつまみを捻って火を入れ、使い込まれた鍋を温め始める。

「どうぞ召し上がって。私の自慢の料理なんです」

暫くして、彼女は鍋の中身を二つのスープ皿によそってテーブルに置き、サンカと対面する椅子に座った。一連の動作を見ていたが、怪しい物―例えば毒物等を入れておらず、食べたとしても大丈夫だろう。

「……では、お言葉に甘えて」

警戒を解かずにスプーンを持ち、皿に目を落とす。芳醇で濃厚な肉の香りや、とろみのあるブラウンのスープから察するに、この料理はシチューらしい。

サンカは器の中にスプーンを入れ、何が入っているのかを見ようと、軽くかき回す。

具材は人参、玉ねぎ、それから白色のピンポン玉。ピンポン玉の表面には血管が巡っており、外れかけた水晶体が繋がっていた。どう見ても目玉だ。

「なっ!？」

「どうかされました?」

「は? あ、いえ。なんでも」

上ずった声で誤魔化すと、改めて手元に視線をやる。顔を見つめる目玉に生理的嫌悪を覚えてシチューに沈めると、鼻や耳等の、どう見ても人間のそれと分かる物がプカプカと浮かんできた。

(この女、人を食っているのか!)

背中に冷たい物を感じ、掌に汗がにじみ出ると共に、身の危険が迫っていると第六感が告げる。今すぐにでも逃げたいが、逃げ道となるドアの前には女がいて通れず、外に直結する窓らしい窓も無い。万事休す、袋の鼠だ。

「同族かと思いましたが、私の思い過ごしだったようですね。まあ、新しい食材がやってきたと考えれば儲けものでしょう」

部屋に気を取られて女への警戒が疎かになった瞬間、喉元目掛けて牛刀が飛んできた。咄嗟に体を捻じって回避し、反撃のためスペカを取り出そうとポケットを探るが、どういう訳か一枚も入っていない。

（肝心な時に！）

後に失念していた事を知るが、遊んで帰るだけのつもりだったので、スペカ一式は全て部屋に置いて来てしまっていた。あれが無ければ弾幕の制御が効かず、この店だけでなく周辺の施設、果ては自分まで灰燼に帰す可能性があったため、そうホイホイと使う訳にもいかない。これが何を意味するのかと言うと、今の彼は傷の治りが早いだけの人間でしかなく、敵からすれば格好の獲物でしかないのだ。

焦りながらも椅子を手にとって投げつけると、女は避けもせずその椅子を軽々と受け止め、涼しい顔をして床に降ろした。椅子は男であるサンカが持つても重いと思えるくらいなのだが、どうやらこの女には小石を持った程度にしか感じていないようだ。

「壊さないでください。前の住人の物なんですよ」

向けられた双眸を見て、サンカは息を呑む。一目で異形だと分かる黒くなつた強膜と、ボンヤリと光を放つ黄金色の瞳。それはまるで闇夜に浮かぶ満月を想起させ、蠟の如く白くなつた肌や髪も相まって神秘的な印象すら覚えた。

サンカは平静を装いつつ、異常な目をした女に尋ねる。

「店の中で作業していたのは死体の処理かい？外まで臭いが漏れてい

たぞ」

「ええ。私は訪れたお客様を食材として調理し、その身に着けていた貴金屬類を売って生活しています。もともと、今回の様にお客様自らいらっしやるのは初めてですが」

再度凶器が投擲されるが、今度は避けきれず腕に刺さってしまった。相当な威力があったようで、貫通した刃が反対側から顔を出し、滝のように血を滴らせている。

「フー、フー……ふんっ!!」

激痛で悶えつつも、深く息を繰り返しながら牛刀を引き抜く。傷口はすぐに塞がり始め、血の流出が止まり、痛みも消え、跡形もなく綺麗に完治する。

女は驚きつつも、腕の再生を興味深げに観察し、なんともなさそうに指を開閉するサンカを見て、感嘆の声を上げた。

「その力、私と似ていますね」

「僕は人間だ。あんたみたいな食人種と同類にされたくない」

「そうですか。それは失礼いたしました」

女は申し遅れましたと、自身の左手を胸に当てて名乗る。

「私、名を羅刹と申します。貴殿方と似て非なる存在、餓鬼とでも言うておきましょう」

「!?」

羅刹と名乗った女は目を見開くと、顔に青筋が浮かび上がる。すると、サンカの脳裏に凄惨な光景があふれ出した。無抵抗の人間や妖怪を惨たらしく殺し、子供さえも容赦なく血祭に上げる自分の姿を見て、彼は頭を押さえて叫ぶ。

「うわああああああああああああああ!!」

「何をしても無駄です。私の力は、人が体験した最も強いトラウマを引き出して見せる力。目を瞑ろうとも、耳を塞ごうとも、貴方の記憶

からは決して逃れられない」

頭が割れそうな程痛む中、彼はついに意識を失い、膝から崩れ落ちた。

「案外耐えましたね」

動かなくなったサンカを見て、羅刹は能力を解いた。彼女はサンカのポケットを探って金になりそうな物を幾つか取り出し、置いてあつた鋸を首筋に押し当てる。このまま鋸を引けば頭と体は切り離され、成人男性一人分の肉になる寸法だ。思わぬ収穫にほくそ笑む。

「さあ、貴方も美味しい料理に……」

羅刹がそう言うと、サンカの指がピクリと動いて素早く鋸を掴んだ。意識が戻る筈がないと驚いて制止すると、ユラユラ動く焦点の合わない目が徐々に変化し始める。

「まさか貴様?！」

蹴りが腹部に直撃し、乾いた音と共に衝撃が背中に突き抜ける。人間の筋肉量では到底あり得ない威力の蹴り脚は、骨肉を滅茶苦茶に破壊して吹き飛ばす程で、餓鬼として鍛えられた羅刹でさえも致命傷を負った。

「傷の治りが……はっ?！」

接近に気づいた頃には、既に手遅れだった。顔に涎がボタボタと滴り落ち、魚が腐ったような血生臭い臭いが、鼻腔を刺激する。

「こ、こんな!!こんなところでわたー」

羅刹の声が途切れ、硬い物を噛み砕く音がした。

30話 モヤモヤの答え

天井からぶら下がった灯りに羽虫が群がり、自身の呼吸音がハツキリと聞こえてくる静かな部屋で、サンカはあたかも魂が抜けたかのように動きを止める。

自分は何をしていたんだろうか。両手に肉塊を持ち、口元と服を血でべつとりと染めながら、彼はふと我に返った。確か、紫に命令された後、怪しいと思った宝石店に足を運んで、それから店の女に誘われて食事を取りに……

(んぐつ)

喉の辺りに違和感を覚え、血染めの手を口の中に突っ込む。指先に細長い糸のような物を捉え、ずるりと引っ張り出してみる。

出てきたのは、千切れた頭皮から生えた毛髪だった。長さからするに、どうやら女の物らしい。

「そうだ、あの女……」

今一度周りを見渡す。床一面に広がった血の池と、食いちぎられたような何かの肉の塊、そして口から出て来た髪の毛——全てを察して嘔吐すると、その吐しゃ物の中には肉片だけでなく、歯や骨等も出て来た。

サンカは羅刹を食っていたのだ。彼は受け入れたくない現実から目を逸らし、震えながらもテーブルを支えに立ち上がると、自分に暗示をかけるように、

「僕は人間だ……僕は人間なんだ……人を食う筈がないんだ……」

と何度も呟く。そうしてブツブツと壊れたように繰り返していると、徐々に落ち着きを取り戻して来た。

暗さにも目が慣れると、ノブを外された壁と同色に塗られたドアがある事に気が付き、何があるか気になったサンカは警戒しつつ、そのドアを蹴破った。

「これは……」

現れた部屋には、大がかりで珍妙な機械が置かれており、散らばった資料とおぼしき大量の紙を見るに、羅刹はこの場所で幻想郷に入るための装置を作っていたらしい。全くの偶然ではあったが、紫からの依頼は達成したに違いなかった。

サンカはポケットからライターを取り出すと、資料に火を付け、装置を近場にあつたボールで叩き壊す。そして火が収まったのを見届けると、破れかけた札を手にし、隙間を開いた。

今日はもう家に帰ろう。購入した品物の片付けと服の掃除、それから紫への報告。やりたい事は沢山あるが、疲れていてはなにも出来ない。サンカは眠気を醒ますかのように伸びをし、凄惨極める部屋を後にした。



判断が鈍つたままでは危険と判断したサンカは、眠気覚ましにと霧の立ち込める湖で身を清め、体を拭かずに汚れた服を羽織り、ライターを灯りにして帰路に着いた。服に染みついた血の臭いに釣られて寄ってきた妖怪もいたが、不思議と襲つて来た輩はおらず、無事に天狗の里までたどり着けた。門番をしていた天狗には驚かれたが、夜の妖怪の山をただの人間が抜けて来たのだから、当然の反応だろう。

(遅くなっちゃったな。泣いてないと良いけど)

サンカは背後からの好奇の目を背中に感じつつ、家の戸を叩く。

「ただいま」

戸が素早く開き、中からはたてが飛び出す。彼女は涙と鼻水で顔がグシャグシャになった状態で、サンカの胸へ飛び込んだ。

「は、はたて」

「うううう……」

「おかえりなさい。今日はお疲れ様でした」

「その声……椀ちゃんか。ありがとう。大変だっただろう？」

「ええ、暴れるし泣くしでもう……」

廊下の角から椀が顔を出した。彼女はハハハと苦笑いをすると、大きなため息をついて座り込んでしまった。サンカが留守にしている間、はたての面倒を見てくれたらしく、その顔には疲れが窺える。

「それより、服が血だらけじゃないですか。怪我をしたんですか？すぐに手当てをした方が――」

「いや、これは僕のじゃないんだ。心配いらないよ」

「ちよつと何の騒ぎだい？」

「はたて様の御付きの人間が帰って来たんですって」

「御付きって、あの？」

ひそひそと会話が背後で交わされている。段々とその状況が恥ずかしくなってきたサンカは、泣きじやくるはたてを連れ、家の戸を閉めた。

「全く、ちよつとの時間くらい別々に居られるようになってほしいよ……そうだ、また今度外界に行くんだけど、なにかほしい物はあるかい？」

はたてを寝かしつけたサンカが椀に問う。彼は血に汚れた普段着を脱ぎ、はたてに貰った甚兵衛を着用していた。椀にはその格好が珍しかったらしく、普段着よりもよく似合っているとお世辞を言われた。

「欲しい物、ですか？」

椀は持っていた湯呑を置き、手を顎にあてて考え始めた。外界でと言われると、やはり何が良いのか思いつかないのだろう。

暫し苦悶する様を眺めていると、欲しい物が思い浮かんだのか、椀

はうんうんと頷いてサンカを見た。

「じゃ、じゃあ、甘い物を」

「甘い物？わかったよ。それにしても意外だね。君の事だから、てつきり煎餅とかお茶とか選ぶとー痛ててて！」

言い終わる前に、椀はサンカの頬をグイッと抓った。メリメリと音を立てて頬が引っ張られ、爪が肉に食い込む。

「年寄り臭いって言いたいんですか!私だって甘い物くらい食べます!!」

「ごめんよ悪かった!許してくれ!顔が千切れる!!」

椀は気が済むまで頬を引っ張った後、そつと手を放した。頬は赤く腫れ、爪が喰い込んだ痕から血が出ていたものの、能力のお陰かすぐにそれも収まった。傷や怪我の治りが早まっているとは言え、彼女は容赦という物を知らないらしい。

「痛てて……」

「これからは言葉に気を付けてください。それにしても……」

椀は涙目になって蹲るサンカに忠告すると、背後から聞こえてくる寢息に、その大きな獣の耳を傾けた。

「お付き合いされているのは存じてましたが、仲も良いようで安心しました」

「うん?付き合い?」

「はい。はたて様がそう仰ってましたが……」

「はたてが?」

「ええ。好きって言ってもらったから両想いだ、と」

(言ったっけ?)

いきなり何を言い出すのだろうか。サンカは家に上げてもらっているだけで、はたての彼氏、ましてや婿になった覚えはない。確かに人前でも遠慮なしにくつつかれる事が多いし、家の中では常に傍らに

居たが、あくまではたてが勝手にそうしているだけで、サンカ自身は特に意識した事は無かった。そんな関係にいつなったのだろうか。

権と共に首を捻りつつ、その話が出た時期を探っていると、丁度自分がスペルを初めて使用した頃と重なり、合点がいった。どうやらはたてに対して言った慰めの言葉を、違う意味で捕らえてしまっていたらしい。

「ああ、あの時か」

「やっぱり言ってるじゃないですか」

「いや、あれはそういう意味でなくて……」

権に懇切丁寧に説明すると、権は心底残念そうに肩の力を抜いた。あの女といい権といい、何をそんなに残念がるのだろうか。女心はつくづくわからない。

「なーんだ……はたて様の勘違いか」

少し安心したように、権はお茶を啜って一息つく。

「そういう訳だよ。期待させちゃって悪いけど」

サンカは襖を少しだけ開き、熟睡するはたての様子を窺う。体を赤ん坊のように屈めて布団に包まった格好は、普段よりも大分幼く見え、庇護欲が掻き立てられる。

「……この子と一緒に居ると、どうも落ち着けなくなるんだ。胸の辺りが苦しいと言うか、締め付けられると言うか」
「ぶっ!?!」

権が口に含んだお茶を盛大に吹き出した。サンカは突然の出来事に慌てながらも、拭くものを持ってこようと立ち上がる。

「だ、大丈夫か!? 今拭くもの取ってくるから!」

「ゲホッ、い、いえ大丈夫です! それより、今の本当ですか!?!」
「何が?」

「胸がどうとかがってやつです！」

「え？う、うん。そうだけど」

椀は苦しそうに息をしながらも、顔を真っ赤にしながらサンカの前へと回って、鼓膜が破れるのではと思うくらいの声量で怒鳴った。

「サンカさんは鈍感通り越して馬鹿です！それは異性として好きって意味じゃないですか!!」

「ああ……そうなのか。この感情が好意って奴なのか。スッキリしたよ」

サンカは騒ぐ椀をよそに、どこか楽し気に笑った。

第三章 飢食

31話 一休み

「面白そうだけ霊夢。このサンカって奴」

ある日の事。白黒の魔法使いと紅白の巫女が、仲良く縁側に座ってお茶を飲み、煎餅を齧っていた。

魔法使いに霊夢と呼ばれた巫女は、面倒くさそうに新聞を覗き込む。

「外来の能力者、驚異的な活躍……これのどこが面白いのよ、魔理沙」
「最近外界から入ってきた、能力を使える人間の男らしいぜ。そんなのが妖怪の山で、それも人間を見下してる天狗と生活してるなんて、面白くないか？」

霊夢は口につけかけた湯呑みを傍らに下ろし、新聞を取り上げて一面を注意深く読む。異変を起こそうと企んでいるのなら今のうちに潰すつもりだったが、紫が一枚噛んでいるのが判ると、彼女は興味を失い、魔理沙に新聞を押し付けた。

「外から来た人間？早苗と似たような物って事ね。で、能力はなんなの？」

「それが分からないんだぜ。な？面白そうだろ？」

「ふーん」

霊夢は一人ではしゃぐ魔法使い―魔理沙を鬱陶しそうに横目で見つつ、それで？と方眉を上げた。

「どうせアンタの事だから、弾幕勝負がしたいだけでしょ」

「ご名答だぜ!!今日は宴会をやるだろ？コイツも来るだろうし、一戦交えて実力を試してみるのも面白いだろ!」

「あっそ。やりたければ勝手にやりなさい。ただし、神社ぶっ壊したら二人纏めてぶちのめすからね」

霊夢は素っ気ない態度をとり、食べかけの煎餅を口へ放り込んだ。



「フッフフーン……」

はたては鼻歌混じりに手際よく卵焼きを焼き上げていく。今日の彼女は機嫌が良く、いつもより気合いの入った料理を作っていた。

サンカも上機嫌な彼女の後ろ姿を見ながら簡単な部屋の掃除を済ませ、購入が必要な備品の確認を行う。互いに作業を分けて済ませれば負担も減るし、それだけ自由な時間も増えるので、自ずと進んでやっているのだ。

「ねえはたて、僕の歯ブラシ知らない？この間買ったと思うんだけど」
鏡台の前に、サンカは怪訝な顔をした。石鹸、鉛筆、箸。他にも最近無くなる、もしくは消費が早くなる物品が幾つか増えた。特に歯ブラシの紛失率は高く、幻想郷で簡単に買い揃えられる物でも無いので難儀している。

訪ねられたはたては、何故かビクツと体を強張らせ、若干早口になりながら声を返す。

「歯ブラシ？あー、ごめん。私にも分からないわ」

「んん。わかった」

サンカはメモ帳に買い出しする物を書き纏め、胸ポケットに仕舞った。

暫くすると、食事の良い匂いがしてきた。昨晩は新聞の製作に手間取って寝るのが遅くなった事もあり、今回の食事は昼食兼朝食である。夜遅くまで起きているのはやはり辛い、こうして昼頃まで寝るのも悪くはない。

「はい、あーん」

「自分で食べられるよ」

はたての顔から笑みが消えるが、気にせず卵焼きを受け取って食べた。

ここ最近、彼女との距離は以前より更に近づいていた。スキンシップの取り方はより過激になり、人前であってもお構い無しに引っ付いてくるようになったせいで、椀の言っていた噂は益々拡がりを見せている。

もつともサンカとしては満更でも無く、態々否定して回ったところで焼け石に水なのが明らかなので、今は放置しているのだが。

(はたてが好き、か。確かに可愛いし美人だし良い子だけど……それにしてもヤケに赤い味噌汁だな)

普段は合わせ味噌を使っているのだが、今日のは妙に赤く鉄っぽい味がする。味噌を変えたのか、或いはほうれん草のせいだろうか。

と、視線を感じて顔を上げてみる。対面に座っているので当然はたと目が合うが、何故かその目は暗く澱んでいて、危険な雰囲気を見せていた。

「フフッ」

(ツ!!)

彼女はニコリとしてみせたが、サンカに伝わったのは酷く殺気立った感情だった。怒りを堪えるかのように、膏藥が貼られた指が僅かに震えている。

「ご、ごちそうさま。美味しかったよ」

重苦しい空気の中、味のしない食事を終えると、まるで正気に戻ったかの如く負のオーラが消え、普段通りの明るく、快活なはたてに戻った。

「お粗末さま。この後はどうする？」

「縁側で少し休むよ。ちよつと日に当たりたいから」

「わかったわ。お茶、淹れて来るね」

「ありがとう」

逃げるように早足で縁側へと向かう。そして彼は、庭でも見て少し落ち着こうと思ひ、良さげな日向を探して座布団を置く。

今日は強めの風が吹いており、体感にして春先程度のため、熱中症になることはないだろう。涼し気な風鈴が頭上で鳴っている。

(こっちに来て何日経ったかな)

思えば短い間に色んな事があつた。トンネルを潜り抜けた先で天狗に出会い、能力に目覚め、そして今では怪異討伐に出向いている。まるで冒険活劇の世界に迷い込んだようで、何となく主人公たちの心境が理解できた気がした。

「お待ちせ。お茶持ってきたわ」

枯れ始めたヒマワリを見つめながら思い耽っていると、はたてが二人分のグラスを持って現れた。外界で購入したグラスには、井戸で冷やした麦茶が注がれており、彼女も隣に座るつもりなのだとすぐに分かった。サンカはお礼を一言述べ、差し出された麦茶を受け取る。

「なあはたて」

「何？」

「どこに座って……」

「どこって、膝だけど？」

「降りてくれると嬉しいんだけども。麦茶が飲めないんだ」

「えーちよつとくらい良いでしょ？それよりも、なんか顔赤いよ？もしかして……照れてる？」

「ちっ、違うー！これは照れてるんじゃないやなくてその……」

照れ隠しの否定の言葉を述べようとした途端、鈍い痛みが両目に走った。ゴミが目に入った時とは異なる、どちらかと言えば目の内側から痛みが来るような感覚に、サンカは小さく呻く。はたては異常に気付いて膝の上から飛び降りると、サンカの前で屈んで彼の手を握った。

「サンカ？ねえどうしたの？どこか痛むの？」

「……だ、大丈夫だよ。心配いらない……から」

不安にさせまいと今できる精一杯の笑顔で誤魔化していると、段々と痛みが引いて来た。彼女も落ち着いたのを見計らって、流れ出た大粒の涙を拭き取ってくれたが、その面持ちは未だ暗い。

「ねえ、本当に何ともないの？本当に無理してないの？」

「大丈夫だよこれくらい。なんて事……ないよ」

「……」

「仲が良いわね。羨ましいわ」

「……紫さん」

介入する頃合いを窺っていたのか、会話が途切れたタイミングで紫が現れた。また依頼かと思ったが、どうやら今回は違うらしい。

「暇そうだから、ちよつとしたお誘いをしに来たのよ。今日は博麗神社でお祭りがあるのは知ってるかしら？」

「ええ。存じてます」

今にも飛び掛かりそうなのはたてを押さえつつ、紫の問いに答えた。博麗神社と言えば、はたてに危険だから行くなと強く言われた場所だ。凶暴な輩がいるらしいが、そんな場所で祭り事とは肝が据わっている。きつと相当な実力者が多く集まるのだろう。

「知っているのなら話が速いわ。貴方と弾幕勝負をしたがってる娘が居るのよ」

「弾幕勝負ですか……あれは痛いからなあ」

「あら、別に必ず来いと言っている訳では無いのよ？ただ、祭りという事は宴会もあるから、何かしら美味しい料理もあるんじゃないかしら？」

チラリとはたてを見ながら言うと、彼女は痛い所を付かれたような声を出した。彼女としては行きたいらしく、うー、と唸っている。

「一緒に行こうよ。今なら能力だって使えるし、弾幕だって作れるから」

「うーん……」

はたては悩んだ末、何か閃いたような顔をして承諾した。何か黒くドロドロした雰囲気が渦巻いている気もするが。

「それじゃあ、今晩は楽しめると良いわね」

紫はそう言うと、甘い香の匂いを残して消えて行った。

32話 月夜の大宴会

「やっぱり夜だと派手ね。それ」

満月が幻想郷を神秘的に照らし出す中、はたてはサンカの足に装着された飛行装置を指差した。この装置は重力場を形成した際に紫色の燐光を発するのだが、確かに夜だとしても目立つ。はたてとしてはもう少し光量を抑えて欲しいらしい。

「今度整備に出すから、その時に調整して貰うよ。本当はこんな機械に頼らずに飛べれば良いんだけどね」

「あーじゃあじゃあ、また私が抱えてー」

「いや、いいよ。大変だろうから」

「むう……」

雑談をしながら山を越えると、はたてに抱えられて空を飛んだ時に見た神社が近づいてきた。境内には提灯と思われる光が幾つも灯り、社を指して階段を登って行く人ならざる者達の喧騒が聞こえるようだった。

「皆見てるね」

「宴会に来るような人間は限られているもの。珍しいんでしょ」

サンカは両足の装置を前に向けて減速し、広々とした境内に降り立つ。そして空から現れた見知らぬ人間に驚く妖怪や妖精たちを尻目に、はたてと共に砂利を踏み鳴らして歩いた。

はたてに手を引かれるがまま拝殿に足を踏み入ると、既に宴会は始まっていたらしく、雑多に並んだ酒瓶や、ずらりと並んだ料理、アルコール類独特の臭気が漂っている。

一見するとただの人間にしか見えない会場の面子も、観察してみれば人とは明らかに違う特徴を持っているのが見受けられ、少しだけ自分が場違いな場所に来てしまった気分になった。

「注意して。ここにいるのは幻想郷の中でも強者だけ。気分を害した

ら―」

「お、文と権ちゃんも来てるのか」

「……ちよつと。聞いてるの?」

はたての忠告を右から左へと聞き流し、見覚えのある二人の天狗の元へと向かう。権は額から朱色の一角を生やした巨漢の女（恐らくは鬼だろう）に絡まれオロオロして、文は空いた酒瓶を片手に笑い転げている。

「隣、いいかい?」

サンカは文の隣に立つと、赤ら顔をした彼女は焦点の定まらない目で見つめて来た。呼気にアルコール特有の匂いが混じっており、相当酔っているようだ。

「あやあ?ハンカさんにはやても来てたんねえ。まずは一杯」

そう言つて徳利を差し出す。辛うじて呂律が回っているので聞き取れはしたが、酒に強い文を酔わせるような代物を飲んで平気でいられる筈がないので、丁重に断りを入れておく。

「お酒は飲めないから遠慮しておくよ。ちよつと興味があつたから見にいだただだ!」

酔つ払つた文と会話を続けながら腰を下ろそうとすると、はたてに耳を強く引つ張られた。あまりの痛さに大きな声が出てしまったが、酒盛りをしている者達にとっては悲鳴の一つや二つはどうでも良いらしく、気にする素振りも見せていない。寧ろ、またかという反応をしている者がいるのを見るに、揉め事の類はよくあるようだ。

「痛たた……いきなり何をするんだよ」

「フンツ!」

はたては不機嫌な態度を隠さず、文とサンカの間に無理やり割り込むように座つた。サンカも痛む耳を押さえながら座ると、すぐにはたてが肩へと寄りかかり、腕を絡ませて来た。

「あの、はたて？左手が動かせないんだけども」

「何か問題があるの？」

「いえ、ありません」

圧に負けて引き下がる。確かに飲食をする際には右手を使うので問題はないが、彼女の語気に怒りが混じっているのは何故だろうか。癩に障る様な真似は覚えが無いが、今一度思考を巡らせた。

（うーん、ダメだ分からない。やっぱり女心って難しいな）

「危ない！」

ハツとして顔を上げると、直径四十センチはある巨大な酒杯が、顔に目掛けて飛んでくる所だった。後ろにはしまったと目を丸くする鬼と、青くなつた権がいる。

（冗談だろ）

咄嗟に頭を下げると、酒杯は頭上を通り過ぎて、後ろの席に座つていたブロンス髪の女の頭に命中する。女は蛙が潰されたような奇怪な声を上げ、仰け反りながら倒れ、ぶつけた個所を押さえてのた打ち回った。

相当重そうな酒杯が顔に当たっただけあつて、死ななくとも麻痺等の後遺症が出るかもしれない。サンカははたての手を振り払い、魔女に近づく。

「平気かい？怪我は？」

「うう、首が痛い」

触診してみたところ、赤く腫れているだけで骨は折れていなさそうだ。能力を使って怪我を治療してやると、女はすぐに起き上がり、ニカツと笑顔を向けた。はたての笑顔を柔らかい春の日差しに例えるなら、彼女のは真夏の太陽のような明るい笑顔で、見ているだけで元気になる気がする。

「助かったぜ！ええとー」

「箕作サンカ」

「サンカ？どつかで……ああ、お前がサンカか！ありがとな！なあなあ、天狗に拾われてこき使われてるって噂は本当なのか!?文の新聞に書いてあるみたいに、一人で化け物退治してるのか!？」

「いや、あの……」

魔理沙と名乗った女は目を爛々と輝かせながら、息をつぐ間もなくに質問してきた。その一方通行な言葉の弾幕を前に、サンカは早くもタジタジになりつつある。

「ちよつとー馴れ馴れしくしないでよー」

はたてが乱入してくると、サンカの腕を掴んでグイつと引つ張った。咄嗟に魔理沙が反対の腕を引つ張る。

「今話しているのは私だぜ？話終わるまで待てよ」

口を尖らせる魔理沙。はたては一層語気を強め、魔理沙をけん制する。

「話し？どう見ても一方的に喋ってるだけじゃないの。それに、サンカが困ってるでしょ。強引過ぎて本当に引くわー」

両手に花、と言ったところか。普通なら喜ぶところなのだろうが、腕が千切れそうだし、なにより女同士の舌戦の間に挟まれているのは胃が痛くなる。サンカは天井を仰ぎ、早くこの時間が終る様に願う。

すると、魔理沙の引つ張る力が一瞬弱まり、体のはたて側に大きく傾く。はたてはこの隙を見逃さず、光の速さで魔理沙の手を弾き、サンカを抱き寄せた。彼女の胸が顔を覆う。

「いい？彼は私の物なの。勝手に話すのは私が許さないから」

「あーはいはい分かりましたよ。ところで、今にも窒息しそうになってるけど大丈夫なのか？」

「え？……あー！」

息ができるようにサンカの拘束を解くと、彼は上を向いて大きく息を吸い込み、涙を浮かべて咳き込む。

「ゲホゲホ……死ぬかと……」

「ご、ごめんなさい。悪気は無くて」

「いい、良いんだ。次は加減してくれ」

魔理沙は二人のやり取りを見て苦虫を噛み潰したような顔をする
と、小さな八角形の道具を取り出し、底に付いているスイッチを押し
た。道具の上部から小さな火が明滅する。

「早速だけど、弾幕ごっこを挑ませてもらうぜ！言っておくけど、拒否
権はない!!」

「ちよつと貴方がいい加減にー」

「喧嘩はよせ」

ムキになったはたてが手を上げようとしたので、サンカは立ち上
がってはたての前に割り込んだ。そして魔理沙の方を向き、ため息を
つきつつ帽子を被り直した。

「受けて立つよ。でも、僕が勝ったら宴会の間静かにしていると約束
してくれ。良いかい？」

魔理沙は不敵に笑う。

「話の分かる奴だぜ。なら、私が勝ったらじっくり話をさせてもら
うからな！」

33話 戦術と力技

「ちよつと何の騒ぎ？まさか、もめ事起こしたんじゃないでしょうね」「もめ事なんて起きてましえんよ〜」

「酒くさっ」

呂律の回らない文が霊夢と呼んだ巫女に事情を説明すると、彼女らは魔理沙の対戦相手を見た。

中折れ帽を深く被った色白な男。間違いなく朝刊の記事になっていた輩だ。通気性の悪い長袖の服を着ているから、見るからに暑苦しい。

（あの男、何か妙ね）

それは長年の巫女としての経験から覚えた違和感だった。具体的には言えないが、あの男は天狗に拾われたただの人間ではなく、もつとドス黒く、幻想郷にいるべきではない邪悪な何かである気がしてならないのだ。

霊夢は魔理沙と黒尽くめの男が庭に出て行くのを見送ると、何かあったらいつでも動けるように裏口へと向かう。もしかしたら自分も戦うことになるかもしれない。彼女は人知れず、そう覚悟を決めていた。



「お互い手加減無しだぜ！本気でかかってこい！！」

「はいはい」

社を見ると、多くの野次馬が二人に大金を賭けているところだった。はたて達は賭けに参加していなかったが、弾幕勝負がよく見えるよう、最前列に座っていた。

（やるしかない……か）

不安そうなのはたてと目が合い、サンカは手を振る。うまく言いくる

めて勝負を放棄させる算段だったが、ここで引こうものなら間違いない賭けをしている面々に袋叩きにされるだろう。退路を絶たれた以上、戦うしかないのだ。

「いつでも」

「じゃあ、月がああ雲に隠れたら始めるぜ」

指さす方を見上げると、朧雲が月に差し掛かろうとしていた。あの雲が月を隠したとき、ここは逃げ場のない戦場と化すのだ。サンカはただ刻々と迫ってくるその時を、スペカを手は今かと待つ。

そしてついに、雲が月を覆った。一瞬辺りが暗くなり、松明の火が煌々と煌めき出す。

「隙あり！」

最初に仕掛けたのは魔理沙だ。彼女は指の間に挟んで隠し持っていた数本の小瓶をサンカに向かって投げつけ、彼の足元近くに落ちていく。

—ボウツ！

小瓶が割れた事で、封入されていた液体が空気に反応して爆発した。初動の遅れたサンカは急いで装置を起動し空中へと逃れるが、先に飛び立っていた魔理沙による爆撃で思うように動けない。

「ならばー！」

装置の推力を最大にしつつ、被弾覚悟で強引に爆撃を突破した。魔理沙は不敵な笑みを浮かべると、星形の光弾を展開しながら常に一定の距離をとって逃げ回る。

サンカも必死に後を追うが、飛行装置を移動用程度にしか使ってきたのが仇となり、満身に制御できずフラフラと蛇行する有り様だ。もはや勝負にすらなっていない状況に、野次馬からも嗤い声がかかる。

「どうしたんだ？そんなんじや蚊にも勝てないんだぜ？」

「こいつー！」

相手のペースに乗せられてしまい、ほぼ垂直に上昇を始めた魔理沙を追おうと、無理矢理加速して高度を上げていく。位置は真後ろ、攻撃を行うには絶好の位置だ。サンカは攻撃を仕掛けるべく、指先に全神経を集中させる。

(なんだ？頭がボーツとして……)

視界が黒くなり、瞬く間に意識が飛ぶ。強い負荷を掛けたのが原因で頭に行きわたる血が足りなくなり、眠るように気を失ったのだ。サンカは空中で身動きが取れなくなり、落下していく。

魔理沙は急旋回して方向を変えると、懐から八角形の小物を取り出し、真っ直ぐ狙いを定めた。

「ミニ八卦路!!避けてサンカ!」

「食らえ!スペルカード、恋符・マスタースパーク!!」

血が頭に行き渡ったサンカが目を醒ますと、状況を把握して慌てて急停止させるが、回避は間に合いそうになかった。彼は最終手段として残しておくつもりだった、虎の子の防御スペルを唱える。

「スペルカード!吸武きゆうぶ・禍白まがしらのさかほこノ逆鋒!」

シールドを作り出して攻撃を吸収させようとするが、魔理沙のスペルは想定より強力で、ものの数秒で吸収限界を迎え、いとも容易く破壊された。サンカは間一髪回避して無事だったが、服が煤けてしまっている。

(なんだあの出鱈目な火力は!?)

「逃げてばかりじゃ勝てないぜ!スペルカード、魔符・スターダストレヴァリエ!」

再びあの攻撃を受ける前に逃げようとしたが、魔理沙はサンカを正

確に捕捉しており、魔法陣を展開して七色の巨大な星形弾幕を呼び出していた。サンカは目に見えて焦り、何を思ったのか弾幕勝負では無意味な防御姿勢をとる。

(しまった)

魔理沙は箒の柄をサンカの背中に衝突させ、大量の光弾を浴びせつつ急上昇、再び降下して箒をぶつけて、と一撃離脱を繰り返す。爆煙に包まれた彼がどうなっているのか分からないが、これ以上戦いを続けるのは不可能だろう。

魔理沙は技のメにと星形光弾の列を作り出し、未だ晴れぬ煙の中へと放とうと力を込める。

「なんだ弱つちいなあ。もうちよつと頑張つてほしかったぜ。しかし、弾幕はパワーだよ。頭使つて戦うなんてちゃんちゃらー」

「力任せで勝った気になるなよ」

魔理沙が素早く顔を上げると、口を開けたまま固まった。何故なら、さつきまで攻撃を加えていたサンカが立っていたからだ。彼は満身創痍という言葉がピッタリな程にボロボロで、裂けた帽子のツバから覗く黄金色の瞳には、さつきまでとは明らかに異なる雰囲気を感じている。

「二回戦目だ。行くぞ」

直後、魔理沙の体が木の葉の如く宙を舞う。サンカの蹴りが背中に命中し、バランスを崩させたのだ。魔理沙は箒の柄を握り締めて体勢を立て直し、新たに弾幕を展開して攪乱しつつ、先ほど撃とうとしていた本命の攻撃を放つ。

弾幕は真つ直ぐサンカへと進んだが、彼は弾道を見切つて僅かな姿勢の変更だけで回避し、逆にスペルを唱える。

「スペルカード。修羅・百鬼若松の構え」

「なっ!？」

正面からは大玉の光の弾が迫り、周囲からは誘導性のある光の針の群れが押し寄せる。幸いにも弾幕の速度は速くないので、魔理沙は態勢を立て直し、敢えて自分から針の群れへ突っ込む。

「こんな遅い攻撃、見た目が派手なだけで意味なんてないぜ！」

自分の射程に収めれば勝てるかと踏んだらしい。未だ勝ち気な表情は崩れず、勝利への希望を見失ってはいないようだ。

「そろそろか」

サンカの声に呼応して、箒の柄が光った。裏側を見ると、小さな賽子を取り付けてあった。それは甲高い音を立てて、煙を吐いている。

「プレゼントだよ。受け取ってくれ」

断続的に続いた煙が途切れ、少し間をおいてから青白い炎を上げ、炸裂した。箒を破壊する程の威力ではなかったが、意識を逸らされたのが原因で弾幕に追い付かれ、気づいた頃には空を埋め尽くす緑色の弾幕が降り注いでくる所だった。

「スペルカー……」

魔理沙はスペルを発動しようとしたが間に合わず、全身を弾幕の暴風雨に打たれて地に落ちた。それは正しく、強者の落日の日であった。

34話 存在

サンカはフラフラと着陸すると、体についたチリを軽く払う。そして地に伏す魔理沙を一瞥し、はたての方を向く。

「サンカ? その目……」

はたてはすぐにサンカの異変に気付いた。彼の瞳の色が見慣れたこげ茶色ではなく、どうしてか黄金色に変色し、月の光を反射して薄っすらと光っていたのだ。他の面々にもその異常に気付いているのか、ひそひそと声を交わす。

「……ぐああっ!!」

「サンカ!? 楯、永琳を呼んできて!」

突然、サンカが両目を押さえて悶えだした。指の隙間から生暖かく、粘り毛を帯びた赤い液体が滴り落ちる。

はたては楯に叫びながら指示しつつ苦しみだしたサンカの元へ急ぐが、そんな彼女の前に霊夢が現れた。胸の前で腕を組んで仁王立ちする霊夢は、はたてを制止させると、キツく睨みつけた。

「永琳を呼ぶ必要はないわ。放っておきなさい」

「何を言ってるの!? サンカが苦しんでるのよ!? 早くどい……て……」

はたてが言葉を失う。霊夢の肩越しに見た彼の姿は、あたかも満月を見てしまった狼男のように変化を始めていた。黒々としていた髪からは色艶が消え失せ、肌色は生氣を感じさせない寒々とした白色へと変色し、まるで死人の如き様相へと変わっていく。その姿は彼女の古い記憶を鮮明に蘇らせ、同時に畏怖すらも抱かせた。

「はたて」

はたては名前を呼ばれてビクリとし、恐々と霊夢を見た。僅かながら眉間に皺が寄っていて不機嫌そうだ。

「アンタがコイツを匿ってた理由は後で聞かせてもらおうわ。嘘をつこうなんて思わない事ね。しかしまだ生き残ってたなんて……とつくの昔に全滅したと思っっていたわ」

「サンカさんは貴方と同じ人間ですよ？全滅したなんてそんな……」

「人間？笑わせないで。こんなのが人間な訳ないでしょ」

酔いの醒めた文の茶化しに、霊夢は食い気味に反論する。そしてすつと息を吸い、周りにも聞こえる音量で言った。

「アンタは人間なんかじゃない。餓鬼の出来損ないよ」

その場が水を打ったように静まり返り、次にどよめきが広がって行く。

「執念深いわね。人間の真似をして幻想郷に入り込むなんて。今度は何？外界から追い出すに飽き足らず、幻想郷まで滅ぼしに来たって訳？」

「言いがかりです！サンカさんはそんな事をする人じゃありません！！」

「表面上は良い顔していても本性は化け物よ。きっと私達を油断させて喰う腹積もりに決まってるわ」

椀が抗議するが、酒を飲んで騒いでいた面々も冷ややかな態度を取り始め、口々に呪詛を吐き、石や徳利を投げつけ始めた。サンカは周りの態度の変化が理解できず、投石を浴びて額から血を流しながらも困惑した表情で霊夢を見つめる。

「アンタはここで始末させてもらおうわ。無駄な抵抗はしない方が良くわよ」

「僕が……僕が何をしたって言うんだ」

「自覚無いの？まあそうよね、人外を餌としか思っけない輩は！」

霊夢は怒鳴ると大幣を大きく振りかぶり、サンカの頭に振り下ろした。



「はっ!？」

サンカが目を覚ますと、薄暗い座敷で寝かされていた。はたての家で無いのは間違いないらしいが、だとすれば此処に運び込んだのは誰だろうか。

首を動かして辺りを見ると、枕元で弱弱しく明かりを灯す行燈の後ろに姿見があるのを見つけた。鏡には白っぽい影が映りこんでおり、段々と暗さに目が慣れてくるにつれて、その影が現在の自分の姿だと分かった。

「嘘だ……そんな……」

鏡の中の自分が明確になると共に狼狽し、声にならない声を発しながら己を映す鏡を叩き割る。

老人のように色が抜けた艶の無い髪、血管が青く浮き出る程青白く生気の無い肌、真っ黒になった白目に浮かぶ、月の如き黄金色の瞳。まさしく外界で相対した餓鬼そのもので、自身を人間と鼓舞し続けていた彼にとってはおぞましく、認めたくない姿だった。速くなった呼吸が、静かな部屋に響く。

「サンカ?」

声が聞こえた方へ振り向くと、はたてが暗がりの中に座ってウトウトとしていた。彼女は傷だらけの痛々しい姿をしていて、両目は泣いていたのか腫れている。

「怪我の具合はどう? 霊夢に殺されかけて――」

「ちよつと黙ってくれ!!」

「……」

「……ごめん」

混乱のあまり怒鳴ってしまったが、落ち着きを取り戻すと謝罪の言葉を述べ、ため息を深くつく。はたてはサンカの心境を知ってか、彼

を責める事はしなかった。

「……ここはどこなんだ？あの後どうなったんだ？」

サンカがはたてに近づき、なけなしの力で怪我を癒しながら質問する。

「紫の屋敷よ。霊夢に捕まった私達を運んでくれたの。宴会は騒ぎでお開きになったわ」

「紫さんが……」

「うん。目が覚めたら部屋に来るようになって」

はたてが一通り説明すると同時に治療を終え、重たい静寂が戻った。行燈の火が揺らめき、二人の姿がゆっくりと明滅する。

「はたては……はたては僕を嫌いにならないのか？」

「……」

投げかけられた恨みつらみの言葉が脳裏から離れない。霊夢の言葉と周りからの拒絶は、サンカに耐えがたい苦痛を与えた。

もし餓鬼と化した自分に対し、はたても恐怖心や嫌悪感を抱いて離れて行ってしまったら——そう思うと、生きていく気力すら無くしてしまいそうだ。

サンカは暗い面持ちのはたてから帰ってくるであろう返答を待つ。

「そんな訳ないでしょ？ずっと一緒に居たのに、今更嫌いになんかならないわ。私は何時でもサンカの味方よ？」

「本当か？」

なおも疑念を拭えないサンカを、はたては優しく抱き寄せる。温かな抱擁はサンカを安心させ、壊れかけた心を繋ぎとめてくれた。

「これでも信用できない？」

「……ありがとう、はたて」

「分かればよろしい。ねね、能力を使っちゃったから眠くなってるない

？」

指摘されると、確かに瞼が重くなってきた。

彼女は自分の味方だ。傍に居る限り、命も、他者からの怨みに押しつぶされる心配も無いだろう。サンカは身をゆだねるよう、静かに目を閉じた。

再び眠りについたサンカに布団を掛けると、はたては同じ布団に潜り込む。肌に触れると死体のような冷たさを感じたが、彼は確かに呼吸をしていた。

「ちよつとやり過ぎちゃたけど、私を避けようとするから悪いのよ？」
博麗神社での宴会は都合が良かった。能力をあの巫女の前で使えば、遅かれ早かれ間違いなく孤立する。

そして孤独を感じるようになった彼に救いの手を差し伸べれば、必ず自分を求めてくれる筈だ。自身を避けた罰として実行してみたが、サンカの餓鬼化という予想外の出来事もあり、効果は抜群だったとはたてはほくそ笑む。

「例えお互いが引き離されていたとしても、例え私の事を忘れていたとしても、永遠に添い遂げて見せるわ。アナタ」

はたてはサンカの頬に口づけをすると、耳元で小さく囁いた。

35話 過去

歩ける程度まで回復したサンカは、はたてに付き添われて紫の元へ連れて行かれた。紫は袖の下として渡した饅頭を摘まんでおり、幾つか食べ終えた包みが散らばっている。

「さて、何から話しましょうか」

手にした饅頭をペロリと平らげると、扇子を口に当てつつ悩ましげに片目を瞑った。

「まず、僕について教えてください」

「そうですね。そこから説明しましょう」

紫はお茶を一口だけ口に含んで、湯呑をちやぶ台に置く。彼女なりに思うところがあるのか、珍しく動揺しているようにも見えた。

「博麗の巫女の言った通り、貴方は餓鬼で間違いないと思うわ。それも、人工的に造られたタイプの」

「……そうですか」

「認めたくない。そう言いたげね」

「……はい」

「無理もないわ。外で餓鬼を討伐した時の報告書を見るに、貴方はアレを相当嫌悪していたのだからね」

紫は乾いた口を濡らす程度にお茶を含み、今に至るまでの餓鬼とその他種族との関係を話してくれた。

「昔、海の方こうからやって来た高度な技術を獲た人間は、これまで共存してきた人知を超えた者達を討伐し、人間だけが頂点に立つ世界を作ろうとしたの。最初は私達が持つ、程度の能力で圧倒出来ていたけれど、人間は自身の最大の武器である知恵を駆使して、ついに禁域に手をつけたわ」

「それが餓鬼と？」

「ええ。毒を以て毒を制す、といった言葉があるでしょう？ 程度の能力を使う妖怪や神には、程度の能力を持つ者で対抗しようとしたの。今現在、幻想郷に住んでいる妖怪や神、妖精の殆どは、貴方達に肉親を殺された被害者であると言えるわ」

「造られた餓鬼達は、その後どうなったんですか？」

その問いに対し、紫はここから先は流れてきた文献によるものであるとしつつ、

「人ならざる者を一掃した後、用済みになった餓鬼の存在が疎ましく思えたのでしようね。皆処分したと記録されていたわ。難を逃れた、たった一人を除いて」

「それが僕ですか」

「ええ。貴方は奇跡的に彼らの手から逃れることが出来た。製造法は失われたようだし、もう一度製造するなんて真似は出来ない筈だから、当時造られた個体と見て間違いないと思うわ」

成程、まだ多少は混乱しているが、自分の生い立ちには一応の理解はできた。しかし、紫の説明ではある点の説明がつかない。それは外界で遭遇した女だ。

「外界で遭遇した女、羅刹は自身を餓鬼と称していました。あれは何だったのでしょうか」

「その件なのだけれど、恐らくあれは原種の餓鬼だと思うわ。情報を地獄に送っておいたから、他にも逃げ出した者がいないか確認している筈よ。今頃閻魔は大わらわね」

くっくっくと紫は笑う。口振りからするに閻魔が口煩かったらしく、仕返しの良いネタが入ったと考えているらしい。

それに、人間が転生する本来の意味での餓鬼は今も存在しているよ。うだ。人外を滅するのは抵抗が無くても、元は人だった彼らを殺すのは引けたのだろうか。なんとも都合の良い話である。

「……これから僕はどうなるんですか？」

「幻想郷に住む以上、迫害を受けたり命を狙われる事が増えるでしょうね。でも、その能力と身体機能なら殺される心配は無いと思うわ。依頼も人目につきにくい所を優先的に回すようにするから、これまで通りに取り組んで頂戴」

「どうやらこき使うのは止めないらしい。はたてと共に苦笑いしていると、藍が一枚の似顔絵を持ってきた。誰が描いたのか、絵は写実的で特徴をしっかりと捉えており、ひねくれた目付きからは若干の悪意すら読み取れた。」

「この娘は？」

「この間の異変を起した張本人よ。名前は鬼人正邪。種族は天邪鬼」

「この間の異変と聞いて、サンカはああと声を上げた。実は何日前、天狗の里で色々な道具が勝手に動き出したり、山に生息する妖怪が凶暴化する事案が発生していたのだ。」

「幸い博霊の巫女のお陰で事なきを得たが、首謀者の正邪は逃亡してしまい、放置しておくにも危険であると判断された為、賞金を掛ける事態となった、と文から聞いた覚えがある。」

「……成る程」

「サンカは暫し絵を見つめ、意図を察して呟いた。懸賞金も掛かっているので出る幕は無いと思っていたのだが、この娘の似顔絵を見せてきたという事は、サンカも捕獲に加われと言いたいのだろう。」

「お願いできるかしら？ 手段は問わないわ」

「生死問わず、と紫は付け加える。予想は当たりらしい。」

「サンカは正邪の似顔絵を懐に仕舞うと、帽子を取りに部屋を後にした。」



「あ、帰ってきた」

数日後の夕方。はたての家から空を眺めていた文は、二つの飛行機雲を指さして言った。ゆつたりと伸びていく雲が、紫がかつた空に溶けていく。

「文様！鍵を開けてきました！」

「ご苦労様です。権」

よっこらせつと腰を上げて玄関先に出ると、丁度二人が着陸した処だった。

「おかえりなさい。二人とも」

「おかえりなさい！はたて様！サンカさん！」

「ただいま……つて、なんで文と権が家の中にいるの？」

鍵を掛けた筈だと驚いた様子ではたてが尋ねると、二人は声を揃えて

「合鍵で入りました」

と言った。植木鉢の下というベタな処に鍵を置いていたので、すぐに見つけられたらしい。

「それはともかく、色々大変でしたよ」

文はヤレヤレといった具合に首を振った。彼女曰く、機嫌の悪い霊夢がサンカを探しに里まで来たらしく、説得の末追い払ってくれたとの事だ。

「ささ、上がりましょうよ。立ち話もなんですし」

「私の家なんだけど……まあいっか。サンカ！」

はたてが上機嫌にサンカの腕を引くと、今まで隠れていた肌が見えた。死人のように青白く、生命感の無い肌色だった。

「あ、あのー！」

権がサンカの注意を惹こうと軽く袖に触れると、彼はゆっくり振り

返り、帽子の唾を少しだけ持ち上げて権を見下ろした。

「どうしたの？」

「……なんでもありません」

少しでも励ますつもりでいた。だが、黄金色に光る彼の瞳を見ると、権は視線を逸らし、はぐらかす事しか出来なかった。

36話 信頼

卓袱台を挟んで向こう側に座る二人の天狗に、サンカは少なからぬ疑念を抱いていた。

正体が餓鬼だと分かった途端、大多数の人外が嫌悪の表情を浮かべ、罵詈雑言を浴びせながら石を投げる―あんな目に遇えば、親しくしてくれたこの二人も内心は憎く思っていて、いつか自分に牙を剥くのではないかと考えてしまうのだ。

「それじゃ、お茶取ってくるね。サンカはほうじ茶で良い？」

「……うん」

機嫌の良いはたてがお茶汲みに出ると、残された3人の間に重い空気が流れた。椀と文はよそよそしく姿勢を変え、互いに目配せしている。

「あの、サンカさん」

暫くして、沈黙に耐え兼ねたのか椀が口を開いた。声色は暗く、いざ呼んでみたが話すのを躊躇うように口をパクパクさせている。

「サンカさんはその……本当に餓鬼なんですか？」

漸く絞り出された言葉に、サンカは小さくため息を吐いた。彼は帽子を脱いで色の抜け落ちた髪を露にし、闇に浮かぶ満月のような目に、動揺する二人の姿を入れる。

「そうだよ。見ての通り、僕は餓鬼だったんだ」

過去の記憶を持たず、常に孤独が当たり前だったサンカにとって、幻想郷は安寧を得られた唯一の場所であり、はたてのように親しく接し、温もりを与えてくれる相手が初めて出来た場所でもあった。それだけに、存在を拒絶され、覚えの無い理由で命を狙われるようになってしまった

「皆僕を嫌う。何も覚えてないのに。自分が誰なのかもわからないのに」

サンカは誰に言うでもない怒りとも嘆きとも取れる言葉を棍と文に投げかけ、頭をグシヤグシヤと片手で搔きり、小さく嗚咽する。押し殺していた感情が一気に溢れ、彼にもどうすることも出来なかった。

「顔を上げてください。私達は貴方の味方ですよ」

呼びかけられて顔を上げると、棍は顔を覗き込み、両方の手を痛いくらい握り絞めてきた。

両手を封じられたサンカは振りほどこうと抵抗したが、棍も後ろで控えている文も何もしてこない。

「何をして……僕を恨んでいるんだったら早く殺せば良いじゃないか」

「恨む？なんでサンカさんを恨まなきやいけないんですか？」

棍はキョトンとして聞き返すと、文が心情を読み取ってか苦笑いし、サンカに説明するように言う。

「安心してください。私も棍も、この里に住まう全ての天狗達も、サンカさんに危害は加えません」

「なんで……僕は餓鬼なんだぞ？昔——」

「昔の事なんて一々覚えてませんよ。天狗は忘れっぽいので。それに貴方は悪い……死霊じゃありませんしね」

棍は数度頷くと、持っていた紙をサンカに渡した。受け取って見ると、どうやら寄せ書きの様だった。書かれていた字は綺麗な物から読みにくい物まで様々で、励ましの言葉や賛辞の言葉が綴られてある。

「なんだ？これ」

「霊夢さんの言動が気に入らなかつたので、色んな所を回って同意見の人に書いてもらったんです。二日も居なかつたので出し損ねてま

した」

「フランさんなんて、お兄ちゃんを化け物って呼ぶな、って抗議してましたよ。いや、短い間に随分人気者になりましたねえ。羨ましい限りです」

文は冗談めかして言う、権が軽く小突いた。

「恨む方もいると思います。でも、未だに昔の事を引きずり出して恨むのは器量が小さいですし、そんな事する方は情けないと思います」
「そうか？」

「そうですね。ここは実力が物を言う場所ですからね。貴方ももっと強くなって、堂々とすれば酷いこともされなくなります」

サンカは少し考えてみた。

文の言う力で押さえつけるやり方はあまり好ましくはないが、自分を嫌う妖怪は少なからずいる。

それなら、お互い嫌な思いをするのであれば会わなければ良いだけの事だ。態々こちらに来てまで蒸し返そうとするのも、馬鹿馬鹿しいと思えるように。

そもそも霊夢に、たかが10代の娘に貶されて何を悩むことがあるのだ。自分には信頼してくれる者が多くいる。

そう思うと少しだけ気が楽になり、さつきまで疑心暗鬼だった自分がおかしくなってきた。

「何を考えていたんだ。僕は」

「あや？なんで泣くんですか？」

「最近涙腺が脆いんだ。歳かな」

「ごめん、ちよつと時間がかかっちゃったわ……って何見てるの？」

はたてはサンカの隣に座る二人の後ろ姿を見て蔑んだ様な顔をすると、すぐに普段通りの笑顔を浮かべてサンカの背中に飛びつき、彼の手元を見る。

「ああ、これはですね……」

文が傍から離れると、秋の特有の匂いを乗せた風が涼し気に風鈴を鳴らした。

37話 輝く

「へえ〜。寄せ書きねえ」

はたてはサンカの持っていた寄せ書きを不服そうに見ていた。

折角あの騒ぎで彼を依存させる事が出来たと思つたのに、これではまた振り出しだ。それに文字を書いた人数の多さ。名前から推測すると都合の悪いことに男より女の方が多い。

この女たちの中には、サンカをはたてから奪おう考えている者もいる筈だ。サンカが彼女から離れて行かないようにするためにも、より監視を強化しなくてはならないだろう。

「・・・せめて悪い虫が付かないように見張つてなくちゃ」

「ん？何か言った？」

心の声が表に出てきてしまったようだ。はたては咄嗟になんでもないと追及を逃れ、話を逸した。

「そ、そうだ！早く正邪を捕まえないと！」

そういえば紫から頼まれていたのだった。今回は何か褒美にくれるらしいので、先を越される前に動かなければならない。

「あの天邪鬼を捕まえるんですか？」

「そうだけど・・・二人も捕まえに？」

「結局逃げられちゃいましたけどね。反則アイテムさえ取り上げられれば雑魚中の雑魚なんですけど・・・」

「反則？」

「打ち出の小槌の力が宿つた道具の事です」

成程、振れば願いを叶える打ち出の小槌の力を持った道具を所持しているのか。それなら逃げられもする筈だ。

しかし、昔話しに出てくる伝説上の物もここにはあるのか。一度一寸法師とセットでお目にかかりたいものだ。

サンカは卓上に寄せ書きを置き、自室の扉を開けた。

「ここがサンカさんのお部屋だったんですか？てつきり開き部屋だと」

無理もない。普通感覚なら箆笥の一つあっても良いと思うはずだ。

以前にも調度品の一つでも購入してはどうかと勧められた事もあったが、無くても問題がない事は放浪生活でわかって居るので断っていた。

サンカは何も言わずリュックサックの中をゴソゴソと漁りだすと、椀が興味深げに部屋を隅から隅まで見回す。

「男の人の部屋って、こんなに殺風景なんですか？」

「男の人って言うより、僕が単に変なだけだと思う」

手を右へ左へ動かして目当ての物を探り当てると、彼は数個それを手に取って引つ張り出し、三人に見せる様に掌の上で転がした。

サイコロのようなそれは、魔理沙との弾幕ごっこの際に使った物と同一の物だった。

「それって確か・・・」

「河童製の小型爆弾。威力は目くらまし程度だけど使える事は分かった」

「ごつちのは黒い粉？何に使うんです？」

「内緒だ。はたて、もうすぐ待ち合わせの時間だ。直ぐに出よう」

「わかったわ」

椀の耳がピコりと動いた。

何か言いたげにモゾモゾしているのについてきても構わないと言うと、彼女は明るい顔になり、

「直ぐに仕度します!!」

と風のように出て行ってしまった。てつきりこのままついて来ると思っていたが、家まで戻ったのであればそこそこの時間がかかるだろ

う。

時計を見ると、予定的に彼女を待って居られるほどの時間は残されていない。

「先に行ってくる。はたては後から来てくれ」

「あ、ちよつと！」

「いってらっしゃい。良いネタ期待してますよ」

サンカは一瞬で高空へと飛び立った。足先から出る燐光は、あたかも彼の存在を強く主張するかのようになり、暗い大空に輝いた。

妖怪の山上空、彼女は月の光に照らされながら魔導書を読んでいた。ブロンズの美しい髪は黒い服に良く映え、時折吹く風に静かに靡く。

彼女は一人の男を待っているのだ。ある目的のために。

「来た」

紫色の眩い光を放ちながら彼はやって来た。話では二人の筈なのだが、どういう訳か一人だけだ。

彼女は読んでいた本を仕舞い、ランタンを下げた筈を彼に向けた。

「遅いぜ・・・って、なんだよその目と肌」

待ち合わせていたのは魔理沙だった。

最初は霊夢と共同で正邪を捕らえる予定だったが、サンカが激しく拒否したため、代役として暇そうだった魔理沙が選ばれたのだ。

彼女は開口一番、人間だった頃の彼と違う点を指摘してきた。事情は紫から聞いている筈だが、姿まで変わっているとは思わなかったようだ。

「気にしないでくれ。それとはたて達は後から来るよ」

「達？二人だけじゃないのか？」

簡潔に説明すると、サンカははたて達がやってくるのを待ってから仕事を始める事を提案した。

魔理沙は読み途中だった本の読みたさもあり、快く応じる。

「じゃあ記憶喪失って奴かよ」

「そういう事になるね。食べたパンの数以上に覚えてない」

「私は覚えてるぜ。13枚だ」

「よく覚えてるな」

「和食派だからな！つと皆来たみたいだぜ」

他愛もない話をしつつ時間を潰し、二人がすっかり打ち解けた頃、権とはたてが先を競うように到着した。最初に到着したのは権で、息を切らしながら遅れてくるはたてを見て尻尾を千切れんばかりに振っている。

「決まりですね！約束は守ってもらいますよー！」

「ちよつとは・・・手加減しなさいよ・・・」

何を約束したのかと問うと、此処に来るのに酒の奢る奢らないの競争をしていたと言われた。少し真面目にやってほしいものだ。

中途半端に読み進めた本をため息交じりに仕舞う魔理沙に、サンカが申し訳ないと手を合わせると、彼女は少しでも良いらしく欠伸をして手を振った。なんでもいいから早くしてくれと態度に出ている。

「それじゃあ早速・・・はたて、権ちゃん。ちよつと能力を使ってほしいのだけでも」

「はいー任せてくださいー！」

サンカは彼女達に正邪がどこにいるかを探り当てて貰った。

元々はここに逃げ込んだという情報のみを頼りに、土地勘のある魔理沙とはたてと共に手分けして探す予定だったが、この広大な山の中から探し出すのは至難の業だと思えていた。

だが権が居ればどんな場所に居ようとも見つけることが出来るのだ。サンカを探し出したときののように、千里を見通す能力を使えば。

「いたわ。木の陰に隠れてる」

「こっちも見つけました。南西に6間離れた場所です」

想像より早く、いとも容易く正邪を見つけることが出来た。

二人の力は味方であるうちは頼もしいが、敵になれば一生逃れることはできないだろう。

改めて恐ろしい能力だと痛感すると共にサンカは感謝の意を伝え、魔理沙とはたてを連れて急降下した。

38話 狩り

「まったくしつこい奴らだった」

木の陰から辺りを伺うその妖怪は、先ほどまで賞金目当ての妖精に追い回されて逃げてきたのだった。

黒に白と赤のメツシユの入った髪の毛、小さな二本の角、腰に付けた上下逆さのリボン。彼女は今まさにサンカと魔理沙が捕えようとしている妖怪、鬼人正邪である。

彼女は鬼のように見えるが、実際は鬼でもなんでもないただの捻くれた妖怪だ。

「今に見てろ。いつか弱者を率いて、必ずこの世界をひっくり返してやる！」

焦りか、それとも怒りなのか。正邪はそんな言葉を吐いた。

彼女は息を整えて立ち上がると、月が照らす森の中をソロソロと足音も立てずに移動を始めた。鬱蒼とした木々を抜けると大きな川があるの、そこで喉を潤すと同時に体を洗うつもりなのだ。もう十日以上垢を落としていない事もあり、ベタついて気持ちが悪いくらい。

「どいつもこいつも寄ってたかって追い掛け回して・・・こっちの都合も考えろ」

「それは無理だね。アンタの都合はこっちの不都合だからな」

ハツとして声のした方を見ると、薄暗い森から異変（革命）の邪魔をしてきた強者Ⅱ魔理沙が出てきた。既に八卦路を取り出して臨戦態勢に入っている。

「魔理沙・・・」

「さあ、覚悟してもらおうか！」

魔理沙は箒に乗って宙に浮くと、ランタンを投げ捨ててスペカを取り出した。

正邪と対峙した彼女は、サンカに言われたことを思い出していた。

(確か一定の方角に追い込めばいいんだったな。それくらいやってやるさー!)

「もう追ってきたと言うのか。少しは休ませろ」

「休んだら逃げるだろ。疲弊してる今がチャンスって奴だぜ! スペルカード! 邪恋・実りやすいマスターパーク!」

細いレーザー光が八卦路から放たれ、正邪へと向かう。正邪は咄嗟に躲すと、その細いレーザーが通った直後に極大のレーザーが木々を薙ぎ払った。圧倒的な破壊力と熱が大気を焼き、大地を焦がす。

「ちっ。外したか」

「こんな攻撃当たる分けないだろう! 馬鹿が!」

ゲラゲラと舌を出して挑発すると、魔理沙はムスツとして次なる攻撃を行う。

「馬鹿にするな! スペルカード! 魔弾・テストスレイブ!」

今度は大型の使い魔を呼び出し星弾を大量にばら撒くと、正邪は弾幕を回避しながら逃げるが、魔理沙はピッタリと視認して付いて行く。

密度を増していく弾幕を見て逃げきれないと判断した彼女は、市松模様の体を包めるほど大きな布を取り出して、自らの頭の上から被った。するとどうだろうか。魔理沙の弾幕はまるでその布を避ける様に、明後日の方向に飛んでいく。

噂の反則アイテムの様だ。魔理沙は驚きつつも接近し、更なる攻撃を仕掛けようとする。先ほどから微動だにしない辺りからすると、弾幕は躲せるが自力では動けないようだ。

彼女は十分接近すると、箒を高く掲げて振り下ろした。

「何?」

確かに当たったはずだが、風景に変化がない。そこに存在していないかのように、箒の柄すら視界に入っていないかった。

魔理沙は周囲を警戒しつつ、体の違和感に気づいた。

彼女は地面だと思つて箒を振り下ろしていたが、実際には、振り上げて、いたのだ。

右腕を動かした筈が左腕が動き、見上げたはずが見下ろし、更には実際に見ているものの向きすら違つていた。

「掛かった掛かった!」

正邪が真上（真下）からこちらを見上げて笑い転げている。

思い通りに動けない魔理沙が滅茶苦茶な軌道を描いて墜落すると、正邪が布を回収し悪意に満ちた表情で近くに寄つてきた。

「どんな気分だ？弱者だと思つてた者に一杯食わされるのは」

「この！能力を解け！すぐに!」

「解くわけないだろう？暫くそうしている!」

正邪はそう言い残して、魔理沙を置いて走つて行つてしまった。だが、幸か不幸か、正邪はサンカに指定されていた方向に向かっている。目標は偶然にして達成することが出来たのだ。

「逃亡劇もここで終わりだぜ。後は任せたぜ、サンカ・・・」

彼女は気づかれないうように小さくグッドサインを出し、泥だらけの顔でほくそ笑むと、スペルを連発し過ぎたせいか力尽きて突っ伏した。

「派手な弾幕だったな。見てる分には良いんだけども」

サンカは一際高い木の上に座つて二人の攻防戦を眺めていた。魔理沙の弾幕は強力ではあるが、動作が単純で隙が多い。その隙をどう埋めるかが、彼女の今後につながるだろう。

木々の隙間から見え隠れする少女を目視し、手渡された紙と見比べる。特徴は一致した。正邪で間違いなさそうだ。魔理沙との戦いで体力を相当消耗しているが、油断はしない。

このために作戦を立て、念には念をと弾幕を避けるような反則アイ

テム対策も苦勞して用意したのだ。逃げられては水の泡である。

「そろそろか」

罨は仕掛け終わった。後は直接正邪と対決するのみである。

サンカが月を背にして立ち上がると、獲物へ狙いを定めた彼の金色の瞳が、暗闇でボンヤリと光を放った。

39話 黒い粉

高木から飛び降り着地すると、サンカは正邪の逃亡を防ぐように立った。

彼女は急に現れた彼に気を取られて石に躓き、転びそうになりながらも如何にか態勢を戻す。

「こんばんは。そんなに急いでどこに行くんだい？」

「今日はいつともより追手が多いな・・・失せろ老いぼれ。痛い目見たくないならな」

老いぼれか・・・そんなに歳をとっているように見えるのだろうか。非常に遺憾である。サンカは心外だと瞬きを数回すると、彼女の足元を指さした。

「それ以上来ると危ないよ。罨が仕掛けてある」

「は？」

何を言い出すのだ、コイツ馬鹿なのか？と言いたげに足元と顔を交互に見てくる。

確かに足元には見え見えのロープが張ってある。

普通こう言われれば誰でも警戒して―もしくは感謝して踏み込まなかったりするものだが、彼女は絶対に踏み込む。いや、種族的に踏み込まなければならなくなるという確信があった。

「こっちは通れないんだ。他所を探してくれるかな？」

「ハンツ、戯けた事を言うな。こんなバレバレな罨仕掛けるやつが何所に居ると言うんだ？」

正邪はロープを蹴り上げ、自身気に胸を張った。

「そら見た事か！こんな物―」

言いかけると、頭上から粉が降ってきた。モロにその粉を被って頭からつま先まで真っ黒になると、プルプルと震え出した。怒ったよう

だ。

「お前!!」

「だから言っただろう?人の言う事を聞かないからそうなるんだよ」

露骨に残念そうな顔をしながら鼻先をポリポリ搔くと、正邪は此方に走り出した。手は握りこんでおり、次に来るのは鉄拳だろう。

サンカはそんな彼女を見ると、更に指を差して指摘した。

「そこそこそこも罨だよ」

「あ?」

注意した所で引つ掛かるのは回避はできないが、一応嫌がらせ程度に言っておくと、正邪はまんまと罨を起動させた。更に粉が降り注ぎ、一面墨を撒いたように真っ黒になる。

サンカは口元を押さえて極力吸わないようにして、粉塵が落ち着くまで気長に待った。

「貴様!!人間のくせに!」

「人間か。もう僕は人でないし、襲うのも捕まえろと言われたからだけどね」

正邪はその言葉に何か引つかかりを感じたのか、此方を睨むように観察すると、ふと何かに気づいたように血の気が引き、恐怖した。

「その白い肌に黒い目・・・お前、餓鬼か!」

「その通りだよ」

「まさか!他にもまだ・・・」

言葉が尻すぼみに小さく鳴り、踵を返して涙目で走り出した。幽霊を見た子供のように本気で逃げていく後姿を見ると、彼女もまた餓鬼によつて数を減らした種族なのかもしれない。

だが、残念ながら逃がすという選択肢はないのだ。サンカはポケットからスペカを取り出して一瞬で回り込むと、前方から追い立てるように宣言する。

「スペルカード。冥撃《めいげき》・黄泉御霊」

よもつみたま

赤黒い針を、一切の手加減をせず出現させて片っ端から投擲する。針は細かく分散して降り注ぎ、さながら血の雨のようにも見える。

正邪は自身の手汗にてこずりながらも、再び布を取り出して防御した。途端、針は布を避ける様にして右へ左へと逸れ、地面や木々、岩などに着弾し、内側から破壊されるかのように弾け飛んだ。地面に広がっていた黒い粉は衝撃で巻き上がり、あたかも霧のように広がる。

「それが噂の反則アイテムか。なんか既視感がある様な気がするな」

「お、お前は私に勝つことはできない。弾幕は撃つだけ無駄だ！」

「そうらしいね」

—もう十分な量を散布できた。答えを教えてやろう。

「文明は便利になると同時に、危険性も隣り合わせで増えて行った。毎年必ず何らかの形で死人が出るほどにね」

「・・・一体何を」

「今君の被った粉は石炭を粉末状にしたものだよ。それともう一つ。燃えやすい粉って、空中に撒いて火をつけると爆発的な燃焼を生みだすんだ。石炭粉には高い可燃性があるんだけど、今ここでこの小爆弾を投げたらどうなると思う？」

「！」

正邪はこの後何をする気なのか察した。

周囲はまだ粉が舞っている。さっきのスペルは彼女を攻撃するのではなく、周りの粉を舞い上がらせるために放ったのだ。

慌てて逃げようにも四方八方粉塵まみれだ。サンカを見ると、彼は防御姿勢を取りながら上昇し、爆弾を投げた処だった。

「弾幕が効かないなら物理で叩けばいいだけの事。それじゃ、良い空中散歩を」

「待っ！」

四角いサイコロ状の爆弾が起爆したのは、正邪が命乞いをしようとしたのと同時だった。

それ単体では目くらまし程度にしかならない爆発は瞬時に巨大化し、遠目から見れば隕石の衝突に見紛うほどの規模の威力を発揮する。爆心地から周囲数十m内を超高熱で焼き払うそれは、正しく地獄の業火と言えよう。

「サンカ、終わったの？」

「うん。なんとかね」

サンカは上空にすぐさま避難して無事ではあったが、顔を少し焦がしてしまった。この程度すぐに治りはするのだが、はたては濡れたハンカチで火傷の後を冷やしてくれた。

傷口に沁みるが、それもまた生きている証だ。

爆発が収まり残り火がチラチラと散見される程度になると、二人は地上に降り立った。

正邪ははそこから少し先の場所でひっくり返って気を失っており、傷は殆どないように見える。

あれ程の爆発だったというのに軽傷なのは、彼女が妖怪だからか、それとも悪運が強いのか。なんにせよ、これで捕らえることは容易にできるようになった。

サンカは余っていたロープの切れ端を、未だ起きる様子のない正邪にきつく巻きつけて捕縛し、肩に担いだ。

40話 夢

道中、正邪の能力で何もかもがひっくり返っていた魔理沙を元に戻させると、魔理沙は土埃を払いながら立ち上がった。帰ったら洗濯だな、と彼女は笑う。

「じゃあ私は帰るけど、何かあったら頼ってくれよな。幻想郷で一番信頼できるこの私に」

「ははは・・・まあ、はたてに頼ることができない事があったら、そのうち・・・ね」

「まーまーそう言わずにさあ、私とお前は友人だろ？なんでも任せてくれよな！」

魔理沙は泥だらけの顔でニカツと笑った。彼女の笑顔は清々しい物だが、文にも匹敵するこの強引さには些か閉口する。

暫しの押し問答の後、サンカはある事を思いついた。彼女は会話の中でなんでも任せてくれと言った。それなら今現在悩んでいる、はたてに頼ることが出来ないことも解決してもらえるのではなからうか。

サンカははたてや権に聞こえないよう、小声で魔理沙と二、三言交わすと、彼女あつさり承諾してくれた。

「わかったんだぜ。明後日辺りに来てくれよ」

「感謝するよ。はたてには内緒で頼むよ」

「・・・サンカ？何を頼んだの？」

怒気を含んだはたての声が聞こえた気がするが、きつと気のせいだ。空へ消えていく魔理沙を見届けると、サンカは大きいため息をついた。

「と、いう事で捕まえてきました」

「あら、思っていたより早かったわね」

権とはたてを外に待たせて紫の元に行くと、紫は珍しく眼鏡を掛け

ており編み物をしていた。最近趣味で初めてみたらしいが、中々手先が細かいらしく、絵柄まで編み込んだセーターを作っている。

彼女は美人であるし、裁縫などの作業もできる様になれば、何も知らない外界の男達を簡単に魅了することが出来るだろう。・・・性格さえどうにかなれば。

彼女は一旦手を止めると、逃げられないと悟って仏頂面で座っている正邪をジロジロと見て、再び編み物を始めた。

「ご苦労様。報酬は後程渡すわ」

「ありがとうございます。ところで彼女は今後どうなさるおつもりで？」

「そうねえ。閻魔の元にするかここから追放するか、後々ゆつくり考えるわ」

正邪のした事は重罪なのだ。当然の結果だろう。

今日はなんだか疲れた。帰ったら寝てしまおう。サンカは紫に一礼すると、フラフラとおぼつかない足でその場を後にした。

里に戻った3人は疲労しており、柵は用事があるときつきと帰ってしまった。酒を奢るのは暫く先になったようだ。

サンカは伸びをする、はたてに誘導されながら家に入った。眠気が強く、歩くことも難しい。

「少し休みたいのだけでも、いいかな？」

「良いわよ。あ、でも折角だから・・・」

はたては正座すると、膝の上をポンポンと叩いた。

「膝枕してあげるから。ほら、おいで」

一度やってみたかったんだとニコニコする彼女は、サンカに促すように手招きする。

サンカは最初、普段の様にやらなくていい、と断ろうと口を開きかけたが、思いとどまった。

はたてはサンカが孤独感を感じているとき、傍に居てくれると誓ってくれたのだ。自分から遠ざけるのは、そんな彼女の気持ちを踏みにじり、自分の心に開いた穴をより広げる事になる。

彼は荷物を置くと這いずるようにして移動し、膝の上に頭を載せた。太ももは柔らかく、被服からは良い匂いがする。

はたては普段と違うサンカの様子に以外そうにしながらも頭を撫でてくれた。

「来てくれたの？いつも断ってくるのに」

「僕だって甘えたい時はあるさ。それにその…断るのは…もう…」言葉は聞き取れない程小さな声になり、サンカは眠りに落ちた。

その日見た夢は、どこか懐かしい感じのする物だった。古めかしい銃を携えたサンカが見知らぬ女の子の手を引いて、ただひたすら荒れた道を歩くだけの夢だ。

女の子の顔は靄がかかってみえないが、赤い着物を着ていて、長い髪の毛を紫色のリボンで左右に分けて束ねていた。

それとは対照的に夢の中のサンカは無駄のない服を着ており、サーベルに喇叭、胴乱（弾入れ）を、白い革帯に装着している。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

「なんだ」

ぶつきらぼうに返事をした彼は、立ち止まって心底つまらなそうにしながら女の子を見た。女の子はニコニコと愛想よく笑顔を振りまくと、突飛な事を言い出す。

「私、お兄ちゃんのお嫁さんになる！」

「そうだな、あと130年したら考えてやろう」

子供の言う事だ。適当に話を合わせておけば満足するだろう。女の子はあしらわれている事に気が付いたのか、ムツと頬を膨らませた。

「・・・私は本気だよ？」

「そうかそうか」

「お兄ちゃん私を馬鹿にしてるでしょー！」

機嫌を悪くされるのもそれはそれで困るのか、サンカは舌打ちをしつつ目線の高さまで屈んで小指を差し出した。爪は浅黒く変色し、指も骨と皮だけの様に細い。

「約束は守ってやる。それでいいか？」

「本当に？絶対守ってよ！」

もう十分眠ったと体が判断したのか、指切りげんまんの声が霞みがかかったように遠のき、急速に意識が覚醒していった。

41話 閑話

まだ太陽が昇る前の薄暗い時間に、サンカは外出の準備をしていた。

傍から見れば夜逃げしようとしているように見えるが、実際には紅魔館からお茶会の案内が来たからだ。

妖怪達が活発になる前の、なるべく早い時間に来いと言われたためこの時間となったが、多少は此方の事も考えてほしいものである。

「この文面だと絶対に来いって言ってるようなものじゃないか・・・」
愚痴を零しながら外界で購入した縫いぐるみをリュックに詰めていると、まだ寝ぼけている様子のはたてが部屋に入ってきた。いつの間にか寝巻から着替えていた彼女は眠い目を擦って欠伸をすると、もはや当たり前になった朝のやり取りをする。

「おはよう」

「おはよう。出かけるの?」

「ああ。紅魔館に行った後魔理沙の所に行くんだけど・・・君も行くかい?」

「・・・うん」

少々暗い返事ではあるが、はたては頷いた。彼女はサンカからの誘い、特に人と会う時は全くと言っていないほど断らなかつた。それは二人で居られる時間を増やしたかつたからなのか、或いは暇だからなのか。いずれにせよ、一人よりは二人の方が寂しさはないので歓迎するが。

「まだ髪は整えてないのか。ほら、待ってるから寝ぐせ直しておいで」

「サンカがやって」

「はいはい」

まだ完全に目が覚めていない彼女が怪我をしないように手を引くと、薄くなった線状の傷痕が目につく。最近のはたては怪我の頻度が

増えており、ついこの間も料理中に腕を傷だらけにして、台所を血の海にしていた。

サンカは指に能力を集中して痕をなぞりながら、はたての目を見た。焦点が定まっていけないが、彼女も不思議そうに此方を見返して来る。

「最近どうしたんだ？なにか心配事でもあるのかい？」

不安げにそう言うと、彼女は目をそらした。彼女はサンカと同じように嘘が下手だ。傷痕が薄っすらと煙を上げて消えていく。

「・・・なにもないよ。それより出かけるんでしょ？急がないといけないわ」

「いや、僕は君のことが」

「大丈夫よ。ほら、髪を整えて？」

話題をすり替えられてしまった。都合の悪い事から逃げようとする、はたての常套手段だ。

この方法を取られた場合、サンカは深入りせずに話を合わせている。聞かれたくない理由があるのなら、無理に聞き出すことはない。

「ほら、終わったよ」

「ありがとっ。さあ、行きましょ？」

もうすっかり目が覚めたはたてが、ニコツと笑顔になった。

この笑顔は、どんな物と比べても価値のある物に思えた。彼女を守るるのであれば、どんなことでもやり遂げて見せるだけの覚悟がある。

山の間から登り始めた太陽が二人を照らすと、サンカは眩しそうに朝日を手で遮った。

「遅かったですね」

「申し訳ないです。道に迷ってしまいました」

「そういう事でしたら大丈夫ですよ。此方です」

ほぼ役目を果たしていない門番を素通りして館に入ると、メイド長の咲夜が出迎えてくれた。後に聞いた話ではあるが、彼女は一応人間で、時間を止める事が出来るのだそうだ。外界で館の主であるフランの姉、レミリアに拾われるまでかなり肩身の狭い思いをしていたように、彼女の主への忠誠心は最早崇拜のレベルにまで達している。

館内を速足で行く彼女に付いていくと、以前来た図書館ではなくフランの私室に案内された。部屋は広く、物と言えば、部屋の中心にポツとベッドとテーブル、椅子が置いてあるくらいだ。

フランはドアを開けて入ってきたサンカを見ると、貴族が行うようなお辞儀（カーテシーと呼ばれる）をし、対面に座る少女に何やら伝えていた。

「まさか、私と話していた相手が餓鬼だったとはね。驚きだわ」

「遅くなりましたパチュリーさん。フラン、これお土産だよ」

「ありがとう・・・はたてお姉ちゃんも一緒に遊ぼう？」

「え？ええと」

「すまんはたて。遊んできてあげてくれないか？」

「・・・わかった」

サンカは一息ついて椅子に座ると、出された紅茶を一口だけ飲んだ。血のように赤い紅茶は味わい深く、冷えた体を温める。

「どうされたんですか？お茶会なら、テラスでも良いのに」

「フランも参加したいと言っているのに外でお茶会はできないわ。それに、中の方が涼しいし」

彼女は持っていた本のページをペラペラと捲りながら、サンカを観察するようにジッと見た。あまり良い気分はしないのでティーカップの中に視線を落とすと、彼女は独り言のように小さく、

「・・・本題だけれども、あの死骸を調べて分かった事があるわ」

「分かった事？」

カップを皿の上に置き、視線をパチュリーの後ろに向ける。背後では楽し気に遊ぶフランと、少し恐々と相手をするはたてがいた。とりあえず二人は大丈夫そうだ。

「確証はまだないけれど。貴方達は妖怪や人間等を捕食する事で、命を取り込んで自分の物に出来るみたいよ」

「命？」

「ええ。餓鬼は施しを受けた食事や水しか飲食できず、自力で何か食べても吐き出してしまふのは知っているわよね？」

「まあ、はい。僕がそうですし」

あんみつを作ったときに口の中で砂になってしまったのはこれが原因だった。施し、というのは、他者が食事を分け与えたり、作って振舞ったりすることだ。こうする事で初めて餓鬼は飲食が可能となるのだ。

「でも、それで空腹感が満たされることはない。あくまでも食事ができるようになるだけ。貴方はどうしているか分からないけれど、餓鬼の空腹感を満たすことができるのは、何かしらの意識を持つものを捕食したときみたいね」

身に覚えはあった。初めて物の怪を殺めた時、そして外界で餓鬼に遭遇した時。どちらも吐き出しさえたが、捕食した後に空腹感を覚えることは無かった。

「話を戻すと、取り込んだ命はストックされるの。そして命を死の瞬間に消費する事で、即死級の攻撃を受けたとしても、取り込んだ命の数だけ何度でも復活できる。貴方がフランの能力、ありとあらゆる物を破壊する程度の能力を受けたのに死ななかつたのは、それが原因よ」

(・・・命の数だけか)

一体自分は、何人の妖怪や人間を喰らったのだろうか。今もこうし

て生きているのは、食われた者達の命を消費しているからなのだ。人から奪い取るだけ奪い取り、のうのうと生きている自分に怒りを感じる。

俯くサンカの様子を見たパチユリーは本を閉じて卓上に置くと、カップに新しく紅茶を注ぎ、砂糖を入れた。

「この話題はこの辺りにしましょうか。時間はたっぷりあるわ。好きなお菓子を食べて雑談といきましょう?」

サンカは小さく頷いてはたてとフランを呼ぶと、すっかり冷え切った紅茶を口に含んだ。

42話 嫉妬

「今日はありがとうございました。今度来る時は、何か珍しいお菓子でも持ってきてます」

「あら、それは楽しみね。それじゃあまた会いましょう?」

社交辞令的な別れの挨拶をサンカとパチユリーがしている間、はたてはお土産として咲夜から持たされた菓子を手にも、ほんの少し喜んでいた。甘い物が手に入ったというのもあるが、どちらかと言えば何事もなくお茶会を終えられたことの方が嬉しかったのだ。

最悪の状態も考慮して何時でも弾幕を張れるようにしておいては居たが、有難いことに無駄に終わってくれた。彼女も血を見るのは嫌だし、なによりもパチユリーがサンカに対して恋愛的感情を持ち合わせていない事が、一番の収穫だった。とは言え、警戒するに越したことはないが。

「それではお気をつけてお帰りくださいませ・・・と」

咲夜は依然居眠りを続けている門番を中庭に連れて行くと、門番の物と思われる凄惨な悲鳴が聞こえてきた。仕事を怠けていたとは言えど、一体どんな罰を与えられているのだろうか。

はたては同情しつつ、サンカがパチユリーに別れを告げるのを待って、紅魔館を後にした。

「それじゃあ次は魔理沙の所に行かないと」
「う・・・」

はたてはもう一つ大切な事を忘れていた。なんの用事があるのかは分からないが、この後魔理沙の家に行かなければならないのだ。

(なんであんな奴の所なんか・・・)

はつきり言っただの白黒魔法使いは嫌いだった。

彼女は魔理沙の強引な性格や態度、何より馴れ馴れしくサンカに接していくのが気に食わなかった。できれば会いたくは無かったが、サ

ンカ一人で行かせようものならどうなるのか目に見えている。

押しに弱い彼の事だ。万が一魔理沙がサンカの気を引こうと行動に移したなら、強引にはたてから奪ってしまうだろう。

それだけはなんとしても避けたかった。

(油断できないわね。気を付けないと)

「はたて? どうしたんだ?」

「なんでもないわ。早く行きましょ」

少し怒っているように返事をする、はたてはサンカに先立って空へ飛び立った。

迷いの森に差し掛かると、はたてから出ている強い圧をヒシヒシと感じていたサンカはため息を一度つき、空中で停止して声をかけた。

ここまで来る間にお互い無言で気まずさが募っていたのもあり、とにかく何か話そうと思つての行動ではあつたが、いざ話しかけると何を話題にしようか思いつかなかつた。

もつと何を話すか考えてから話しかければ、と自身のうかつさを呪う。

「あ……えつと……」

そうしている間にもはたては何?と首をかしげている。その動作もまた愛らしいのだが、話しかけた後に何を話すかで、サンカの頭は一杯だつた。

それから数分経つてようやく何を話すか纏まつたので、どもりながらも口を開いた。内容的に少し恥ずかしい気もするが、この空気を打開できるのならそれで良い。

「あの……さ、僕が……」

「おーいー!」

はたての物とは違う別の声が出て、即座に声の主を探した。声質が

らすると魔理沙のようだが、どういう訳か姿が見えない。

「魔理沙か？どこにいるんだ？」

「わっ!!」

後ろからドンつと背中を押され、反射的に姿勢を保とうと体が動く。足に装着した装置は使い慣れてきてこそいるが、バランスを崩すと容易く制御できなくなる程のデリケートさがある。

そのため上手い具合に足の向きを微調節しなければ、高度によってはバランスを崩すことは死を意味するのだ。

悪気はなかったのだろうが、殺されかけたサンカは少々苛立ちながら振り向くと、いつもの明るい調子で笑う魔理沙がいた。

「なんだ・・・後ろにいたのか」

「えー、リアクションが薄いぜ全く・・・」

彼女は片手に薄汚くなったぼろ布を持っており、それをブンブン振り回しながら不服そうにした。

聞いてみれば、その布は最近作った透明になれるマントなのだそう。実際に彼女が被ったり脱いだりして見せると、姿が消えたり現れたりする。

「どうよ！結構自信作なんだぜ？」

「へえ、凄いじゃないか」

「だからその反応の薄さは何なんだぜ・・・まあいいか。家まで案内するぜ」

魔理沙はそう言って地上へ降りていくと、すぐさまはたてが腕を掴んできた。眉間に皺が寄っており、魔理沙の後ろ姿を睨みつけている。

「なんだか怒ってないかい？」

「別に。それより話そうとしてたことって何？」

「・・・いや、忘れてくれ」

話の輪に入れなかったのが気に入らなかつたのだろうとサンカは予想すると、はたての腕を握り返し、見失わない様に魔理沙の後を追った。

43話 魔女と、餓鬼と

魔理沙の後を付いていくと、小さな西洋作りの一軒家に着いた。想像していた陰鬱な感じのするいかにも魔女が生活していそうな家とは違い、周囲は木々が伐採されている事もあって明るく、白い壁は清潔感を感じさせた。

屋根の上には掠れた文字で、霧雨魔法店と読むことが出来る看板が設置されている。

「意外ね。もつとこう、ジメジメした所に住んでると思った」

「失礼な。私はそんな根暗な奴じゃないぜ」

はたての嫌味ともとれる言葉にそう返すと、魔理沙は二人を自宅へ招き入れた。

玄関を通ってリビングと思わしき場所へ案内されると、来客用の物なのか古ぼけた椅子を二つ引つ張り出してきた。座ってみるとかなり軋むが、大丈夫なのだろうか。

「まあ適当に座っててくれ。今紅茶を出すから」

「いや、紅茶はいいよ。君の分だけ入れてきてくれ」

「うん？そうか。じゃあゆっくりしていつてくれよな！」

案内された部屋はガラクタや得体のしれない物が散乱しており、足の踏み場もない状態だった。

人は外身だけではわからないとは良く言うが、家もそうなのだろう。外からは想像できない散らかり様だ。オマケに空になった鍋の中には先日夕飯なのか、毒々しい色合いのキノコの欠片が入っている。

今まで誰かの家にお邪魔することは何度かあったが、流石にこの惨状を見ると閉口せざる負えなし、これ程酷い物も見たことがない。

(玄関先で用事を済ませるんだった)

「サンカ、床からキノコが生えてるわよ」

半笑いの声を聴いて振り返ると、はたては屈んで床から生えたちつぽけなキノコを見ていた。そのキノコは魔理沙のズボラさと芯の強さを象徴しているかのように、ポツンと一本だけ生えている。

「どれどれ」

サンカはそれを拾い上げると、窓から入ってくる光にかざしながらしげしげと観察してみた。

鮮やかな黄色い色味からするとニガコのような。所謂毒キノコで、彼自身も何度か誤食してひどい目に合っているため、見間違えることは無い。

サンカははたてに食べては駄目だと真剣に伝えると、

「食べるわけないでしょ?」

と至極当然な返しを貰った。

自分程食い意地を張っていないくて良かったと安堵していると、魔理沙が戻ってきた。片手には何か握られているが、ミニ八卦路ではない。

彼女はよつこらせと椅子を軋ませながら腰かけ、テーブル上の本を退けてそれを置いた。それは手に収まるほどの大きさの藍色の四角い箱で、開かない様に周囲を薄桃色のリボンで括っている。

「お望みの物はこれで大丈夫か?」

「中身を確認しない事には何とも・・・はたて、良いって言うまで後ろ向いていてくれないか?」

「え?う、うん・・・」

はたての視線が箱から逸らされると、念のためサンカは彼女から見えないであろうテーブルの下で箱を開け、中身に入っている物を確認する。

「・・・大丈夫そうだ。もう良いよはたて。ありがとう魔理沙」

「友人の願いだからな。これからも異変解決から水道管修理までなんでも任せていいんだぜ!」

魔理沙は自身気に宣言すると、手元に戻ってきた箱を手早く包装し、それに見合った大きさの紙袋に入れて手渡してきた。

「ご丁寧にも、花を模したりボンまで作ってあった。ある意味繊細なその仕事を見るに、彼女もやはり女性なのだ」と実感する。サンカは紙袋を受け取ると、中を覗き込もうとするはたてから袋を遠ざけた。

「ねえそれ何?」

「内緒だ」

「また内緒?もしかしてやましい物でも・・・」

「そんな物欲しがるように見えるかい?ほら、もう帰るよ」

「ああ、ちよつと待ってくれだぜ」

心外そうにしながら席を立つと、魔理沙が呼び止めてきた。まだ何か用があるのだろうか?

中腰の体制のまま制止すると、はたては瞬時に魔理沙を睨みつけた。何か不都合な事を言えば殺すと言わんばかりの目だ。

サンカははたてを何時でも抑えられるようにしつつ魔理沙の言葉を待つと、彼女は顔の前で親指を立てた。

「何故グッドサインなのだろうか。」

「頑張れ!応援してるぜ!」

魔理沙はまるでいたずらを思いついた子供のような笑顔を作った。

サンカは何のことなのか最初はわからなかったが、暫くして言葉の意味に気づいた彼は、死人の様な白い顔を茹ったタコのように赤くした。魔理沙はそれを見て更に面白がる。

「う、うるさい。行こうはたて」

「?」

「結果も聞かせてくれると嬉しいぜ!」

「うるさいっての!」

魔理沙の揶揄うような声が、動揺するサンカの背中を押しした。

44話 色

途中買い出しをして家に帰ると、サンカは酷い頭痛と吐き気を覚えていた。

先日から体調は多少悪かったが、無理をして出たため悪化してしまったようだ。

はたては彼の額に手を当てると、直ぐに離して暑そうに手をパタパタと振る。彼女の反応からすれば、熱があるのは明白の様だ。

「風邪?」

「そうみたいだ」

「無理するからよ。生姜湯作ってるから寝てて」

そもそも人造の餓鬼が熱を出すのだろうか。理を無視して作り出された自分が風邪をひくのはどうにも腑に落ちない。

怪我をすぐに再生出来るほどの力があるなら、病原体への耐性も高くしてほしかったものだ。

はたては部屋まで付き添った後、炊事場へと向かった。そうしている間も頭は痛みを増していき、体中が鉛を詰めたかのように重い。今は彼女の言葉に甘えて一日休むべきなのだろう。

「せめて布団を・・・」

サンカは押し入れから布団を引っ張り出そうとして力尽き、上から降ってきた衣類などに生き埋めにされた。

もうこのままでいいか、と投げやりになりながらため息をつくとき、生姜湯を作り終えたはたてが戻ってきたらしく、襖が開く音がした。彼女は部屋の惨状を見ると、生姜湯を置いてサンカに駆け寄り、辛うじてはみ出ている足を引っ張って衣類の山から引きずり出した。

「大丈夫?」

「大丈夫だ。このくらい・・・」

「やせ我慢しないでよ。私が布団出してあげるから、大人しくしてて」

はたては生姜湯の隣まで引つ張っていくと、すぐに不要な物を押し入れに戻し、普段サンカが寝ている布団を敷いていく。

布団を敷いていくはたての様子を見ながら、妙に赤い生姜湯を飲み干すと、ぼやける視界ではたての後ろ姿を見ていた。

誰かが自分のために世話をしてくれる。今でこそ当たり前の光景になりつつあるが、外に居た時には考えられない光景だ。

幸いにも資金は短期の仕事で手に入れられるため病院にかかる事はできたが、薬を飲んだ後は雨を凌げる場所で寝袋に入り込んでひたすら眠る事しかできず、熊や猿に一方的に襲われたときは、あまりの腹立たしさに何度か憤死しかけた。

だが今は傍に居てくれる人がいて、更には居を構える場所がある。一体何度彼女に感謝したのか、自分でも分からなかった。

「ほら、横になって」

綺麗に敷かれた布団に潜り込むと、いつの間に干したのか人肌程度に温まっており良い匂いがする。ジンワリと丁度良い熱が体に回るのを感じ、思わず安堵のため息がでてしまった。

この体になってからというもの、セミの鳴く暑い日でも冬の様な寒さを感じる事が多くなった。はたて曰く、普段は触れると氷のように冷たいのだそう。夏がすぎれば秋が来て冬になるわけだが、凍死しないか心配だ。

「薬を持ってきたわ。飲める？」

「ああ」

はたてが粉薬を枕元に置くと、サンカはぎこちなく起き上がって、水と共に薬を飲み込んだ。あまりの苦みに顔をしかめるが、これも健康体になるために我慢しなければならぬ。それは分かっている。分かっているが、如何せん苦すぎる。

一気飲みしたのも相まって息苦しくなり、背中を丸めて咳き込むと、はたてが背中を摩ってくれた。

「ありがとう」

「どういたしまして。ご飯はどうでしょうか？」

胃に相談してみると、ねじくれているのか何も入りそうになかった。今何か食べると（食事をとる意味は無いのだが）反射で戻すかもしれない。その旨を伝えると、はたては心底残念そうに項垂れた。

そんな彼女の様子を見てみると、普段とは真逆の、なにかさせてあげたいという気持ちが強く出てくる。食事以外で出来そうな事は何があるだろうか。

「じゃあそうだな、今日は一日傍に居てくれないかな」

「！わかったわ!! あっ、そうだ。ちよつと待っててね」

分かりやすい程嬉しそうな顔をした彼女は、何かを取りに部屋から飛び出していった。

何をするのか気にはなったが、彼女が戻ってくれば自ずと分かる事だ。その間ゆっくりすればいい。

一人になったサンカは、首を動かしてある一点を見つめた。そこには魔理沙に渡された紙袋が無造作に転がっており、中からは件の小箱が顔を覗かせている。

（渡し損ねたなあ。まさかこうなるとは）

本当は今日渡すつもりだったが、こんな状態では格好がつかない。

ただ、サンカにはこの風邪が完治してから渡すにしても、タイムミングがいまいち分からなかった。違和感なく、それとなく渡せる時はあるのだろうか。回転の鈍い頭で数秒考えてみると、答えは割とすぐ見つけた。

（そうだ、どうせならはたての誕生日に渡そう）

そうすれば、きっと喜んでくれるはずだ。・・・権の言う事が嘘でなければ。

「うん？　そういえば、はたての誕生日っていつだっけ？」

「どうしたの？」

「お帰り。ちよつと考え事を・・・」

声のする方へ顔を向けると、大きな桶を持ったはたてが立っていた。水が入っているらしく、いつになく慎重に運んでおり、転ばないか心配になる足取りで此方へと歩いてくる。

彼女は隣に座ると桶をサンカの顔元に置き、中に浮かんでいる手拭を取って絞った。パシヤパシヤと霧のように細かい飛沫が顔にかかったが、気にはしない。

それにしても、妙に大きい手拭だ。額を冷やすなら、こんなに大きい物は要らないと思うのだが。

「体拭いてあげるから」

彼は納得した。丁度背中が汗で気持ち悪くなっていた所だった。

はたては寝た態勢のサンカの上着のボタンをはずすと、服を脱いで背中を向けるように指示した。

「助かるよ。何から何まで」

「いいのよ。今は病人なんだし、これくらいのごときは・・・」

「・・・?どうした」

はたての顔から笑顔が消えると、何も言わずにサンカの背中に触れた。

彼の肌は右半分で色が変わっている部分があり、それは丁度わき腹から肩までを覆うように茶色くなっていた。

サンカがくすぐったそうに身をよじってはたての方へ振り返ると、彼女は何故か後悔しているような表情をしていた。まるで取り返しのつかない事をしてしまった、と言わん顔だ。

「これ・・・」

「ああ、多分生まれつきだよ。気にしないでくれ」

「・・・私のせいで」

「何?」

「ううん、なんでもないわ。ほら、じっとしてて」
彼女は取っつけたような笑みを浮かべると、背中を拭き始めた。

45話 不穩

風邪が治ってからというものの、サンカには依頼の数が増え、はたてに構っていられる時間がない程多忙になった。と言うのも、最近大きな異変が起こり、その後始末に回されている訳である。

更にはあの紅白巫女こと霊夢が彼を探し回っているというのだから、気が気ではなかった。現在は体調こそ万全ではあるが、霊夢と対峙した際に無事で居られる確証はない。彼女の力を鑑みるに、良くて相打ちといったところだと想定される。一方的に目の仇にされた上に、存在その物を消そうとしてくるのだから非常に厄介だ。

「さてと」

報告のための書類一式を書き終わると、サンカは大きく欠伸をし、指をブラブラさせたりして凝りを解していく。

今日も異変による局所的異常気象によって、どこからか湧いて出てくるようになった悪霊を地上から一掃したのだ。

能力を使い過ぎたこともあり、妙に疲れも溜まっているので、早めに眠るようにしよう。明日もまた何処かに放り出されると考えると憂鬱になるが、これも役割なので仕方がない。

「お疲れ様」

卓上に湯呑が置かれる。サンカははたてに感謝の意を伝えると、ゆっくり味わうように少しずつ口に含んだ。夏も終わってやや冷たさを感じる秋の空気に代わり始めているので、暖かい飲み物が美味しく感じられる。

「今日はほうじ茶か」

「さっき作ってみたのだけれど・・・どう?」

「とても美味しいよ」

彼女は小さくガッツポーズをすると、此方も幸せになりそうなほどの笑顔を振りまいた。確かにこのお茶は美味しい。美味しいのだが、

妙に赤いのが不思議だった。味は確かにほうじ茶なのだが普通こんなに赤くなるのだろうか。

そんな疑問を抱えながら時計を見ると、まだ針は昼過ぎを示していた。今日は普段より早く依頼をこなせたため、時間が多くある。

「今日は僕が夕飯を作るよ。何が良い？」

「本当に!?じゃあ私が小さい頃食べた、コルリってやつが食べたいわ」「コルリ？」

「えっと、茶色くて、辛くて・・・」

サンカは首を小さく頷きながら、はたての必死な、しかし楽し気な説明に耳を傾けた。

聞く限りでは、どうやらコルリという料理はカレーの事らしい。小さい頃というのだから、まだ外界にいた時に食べたようだが、当時の味は現在の味とは大きく異なっている筈だ。完璧に再現できるかはわからないが、やるだけやってみるとしよう。

(昔は珍しかったカレーを食べてたって、天狗って意外とハイカラな種族だったんだな)

「ねえ、良かったら作ってるところ見ててもいい？」

「勿論」

確かカレー粉はまだ残っていた筈だ。期待から目を輝かせるはたての頭を軽く撫でると、席を立て隣部屋の続く戸を開ける。

「あら、終わったの？」

湯呑を手に勝手に勝手にくつろいでいる紫がいた。

サンカは特に驚きもせず、ため息交じりに髪をワシヤワシヤと掻きながら扇を口元に当てて微笑んでいる紫を見た。彼女の薄っぺらな笑みは何を考えているのか分からずとも不気味ではあるが、思わず見惚れるほどの妖艶さがある。

「まさかだと思えますけど、またですか」

紫がサンカの前に現れる理由は大概一つしかない。何となく事情を察しながらも、サンカはそう言った。

「その通りよ。今すぐ動いてもらおうわ」

「それって拒否権とか・・・」

「無いわ。それと今回はそっちの烏天狗は置いて行ってもらおうわ」

分かってはいたが、やはり此方の都合は考えてくれないようだ。

はたてを見ると、先程とは打って変わって暗い表情をしていた。折角一緒に居られる時間が出来たというのに、こんな形でそれを奪われれば当然だろう。

それに今からまた出るとなると、依頼内容によってはいつ帰れるかもわからない。彼女もそれを理解しているのだ。

「ごめんはたて、今度何か埋め合わせするから」

「わかったわ。行ってらっしゃい」

微笑んでこそいるが、悲しさを隠しきれていない。

サンカは酷く申し訳ない気持ちになりながらも準備を熟し、外へ出た。太陽は山の少し上あたりまで落ちており、日没まではそう時間がかからないだろう。

日傘をクルクル回す紫が妙に憎たらしく思える。一人ため息をすると、紫の開いた隙間へと踏み入った。

「ほらお姉ちゃん！やっぱり来てくれたよ！」

「こいし、この人はお仕事で来たのよ。邪魔しないであげて」

隙間から出た先は、地霊殿と呼ばれる和洋折衷の館だった。窓から差す光はステンドグラスによってカラフルな色がついており、まるで宝石のように薄暗い部屋を照らしている。

紅魔館が必要最低限の装飾が施されているのに対し、柱や壁に施された豪華な装飾のせいもあって、この地霊殿は真逆の華美な印象を受けた。

サンカは体に纏わりついて来るこいしを無視し、目の前で猫を撫で

ているさとり尋ねた。

「早速依頼をお聞きします。ご用件は？」

「実はこの地底に怨霊とも妖怪とも違うモノが現れる様になったの。それも一匹や二匹ではなくね。貴方にはそれらの排除をお願いしたいわ」

「・・・わかりました」

「不機嫌そうね。なにかあったの？」

「元からです」

確かに仏頂面ではあるが、別に不機嫌な訳ではない。背中伝いに感じる重量が、背骨の変な場所に負荷をかけているのでこんな顔になっているだけだ。

このままでは骨が折れてしまうかもしれないと判断したサンカは、よじ登ってきたこいしを抱え上げ、肩の上に乗せた。するとこいしは、キャツキャとはしゃいで足をばたつかせる。余り暴れられると落としてしまうので気が気でないが、本人が楽しいのであれば咎めはない。

「こいし、迷惑でしょ？早く降りなさい」

「構いませんよ。慣れてますんで」

「そうは見えないけれど・・・まあいいわ。今回はお燐も連れて行ってもらえるかしら？それともう一人。外で待っている筈よ」

さとりがお燐と呼んだのは、彼女が抱きかかえていた黒い猫だった。尻尾が二つに分かれている辺り猫又か何かなのだろうが、何故猫を連れて行かなければならないのだろうか。

何の脈絡もなくサンカをペットにしたいと言いついたこいしもそうだが、姉もつくづく不思議な人物だ。サンカはこいしに髪をモミクチャにされながら、目を丸くして、尻尾をゆったりと振るお燐を受け取った。

46話 対決

地霊殿を出たサンカは、旧街道を一人歩いていた。

地底は地上と違って蒸し暑く異様な臭気が漂っており、大きく息を吸い込むと肺が締め付けられるような感覚がして咳き込んでしまう。

道端には物乞いや酔いつぶれた妖怪、路地裏で金を巻き上げているゴロツキ等が屯していて、お世辞にも治安は良くなさそうであるし、無計画に増築された家屋がそのイメージを増長させた。

「猫さん猫さん、待ち人さんはどちらかにや」

疲れからか、胸元で丸くなるお燐に投げやりな調子で語りかける。当然返事は無いが、こうして独り言でも語り掛けなければ気が狂いそうだった。

(毎度毎度気まぐれで異変を起こして・・・お陰で後始末が終わらないじゃないか)

確か首謀者は天人だったと紫からは聞かされている。暇つぶしで異変を起こして紫に半殺しにされたと聞いたが、それだけではサンカの腹の虫がおさまりそうにない。いつそ異変の首謀者諸共、天人全てを自分が文字通り根絶やしにすれば、この妙なムカつきも消えるのだろうか。仙果を食べて生きる彼らを捕食すれば、甘い味がして旨いかもしれない。

・・・いや、食っては駄目だ。

自分を餓鬼として認めて以来、人間としての価値観が急速に妖怪に近い物になってしまった。そのうち人を襲うようになりそうで、戦々恐々としながら日々を過ごしている。

「ニヤー」

「ご主人に可愛がられて自由を謳歌するなんて、僕は君が羨ましいよ」
喉元をさすってやると、お燐はゴロゴロと落ち着く鳴き声を上げた。

「うぶっ」

「おっと、すまないな」

丁度路地裏から出てきた誰かにぶつかつた。足を止めて一歩引いてみると、はたての物より豊満な胸部が目に入った。女のようながサンカより背が高く、何処かで見覚えのある恰好をしている。

「怪我はないかい？」

整つた顔立ちに似合わぬ大きな一本の赤い角、筋肉質な腕に携えられた朱色の酒杯。その女は、宴会の時に椀に絡んでいた鬼だった。

この鬼はサンカの顔を見ている筈だ。もし正体に気づかれれば何をされるか分からない。一応サンカも鬼ではあるが、恐らくは格上であろうこの鬼に対して勝機はあるのだろうか。

いや、恐らくは無理だろう。お燐を抱え直すと会釈をして、足早にその場を去ろうとした。

だが空しくも、その行動は無に帰すこととなる。

「待ちなよ」

肩をがっしりと掴まれ後ろに仰け反ると、その鬼は耳元に顔を近づけてきた。フツと耳に吐息がかかり、脈が速くなる。

「なんの用で」

「お前、あの時の餓鬼だろう？」

一気に血の気が引き、驚きで見開かれた目が小刻みに揺れる。何故気づかれた？帽子を目深に被っているので外から目を伺う事は出来ない筈だし、声色も変えていた筈だ。

走馬灯でも見る様に高速で思考を張り巡らせていると、その鬼はサンカの首を鷲掴みにして、先程歩いてきた路地裏へと連れて行った。

「私は星熊勇儀って名前だ。それで？ここに何しに来た」

鬼は勇儀と名乗ると、彼を壁際に追いやって詰め寄つた。

答えによつてはこの場で始末する、と殺気まで出している。別にやましい事をしているわけでもないのに、全く臆さずに答えた。

「僕はさとりさんから指示を受けて此処に来ました。怪異を解決するようにと」

「ほう」

お燐に目を落とすと、ジタバタと暴れ出して、腕の中から抜け出て地面に降り大きく身震いする。すると徐々に赤髪の少女へと姿を変え、二人の間に割つて入るように立ち上がった。

「大丈夫だよ勇儀。さとり様の言つてた救援つてのはコイツさ。敵じゃないよ」

「コイツが？大丈夫なのか？」

「すくなくとも語尾にニヤアを付けて話すような奴が、悪だくみするとはアタイは思えないよ」

そう言いながら振り向くと、鬼が警戒していた餓鬼は顔を赤くして俯いていた。

黒猫が人になれるとは思つてもいなかっただけに好き勝手言つたが、まさか聞かれた上に喋られるとは。

勇儀はサンカの恥ずかしそうな反応を見ると口をへの字に曲げ、

「まあ、一応鬼だし嘘はついてなさそうだな。」

と頬を掻いた。

先程まで感じていた殺気は無く、表情も幾分か柔らかくなつていたので、一先ず安心だろうか。暑くなった顔を冷やそうと帽子を手に取つて扇ぐと、異臭が鼻についた。

「ほらほら、時間が無くなるから急ごう」

お燐が二人の背中をグイグイと押すと、勇儀はサンカの前に立ちふさがつた。今度は何用かと尋ねると、彼女は口角を少し上げた。

「・・・いや、その前に寄り道をさせてもらおうよ。ついてきな」
そう言うと、サンカの襟をつかんで何処かへと歩き出した。

着いた場所は巨大な池の畔だった。池とはいっても水は血のように赤い上に粘度が高く、妙に生臭い。遠くには白い靄が形をゆっくり変えながら徘徊している様子が見れる。

勇儀はどこから取り出した一升瓶から酒杯に酒を注ぐと、サンカに向き直った。

「それじゃあ、体術だけで私の持つこの杯に入った酒をこぼしてみな」
「はい？」

「勇儀、さとり様から協力しろって言われてるじゃないか」

「私は自分の認めた相手としか協力しないし、酒も飲まない。力を貸してほしいならこれ位やってみせな」

何故鬼と戦わなければならぬのだろうか。

お燐は勇儀に詰め寄ったが、勇儀は彼女を一蹴し、力を満身に込めた。気は高まりを見せ、大気が揺らぐ。

「いくぞ」

待て、準備も整っていないしまだやると言った覚えもない。

制止させようとするが、既に勇儀は足を振り下ろしており、反射的に腕で受け止めた。

ズン、と鈍い痛みと衝撃が腕を伝うと、足が少し地面にめり込んだ。勇儀は更に力を籠め、彼の腕から骨が折れる音を立てさせる。

「のー」

サンカが勇儀の片足を払ってバランスを崩させると、彼女は素早く彼を蹴り上げて後方に宙返りし、距離を置いた。

自身の腕を一瞬だけ見ると、骨を修復するために煙を吐いている。

「勇儀の攻撃を耐えた・・・並みの妖怪ならなら即死なのに」

お燐は手を開いたり閉じたりするサンカを見て驚愕した。

これが餓鬼というものなのか。話しには聞いていたが、驚異的な再生速度と勇儀の蹴りをモロに受けても動じない堅牢さには一目を置く。

「かかってこいよ。それとも餓鬼はこんなものなのか？」

鼻で笑われると、ゆっくりと立ち上がって相手の目を見つめた。

理由はないのだが、先程から彼女の言葉には人を試すような調子であり、何か真意は別にある気がした。どうにも解せないのだ。

すると、いつまでも自分から攻撃してこない彼に業を煮やしたらしく、勇儀はたった一步で肉薄してきた。

拳は正確に顔を捉えており、容易に首が飛ぶ速度と威力を持って迫ってくる。

だがサンカは避けようとしなかった。左手を強く握りこみ、歯を食いしばって勇儀の拳に自らの拳を叩き込む。

威力を完全に相殺できず歪んで骨が露出するが、気にも止めず、無事な方の手でもう一撃お見舞いする。

(ようやくやる気になったか)

彼女はほくそ笑んで再び蹴り技をお見舞いするが、寸でそれは回避されてしまい、顎へ一撃を受けた。顎に衝撃を感じて体が少し浮かぶと、勇儀は苦悶に満ちた顔になる。

痛みを感じないわけではないが、この一撃はこれまで味わったことのあるどの痛みをも超えていた。その後も一方的とも言える連撃を受け続け、回避を連発し続ける。

この男は意外と手強い。再び距離を取ると、杯をお燐に押し付ける様に渡し、ほんの少し本気を出してみた。気の高まりは更に強くなり、地鳴りのような感覚を与えてくる。

(厄介だなあ。まだ強くなるのか・・・)

サンカは浮足立った様子 of 勇儀に対して、ヤレヤレと首を振り、腕を垂直に立てて顔を覆うように構えた。

47話 もう一つの存在

「派手にやってるわねえ」

紫は少し遠巻きにその光景を見ていた。既に一時間以上も戦い続けており、勝敗が中々つかないようだ。

勇儀の性格上必ずこうなるとは思っていたが、ここまで長引くとは予想が少し甘かった。

「それにしても、いつまで隠れているつもりかしら？」

振り向きざまにそう言うと、何も無い虚空から男が一人現れた。

シルクハットと燕尾服、丸眼鏡を掛けた出で立ちは紳士的に見えるが、口元を血で汚れた黒い覆いで隠しており、万人に危険だと感じさせる雰囲気がある。

男は狂気に染まった瞳を瞬かせながら、粘り気のある音を口から出した。黒ずんだ涎らしき液体が垂れてくる。

「意外だな。気づかないと思ってたんだが」

「貴方は臭うのよ。簡単に分かるほどにね」

確かに男は強烈な腐臭を漂わせていた。肉の腐ったような臭いを嗅ぎ、紫は顔をしかめた。

「二度と私の前に現れないで。それとも消されるのがお望みかしら？」

「酷い言い分だな？紫よ」

「馴れ馴れしく名前を呼ばないで頂戴」

「ヒッ・・・ヒヒッ」

押し殺したような気味の悪い笑い声を上げると、甲高い足音を立てながら紫の元へ歩き出した。紫はいつでも能力を発動できるように待ち受けると、男は何をするわけでもなく、紫の少し後ろで立ち止まった。

ポケットに両手をつ突っ込み、いつの間にか取り出していたパイプを

ふかす。目線の先には、死闘を繰り広げている勇儀とサンカがいた。

「あの男、モドキの割りにはやるじゃないか。お前が使うにはもったいない」

「……ここで異変を起こして何をやる気かしら？」

「人間は繁栄しすぎた。一度全てを無に戻さなくてはならない」

紫の顔に煙を吹きかけると、彼女の顔がピクリと動く。男は静かに怒り狂う紫を逆なでするように、引き笑いをしながらポツリと言った。

「こんなチンケな場所を作って……救世主の真似事は楽しかったか？」

「黙れ！」

紫は扇を振りかざすと、男は既にそこにはおらず、ウジの湧いた血だまりが残されていた。

勇儀の角先を蹴りが掠め、お返しとサンカの短い髪を掴んで振り回し、地面に叩きつける。

だが彼はすぐに起き上がると、なんともなさそうに顔の泥をぬぐい取り、黄金に輝く瞳で目前の鬼を見据えた。

「しぶといなアンタもー！」

「いい加減やめにしませんか？ 決着つきませんよこれ」

両者ともほぼ互角の戦いをしていたが、勇儀は息が上がり始めており、負傷しても即座に傷が治癒し、一切の疲れを見せないサンカに理がある様に見える。

博麗の巫女以来の強者という事もあってか、勇儀の顔は恋する乙女のように色めき立っていた。力を貸してほしいならというのは嘘ではないのだが、単に彼と戦ってみたかったというのが本音だ。

勇儀は幻想郷最強である霊夢に次ぐ強者である魔理沙を、圧倒的な力でねじ伏せた餓鬼に目を奪われた。それ以来戦ってみるのが夢で

夜も眠れぬ日々を過ごしている中、地底で餓鬼が怪異を引き起こしたと聞き、血眼で探し回っていたのだ。

結局のところ元凶では無かったが、さとりが手配した救援が彼だったので探す手間が省けた。

「うおおおおお!!」

勇儀は近場に会った岩を力任せに持ち上げ、投擲する。

放物線を描いて迫りくる巨岩を即座に手刀で叩き割ると、割れた岩の陰から飛び出してきた勇儀が、両手を合わせて頭上から振り下ろした。

モロに脳天に命中し光が明滅するが、腕を掴み返し、顔面に向けて満身の力を込めた拳を命中させる。

「ウツ」

空気が漏れるような声を上げると、彼女はよろけて仰向きに倒れた。

体は青あざと擦り傷にまみれて息も絶え絶えといった様子で、対照的にサンカは脳震盪を起こしながらもなんとか立ち続けていた。

「僕の勝ちでいいですか？」

「・・・ああ、参ったよ」

満足そうに声を上げると、彼女はお隣に向けて手をブラブラと振って見せた。お隣は杯と酒瓶を持ったまま歩み寄って二人の顔を交互に覗き込み、呆れたように苦笑いする。

「満足したかい？」

「ああ、とてもな。ここまでやられるのも久しぶりだよ」

「約束通り協力してもらいますよ。異論ありませんね？」

「鬼は嘘を付かない。アンタもそうだろう？」

不快な視界の歪みが取れると、大の字になっている勇儀に対して能力を行使した。

見る見る傷が癒えて行くのを驚きながら見ていた勇儀は、上半身だ

け起き上がると、彼を見て何かを決心したように大きく何度も頷いて、心底楽し気に肩を揺らした。

「気に入った！名前を聞かせてくれ」

「箕作サンカです」

「よしサンカ、今日からアンタは私の盟友だ！」

どうやら鬼に実力を認められたらしい。彼女は差し伸べた手をガシリと掴んで立ち上がると、拉げた帽子を拾い上げ、埃を掃ってそれを被せてくれた。

「では本来の目的を熟しましょうか。最後に異形を見た場所に案内してくれませんか？」

「ああ、それなら心配ない」

その言葉が合図だったのかのように、血の池から一斉に腕や足が這い出てきた。それらは蛇がのたうつようにバタバタと暴れると、徐々に頭、胴、といった具合に姿が現れていく。

サンカはそれを見て、瞳が小さく見えるほどに目を見開き、驚愕するかのような顔に変わった。完全に地上に出たそれらは皆、ぬめり気のある青紫色の肌で、黒々と開いた眼孔から血を流し、四つん這いで踊る様な奇怪な動きをしており、強い既視感があった。

「さて、一戦行こうじゃないか」

勇儀が拳を作ると、サンカも少し遅れて構えた。

48話 名案

夕焼けが照らす往来が少なくなった通りを、文は小鍋を抱えて歩いていった。

自身の仕事は未だ片付いていないのだが、それすら放り出してある事に没頭していた結果、こうしてはたての家を目指して歩く羽目になっているのだ。

「作り過ぎちゃった・・・」

サンカに教わった異国の料理を作ってみるまでは良かったのだが、少々多めに出来てしまった。そこで、教わった通りの味付けなのか確認してもらおうという名目で体よく押し付けようという魂胆なのだ。

「くしゅん」

冷たい風が吹き、思わずくしゅみやみをしてしまった。

夏が終わった事もあって、あれだけうるさかった蝉は姿を消し、代わるように秋の虫達が鳴き始めている。些か肌寒さはあるものの風呂敷に包まれた鍋が温かく、それが温石のようになってくれているために左程苦痛にはならない。

「・・・」

文は歩きながら、目的地の家の主とその居候の事を思案した。

はたての言動や態度等からして、サンカと初めて会ったというのは嘘だろう。かの者を里に連れてきた時の事を思い出してみるが、初対面と言い張るには余りにも不自然だった。

椀や文といった例外を除き、会話はおろか目を合わせる事もなかったような人物が、初対面の相手にあれ程寄り添い、笑顔を見せ、尽くすことができるだろうか。自分なら無理だ。得体のしれない外からの来訪者ともなれば余計である。

そして不自然な点はもう一つあった。

今まで限られた他者以外との関係を断って一人部屋に引き籠っていた彼女は、ある日を境に勲功を多く残すようになり、現在の地位まで上り詰めた。当時は何かに火が付いたのかと思っていたが、それが

サンカが幻想入りする数年前、丁度彼の記憶が残っている辺りからだと、話を聞いて気づいた。

(どうも不審なのよねえ)

はたては何かを隠している。旧知の仲である自分にすら話せない何かを。

「あや？留守かな？」

そうしてはたての家に着すると、普段は煌々と明かりのともっている戸の向こうが暗かった。

二人揃って居ないとなれば寧ろ好都合だ。断られることもないので、勝手に上がって一筆したため置いていく事ができる。

鍋を一旦どこかに置こうと目を動かすと、家の中から気配を感じた。気のせいかとも思ったが、確かに何かの存在を戸の向こう側からひしひしと感じている。文は警戒しながら、戸に手をかけてみた。

「あれ？」

なんの抵抗もなく開いた。鍵を掛けずに出かけたのならば、なんとも不用心だ。奥では暗い中で何者かが動いており、空き巣かと思いき身構えた。

と、短い音が聞こえた後小さな明かりが灯り、女の顔が青白く浮かび上がる。女はブツブツと小さな声で呟いており、虚ろな目でその明かりを見つめていた。

「・・・はたて？」

声をかけると、その顔がこちらを向いた。確かに彼女ははたてであつたが、髪は乱れて大粒の涙を流し、腕にできた線状の模様から何かが垂れているのが伺えた。

「文・・・」

「ちよつとなにしてるの！傷だらけじゃないですか!!」

文は鍋を投げる様に置くと、救急箱を取りに走った。

「ああ・・・どうすればいいんだろう」

念写の力を行使して地底での一連の様子を見ていたはたては年季の入ったカウンターに突っ伏した。

どうにも落ち着かないらしく、時折携帯を取り出しては念写して、笑顔になったり苦虫を噛み潰した顔になったりしており、時々爪を噛むのを文に窘められていた。

「死んじやったらどうしよう・・・」

「あんまり悩んでも仕方ないでしょ？それにあの人はそう簡単に死ぬ人じゃありませんし」

文は慰める様にはたての背に手を置いた。

腕の応急処置をした文は、急遽近くに出店していたミステリアの屋台に連れて行き、詳しい事情を聴いていた。

とうとう捨てられたのかと思っていたのだが、最近はお互いに（サシカは自覚がないようだが）依存してきているのですぐにその線は消えたし、訳を知ってからは同情した。

ほら、と空になった猪口にぬる爛を注ぎ、自身はおでんを食べる。時期が早い気もするが、ヤツメウナギは取り扱っていなかった。出汁の染みた大根が旨い。

「今までだって必ず帰って来てたでしょ？」

「でも・・・今回はどうなるか分からないわよ。地底なんて危険な処に・・・」

先程から永遠とこのやり取りを繰り返している。

ミステリアは別段気にした様子ではないが、数時間前の訪問を最後に客足が止まってしまった。たまに客は来ていたのだが、はたてから放たれている異様な雰囲気を受けて、皆一杯だけ飲むか回れ右をして帰ってしまった。

これでは営業妨害も良いとこだ。連れてきたのは失敗だったかも知れないと、ため息をつく。

「そんなに心配でしたら、手の届くところに置いておけば良いんじゃないんですか？」

ミスティアが掃除をしながらいたずらっぽく言う。まだ閉店になるには大分時間が速いが、これ以上やっても商売にならないと判断したのだろう。暖簾や提灯を片付け始めている。

夜雀という妖怪である彼女は、時折（拒否できない）サービスで歌を歌うのだが、今日は一度も歌っていないかった。多少の申し訳なさを覚えつつ、文はもう一口大根を頬張った。

はたてはミスティアの何気ない一言を聞いて起き上がると、彼女の方を見た。泣きはらしていたので、まだ少し目が赤い。

「え？」

「大切な物は箱に仕舞っておけばいいんです。どこかにいたり壊れたりすることもないですから」

「……」

「冗談です。サンカさんは人ですし、そんな事したら後々大変ですから」

商売道具である酒瓶を一本取り出すと、まだ客が居るといいうのに小さなグラスに注ぎ始めた。切子細工のグラスの中で踊る酒が、美しい青色の光を乱反射させている。

「今日はもう閉店です。今から私も飲んじやいますね」

「良いんですか？あんまり飲むと貴方は音痴になるじゃないですか」

「ちゃんと弁えてます。ささ、はたてさんもサンカさんの無事を願いつつ飲みましょう」

「……私、迎えに行ってくる」

「え？ちよつと……」

はたては席を立つと、黒い翼を広げて一瞬で飛び立った。

何故こんなにも簡単な事に気づかなかつたのだろうか。色々準備は必要だが、目的のためなら何だつてできる。

本当の意味で二人きりになつたら何をしようか。頬が自然と緩むが、彼女が湛えていたのは普段の笑顔ではなく、まるで悪魔のような笑みだった。

49話 不器用な心

「ふう……今ので最後だな」

勇儀は死骸の山の上に座り、指を顎に当てて険しい顔をするサンカに手を振った。

しかし返事は無く、なんの反応も示さないので、静かに首を振ってお隣に向き直った。彼は勇儀の姿や声が入らない程に考え込んでおり、瞬きすら忘れている有様だ。

この異形達は以前妖忌と共に対峙した物によく似ていた。もし同一であれば、これらも元は人間か何かだったと思われるし、変異した原因も同じであると予測できる。

そして今回は、地上と地底という場所の違いがある。となれば変異の原因はあの場所特有の土着系怪異等ではなく、なんらかの存在が引き起こしたものと考えるのが妥当だろう。

しかし地底という、鬼や危険度の高い妖怪達がひしめく環境に人間が入り込むのは不可能であるし、地上で暮す並みの妖怪でも難しい筈だ。

(いや、まさかな)

勇儀達の様子からすると、これらの異形達は彼女らの知る存在が生み出したものではない。何となく何が引き起こしたか察しはついているのだが、幾らなんでも短絡的すぎるかもしれないと、サンカは頭を抱えた。

すると、今まで座っていた死骸が大きく崩れ始めた。慌てて飛び降りると、お隣がどこからか持ってきた猫車に、死骸を次々と積んでいつているのが窺える。

勇儀は、嬉しげだが淡々と作業する彼女の様子をつまみにして、酒を呷っていた。成程、後処理のために彼女を連れて行けと言われたのか。しかし、これ程大量の死骸を処分できる場所なんてあるのだろうか。

「どうするんですか？この死体の山は」

「お憐が灼熱地獄まで持って行って火葬する。成仏する事は出来なくなるけど、まあ仕方ないだろう」

「はあ・・・」

力なく反応すると、緊張の糸が途切れてしまったらしく、膝をついてしまった。足に力が入らない。気づかなかつたが、疲労もかなり蓄積していたようだ。

少しの休憩を挟めば歩けるだろうが、もし戦闘中にこの状態になってしまったら死んでいただろう。勇儀は突然の事に一瞬戸惑ったが、すぐに彼に駆け寄った。

「おいどうした？」

「ちよつと疲れたみたいです・・・少しすれば歩けると思いますんで」
白い肌を青くしながらも、なんとか立ち上がろうとする。

しかし徐々に腕にも力が入らなくなってきてしまい、前のめりに倒れた。勇儀は、さつきまで元気だったじゃないかと言いながらも、そんな彼を抱え上げ肩に担いだ。

面倒見が良く豪快な性格に加えて、端正な顔立ちは、間近で見ると男らしくも見える。きつと女性にも人気だろう。

「さてと、地霊殿まででいいか？送ってやる」

「ありがとうございます。何から何まで・・・」

「気にするな。これも盟友のためだ」

恰幅のいい笑い声をあげると、荒れた道を歩き始めた。背が高いこともあって、地面が遠い。時々鼻をくすぐる髪からは、はたてのよう甘い香りはせず、代わりに粗悪なアルコールが薄まった臭いがした。

「・・・ところで、女物の香水の匂いがするのはお前の趣味か？」

「ああ、気づきましたか」

その香りははたてが普段付けている物であって、趣味で付けている

訳ではない。

密着してきて服に移ってしまったり、時折彼女が衣類に噴霧したりしているせいでどうしても薄っすら匂ってしまうのだ。

はたて曰く、せめて一緒に居れないなら存在をいつ何所でも感じられるようにとの事らしいが、止める理由もないのでそのままにしている。

「お前恋人がいたのか！」

勇儀はまるで自分の事のように喜ぶと、彼の背中を強く叩いた。背骨に激痛が走る。

「まあ、はい。そうですね・・・」

「なんだ？ 歯切れの悪い」

恐らくは間違っただけではないだろう。色々とあやふやなまま今に至っているが、傍から見ればお熱い関係だ。

実際に、文からは顔を合わせる度に新婚さんと揶揄われ、権も二人のやり取りを見てニコニコとしている。彼も周りからそう見られているのは案外悪い気はしなかったし、満更でもないのだが、一つだけ未だ納得していない点もあるのだ。

初めて能力を使った日に、口から出た好きという二文字は、あくまでも一個人の人（妖怪）としてという意味であって、意中の女性としてという意味ではない。

はたては未だにそれを正式なプロポーズと思い込んでいる様だが、サンカからすれば、勘違いで今の関係を続けていく事が嫌だった。

そこである物を渡した上で、改めて気持ちを伝えようと思ったのだが、異性として意識し始めると言いづらかったし、そもそも依頼を熟す事で手一杯な状況だった。

意外と自分は奥手らしい、と彼はぼやく。

「男らしくないな」

「仕方ないじゃないですか。恥ずかしいんですよ」

顔を少し赤らめると、勇儀は吹き出した。僅かながらも腕に力が入るようになって来ていたので、彼女の腹部に情けないほど弱い力で、ささやかな抗議をした。

「悪い悪い。で、お前の思い人はどんな容姿なんだ？」

「ええと、茶色い髪を左右で束ねてて、小柄で愛嬌のある……」

「……あれの事か？」

勇儀が立ち止まると、視線を前に向けたまま言った。辛うじて動く目の上に向けると、既に地霊殿の手前まで来ており、門の先で見覚えのある少女が立っていた。

上記に上げた特徴に加えて、鳥のように黒い翼に、紫色が良く見える服装。間違いなく彼が、そして彼に好意を寄せている人物だった。しかし、両腕には真つ白な包帯が巻かれ、痛々しい姿をしていた。どうやらまた治さなければいけないようだ。

「サンカー！」

はたては肩に担がれたサンカに気づくと、普段と違って泣きじやくりながら歩み寄るのではなく、手を振って此方へ駆けて来た。表情も何時もの微笑むような笑みではなく、悩みが吹っ切れたような明るい笑みで、見ている此方も自然と頬が緩くなる。

勇儀は自身が二人の邪魔になると察すると、サンカを静かに降ろし、直ぐに踵を返し手を振って帰って行った。

まだ一人で立ち上がる事が出来なかつた彼は座り込むと、はたてが彼を優しく抱き寄せてくれた。

何も言わず体を預け、目を閉じて息を大きく吸う。ほんのりと感じる事ができる件の香りが疲れを癒し、服越しに伝わってくる体温が心地よい。

暫くして離れると、はたては再び明るい笑みを浮かべて、頭を撫でてくれた。

「帰ろう。歩けないなら私が運んであげるから」

「・・・ああ。頼むよ」

腕を治すと、頼られたのが嬉しかったのか、彼女は小さく歌を歌いながら翼を広げる。

鈴を転がすかのような儂げで繊細な歌声は妙に懐かしく、サンカはゆったりとした眠気の波がやってくるのを感じながら、目を瞑った。

50話 ささやかな平穩・1

今日も朝が来た。日の光が部屋を照らし出し、眩しきで目が覚める。

首が少し痛むのでさすりながら起き上がると、布団を畳んで押し入れに仕舞った。時刻は7時、いつも通りの何も変わらない朝だ。未だ頭の半分が夢の中のせいか、ボンヤリとして思考が纏まらない。

―明日後日はゆっくりと休みなさい

昨日家に帰った後、再び現れた紫にそう言われた。疲れていたのもあって少々苛立っており、姿を見た時つい遠回しに嫌味を吐きそうになったが、それを聞いて急速に怒りが萎んでいった。

新しい依頼をされなかったという安心感もあるし、何よりもそういった配慮をしてくれたのが有難かった。彼女の中にも、一人で身動きを取れない程にまで使い込んだ罪悪感があるのかもしれない。

昨晚の出来事を思い出していると、徐々に目が覚め始めた頭が、はたての素晴らしいまでの掌返しの映像を何度も再生し、少し笑いそうになった。あそこまで露骨なものもそうそうないだろう。紫の引きつった笑みが、更なる笑いを誘った。

(朝風呂するか)

サンカは上機嫌な様子で入浴道具一式を携え、まだ少しだるい体を引きずるようにして風呂場へと歩き出した。

昨日は入浴せずに寝てしまったため、体中がべた付いて気持ち悪い。涼しくなってきたので出来る事ならお湯の方が良いのだが、新たに沸かすのは面倒である。

温泉に行くのも考えはしたが、一人で勝手に行動して後で面倒な事になるのが目に見えたので取りやめとなった。昨日夜遅くまで起きていたのもあって、はたてはまだ眠っているだろう。黙って行動するのは良くない。

よって今回は自動的に水風呂という選択に至った。冷えたとして

も朝食を作る時に釜土の傍にでもいればそのうち温まるだろうし、さほど問題にもならない。

彼は脱衣所の前に立つと、鼻歌交じりに戸に手をかけて、カラカラと音を立てながら引いた。

「？」

そこには寝巻を半分ほど脱いだ状態で、此方を見て固まっているはたてが居た。彼女もまた同じことを考えていたようで、着替えもすっかりそこに置いてあった。

視線を上から下へ動かし再び上を見ると、はたての顔の位置で止まった。彼女の目はまるで驚いているかのようにパチリと開かれている。整えておらずボサボサになった髪型でキョトンとしているのがまた愛らしく、少々眠たげなこげ茶色の目が綺麗だ。

「……」

お互い何が起きたのか収集が付いておらず、まるでそこだけ時間が止まったかのように制止していたが、頭は数秒程経ってから今の状態の理解に努め始めた。

はたての顔がポンツ、と音が聞こえそうな速さで赤くなり、反対にサンカの顔は血の気が引いて、元々白い肌色が青を通り越して土気色になる。

「ひゃあー！」

「ぐ、ぐめん!!」

はたてが恥じらいの悲鳴を上げたと同時に、壊れるのではないかと思う程の速さで戸を叩きつけるように閉め、サンカはその場から素早く逃げ出した。

何と言いついしようか。

これが原因で追い出されたら泣くに泣けない。盛大に混乱していると、外からその様子を笑うかのような雀の鳴き声が聞こえた。

「はたてさん・・・あとどれだけ続ければ良いですか？」

「んー・・・あと10分」

そう言うて既に一時間経過している。座布団を敷いているので正座でも楽ではあるのだが、そろそろサンカは膝と尻が痛くなってきた。少しだけどいてほしい気もするが、これも彼に課された使命である。約束は守らなければならない。

何をしているのかというと、(故意ではないのだが)着替えを見た罰として、膝枕をしているのだ。

散々悩んだ挙句、風呂場から頬を赤くして出てきたはたてに謝罪したところ、条件付きで許してもらえ事になった。最初は気にしていないから謝罪は不要の一点張りだったが、彼女は少し考えてからへ今日一日、言う事を何でも聞くことを提案してきた。自傷や自殺等まですできない事を除いて、はたてからのお願い事は日付が変わるまで全て熟すという物だ。

最初は提案してきた時、いつもと同じではないかとは思ったが、いざ長時間実行してみると中々辛い。いい加減限界のようだ。

「ん、ありがと」

顔には出さずにひたすら堪えていると、はたてはおもむろに頭を膝の上から起き上がった。サンカは両足をバタつかせた後、座布団に座り直す。

「次は何にしようかなー」

「なんなりと」

少し痺れる足で立ち上がり、大きく背伸びをした。隣では、はたてはご機嫌な様子で指を折って数を数えている。これからお願いする内容を選んでいようだが、7つを超えた辺りから見のを止めた。

時計を見れば、既に昼頃まで針が進んでいる。このまま変なお願い事が出ずに一日が終わってくれる事を切に願っていると、背後から何か決心したような声が聞こえた。振り返ってみると、丁度炊事場のあ

る方へ彼女が歩いていく所だった。

「手伝うよ」

「いいの。大人しく座ってて」

「けど・・・うん、わかった」

「良い子。座布団引いておいてくれる？すぐできるから」

サンカがはたての鼻歌を聞きながら二人分の座布団を居間に引いていると、彼女の後姿が目に入った。白い割烹着は何度見ても初々しく、背中から生えている黒い翼が、時折パタパタと動いている。

（新婚さん・・・か）

彼は文の揶揄い文句を思い出しながら壁に寄りかかり、楽し気に動き回るはたてを静かに眺めていた。

51話 ささやかな平穩・2

完成した食事は基本的な一汁三菜。贅沢過ぎず、かと言って貧相すぎることもない丁度良い品数だ。

(今日は赤くない料理か)

時々出てくる妙に赤い料理は、食べると不思議と体調が良くなる。何の調味料を入れているのか謎ではあるが、心なしか味も多少良いように感じる様になってきた。とは言え、やはり見栄え的に不気味なのだ。

「これは・・・鮎？」

「そうなのよ。新鮮なのが手に入ったから・・・貴方の好物でしょ？」

「ああ。ありがとう」

誰かに作って貰う料理と言うのは、なぜこうも旨いのだろうか。一度はたてにおいしさの秘訣を聞いたことがあるが、愛情という答えしか返ってこなかった。本当にそれだけで味わいが向上するかは不明だが、ともあれ彼女の作った料理は一級品だ。

しかし・・・なぜか膳は一人分しか用意されておらず、一人で食べるには多すぎる量がよそられていた。それに加えて彼女との距離も近く、手を伸ばせば容易に顔に触れられる位置に対面で座っている。これから何をしようとしているのだろうか。意図が全く不明だ。

「サンカはさ、今日一日私の言う事を聞いてくれるんだよね？」

「まあ・・・うん」

聞くも何も、はたてから提示した罪を償う条件である。よほどでなければ拒否はしない。そう説明すると、彼女は少し恥じらいながらも、ずいっと身を乗り出すような姿勢になった。

「私に食べさせてほしいな・・・って」

そういうことか。何も考えずに添えられていた箸を手にとって一

口分のご飯をはたてに差し出すと、彼女は口に含んで咀嚼しゆつくり飲み込んだ。その様子が妙に色っぽく見え、サンカは頬を赤らめる。

「・・・おいしい」

「そうか」

「ねえねえ、次はこれが食べたいのだけど」

「焼き魚だね。わかった」

再度一口分切り分けて彼女の口に運んであげると、頬を両手で押さえながら心底幸せそうな声を上げる。顔の周りに花が咲いていると錯覚させる程の幸福顔だ。

（幸せそうだな）

サンカはつられて頬が緩みそうになるのを抑えつつ、自身も食事をするべく箸を伸ばした。

食事を終えたサンカは、お茶を片手に庭をボンヤリと眺めていた。天井から下がっていた風鈴は片付けられており、季節が変わった事を知らせてくる。息を吸えば秋独特の枯れ草のような匂いがふんわりと感じられ、庭の隅では白い彼岸花がゆったりと風に吹かれていた。

白彼岸。それは彼女にとっては特別な花だった。この花を見ていると、無性に虚しく、無性に寂しく、無性に、誰か、に会いたくなるのだ。

、誰か、は彼にとって最も大切に、最も愛しい相手だった。ただし、その人物がどんな姿でどんな声だったのか、記憶が抜け落ちた今の自分では思い出すことは出来ない。

（・・・）

食器にこびり付いた米糊も取れた頃だろう。サンカは片付けのた

めに立ち上がると、顎に手を当ててふと考えた。

(ああいうお昼飯も悪くない・・・かな?)

先ほどの昼食はなんとも不思議だった。はたてに一口づつ食べさせつつ、彼女から食べたい物のリクエストが出るまでゆっくり食事を取る。体質上空腹なままではあるが、妙な満足感があつた。

・・・そういえば箸は一膳しかなく、はたてに食べさせた後にその箸を使って食事を――

その意味を一呼吸置いてから理解し、サンカの顔が自分でも分かるくらい暑くなっていた。終始彼女がニヤニヤしていたのはこのせいか。先程までの感傷はどこへ行ったのか、彼は感情が爆発しかけているのを抑えつつ、恥ずかしさを誤魔化すかのように、走りながら炊事場へ向かった。

「あれ?はたて?」

炊事場に入るとそこに食器は無く、代わりに黙々と野菜を切っているのはたてがいた。

「なーに?」

上機嫌そうに振り向くと、やはりニヤニヤしている。先ほどの事を意識しないように抑えつつ、冷やしていた食器の事を尋ねると、既に片付けたという答えが返ってきた。

「ありがとう。でも、僕にやらせた方が君に負担が・・・」

「いいのよ別に。それに負担とかそんな問題じゃないし・・・」
「?」

気にしないでと食材を切る手を止めずに言うと、突然彼女の動きが止まり蹲った。よそ見をしている間に指を切ってしまったらしく、手の隙間から流れていく血が痛々しい。

「大丈夫!?すぐに・・・」

「能力は使わないで！」

怒鳴るように拒否されて体が硬直する。

治療しようとしているのにどうして拒絶するのだ、と理解できずにいると、彼女は負傷した指をサンカの顔の前まで持ってきて、指差し
の形で止めた。指先からは真っ赤な血が滴っている。

「・・・舐めて治して」

「いや・・・流石にそれは」

次々と変わっていく状況に追いつかない頭が絞り出した一言がそれだった。フランなら喜んで飛びつくかもしれないが、サンカは吸血鬼ではないのだ。自分の指ならまだしも、他人の、例え好きな人の指であつたとしても舐めたいとは思わない。それでは変態だ。

能力を行使した方がずっと早く傷を治せる筈だと訴えるべくはたての目を見ると、そこには光は無く、疑問と不信感の入り混じった感情が見受けられる。

「なんでも言う事を聞くって、言ってくれたよね？」

「確かに言ったけど・・・」

「じゃあ舐めて」

「う・・・」

「舐めて。ほら」

目が怖い。数度の押し問答を繰り返すと、段々と機嫌が悪くなって行くのが分かった。これ以上逆らうと恐ろしい目に会う気がする。直感的に判断すると、若干抵抗しながらも彼女の指をくわえて血を舐め取った。上目遣いに表情を伺うと、恍惚の表情を浮かべており、少し息が荒っぽい様子のはたてがいている。

「ああ・・・サンカが私の血を・・・直接・・・」

何やら小声で呟いているが、それよりも口の中が血生臭くてたまらない。ここにきてようやく罰らしい罰が来たなと思いつつ、こっそり能力を行使して出血を止めた。

指を口から出すと、素早く流水で洗い流し、ハンカチで涎を取りとる。口に溜まった血を吐きだそうとしたが、ふとした拍子で飲み込んでしまった。吐き出す事を期待したが、それは叶わなかったようだ。

「血は止まったよ。はたて」

「え？う、うん・・・」

はたては正気に戻ったような顔になると、渋い表情をしたサンカを他所に、負傷していた指を名残惜しそうに見つめていた。

52話 悪夢の果てに

「終わったよ」

夕暮れ時の日の明かりが手元を暗く照らす中、明日朝に配達予定の花果子念報の印刷を終えると、サンカは目を瞑って瞼の上からグリグリと軽く解した。高さの合わない机での作業で血の巡りが悪くなっってしまったようで、首から頭にかけて妙に痛む。

今日は早く入浴して眠ろう。明日になれば疲れも回復しているはずだ。

「・・・」

チラリとはたてを見ると、完成した新聞を束ねる作業をしていた。購読者はそこその数になっており、いまや文々。新聞に迫るほどで、文からは二人がかりのネタ探しは卑怯だと言われた。一面に怪異等の特集を組んだのが功を奏したのか、暇な人里の者達には良い刺激になっていくらしく、この新聞を心待ちにしていると言われたとはたては喜んでいた。

「！」

不意に視線に気づいた彼女と目が合いニコリと微笑まれた。気恥ずかしくなって思わず顔を逸らすと、彼女はすぐさま近づいて後ろから腕を回して密着してきた。

「な、なにを・・・」

「サンカはさ・・・本当に私の事を嫌いにならないの？」

呆気にとられて顔を上げると、再度目が合った。これだけ間近で見ても初めて気づいたのだが、こげ茶色の瞳に薄っすらと紫色が入っており、まるで宝石の様な透明感がある。ただ、表情はとても悲し気であり、今にも泣きだしそうだった。

サンカは多少目を丸くしたが、至って冷静にその質問に答え始めた。

「まあ、確かに血を舐めさせられた時は嫌な気分になったよ。でもね……」

「でも？」

「君は僕をととても大切に思ってくれているし、居場所をくれた上にずっと傍にいて約束までしてくれただ。そんな人を嫌いにならないでよ」

小さな声でそれに可愛いしと付け加えると、はたては照れくさそうに笑ってくれた。お世辞ではなく本気で言ったのだが、彼女は何方と取ったのだろうか。

暫くして大きく息を吸った後、彼女はサンカから離れて部屋を出て行った。部屋を出る直前に見えた表情は、先ほどまでと違い明るく自身に満ちていた。

入浴後、サンカは蠟燭の明かりを頼りに布団の上で古びた本を読んでいた。古本屋で購入したは良いものの、今の今まで読むことが無かったので試しに開いてみた次第だ。

オカルト系の話ではあったのだが、オカルトとして語られる側の住人になった彼にとっては些か滑稽にも思え、昔ほど楽しんで読むことが出来ない。そこで彼は、幻想郷で得られた事実と本の内容を照らし合わせつつ、赤ペンで上から注釈を入れたり訂正したりして読んでいた。

部屋の隅を見ると、リュックに支えられる様に小さな紙袋が立っていた。件のプレゼントだが、結局今日も渡すことが出来ずに部屋の肥やしになってしまっている。誕生日までにと思っていたが、中々その機会に恵まれない。果たして渡せる日はやって来るのだろうか。

「サンカ、ちょっといい？」

襖の向こうからはたての声が出た。本を枕元に置いて返事をするのと、襖が静かに開き、はたてがひょっこりと顔を出した。落ち着いた

色合いの寝巻姿で、まだ少し湿り気のある髪は結わずに下している。

「どうしたんだ？」

「あの、さき……今日は一緒に寝ても良い？」

時計を見るとまだ日は跨いでいない。言う事を何でも聞く、は未だ有効な筈なのだがと首を捻るが、断る理由もないので手招きをすると、はたては喜々として布団までやって来た。いつもの香水の香りと違い、石鹸の優しい控え目な香りがする。

「枕は……持ってきてあるね。明かりを消すよ」

「うん」

彼女が横になるのを見た後、サンカも蠟燭に灯った火を消して床に就いた。一人用の布団に二人も入ると流石に狭く感じるが、程よく温かくて落ち着ける。

孤独には慣れたつもりだったが、その実何処かで寂しく思っていたのかもしれない。そうでなければ、はたての傍にいられるだけでこんなにも安心できる筈がない。

明日はプレゼントを渡せるだろうか。サンカは背中伝いに伝わる体温を感じながら、眠るために目を瞑った。

嫌な夢を見た。思い出したくもない忌々しい記憶が次々と溢れ、深い絶望感が襲ってくる。

夢の中のはたてはまだ幼く、体中に火傷や青痣等ができていた。目の前には二人の大人の天狗が居たが、顔にはポツカリ穴が開いているかのように黒く塗りつぶされていて、表情を伺う事は出来ない。

突然左頬に何かがぶつかり、彼女は蹲った。強い力で弾かれた頭を支えきれず、首が悲鳴を上げている。怯えながら顔を上げると、天狗の片方が筋肉質な腕を振り上げた所だった。

瞬間、壁に付いた黒黒とした染み、庭に咲くケシの花、生気を失った虚ろな目がフラッシュバックし、ふと気づくとはたては顔に大きな

青痣を作り、鼻血を流しながら泣いていた。

大人の天狗はそれが気に食わないらしく、更に暴力をふるい続ける。暗く埃の溜まった部屋の隅で、決して逆らう事のできない一方的な力に、彼女はただ呻く事しかできなかった。

髪を鷲掴みにして床に何度も叩きつけながら、年端も行かない子供に対して、あまりにも酷な罵声を浴びせる。

—このクソガキが！なんで言う事聞けないんだ！

ごめんなさい。ちゃんとするから、だから殴らないで、お願い……

—目ざわりだなお前は！鬱陶しいんだよ！

ごめんなさい……ごめんなさい……

—お前なんか生むんじやなかった

……

もう嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ——

「ハアツ!!」

はたては飛び起きるとすぐに部屋を見渡した。暗くて良く見えな
いが紛れもないサンカの部屋だ。

肌寒いくらいだと言うのに、息が荒く汗が止まらない。自身の顔に
手を当てて落ち着かせようと何度も狂ったように深呼吸を繰り返す。

「眠れないのか？」

ビクツと体が一瞬硬直し、素早く隣で眠るサンカの方を見ると、彼
はもう一度問いかけてきた。

「嫌な夢を見たのか？」

「……小さい頃の夢を見たの。いい思い出なんて一つもないけれど」
「そうか……辛かったら何でも言ってくれ。力になれるならなんだっ
てするから」

「うん」

サンカはそれ以上詮索しなかった。話したくないのなら話す必要

はないという彼なりの思いやりなのは、はたても良く知っていた。

昔から何も変わっていない。記憶を失っていても自然と当時の言動を取っているのは、まだどこかで忘れていない事の現れなのだろう。

落ち着きを取り戻すと、咄嗟に払いのけてしまった布団を掛け直し再び床に就くが、目がさえてしまつて中々眠れない。背中合わせで寝ているサンカも眠る事が出来ないらしく、時々モゾモゾと体勢を変えている。

「うーん。それにしても寒いな」

彼ははたてのいる方に寝返りを打つと、後ろからはたてを抱きしめる様に触れた。丁度夕方頃とは逆の立場だ。

「ちよ、ちよつと」

「うん。こうした方が温かいな」

決して締め付けるような強さではなく、心地よさを感じる加減だ。少し寝ぼけていた彼の行動で、先程まで鮮明に脳裏に焼き付いていた悪夢の内容が消し飛んだ彼女は、一人悶々としながら朝を迎えることとなった。

53話 記念写真

目が覚めるとはたてが隣におらず、一抹の寂しさを覚えながら起き上がった。時刻は5時頃。少し早い時間に起きてしまったようだ。

「や・・・寒い」

秋も中盤に差し掛かった時期だと言うのに、真冬の様な寒さだ。

枕元に畳んでおいた甚兵衛を着用し、その上から普段着の上着を羽織って囲炉裏まで行くと、炭を入れて火を起こし、水を入れた薬缶を吊るす。湯を沸かせばお茶を飲むことが出来るし、湿気もある程度調節できるので一石二鳥だ。

暫くして薬缶の底を舐める様に火が広がり始めるのを見て、思わず手をかざした。優しい温かさが悴んだ指先を温めて行く。

それにしても、はたての姿が見えない。起きているなら炊事場に居ると思っただが、そこには誰も居なかった。となれば、部屋に戻ったと考えるのが妥当だろうか。

お湯が沸くのを見計らってココアを持ってくると、お湯を注いでお手製のマシユマロを浮かべる。甘くないため、マシユマロを加えると飲みやすくなる寸法である。見た目も洒落ているし、熱が入る事で面白い食感になるので、こんな体質になる前はお気に入りの飲み方だった。今では香りを楽しむだけになってしまったのが、なんとも悔しい。

「・・・」

手を火に当てながら、閉じたり開いたりする。

はたての血を飲み込んでしまった時、空腹感が収まったのを感じた。偶然にして誰かを捕食する以外の、新しい空腹を抑える方法を見つけてしまった訳だが、同時に赤い料理の秘密に気づいてしまった気がする。はたてに確認したかったが、もし予想が当たってしまったらと考えると、とても恐ろしくて聞けなかった。

「ただいま・・・って、起きたの？」

ガラガラと戸が開く音が聞こえたので振り返ると、はたてが震えながら入ってくる所だった。丈の短いスカートと半袖のシャツでは寒いのも当たり前だ。

サンカは彼女を迎えると、羽織っていた上着を着せて囲炉裏まで連れて行き、まだ温かいココアを差し出す。

「おかえりはたて。ちょっと早く目が覚めちゃってね、ひよつとして配達に？」

「あー・・・うん。そんな所ね」

妙に歯切れが悪い返答だが、特に気にはしなかった。

はたては欠伸をした後にクシヤミし、湯呑を上着に包まる様に丸まった。ココアも気に入って貰えた様で、飲む度に幸せそうな笑みを浮かべている。

やはり純粹な笑顔を振りまく彼女が、想像したような恐ろしい事をするとは思えない。少しでも疑った自身を恥じるべきだろう。

全ては思い過ぎしなのだと決めつけてはたての隣に座ると、彼女はすぐにもたれ掛かって来た。

サンカはそんな彼女の事を突き放すことなく、寧ろ自分から距離を詰めて手を重ねる。距離が近くなったのは、彼女の強烈な押しに折れたせいなのか、淡い恋心のせいなのか。果たしてどちらが先だったのかは、今でははっきりしない。

「そんなに臭いかい？」

ココアを飲み終わった後、執拗と言える程に上着の匂いを嗅ぎ続けるはたてを見て苦笑いすると、彼女は服に顔を押し付けたまま首を大きく横に振った。不快な臭いでないのなら良かったが、そんなに何度も嗅がれると恥ずかしくなる。

「サンカの服・・・サンカの匂い・・・うへへ」

何かつぶやきながら悦に浸っている。サンカは妙な寒気を感じて

上着をそつと取り上げると、涎と思わしきシミが幾つか出来ているのを確認して、苦虫を噛み潰したかのような微妙な表情を浮かべる。

はたては息を荒くしながらサンカを物欲しそうに見てきたが、彼の表情を窺い知ると気まずそうに咳ばらいをして座り直し、重ね合わせた手を絡め、首を傾けて肩に乗せてきた。

そろそろ文の来る時間である。二人揃って布団の中よりは幾らかマシだが、格好のネタになってしまうのは違いない。

「はたて、そろそろ朝ご飯作らないか？手伝うからさ」

「駄目、私はもう一寸くっついていたい」

「文が来ちやうぞ」

「別に構わないけれど？」

そう言うとはたてはサンカの腕に体重をかけた。彼女は驚くほど軽いので退かそうと思えば退かせるのだが、体を密着させるように掴まれているので払いのける事は出来ず、力任せに振りほどこうものなら怪我を負わせかねない。

「まったく。あの娘に見られたら何をー」

「おっはようございまーす!!」

言わんこつちやない。間が良いのか悪いのか、戸が乾いた音を立てて蹴破られ、新聞を携えた文が乱入してきた。彼女は二人が寄り添って座っているのを見るや、新聞を素早く放り投げ、すぐにカメラを向ける。

「朝から見せつけてくれますねえ。早速お写真を一枚！」

「どうせなら綺麗に撮ってね？」

はたては渋い顔を文に向けている彼を突いて意識を向けさせると、ニコリとしてピースサインを作った。ひよつとして写真を撮られたのが為に、文が来るまで張り付いていたのだろうか。隣に座ったのは失敗だったようだ。

「・・・もう好きにしてくれ」

悪い意味で今日も退屈しない一日になりそうだ。見せつける様にポーズを決める彼女に促され、サンカは疲れた笑みを浮かべた。



「うまく撮れてるわね。流石は文」

「褒めてもなにもでないわよー」

数分後、文は写真を現像戻って来た。弾ける様な笑顔を浮かべてピースサインをするはたてと、それを見て目を丸くした寝ぐせ頭のサンカが並んで映っており、コミカルな印象を受ける。

「やっぱり記念写真は撮っておくものよねー」

「?」

何の記念だろうか、とサンカと文は顔を見合わせて首を傾げた。出会った日から数えても中途半端だし、今日が彼女と自分のどちらかの誕生日という訳でもなさそうである。

はたてにその事を尋ねると、彼女は少し慌てた様子ではぐらかし、文から訝しげな視線を送られた。

(記念日ねえ・・・)

質問攻めにあって目を回すはたてを他所に、サンカは彼女が持つ写真に目を落としながら、忘れ去った記憶を掘り起こそうと思考した。

54話 物忘れ

「うーん・・・」

サンカは水の張られた桶の前で、手に持った物を凝視しながら唸っていた。

房楊枝と呼ばれるそれは、いわば歯ブラシの一種である。柳の枝を煮た後に叩いてブラシ状にした物で、歯の裏側が磨きにくい事を除けば楊枝にも舌掃除にも使える便利な道具だ。

実は、これまで使っていた歯ブラシ達は一週間と経たずに消えてしまっていた。

最初は何度か新品を購入していたのだが、すぐに無くなってしまし、外界に行くのにもそこそこ苦労するので、はたてに勧められるがまま人里で購入してきたこれを使うようになった。

ただ、この房楊枝も既に5代目になる。

消える度にはたてに聞くが、彼女は決まって知らないと答えるし、誰かが忍び込んで盗んでいくにしてもメリツトが全くないので余計無くなる理由が分からない。

(紫さんよりはまだ若い筈なんだけどなあ・・・)

サンカは痴呆が始まっているのだろうか？と頭を抱えつつ、房楊枝を元の場所へ戻した。

「ねえ、買う必要のある物を紙に書いてくれない？」

外からはたての声が聞こえる。窓を開けて見ると、そこには洗濯板を使って服を洗う彼女の姿があった。洗剤の量が多かったらしく、やけに泡立っているのが分かる。

サンカは時々此方まで飛んでくるシャボン玉を割りながら、現在切らしている物を思い浮かべた。ちり紙に石鹸、そして蝋燭・・・あとは食材くらいだろう。

一応天狗の里でも売ってはいるが、人里まで行った方が安く買い物ができる。

彼は私室に向かい、先程思い浮かんだ必要な物を、忘れない内に手帳に書き込んで切り離れた。

そろそろこの手帳も変え時のようだ。分厚かったページも大分埋まり、何度も切り離れたせいで薄くなっている。

「終わったー！冷たくて大変だったわ！」

「ご苦労様」

洗濯を終えたはたてが両手を温めながら戻ってくると、彼女はメモを受け取って軽く目を通し、買い物袋と財布を取り出した。一緒に付いていきたい所だが、残念な事に今回は自宅待機である。

こんな見た目になるまでは人里まで二人で買い物へ出ていたのだが、神社の一件以来、半獣人の寺子屋教師や、人間に友好的な妖精・妖怪から本気の攻撃を受け、白昼堂々望まぬ血みどろの攻防戦をするようになってしまった。

更には噂を聞きつけた博麗の巫女まで姿を見せるようになったので、現在では紫からの依頼を受けた時を除いて此処居場所から出る事は殆ど無い。

当然、はたてが餓鬼サンカを匿っている事はこの天狗にとっては誰もが知る周知の事実なのだが、外の妖怪達とは違って彼を追い出そうとした事は一度も無く、むしろ野菜のおすそ分けや雑談をしに尋ねて来たり、買い物をするれば時々安くしてくれたりもする。

聞けば、紫からの進言を受けた里の長である大天狗が、いざという時の為の戦力として使うために、サンカサンカの存在を里ぐるみで隠蔽するように指示してくれたのだ。

偉い人に兵器扱いされているのは不服であるが、この際我儘は言わない。

「それじゃ、買い物行ってくるわね。お留守番はよろしく！」
「行ってらっしゃい。ゆっくり待っているから」

玄関先で突風が吹いたと同時に、はたては一瞬で飛び立っていった。何処かの文屋程速くはないが、黒い翼を蒼空へ広げて飛翔してい

く姿はとても美しく、不思議と憧れすら覚える。
彼は日の光を手で眩しそうに遮りながら姿が見えなくなるまで見送ると、箒を手にとって静かに部屋へと戻った。



(これくらいにしておくか)

その日の夕暮れ。サンカは家の中を神経質なまでに掃除すると、汗を拭って庭に引つ張り出した椅子に体重を預けた。

あれだけ存在感のあった夏は何所へ行ったのだろうか。耳を傾ければ鈴虫の鳴く声が聞こえ、白い彼岸花は相変わらずその重たそうな花卉を風に揺られ、時々その周りを空と同じような色味のトンボが行ったり来たりしている。

「平和だな・・・」

何もすることが無くなったので、ゆつたりと流れていく雲を魂が抜けたように見上げながら、指で輪郭をなぞっていく。

考えてみれば、幻想郷にやってきてからはずっとはたてと一緒にだった。こうして何も考えず、しかも一人きりの日はいつ振りだろう。

(まだ5時か)

時計を確認する度に、体感より針が進んでいない事を知らされる。かつての自分なら孤独で居られる時間を貴重だと喜んでいたかもしれないが、今ではただひたすら退屈で、息苦しい時間ではなかった。依頼を熟している間は何時もはたてを家に残しているが、彼女もこんな気持ちだったのだろうか。

そうしてあれこれ考察していると、聞きなれた明るい声が玄関から聞こえた。咄嗟に駆けて行って戸を開けると、商品が詰まった買い物袋を携え、髪が乱れたはたてが立っていた。物が重いのか、或いは急いで帰って来たせいなのか、息が上がっている。

「ただいまー！」

「おかえり」

サンカは普段の様な冷静さを装いつつ、しかしいつもより調子の良さそうな挨拶を返し、荷物を部屋に運ぶべく買い物袋を受け取ろうと手を伸ばした――

「はうっ!？」

その瞬間、凄まじい痛みが彼の腰を襲った。

声にならない声を上げると、彼は腰を押さえながら横たわり、うめき声を上げた。掃除の時に重い机を持ち上げたり、重い物を持って庭と家を行き来していたのがいけなかった様だ。ぎっくり腰になるとは、なんとも情けない話である。

「こ……腰が……」

「ちよ、ちよつとサンカ！大丈夫!？」

はたては落とした荷物に気を止めず、辛そうに悶えるサンカを見て混乱しつつすぐに介抱を始めてくれた。

やはり歳のようなだ。もう二度と無理はしないようにしようと、サンカは肝に銘じた。

55話 急変

紫に事情を説明して得た療養の為の数週間が過ぎ、腰は完治した。当然だがはたての助けを借りる事無く自力で動けるので、いつでも依頼を受けられる筈なのだが・・・

「はたて。もう体調は万全だし、そんなに世話しなくても・・・」
「駄目よすっかり療養しないと。買い物してくるから、留守番おねがいね」

はたては楽し気な様子で返すと、戸を開けて出て行ってしまった。献身的に身の回りの世話をしてくれるのはありがたいが、入浴中に背中を流そうと入ってこようしたり、歯を磨こうとすると代わりにブラッシングしたり等、流石に度が過ぎてきている。

これまでに何度か遠まわしに断りを入れてみたり、理由を聞いたりしてみたが、彼女はこれも療養のためだからと取り合ってくれなかった。

(紫さん、最近見ないけどどうしたんだろう・・・)

療養を始めたばかりの頃は毎日のように顔を出していたが、ここ最近紫の姿を見ていない。

彼女も異変の後始末で忙しいのかもしれないが、サンカに任せる依頼も重要であるし、霊夢や魔理沙を駆り出して代わりに解決させたなら何かしらの知らせを入れてくれてもいい気がする。

幾ら完治が遅れているからとは言えど、変な所でマメな紫が突然訪問しなくなるのは不可解だ。

何気なく視線を外にやると、視界に広がる山々は赤、黄、緑といった様々な色が折り重なり、頂上から麓までをカラフルに染めている。紅葉狩りをすればさぞ綺麗だろう。人里の方を見れば、青々とした田んぼから水が抜かれ、稲が黄金色の穂を輝かせている。

(まあ、心配しなくても大丈夫か。しかし引きこもり一直線だな・・・せめて庭に出させてくれればいいんだけど)

はたてと二人きりで居られるのは嬉しいが、一日中家の中でボーッとしてたりゴロゴロしているのも嫌になってきた。たまには低く狭い天井から離れて、青い空を仰いで精一杯伸びがしたいものだ・・・まあ、それも叶わない夢なのだが。

せめて空が見える縁側で横になろうと立ち上がると、懐からスペカが滑り落ち、そのままはたての部屋へ滑り込んでいつてしまった。ほんの少し開いた隙間へ入っていくとは運が良いのか悪いのか、サンカは参ったなと頬を掻いた。

女性の部屋に入るのは気が引けるが、だからといってはたてに取りに行ってもらうのも申し訳ない気がする。

そこで彼は一瞬だけ入ってすぐに出れば良いと判断した。ごく短時間なら怒りもしないだろう。彼女はそこまで神経質な性格ではないのだから。

意を決して建付けの悪い襖を開けると、素早い動きで部屋へと踏み込む。中はそこだけ夜かと思う程に暗く、伸ばした指先が闇に消えた。窓と思わしき場所から光が薄っすらと漏れているところからすると、木の板でも打ち付けてあるのかもしれない。

余りにも暗いので蠟燭を灯そうかとも思ったが、目的の札は割とすぐに見つけることが出来た。

「有った有った。あまり奥の方に行つてなくて良かった」

札は畳んだ布団と床の間に挟まっていた。拾い上げて安堵しながらそれを仕舞うと、視界の隅に一冊の本が無造作に置いてあるのが見えた。普段なら気に留める事もないのだが、何故か無性に気になる。なんとなく手に取ってみると、本は所々退色して痛んでいる上に表紙に何も書かれていなかったが、サンカにはそれが日記だと分かった。

（はたてののかな。何を書いているんだろ？ いや、でも勝手に見るのは・・・）

暫しの自問自答の末、結局読んでみる事にした。背後から差し込む

屋の暗闇よりも深い闇を抱いた、普段の愛くるしい姿とは似ても似つかぬ、異形と呼ぶに相応しい雰囲気を放つ彼女が。

サンカは短い悲鳴を上げて尻餅をついて後ずさると、はたては心底おかしそうにクスクスと笑い、サンカの腕を掴んだ。

「今度こそ、一緒に幸せになろう？アナタ」

「え？・・・むぐ!？」

直後、はたての両手が素早く伸びて来た。サンカは咄嗟に防御しようと手を動かしたが、彼が反応するよりもはたての方が速く、両腕を押しさえつけられ、口を彼女の口で塞がれてしまった。

彼女は口内に舌をねじ込むと何か苦味のある物に移して来た。サンカは吐き出すことも出来ず、なされるがままにそれを飲み込んでしまふと、はたての服を掴んだ手が力が抜けて崩れ落ち、やがて痺れた感覚が全身を覆った。

(何をするんだ・・・はたて！)

完全に不覚を取られたようだ。意識はしっかりしているが、体は動かず上手く呂律が回らない。辛うじて動く目で見上げると、恍惚の表情を浮かべているはたてが見下ろしている。

「これでやっと・・・やっと・・・」

彼女はだらしなく涎を垂らし、溶けたかのように伸びるサンカの様子を確認すると、彼を抱き上げて部屋の中へと運び込んでいった。

56話 アイノカタチ

得体の知れない薬を飲まされてから、一体どれだけ経ったのだろうか。効果が切れて体が動くようになった頃には、はたての部屋に閉じ込められていた。

手足は縛られており思い通りに動くことが出来ず、壁から天井へと埋め尽くされた自身の写真を見る度に寒気を覚えた。目の前には天使の様な笑顔を湛えたはたてがいる。

「……………どうしてこんな事を？」

サンカは戸惑いながらも、目の前でニコニコと嬉しそうにしているはたてに行動の意図を尋ねた。まだ少し痺れているせいか、あまり呂律がまわらない。

「何所にも行かせないためよ。アナタ」

さも当然だといった口調で質問に答えた。声や顔はいつもの調子なのだが、これまでも何度か感じた黒い感情が別格な強さ現れており、思わず怯んでしまった。背中にフツフツと鳥肌が出来、本能が危険だと警鐘を鳴らし続けている。

気圧されていると、彼女は少しずつ距離を詰めて来た。サンカは説得を試みるフリをしながら、状況を打開するための策を練りつつ様子を窺う。

「やめてくれはたて。僕を閉じ込めても得はない」

「……………もう……………嫌なのよ」

「へ……………」

「私、いつも不安だったの。血だらけで帰って来た時なんて夜も眠れなくて、次の日に顔を合わせる度に生きてくれたって安心して、次は大丈夫かなって怖くなって……………私ね、何年も一人でとても寂しかったの。とても辛かったの。でも、あの腐った日常から救い出してくれたアナタともう一度会って、平和な世界で二人で幸せな日々を過ごしていく……………そんな夢の為にずっと頑張ってこられたわ。だから……………」

だからアナタの居ない日常に戻るなんて、そんなの絶対に嫌なの!!紫の依頼なんかもうどうでもいい!!念報も止めてやる!!一緒に居られない要素は全部消してやるわ!!私にはアナタさえいればもう何もいらない!!アナタは私の物なんだから!!」

「ッ!!」

はたてはヒステリックに絶叫すると、息を荒げたまま糸が切れた人形のようにピタリと動きを止め、ゆっくりと顔を上げた。瞳孔は開ききっており、深い闇が怯えたサンカを映し出す。

「文やミスティアが相談に乗ってくれたの。そしたらとっつっても良い事を教えてくれたわ。大切な物はしまっておけばいい、って。だから、アナタが外に出れないように頑張って結界を張ったの!偉いでしょう?」

「何を言ってる」

「どうして今までこうしなかったのか不思議でならないわ。ねえ、アナタも嬉しいよね?ううん、嬉しくない筈がないわ!だって私に傍に居てくれて言ってくれたもの!それって私と同じ気持ちだって事よね!?だからアナタはここで私と二人つきり、ずっとずっとずーっと一緒に居られるのよ!?!こんな幸せ他にないわ!!」

はたてが矢継ぎ早に愛の言葉を紡ぎながらブラウスのボタンを外すと、そつと彼女の体が露わになった。体には彼方此方に線状の傷が刻まれており、まだ新しい物から痕になったもの、更には内出血しているのか、傷口がどどめ色になっているものまである。

自傷痕だ。ただの怪我ではあのようにはない。もしか、治しても治しても腕に付けてくる傷も自分でつけていたのだろうか。良く見れば、スカートに隠れている太もも付近にも傷がついていた。

はたてはウツトリとしながら、その傷口を撫で回している。目を覆いたくなくなった。見たことを後悔した。それでも目を逸らす事が出来ず、情けない程に歯がガチガチと音を立て、体が震えてしまう。

彼女はそんなサンカの様子が目に入っていないのか、喜々としながら傷の一つ一つの説明をし始めている。すっかり自分の世界に入っ

てしまっている様だ。

「これはね、私がアナタの事を好きって思った時に付ける愛のシルシなの！ほら見て！私がどれだけアナタの事を愛しているかわかるでしょ？」

「やめてくれ・・・こんなの・・・」

「愛の証明だけじゃないわ！私はアナタの為ならなんだってする！昔私を助けてくれたみたいに、アナタが望めば誰かを殺すことだってできるもの！だからさあ、私を愛してよ！私を求めてよ！ねえ、ねえねえ!!」

「やめろ!!」

サンカは言葉をかき消すように叫んだ。それははたてに対する明確な拒絶の意思だった。

拒絶された彼女の顔からは、狂ったような笑顔が消えて真顔になり、やがて動揺や疑念に溢れた物へ変わっていく。自分の愛する人に、自分を愛してくれる人に拒絶された。それは何故なのか彼女には理解できなかった。

一瞬の静寂の後、叫んで息を荒くするサンカの首を締め上げた。指には力が込められており、喉がギリギリと音を立てて締まっていく。

「なんで？ねえなんでよ!!好きって言ってくれたのは嘘だったの?いつも私の料理を美味しいって食べてくれて、いつも可愛い笑顔を見せてくれたのに!!ねえどうしてよ!!私の何がいけないの!?!」

「やめ・・・は・・・はた・・・て」

呼吸が出来ない。このままでは窒息死するのは火を見るより明らかだ。

幸いにも意識が飛びかける直前に、はたてが手の力を緩めたため、サンカは息を大きく吸い込んで空気を肺に送り込んだ。

彼女は俯きながら何事かブツブツと呟くと、納得した様に目を丸くして、涙目で咳き込んでいる彼の顔を手で持ち上げて覗き込んできた。首にはしっかりと手の痕が浮き出ており、はたてはそれを見て更

に嬉しそうな顔をする。

「そっかぁ・・・他の女に何か吹き込まれたんだね？大丈夫、この家で私と二人きりで暮らし続ければ他の女共が間違ってる事に気づくから」

これ以上は耐えられない。芋虫のように体を転がしてはたてから逃げようとする、見えない壁のような物に行く先を阻まれた。襖は開け放たれているのに、向こう側の部屋へ出る事が出来ないのだ。

絶望した表情を浮かべたサンカを見た彼女は、彼を再び部屋の中央に引きずり戻しながら笑う。あれだけ好きだった彼女の顔が、今では狂気をはらんだ全くの別人のような顔に見えた。

「その結界は貴方が生きている限り絶対に外に出れない様に作ってるの。このために毎日少しづつ作ったのよ？一生二人きりでいようね・・・ああ、もうこんな時間。ご飯作ってるから、大人しくしてて？」

そう言い残すと、彼女は襖を静かに閉めて隣の部屋へと消えて行った。

次に帰ってきた時に何をされるか予測がつかない。あんな調子でこれから生活するのであれば、もしかしたらいつか本当に殺されてしまおうだろう。

はたての後姿が見えなくなった事を確認したサンカは、転がった際に拾い上げたポケットナイフで手足の縄を切断すると、起き上がった部屋を見渡した。焦っているせいもあり、サンカの頭にはここから逃げる事以外思いつかなかった。

「何か手はないのか・・・何か手は・・・」

似たような事例は無いものかと記憶を掘り起こしてみるが、役に立ちそうな情報や経験はなさそうだ。こんな時脳というのは現実逃避したくなるのか、余計な記憶まで湧いてくる。楽しかった今までの思い出や何気ない日常の風景等だが、今となってはそれも遠い幻想にな

ろうとしていた。

(また紅魔館でお茶を飲みたかったなあ・・・うん?)

そういえば、パチュリーと再び会った際になにか重要な話をしたのだった。会話の内容は一体なんだっただろうか。

暫く額に指を当てて思い出してみると、その言葉が見つかった。

―取り込んだ命はストックされるの。そして・・・

(そうか。この手があった)

一か八かではあるが、はたての結界の特性が彼女の言う通りなのであれば、やってみるだけの価値はある。サンカは自身の右手を自身の心臓の位置に押し当てると、僅かな明かりが漏れている窓であろう場所に背中を預け、息を整えた。高鳴り始める鼓動が緊張感を彼に与えてくる。

(もってくれよ)

彼は覚悟を決めると、スペルを静かに読み上げた。

57話 共依存

「待たせちゃってごめんなさい。お昼にしましょう」

両腕に血で汚れた包帯を巻いたはたてが、膳の上に乗った料理を落とさない様にソロソロと部屋に入ってきた。献立は一見普通であるが、そのどれもが妙に赤く、米飯にいたっては黒く細い物が点々と入っている。

「お腹空いたでしょ？今日も愛情をたっぷり込めて・・・」

はたては部屋の異変に気付くと、指先から力が抜け、持っていた膳を落としてしまった。皿が割れ、赤黒い料理が床に散らばる。

「・・・サンカ？」

信じがたい事に、確かについ先ほどまでその場にいた筈のサンカが、人ひとりが通れる穴と血の海を残し、忽然と姿を消していた。咄嗟に手を空間にかざしてみると、指先がほんのりとヒリつく感覚がする。この様子だと、結界は未だ効力を失っていない様子だ。

自力でくみ上げた結界に絶対的な自信を持っていたはたては、まだ彼が部屋のどこかに隠れているのではないかと全ての物をひっくり返す勢いで探索を始めた。

だが数分粘ってみても、彼の姿はおろか、気配すら感じない。

はたてはあまりの事に思考が纏まらず、暫くの間呆然としながら破壊された壁を眺めていたが、突如ハツとした様子になると、大きく広がった血だまりまで駆け寄り何の躊躇もなく手を入れた。

ぴちやりと雫が顔に跳ねたが、気にも止めない。血からはまだ温もりを感じられるため、そこまで遠くに行っていない様だ。

彼女はそれを確認すると、震える汚れた手で携帯を取り出してすぐさま彼の居場所を探るべく名前を念じる。

「なんで私から逃げるの？一緒に居ようって約束したじゃない・・・」
暫くして画面を見ると、左胸を押さえながら山の中を走るサンカが

写っており、背景には遠い所に既に枯れて何もなくなったひまわり畑が見えた。

この場所には見覚えがある。はたては手に付着した血を舐めとると、黒い翼を広げて空へと飛び立った。



サンカははたてが追いかけてくる事を予測しており、逃げ切るのは半ば諦めていた。

彼女の能力と天狗としての能力が合わされば、地の利も加わってどう足掻こうとも到底逃げることは不可能だろう。

なによりも今は負傷しているため早く走れないのだ。現に普段以上に息が上がり、数分程走っては足が止まるのを何度も繰り返していた。

「うっ」

ズキリと左胸が痛み、思わず歩みを止めた。脂汗を流して視界が霞んできているあたり、一度休憩した方が良いのかもしれない。

彼は木に寄りかかると、空を仰いで大きく息を吸った。さつきまで晴天だった空には、鈍色の雲が広がって来ている。

サンカが思いついた秘策は、自身を一度殺す事だった。彼は自身の心臓を撃ち抜くことで、死亡したという事実を作り出して結界を無効化し、外に出ることが出来るのではないかと考えた。

—結果として成功ではあったが、まさか一度失敗したお陰で激痛を味わう事になるとは……。

「気持ち悪いな……全く」

少しでも動くよと左胸に開いた穴に空気が通り、非常に奇妙な気分になる。心臓は2度目の挑戦の際に大部分が無くなってしまったが、それでも死なないどころか再生成し始めていた。分かつてはいるつもりではいたが、本当に化け物になってしまったのだなと実感する。

やがて呼吸が落ち着き始め、焦りも消えて徐々に冷静さを取り戻して来た。そこで彼は今一度状況を整理し、自分のとった行動を確認するべく目を瞑り、深く考え始める。

本当にこれで良かったのだろうか。はたては彼女なりにサンカを守るため、監禁という方法を取ったのだ。

手段は完全に間違えていたが、彼女の心に偽りはなかったように思える。ならばもつと冷静に話し合って、最良の選択も出来た筈ではないだろうか。

(・・・)

最初に会った時、随分距離が近いと思った。それから日に日に依存してくるようになって、少しでも距離を置こうものなら発狂した様に泣かれた覚えがある。

彼女も同じ気持ちを抱いていたのだと知ったのは暫く先になってしまったが、今思えば、あの頃から好意を持っていてくれたのだろう。初めこそはたての言動は理解できなかったが、献身的に面倒を見続けてくれる彼女と共に行動することで、誰かと一緒にいる楽しさを知ると共に、サンカは安心し心から惹かれて行った。

やがて彼が忌むべき存在であると分かると、これまでの態度を一変させるところか、より強く愛情を向けると共に更に依存してくるようになり、はたての存在はサンカの中でより大きくなっていった。一方のサンカも、唯一気を許しきれぬ相手が彼女だけになってしまった事もあり、依頼がない日は極力傍にいるようになった。

「・・・」

彼女の笑顔、仕草、性格。そのどれもが愛らしく、儂げで美しい。出来る事なら、隣に居られる時間がずっと続いてくれれば・・・そんな風に願った事もある。

―それにしても、やけに胸が苦しい。痛みのような明確な物ではなく、酷く抽象的で、モヤモヤとした不可解な物だ。

サンカは暫しこの未知の感覚の正体を探っていたが、重い曇天から

雨が降り始めた頃になって答えを導き出した。

それは罪悪感だった。自身が唯一気を許し、自身を好いてくれるたった一人の人物を置いて逃げだした事への罪悪感。そこに今まで気づかなかった小さな焦りと、一人になった事への強い恐怖感が合わさり、締め付けられるような苦しさを感じていたのだ。

「そうか・・・僕も依存していたのか・・・」

ため息交じりに言葉が口をついて出た。

はたてが恐ろしくて逃げて来たのに、今は彼女に会いたくてたまらない。まだ関係をやり直せるなら、また二人で平穩にいられるのなら・・・そんな事ばかり考えたせいなのか、逃げるという選択肢も跡形もなく消えてしまっていた。

「帰らないと・・・帰ってはたてに謝らないと」

傷は完全に塞がった。時間もたつぷりある。ならばやる事は一つしかない。

サンカはフラフラと立ち上がり、世界で唯一の愛しい人に会うために、必死で逃げて来た道を土砂降りの雨の中引き返し始めた。

58話 最悪の再会

「この辺りにいるみたいだけど・・・」

はたては周囲の木々や岩等が雨粒を弾く音を聞きながら、携帯を片手にひまわり畑を一望できる、苔むした巨大な岩の傍に立っていた。

大まかな位置は分かっても、ピンポイントで居場所を特定できないのがこの能力の不便な所だが、愛の力さえあれば必ず見つけられると信じている彼女は、めげずに彼を追いかけ続けていた。

携帯を見ると、画面には相変わらず胸に開いた穴から血を流すサンカが表示されている。その様子はとても痛々しく、自身の胸にも締め付けるような痛みを感じた。餓鬼の特性上すぐに傷は塞がるだろうが、やはり心配なものだ。

（次はもつと強力な結界にして、逃げられない様に手足も・・・そうすればあーんして食べさせてあげられるし、もつといっぱい・・・）

はたては妄想の世界に入りかけると、いけないいけないと首を横に振った。彼を守るつもりなのに彼を傷つけてどうするのだ。それに手足を切断してしまったら、頭を撫でてくれることは二度となくなってしまうのだ。何方が良いのか天秤にかければ、5体満足でいてくれた方がずっと良い。

はたては気を取り直すと、再び意識を耳と目に集中させながらゆっくりと歩き出した。すでに数十分が経過しているだけに、落ち着きが無くなり息苦しさも現れてきている。雨の勢いも強くなってきたので、早く見つけて連れ帰らなくてはならない。

「?あれって・・・」

何かが動いたような気がして目を凝らすと、黒い服を着た男がゆったりと歩いているのが見えた。風雨で良く見えないが、後ろから見た背格好はサンカに良く似ていた。

その瞬間、自身の中で感情が一気に爆発するのを感じた。雷に打たれたかのような衝撃が走り、笑みが自然と零れると、思考より先に体

が動いていた。

サンカと思わしき人物は歩みを止めたが、迫りくるはたてにまるで気づいている素振りはない。その様子は彼女からすれば、誰よりも愛しい彼がその場で立ち止まって待っていてくれるように見えた。

(いた！もうどこにも行かせないわ！)

手を伸ばしながら、背後から素早く距離を詰める。文には遠く及ばないものの、はたても烏天狗の端くれなのだ。感覚的に未だ人間のままだであるサンカを連れ去るのは造作もない。

「サンカー！」

自分はここにいます。そう誇示するかのようにはたては目に暗い色を湛えたまま、弾ける様な笑顔で名前を呼んだ。



なぜ奴が此処に居るのだ、とサンカは嫌な顔をした。よりによって、一番会いたくなかった存在に鉢合わせするとは、つくづく運がないようだ。

視線の先には、はたてではなく巫女服を着た少女が一人立っていた。気だるげな表情を浮かべてつまらなそうにしているが、放たれている気迫は肌を粟立たせ、涼しくなってきたこの時期に冷たい汗を拭きださせるまでの威圧感を与えてくる。

「霊夢・・・」

「ようやく見つけたわ。一緒に神社まで来てもらおうよ」

見るからに歳下の少女を恐れるのは情けなく見えるが、実力は遥かに霊夢の方が上なのだ。話を聞く限り、幻想郷最強の称号を持つ彼女と戦ったところでサンカに勝算はない。

出来る事ならすぐに逃げたい所だが、霊夢は隙を見せないどころか、此方がほんの少しでも気を抜こうものなら攻撃されると容易に想

像のできるほどの殺気まで放ち始めている。

「僕をどうする気だ？」

「ここで答える気はないわ。そうね・・・詳しい事は神社まで来てくれれば話してあげるわ」

「断ると言えば？」

「まったく仕方ないわね・・・だったら無理やり連れて行くわ」

威圧感が更に強くなる。結果は分かり切っているがやはり戦うしかないようだ。

サンカは覚悟した様に懐に手を入れてスペカを探すが、はたてから逃げてきたため部屋に置きっぱなしだった事を思い出した。普段ならスペカを使っている間はある程度の加減が自然と出来るのだが、何も使わずに能力を行使すると、一撃一撃が強力になり過ぎる傾向があるのだ。即ちこれは弾幕ごっこというお遊び等ではなく、本気の殺し合いをする事を意味する。

お互い睨み合って一触即発の状態が続く中、突如として耳をつんざく悲鳴が山に響いた。サンカにはそれが誰から発せられたのかがすぐに分かった。

「はたて!!」

「何なの一体」

霊夢の気が逸れると共に、サンカは土を蹴り上げて彼女の目を潰し、急斜面を滑る様に下り始めた。攻撃をしてくる恐れがあるため、極力ジグザグに移動しながら走る。

予想通り、はたては自分を探して此処まで来ていた。しかも、追って来た矢先で何らかの脅威に晒されているのだ。最悪の結果が脳裏を何度もよぎり、動揺と後悔があふれ出して冷静さを欠いていくのが、自分でもはつきりわかった。

彼は自分のせいではたてが危険な目に遭ったのだと何度も考えながらも、切れかけの糸の様に辛うじて残っている正気にしがみつき、決して狂うまいと堪える。

「待ちなさい！」

霊夢が何か喚いているが、目を潰したのだ。暫くは追ってこれまい。時々足をくじきながらも声が出た方へ必死に山を駆けると、ようやく目指した場所にたどり着いた。

そこには首を掴まれて苦しそうにもがいているはたと、燕尾服を着た男が立っていた。

男はサンカが何か行動を起こす前に、新たに増えた気配に気づいたのか、嫌にゆっくりと、そしてぎこちなく振り返る。

「そうか。誰かと思えばお前だったか。久しいな、兄上」

男は目だけで笑っていた。

59話 兄様

その男とは初対面の筈なのだが、何処かで会った事があるような気がした。ボンヤリと酷く曖昧な所ではあるが、彼は何かとても重要な事を、例えばサンカが何者なのかを知っているのではないかと思えた。

記憶を失う以前の自分を知ることが出来るチャンスと考えたが、はたてに危害を加えているだけでなく明確な敵意を感じ取れるので、もし一対一で出会っていたとしても話を聞きだすのは難しかっただろう。

男は痒そうにしながら顔を左右にぎこちなく振ると、グチャグチャと不快な音を立てながら、口から何か白い物が落ちて行つた。目でその白い物を追うと、地面に落下した米粒程の大きさのそれらがなにやら不規則に蠢いている。

どうやら蛆のようだ。面覆いの下がどうなっているのか想像し、サンカは酷く気分が悪くなった。

「ふむ。出来損ないがいると思っていたが・・・」

邪悪そのものと言えるような禍々しさと憎悪が強くなる。第六感の方はこの男を目にした瞬間から、僅かでも畏怖を感じ取らせてはならないと警鐘を鳴らし続けていた。もしも恐れや恐怖を感じ取らせてしまったら、奴にとって極めて有利な状況になるという、経験、を何故か知っているのだ。

「その子を・・・はたてを離せ！」

「・・・チツ」

恐怖心を押し殺しつつ今できるだけだけの虚勢を張ると、男は苛立ったように頭を震わせながら、はたてをサンカの方へ放り投げた。

「はたてー！」

地面に頭を打つスレスレの所で如何にか受け止めると、咳き込む彼

女の様態をすぐに確認する。顔色が悪く息も荒いが、しつかりと呼吸は出来ているようだ。落ち着くまで安静にしていれば大丈夫だろう。サンカは安堵のため息を一度だけつくくと、純粹な怒りがこみ上げてくるのを覚えた。一番許せないのは彼女から逃げて来た自分自身だが、あの男ははたての首を絞め、拳句の果てに子供のように無造作に放り投げたのだ。こんな目に遭わせておとがめなしは納得がいかない。

だが、いざ攻撃しようと思えば、険しい面持ちで顔を上げてみると、既に男はいなかった。気配を感じ取れず、ましてや移動する音すらしなかった。あの男も何らかの能力を持っていると考えるのが妥当だろうか。

白目は黒く無かったので、餓鬼ではない様だが、得体の知れなさがあり極めて不気味だ。それに、兄上とは一体何のことなのだろうか。

「やっと追いついた……ってオマケもいるのね。楽になるわ」

しまった。謎の男より厄介なのももう一人いるのを忘れていた。サンカは追いついた霊夢を向いて睨みを利かせつつはたての盾になる。

「あーもう！別に揃って始末しようなんて考えてないわよ。ただ神社まで来てほしただけなの。紫にもこの事は伝えるから安心して」

溢れ出る殺気を引っ込め、霊夢が地団駄を踏んだ。本当かどうかは分からないが、紫が此方に付いている間は安心できる筈だ。

サンカはおかしな動きをしたら即座に対処できるよう警戒しつつ、面倒くさそうにしている霊夢の後に続いた。



神社に着いた途端、はたてと引き離されてかなり焦ったが、何もしてくる気配がないのでとりあえずは様子見していた。

開け放たれた部屋からは境内を眺める事ができ、暇なので賽銭箱の上で喧嘩をしている雀を眺めて時間を潰している。

「ああもう邪魔くさいわね！」

「早くそれを渡して！でないと容赦しないわよ!?」

サンカは隣の部屋からする声を聞いて歩き出した。はたての元気そうな声を聞いて笑みが零れたが、霊夢と何を争っているのか気になった。

静かに戸を開くと、丁度一人前くらいの大きさの土鍋を抱えた霊夢と、それを奪い取ろうと猛攻を加えるはたてが居た。予想通りすっかり元気になったようで、雰囲気も何時もの活発な感じに戻っている。

「どきなさいよ！」

「嫌よ！サンカに食べさせるのは私の特権なの!!」

「何変な事言ってるのよ!? 私は食事運ぶだけで・・・」

丁度空腹だったので食事を用意してくれるのは有り難いのだが、二人は起き出したサンカに気づくことなく口論を続けている。どうやらはたてが何か誤解しているらしく、それで揉めているらしい。止めなければ大惨事になるのは間違いなしだ。

「二人ともそれくらいに・・・」

危ないので止めさせようとした直後、霊夢がしがみ付くはたてを振り払おうと強く振り回した手が滑り、鍋が放物線を描いてこちらに飛んできた。鍋の中身は卵粥だったようで、黄色と白のコントラストが雪原に咲いた花のように見えて中々綺麗だ。

「「あ」」

これもはたてから逃げようとした罰なのであれば甘んじて受けよう。サンカは二人の声が重なるのを聞きながら、嫌にゆっくりに見える鍋から避けようともせず、顔いっぱい広がる熱と、肌が茹り痛みへと変わっていく感覚を味わった。

60話 和解、そして

「それで、これはどんな意図があるんだ？」

顔にかかったお粥を拭き取ると、サンカは掃除をしている霊夢に尋ねた。火傷が痛むが、次第に治ってきているので気には留めずにいる。

はたてはどうしているのかといえば、先ほどまでの威勢は何所へ行ったのか、霊夢の背後から何かに怯えたように此方の様子を窺っていた。彼女はサンカから送られた視線に気づくと素早く戸の陰に隠れ、暫くしてまた顔を少しだけ出すのを繰り返している。

「まずはその天狗と話をつけたら？」

床を掃除し終えた霊夢は空になった鍋を拾い上げると、呆れたようにため息を吐いて立ち上がる。二人の無言のやり取りを見ていてじれったくなつた様で、乱暴にはたてを部屋に押し込み、戸を閉めて出て行ってしまった。

はたては二人を隔てる壁がなくなった事で、暫く右往左往しながらそわそわしたり、サンカを一瞬見て顔を背けたりする。サンカは暫くその動きを眺めていたが、唐突に名前を呼んだ。

「はたて」

ビクリと大きく体が跳ね、動きが止まった。やはり怯えが見える。はたては恐る恐るという言葉がピツタリな程ゆつくりと振り返ると、目は一切合わせずに

「いめんなきい」

と辛うじて聞き取れる程度の小さく震える声を出した。

涙を浮かべ、目を赤くしながらすすり泣くはたては、とてもか弱い存在に思えた。普段こそ明るく振舞っているが、その実はサンカの知らない所で少しづつ自分を追い詰め、病んでしまったのだろう。もつと彼女と向き合っていればこんな事にもならなかった筈だ。

「・・・おいで」

謝罪を受けた彼は両腕を広げながら微笑みを浮かべると、はたては何も言わず、警戒する野生の動物の様にゆっくりと近づき、遠慮気味に胸に顔を埋めてきた。

サンカを守りながら傍に置いておくためには、監禁という手段が最善の策だった。マトモな思考なら理性も働いたかもしれないが、日々の焦りが募り追い詰められていたはたては、自分の気持ちを理解し、肯定し、笑ってくれる彼ならば、どんなことでも正当化してくれる筈だと信じて行動に移したのだ。

だがそれも、謎の男に襲われ死を覚悟した時に間違いだったのではと脳裏をよぎった。

結局の所は彼が助けに来たので事なきを得たが、あれ程酷い目に合わせてしまったのだから、もう今までの生活に、今までの優しい彼には戻らないのではないかと思えてしまい、正しい選択と信じた自らの行いを後悔した。

そういった経緯から次に発せられる言葉を非常に恐れていたが、サンカは予想に反して、そつと受け入れた上に静かに抱きしめてきたため、思わず顔色を窺うように尋ねた。

「怒ってないの？」

「怒ってなんかいないよ・・・ずっと気持ちに答えられなくてごめんね」

「！で、でも、あの時私を・・・」

瞬間、サンカはあまりの必死さに吹き出してしまった。彼は呆然とした表情を浮かべるはたての頬を撫でると、子供に母親が聞かせるような優しい口調で語る。

「確かにあの時はとっても怖かったよ。だけど僕に居場所と、誰かといられる楽しさを教えてくれた君を嫌いにはなれなかった。まあ、監禁したことは褒められないけどね」

「本当に？」

「勿論だよ。嘘なんかじゃない」

サンカは笑って見せると、はたては大きく息をついて再度顔を胸に埋めて来た。

その動作を見て張りつめていた緊張の糸が途切れたのか、左胸を締め付けられるような、だが決して不快ではない感覚が現れ、鼓動が少し早くなったのを感じた。

「ああ、そうだ。ずっと言いたかった事があるんだ」

思い出したように腕の力を緩めると、二人は対面して座るような形になる。はたては落ち着きを取り戻してきたようで、薄っすらと笑みを湛えたように見えた。

そして彼女は恐れるのではなく、次に出る言葉を期待を寄せているようだった。

「はたて」

今ならば答えられる。誰にも邪魔されず、真っすぐな気持ちで。

「僕は君の事が――」

霊夢は一連のやり取りを、戸の向こう側から鍋を片手に聞いている。新しい粥を拵えて戻ってきたは良いが、入るタイミングを見失ってしまったので、とりあえず話が終わるまでこうして待っているのだ。

歯が浮くようなクサイ台詞を互いに言い合っているのは気に食わないが、本人達が幸せならいいのだろう。

「誰かを好きになる・・・か」

中に聞こえない様に小さくそう呟く。互いに依存しあい、互いに求めあい、そのまま底の無い水底の様な闇に落ちてゆく。傍から見ればとても滑稽であるし、とても歪んだ恋模様だ。あれは恋や愛情等ではなく、呪いや呪縛のような黒い物にしか受け取れない。

「全く面倒なもんね」

霊夢は小さく開いた戸の隙間から様子を伺い、眉間に皺を寄せた。無邪気に喜び、幸福そうな表情をしたはたてと楽し気に話すサンカの目には光が無く、はたてが見せたような闇を湛え暗く濁っていた。

第四章 無血異変

61話 終わりの始まり

「はいサンカ、口を開けて」

「んあ・・・」

夕暮れ時の博麗神社。

煎餅を齧る音が部屋に鳴る中、はたては匙を使ってお粥をサンカに一口食べさせると、彼は少しづつ味わうように飲み込んだ。卵は何かしらの物の怪の物を使ったらしく、食事では満たされることのなかった満足感を感じている。

サンカは少しだけ俯いて考える様に唸った後、はたての顔を見る。彼女は少し困ったように眉を寄せると、彼は小さく微笑んだ。

「やっぱり少し塩味が濃いかな・・・はたてが作ってくれた物の方が良いかも」

「!じゃあ、帰ったら何を食いたい!?!」

「そうだな・・・」

批評を入れられた霊夢は、ただ黙々と茶を飲み、煎餅を齧りながらやり取りが終るのを待っていた。粥に関しては腹に詰め込むために適当に作ったのだから、そう言われても仕方ないと思っっている。

それよりも彼女の胃を苛立ちでキリキリ言わせていたのは、二人の夫婦漫才だ。

お互いの心の内を伝える時間を与えた結果、二人はこれまで以上に、驚くほどに距離が縮まってしまった。正式に交際する関係になったのは素直に祝福できるが、だからと言って仲睦まじさをまざまざと見せつけられては辟易する。

(まだ終わらないのかしら。いい加減日が落ちてしまうのだけど)

いつまでもイチャついているので、このまま纏めて封印してしまうかと思案し、寸でのところで思いとどまるのを繰り返す。

ただ黙って見ているのも癪だし、此方の要件をいつまでたっても伝えることが出来ないの、そろそろ割り込ませてもらうとしよう。霊夢は二人の声をかき消すほどの音量で、無理矢理二人の砂糖菓子のように甘いやり取りを中断させた。

「そろそろいいかしら？ 続きは帰ってからやってもらえると嬉しいのだけでも」

二人は正気に戻ったようにハツとした後、互いに気まずそうに顔を赤くして俯いた。どうやら霊夢がいる事すら忘れていたらしく、盛大に焦っているのが丸分かりだ。これから毎日こんな調子で生活していくつもりなのだろうか。

「ゴホン…… えっと、君はなんで僕を此処に連れてきたんだ？ それも生きたまま」

何事も無かったように引き締まった表情で振る舞うのがおかしかったが、霊夢はグツとこらえて博麗神社に連れこんだ理由を非常に簡潔に語った。口の端が上がっている気がするが、目の前の二人は気づいていないようだ。

「アンタに提案があるわ。アンタを封印しない代わりに手を貸してほしいの」

サンカはポカンと豆鉄砲を喰らったように数秒停止した後、眉間にシワを寄せて怪訝な表情を浮かべた。

「なんの冗談？」

「そう言うと思ったわ。でも、冗談言うほど私達は仲良くないでしょ」
嫌味ったらしく言うと、サンカは不快そうに口をへの字に一瞬だけ曲げて、より詳しく話を聞くために霊夢を促して耳を傾けた。霊夢は彼の態度を見ると少し気が晴れたため、提案の詳細を説明する。

「実は数日前から集団で人や妖怪達が失踪する異変が起きています。もっぱらアンタが仲間の男に指示していると思っていたけれど、あの男とのやり取りを見て、アンタは異変の首謀者じゃない事が分かったわ」

あの男とははたての首を絞めた男の事だろう。あんなものと仲間だと思われていたのは酷く心外だが、奴が人を拉致して何をするのが気になる所だ。

「で、ここからが本題だけど・・・面倒だから本人から説明してもらわね」

「？」

霊夢が二度ほど手を打ち鳴らす。すると、背後に隙間が開いて、そこから日傘を持った金髪の女性がゆっくりと現れた。ブロンドのウェーブのかかった髪に怪しげな雰囲気を持ったその女性は、サンカとはたてが見知った人物だった。

紫だ。怪我をしているらしく、片足を引きずるようにして歩く彼女は痛みで顔をしかめていた。

「久しぶりね。サンカ」

「紫、あとの説明はお願いするわね。私は疲れたから休むわ」

霊夢はすっかり空になった鍋と食器を乱雑に取り上げると、紫を横目で見て舌打ちをしてから部屋から出て行った。あの威圧的な表情や声色を変えてくれればもっと親しみやすいのだが。

「さてと。はたて、何か言う事があるんじゃないかしら？」

サンカが引きずっていた方の足を治そうとすると、紫はたてに対して話しかけた。顔にこそ出さないが、話し方がいつになく冷たい。

サンカは手早く治療を終えると、すぐに二人の間に割って入り、震えるはたてを庇いながら紫を一瞬だけ威圧した。殺気の混じった視線を向けられた紫は意外そうに眼を丸くする。

「あらあら、ちよつと見ない間に随分親密になったのね？叱る気も失せちゃった。サンカもようやく素直になれたみたいで安心したわ」

扇を口に当てて今度は目を細める。目の奥は笑っていないが、叱る気が失せたというのは本当だろう。

サンカはそんな胡散臭い雰囲気を放つ彼女を警戒していたが、紫は突然、普段からは想像がつかないほど真剣に、そして深刻な様子で何事か悔しそうに呟き、自身の手を血が出るほど強く握った。

「すぐに貴方の弟を止めなければ幻想郷はおろか・・・」

「僕の・・・弟？」

様々な疑問が頭をめぐり、俄かに頭痛がしてきて頭を抱える。その様子を見た紫は何かを決心したらしく、二人を見据えて指をパチンと鳴らした。

62話 贖罪と罰

玉砂利に顔を打った後に周囲を見回すと、そこは紫の屋敷だった。この空気は普段から妙に冷たいのだが、今回はどういう訳か刺すような寒さを感じる。空気を深く吸い込めば、肺が痛んで咳き込んでしまう程だ。

一緒に連れてこられたはたては、まるで猫の様に小さく丸まって凍えてしまっていた。

無理もない。人だろうが妖怪だろうが、腕や足の露出が多い格好でこの気温となれば、だれでもこうなる。

気休めかもしれないが、サンカはそんな彼女へ自身が着ていた上着をかけてやると、より体を小さくかがめて団子の様な姿へと変貌した。

「ここなら他人は入ってこれないわ」

紫が日傘をくるくる回しながら隙間の中から現れると、二人を立ち上がらせ屋敷の方へ行くように促した。

確かにここには一部の限られた人物しか入れない。余程部外者に聞かれたくない事なのだろうか。

「紫さん、続きをお聞かせしていただけますか」

「そんなに急かさないで。ゆっくり話すから」

疲れがあるのか、珍しく声に覇気がなかった。

足の怪我の方こそ治っているが、顔色が悪い上に歩き方はフラフラと頼りなく、時々転びそうになるのをサンカとはたてで支えながら屋敷へと歩いて行った。



「さてと、それじゃあお待ちかねの本題よ」

どうにか屋敷に入り、藍が出してくれたお茶で体を温めっていると、

紫はサンカの方へ意識を向けた。

どんな話をされるのだろうかと身構えていると、彼女は懐から茶色く変色した一枚の紙を取り出し座卓に置いた。

写真は古く所々に赤茶色の染みができており、椅子に座った男と、つまらなそうにその後ろに立つ男が映っていた。二人は大河ドラマに出てくるような恰好で、腕章や陣笠、携えた銃等から兵隊か、それに準ずる組織の者だと思われる。

「これは・・・僕？」

「そうよ。それは貴方」

つまらなそうにしている男はサンカそのものだった。現代の写真と比べれば不鮮明であるが、毎日のように見て来た自分の顔を間違える事はない。

それに手前に座っている男にしても、恵比寿のような目つきと自然なまでに吊り上がった口が不気味だ。

しかし、この男には見覚えがある。それもかなり最近になって会った気もする。

「なら、こっちの男は・・・」

「蝦夷タタラ。今回の一連の大量失踪の首謀者にして、貴方の義理の弟」

言葉が出てこなかった。あの時、不気味という文字がピッタリな男が発した「兄上」という言葉は聞き間違いではなかったようだ。

もし紫の話が事実なら、時分にも家族がいた事になる。

そして何故幻想郷の住民を拉致しているのか、何故今更になって姿を現したのか、何故兄であるサンカに対して敵対心を向けたのか。それらは理解できそうになかったが、紫がこの男の情報を教えた意味は瞬時に理解する事ができた。

「排除しろと？」

「その通りよ。確実に始末してきて」

「・・・汚れ仕事は僕の役目ですか」

「そうね。貴方の立場上、誰かを殺める事でしかその罪は償えないわ」
「どういう事ですか？」

サンカが食い入るように身を乗り出すと、紫は頭を抱えながらもこれまでこなして来た依頼の本当の目的を、言いくそうにしながら話し始めた。

彼女曰く、これまでの依頼は異変の芽を摘むだけでなく、サンカが過去に犯した大罪を償わせる意味もあったらしい。

彼の犯した大罪とは、数多くの妖怪や物の怪、更には人間を殺めて来た事だ。例えそれが指示された事で本人の意思とは異なっていたにせよ、なんの罪もない者達を殺めた事に変わりはないのだ。

そのためサンカは地獄行きが確定しており、寿命が尽きたと同時に他者に与えた苦しみを永遠と味わい続ける決まりになってしまっていた。

そこで紫は閻魔に直接交渉し、異変の早期解決やそれに付随する問題を解消する事で、完全に清算する事はできないにしろ、犯した罪が多少軽くなる様にしてもらったのだそうだ。

ただ、多かれ少なかれ過去に善行を重ねていた事で（身に覚えはないが）、左程此方で依頼に駆り出す必要が無かったのが唯一の救いだとも、彼女は言っていた。

「どうして僕なんかの為にそこまで・・・」

「そっちの子になんとかしてっってお願ひされちゃうと・・・どうしても、ね」

紫が苦笑いしながら指をさす方向へ顔を向けると、サンカの上着に包まりながら話を聞いているはたてがいた。

「君が？どうして？」

「・・・私はサンカに幸せになってほしい。だって、私の一番好きな人だもん。苦しむ所なんて見たくないわ」

はたてはいたって真面目な顔で堂々と断言した。

サンカに幸せになってほしい。そんな願いのためだけに、彼女はあまり仲が良くないであろう紫に頼んでまで解決しようとしてくれたようだ。

まさか異変解決の駒にされるとは思っていなかったようだが、彼を思う気持ちは人一倍強いと言える。

「何にせよ奴を倒さなければ、待っているのは破滅のみよ……これが私からの最後の依頼になるわ。奴を止め、幻想郷を救って」

少々荷が重いのが、義理の弟と幻想郷、ひいてははたてを天秤にかけたら迷いなく後者を選ぶ。……と言いたい所だが、どの道拒否権は無いので了承以外の返答はない。

サンカは湯呑みに入ったお茶を飲み干すと、はたての手を借りながら立ち上がり、部屋を後にした。

63話 玉散る剣

出来ることなら穏便に済ませたかったが、遭遇した時の態度から考えると、話し合いで解決するタイプの人物ではないのは確かだ。

それに此方ははたてに危害を加えられているので、再度顔を合わせた時に冷静でいられるかどうか不明でもある。彼女を傷つけ更には幻想郷で悪事を働こうとしている以上、消えてもらうしか他に方法は無いのだ。

「それで紫さん、その子は？」

「ああこの子？知人に頼んでちよつと貸してもらったの」

防寒対策をしつかりと施して再び庭へ出ると、そこには白いシャツに緑色のベストを着た白髪の少女が待っていた。

少女ははたてより少し年下くらいで、磁器のように透き通った肌と髪に映える黒いリボン、二振りの日本刀を背負っているのが印象的だった。

刀は大小の組み合わせでは無く双方共に大型の物で、鞘の一つには洒落のつもりか花が一輪挿しになっている。

「紫さん、此方の方が例の？」

「そうよ。彼がお師匠様のお友達」

少女は紫との話を終えると、サンカの方へ向き直って歩み寄って来た。華奢な見た目にはおおよそ相応しくない妙な気迫を放っているせいか、何か大きな生き物と対面したような不思議な感覚を覚える。

サンカはそんな不思議な印象を持つ少女をはたての敵意を他所にマジマジと見ていたが、もう一点気になっている所があった。

少女の周りをフヨフヨと力なく飛び回っている白い半透明の物体は何なのだろうか。白玉のようで美味しそうではあるが、付き従っているかの様な挙動をしているので式神の一種なのかもしれない。

不思議そうにしながら傍までやって来るのを待つと、彼女は手の届

く距離に入った途端、なんのためらいも無く手を強く握って来た。
サンカの背後にいるはたての目から光が消えると共に、怒りの形相
へと変わる。

「初めましてサンカさん。私、魂魄妖夢って言います」

感情を殆ど見せずに自己紹介をする。

魂魄という覚えのある苗字を聞き、思わず声が出た。以前、妖忌と
いう老人に聞かされた孫はどうやら彼女の事だったようだ。

サンカははたての殺意が向けられている彼女の手を弾き飛ばすと、
後ろに向けてはたての手を握った。少々悴んでいるであろう指を絡
めてくる。

「早速なんですが、剣の稽古を始めますよ」

「け、剣？」

サンカは虚ろな目で飛び掛かって来そうなはたてを押さえつつ、目
をパチクリさせた。

覚えている限りでは剣は一度も振るったことはない。妖忌、或いは
紫にどんな話を聞かされたのだろうか。

「サンカ、これを」

「？」

空中に隙間が開き、鈍色に光る何かが硬い金属音を立てて落ちる。
見ると、刃渡り80cm程の緩やかな湾曲した刀身に、握り手を覆う
ように広がった特徴的な鏢を備えた剣、即ちサーベルが、冷たい光を
放ちながら横たわっていた。

試しに拾い上げてみると、何故かしっくりくる感覚がする。所々刃
こぼれを起こしているのも妙に懐かしい。

「これは・・・」

「貴方が過去に使っていた物よ。それで妖夢と戦って勘を取り戻し

て」

「ちよつと、本物の刃物で戦わせる気？怪我したらどうするのよ」

「彼なら怪我しても食らった命の分だけすぐに治るし、そうそう死ぬことも無いわ」

さらりと酷い事を言われた。

はたては紫に食ってかかっていたが、紫は飄々としてどこ吹く風だ。

サンカは睨み合う・・・のではなく一方的に睨んでいるはたてを軽く諭すと、妖夢に抜刀するよう促してサーベルを構えた。不本意だが、やれと言われてしまった以上やるしかあるまい。

妖夢は二振りの刀を抜き放つと、素早く構えた。強烈な重圧がサンカを圧倒する。

「始めるタイミングは？」

「じゃあ始めます」

強く踏み込んだと共に妖夢の姿が消え、鋭い殺意が風に乗って迫ってくる。

そのあまりの速さを目にした彼は、何が起こったのか分からないままワンテンポ遅れて攻撃を仕掛けようとした頃には、既に懐に深く入り込まれた後だった。

妖夢の表情は、先程のあどけない少女の物ではなく鋭く威圧的な物になっていて、左右から薙ぎ払うように刃が迫ってくるのが、嫌にゆっくりに見えた。

(やられるー)

頭の中で強く死を意識した時、突然体が動いた。

サンカはサーベルを地面に突き刺して固定し、そのまま剣を軸に器用に逆立ちして攻撃を躲すと、妖夢を飛び越えて背後に音も無く降り立った。

それは体を防御しようという咄嗟の行動とは違い、熟練した達人がするかのような非常に自然体で無駄のない動きだった。

(今のはどうやって?)

妖夢が驚いた様子でサンカを見ると、当の本人も何が起きたのかわかっていないらしくキョロキョロと辺りを見回し困惑していた。

構え方は素人そのものであつたし、斬り結ぶならまだしも初見で避けたりすることができないのは限られたほんの一握りだけだ。偶然避けることが出来たか、自身が間合いを間違えたと捉えるのが妥当といったところだろう。戦いには不慣れらしいので、ある程度の手加減も必要になってくる。

(やりにくいなあ・・・でも強いつて聞いたんだけど)

妖夢はそんな隙だらけの彼へ再び攻撃を加えるべく、足に力を込めて一気に踏み出した。

64話 怪奇なる生命・前編

灯笼を盾にして斬撃を躲し、後ろへ飛び退く。目まぐるしく変わる状況に対応しようとするが、剣を持って数時間しか経っていない彼にとつては非常に厳しく、時々入るはたての呼びかけに助けられている。

「チッ！」

刃がぶつかって甲高い音を立てると共に、火花が散って頬を焦がす。休憩を挟みながら練習を重ねているが、サンカは未だに妖夢の攻撃を防ぐので精一杯な有様で、攻撃は二の次だった。

妖夢からすれば彼の太刀筋は非常に単純で分かりやすいために防ぐ必要もなく、身を少し捻って容易く躲せるので多少手を抜いて丁度いいくらいである。

「うぐっ・・・」

「これで10敗目ですね」

峰で手の甲を叩かれ、思わずサーベルを落としてしまった。

赤く腫れた手は熱を帯びており、短時間で酷使しすぎたためか痺れていて動かしにくい。感覚も鈍く、軽い刺激を与えても何も感じる事が出来なかった。

「今日はここまでにしましょう。最初の頃と比べれば、大分動けるようになっていきますよ」

妖夢は刀を収めてお世辞を言ったが、サンカの耳には届いていなかった。

彼は急速に治癒した10本の指を見つめながら、一本づつしっかりと曲げられるか確かめると、すぐにサーベルを拾い上げて妖夢へと構える。

どうやらまだ練習を続けたいらしい様だ。

向上心が高いのは素晴らしい事だが、それに体が付いてきていない。事実片方の足には力が入っていないようで、重心が少しだけズレており、構え方があまり綺麗ではなかった。

妖夢はため息を吐くと、ゆっくり首を横に振りながら疲れたように言った。

「駄目です。今日はもう終わりです」

「僕にはやらないきやいけない事があるんだ。早くコレの使い方を……」
「駄目です」

キツパリ断ると、彼は項垂れてサーベルを置いた。

体力はもう残っていないだろうに、この執着心は何なのだろうか。もしかしたら餓鬼という性質に何か関係しているのかもしれない。妖夢はそんな事を考えながら、紫が開いていた隙間へと消えて行った。

「くっ……」

妖夢が消えると、サンカは糸が切れた人形のように膝から崩れ落ちた。

緊張が解けたせいで、今まで蓄積してきた疲労が出たのだろう。怪我がいくら治ろうとも、疲れまではとれないのだ。無茶はする者ではない。

サーベルを支えにして座り込んでいると、はたてが慌ただしくサンカの元に駆けてきた。彼女は何も言わずサンカを引きずって屋敷に運び入れると、暖の効いた部屋に入れてくれた。凍えた耳や指先に熱が伝わり、血行が良くなったのか痒みが襲ってくると共にじんわりと温まってくる。

「お疲れ様。今日は泊って行きなさい」

部屋には紫が居たが、一言だけ言ってさっさと部屋を出て行ってしまった。他にも何か言いたげだったが、出しかけた言葉を呑み込んだ様子だった。

はたては紫の微妙な空気を知ってか知らずか、取り上げられていた玩具を返してもらった子供の様な無邪気さを見せながら、依然として天井をボンヤリと眺めているサンカの介抱を始めた。



調子が戻って来た彼は、はたての手を借りながら湯あみをしていた。お互い同意の上（はたては乗り気だったが）ではあるが、やはり一糸まとわぬ姿で年頃の少女と共にいるのは慣れないので、体を洗っている彼女に背を向けた格好で入浴している。

「ふう．．．」

湯船に浸かりながら腕の様子を見る。まだ少しだけ力を入れにくいだが、一応は自由に動かせる様になった。これなら明日の稽古も万全だろう。

「こうしてサンカと一緒に風呂に入れる日が来るなんて．．．」

背後で何か言っているのはたての存在を強く感じながら、妖夢の動きを思い返していく。彼女の型は妖忌の型と瓜二つだが、斬撃に入るまでの速度が桁違いに早い。だが敗因はそれだけでなく、自身の体の動きが思考に全く追いついていないのが、一番大きな要因だろう。

今後はいかに思考と反射のロスを無くし、彼女に追従できるかが鍵となるはずだ。完全に攻撃を見切れば、隙もおのずと見えてくる。

「ねえ、ちょっと聞いているの?」

ある程度のパターンを作って頭の中でテストしていると、立腹した様子ではたてが背中から抱き着いて来た。柔らかい感触が背中にあるのでどうしても意識してしまうが、なるべく平静を保ちつつ、はたてに意識を向ける。

「何?」

「まだ・・・まだ思い出せないの？」

「残念だけど記憶がすっぱり抜け落ちてて・・・はたて、昔の僕と何があったんだ？」

はたての寂し気な声が胸を締め付ける。

確かに昔の事は未だに思い出すことが出来ていない。彼女は過去のサンカにとても大切な約束をしたのだと言うが、それすらも遥か彼方に消えてしまっていた。

紫に依頼の意義を教えられた時に少しだけ話したのだが、過去にサンカははたてと行動を共にしていたらしい。聞く限りでは相当に外界の歳が離れていた様子だが、当時まだあどけなかつたであろう子供が、誰が見ても年増の男に淡い恋心を抱くのは些か不思議に思えた。彼女はサンカの隣に来て肩まで湯に浸かると、俯いたままの彼にくつつかの思い出話を聞かせてくれた。

「サンカはまだ小さかつた私を連れて親の元まで届けてくれたの。妖怪狩りの組織に所属してたのに、恩を返す為って組織を抜けてまで、ね」

「そんな事を僕が？」

「うん。それに道中で色んな事を教えてくれたわ。字の読み書きとか、料理とか、温もりとか・・・結局私は親よりもサンカと一緒に居る事を選んだけど。今思えば、なんであんな奴らに会いたがったのか不思議でしょうがないわー」

自嘲気味に笑うと、はたてはパシヤリと顔を洗って一息ついて浴室を後にした。不安にさせまいと取り繕っていたが、サンカにはそんな彼女が酷く悲しそうに見えた。

65話 怪奇なる生命・後編

サンカとの話を終え、寝巻に着替えたはたてが外気との寒暖差に震えながら部屋へ向かっていると、庭の真ん中に不可解な物を見つけた。

この空間は月が無いのになぜか薄明るいので、大まかな形状でしか分からないものの、それが人の形をしているという事だけは判別できた。

確か脱衣所にあつた時計は丁度丑三つ時を指し示していた筈だ。

紫の知人が遊びに来たのかとも考えたが、来客にしては非常識すぎる時間帯での来訪であるし、そうでないなら気味が悪い。いずれにせよマトモな人物でないのは確かだろう。

人影は特に何をする訳でもなくただそこに立っただけだったが、得体の知れない言い知れぬ恐怖を振りまいていた。

関わるのは得策ではないが、誰かにこの事を知らせようにもサンカは万全でないし、紫は何所にいるか分からない。はたては何方を頼るかを数秒思索すると、サンカの方がまだ安心できると判断して一度浴室まで戻る事にした。

(気づいてない・・・よね?)

万一でもあれが自身の存在に気づいたら、命の保証がないと第六感強く警告しているのだ。従わない理由はない。

今更な気はするが、足音を立てないようにすり足で後ろへ下がっていく。

——カタン

足になにかがぶつかり、跳ね返って乾いた音が静寂の中に響く。足を元を見してみると、手鞠が一つ転がっていた。そういえば、サンカの稽古中に猫が遊んでいたようなー

急いで人影の方を向くと、人影も此方を向いていた。それは白っぼ

い髪色で緑の服を着ており、背中に2振りの刀を背負っていた。

(妖夢?)

異質な気配を放つ物の正体は彼女だったが、何か様子がおかしい。呼吸は不規則で、焦点のあつていない目で体はフラフラと揺れ始めている。

数分程注視していると、突然妖夢は大きく体を震わせて跳躍し、此方へ飛んできた。その挙動は生理的嫌悪感を覚える動きで、考えるより先に体が動いていた。

「ぎゃあ!!」

悲鳴を上げながら飛び退くと、先程までいた場所に派手な音を立てて落ちてきた。彼女はすぐに起き上がって来たが、やはり動き方は気が持ちが悪く、ゴキカブリのように此方へ走って来た。

助けを呼びに行く暇はない。はたては厳しい面持ちになると、懐から携帯を取り出してカメラを向けた。悪あがきになるかも知れないが、助けが望めない以上此処で食い止める他にない。

今まで相手にしてきたどんな異形よりも強い圧に震える手を押さえ、奮い立たせる様に叫ぶ。

「これくらい私だって!」

スペルの宣言をせずに能力を行使すると、紫の光を放ちながら無数の弾幕が放たれ、妖夢に命中していく。出力を弱めているので大した傷にはならないが、足を止める事ができた。

はたては間髪入れず、弾幕を受けて仰け反った姿勢になった彼女をフラインダーに収め、シャッターを切った。写真として納められた空間には更なる弾幕が展開され、その一つ一つが優美な機動を描いて目標へと吸い込まれていく。

「ギュイイイ・・・」

おおよそ人の声とは思えないような怪音を出して後ろへ吹き飛ば

され、壁に激突して動かなくなる。

息を整えて恐る恐る近づくと、彼女はぐったりした様子で気絶していた。一応は無力化できているので起き上がってくる事はない筈だが、一抹の不安は残る。

「いい加減にしてよ・・・もう」

誰にぶつけるでもない悪態を静かにつくと、伸びきっている妖夢を軽く蹴った。

このまま気の触れた妖夢を放置したとしても碌な事にならないのは明白なので、この場で息の根を止めてしまえばさぞ楽だろう。それに二人の仲を引き裂く敵になる前に排除してしまえば、ある種の予防にもなるので一石二鳥である。

だがそんな事をすればサンカは喜ばないし、異変を起こしている首謀者を倒せなくなる恐れもあるのでぐっと堪え、明日の朝になるまで屋敷の柱にでも括り付け、判断を紫にゆだねる事にした。

「それにしても、馴れ馴れしく私のサンカの手を掴むなんて本当に油断も隙もないわ」

はたては苦虫を噛み潰したような顔をしながら、妖夢を背負って屋敷へと運び込んだ。



「それでここに妖夢がいるのか・・・」

「ごめんねサンカ。今度一緒に外界に出掛けよ？」

二人の声がある。重たい瞼を開けるとぼやけた風景が徐々にクリアになり、何故か紫の屋敷で布団に寝かされている事が分かった。襖の前ではサンカとはたてが背中を向けて話し合いをしており、不穏な空気が流れていた。

「あ、目が覚めたみたいよ」

「平気かい？気分は？」

目覚めた事に気づいた二人が振り向くが、その顔を見て凍りついた。顔はグチャグチャに潰されたひき肉の様になっていて表情を窺い知る事はできず、何故今まで分からなかったのが不思議な程の凄まじい腐臭が漂ってくる。

「う、うわあああああ!!」

刀はない。ならばと腕を振り回して二人を振り払おうとするが、サシカと思われる方の人物に取り押さえられてしまった。

「妖夢落ち着いて！何があったの!？」

「いやああああ!!」

パニックを起こした妖夢はただひたすら暴れ続ける。取り押さえられて来た男は罅が開かないと判断したのか、妖夢の両腕を拘束した上で頭を掴んで床に押し付けた。絶妙に力が入れにくい体勢のため、なされるがままになる。

「この・・・あれ?」

目を動かして睨みつけようとすると、その顔はひき肉の様な醜い物ではなく、しっかりした人の顔に戻っていた。

66話 意識

「なにも覚えてない?」

「は、はい」

サンカは神妙な面持ちで妖夢にアレコレ聞いたが、彼女はどの質問に対しても首を横に振るだけだった。

彼ははたてが襲われたことで気が立っており、返答次第では肉片に変えてしまうつもりだったが、本当になにも覚えていないと察してからはなるべく静かに聞いていた。

彼女曰く、主の屋敷に戻って簡単な報告を済ませた後に炊事場で調理を始めようとしたら、気がつくとき紫の屋敷で寝かされていたと語る。はたてを襲撃した事も記憶にないようで、その場にいる全員が首を捻った。

念のため他者を操る事ができる能力を持っていて、今回の騒動を引き起こしそうな、或いは引き起こすことが可能な人物に心当たりがなにか聞いてみたが、似たような力を持つ者は居るには居るがどれも毛色が違うし、こんな事をさせる理由も特にないとの事だ。

「とりあえず、朝になったら紫に聞いてみようよ。今回の異変関連なら何か知ってるかもしれないでしょ?」

分からない事ばかり浮かんで誰もが首を捻る中、はたてはそう提案した。確かに紫に聞けば何かしら知っていそうではあるし、一度休んで過熱気味の頭をリセットさせれば、小さな見落とし等に気づく事が出来る筈だ。

「・・・そうだね。そうしよう」

「わかりました。一度私は失礼して―」

平行線のまま話を終えて、妖夢の見送りをしようとして立ち上がったまさにその時、タイミングよく紫が障子を開けて入って来た。先程まで寝ていた所を藍に起こされて急いで来たらしく、息は上がっているし髪型は崩れているので折角の美人が勿体ない事になっている。

「紫さん? どうし」

「二人とも一旦妖夢から離れなさい」

普段の落ち着きが全く感じ取れない程に取り乱した口調で、サンカの声を遮った。よく見れば彼女は汗をかいていたのだが、それは体を動かしたせいである汗ではなく、緊張から出てくる汗の様だ。普段は飄々とした態度を崩さない紫がここまで焦るのも珍しいと同時に、かなり悪い状況だということも伝わってくる。

突然そんな事を言われた3人はポカンとしていたが、痺れを切らした紫がはたとサンカの腕を引っ張って部屋から強引に退出させると、妖夢の体の彼方此方を触りつつ痛みが無いか確認しだした。

「・・・まだ大丈夫そうね。サンカ、能力で治療をお願いできないかしら」

安堵の入り混じった声と共に手招きされたが、サンカは言葉の意味を理解するまで時間を要した。何故なら妖夢には目立った外傷は少なく、止血剤や消毒剤を付けておけば自然と癒えるので治療は必要ないと判断したからだ。

紫はその指摘を聞いたが、それでも治療をする様に迫ってくる。

「急いで。空気が冷たくても進行を完全に止められる訳じゃないんだから」

進行という単語を聞き、何かしらの菌やウイルスに感染していると考えて二度小さく頷くと、彼はおずおずと近づいて両手をかざしながら、別に口にする必要のないスペル名を呟いた。

「不空羅索^{ふくうけんじやく}」

その途端に、まるで治療を拒むように妖夢が暴れ出した。

白目を剥いて口から泡を吐きながら、男、或るいは低い老婆の様な声で罵り始めるが、紫は臆することなく隙間から出した無数の手で押さえつけつつ、時々弾かれそうになりながら、怯んだサンカに治療を

続けるよう激を飛ばした。

だが能力が発動すると、あれだけ暴れていたのが嘘の様に、動きが突然ピタリと止まった。

怪訝に思いながら覗き込んでみると、驚いた様に大きく口を開けながら両手両足をピッチリ合わせて硬直している。一見すると間抜けな光景だが、この状態では流石に恐怖を感じざる負えない。

「よ、妖夢?へい—」

「ギイイイイイアアアアア!!」

あまりにも微動だにしないので、呼吸しているか確認するために耳を近づけた瞬間、想像を絶する大きすぎる声量で叫ばれてしまい、何も聞こえなくなつた。思わず治療を続けている手を離しそうになつたが、紫に掴まれてどうにか堪えることは出来た。

妖夢は肺の空気を出し切りながら叫び続けると、緑色の泡を吐き出してぐったりしてしまい、再び動かなくなつてしまった。先程と違ふとすれば、力が入っていない事である。

「死んで・・・ませんよね?」

「眠っているだけよ。安静にしておけば大丈夫」

紫は眠たいのかウトウトしながら布団を被せ直し、妖夢の頭を母親の様な優しい手つきで撫でた。私室まで連れて行こうかと提案したが、妖夢の経過を見たいと丁寧に断られた。

改めて吐き出されたものを見てみると、泡の様なそれはベタベタと粘着質で、血が少し混じっているのも確認できる代物だった。臭いも膿のそれで酷く臭く、鼻が曲がりそうになる。

「それなに?」

はたてが恐る恐る背後から近づき、鼻をつまみながら肩越しに泡を凝視した。紫は素早く隙間の中にそれを落として処理すると、手に付いた埃を払う仕草をする。

「タタラの能力よ。生きた者の意識を乗っ取り、自身の駒に作り替えるの。もうここまで来ているとはね」

「彼女の主は大丈夫でしょうか？」

「人から人へは移らないし、既に屍になった者には使えないわ。妖夢は半人半霊だからこそ餌食になったの。さあ、明日も早いわよ。部屋に戻ってなさい」

サンカは何も言わず、後ろから一連の流れを不安そうに見ていたはたてを連れて、半ば追い出される形で薄暗い廊下を歩き始めた。

67話 開戦

「始めー！」

紫の号令と共に砂利を大きく巻き上げ、サンカと妖夢は走り出す。妖夢は冷ややかながらも美しさすら感じる一振りの刀を、サンカは大振りながらも繊細な印象を与えるサーベルをその手に保持し、もはや常人では目で追う事が困難な速度で斬り結ぶ。

実は片手で扱うサーベルよりも、両手で取り扱う日本刀の方が力を込め易い為、マトモに斬り結べばサンカは圧倒的に不利である。

更には彼の使用しているサーベルは一般的な物とは異なり、刀身が日本刀と同じ作りになっている為非常に重い上に柄も短いため、片手で使うには少々苦勞していた。

そのため一見すると妖夢に利がある様に見えるが、サンカは瞬発力と手数でそれを補っており、今のところなんとか対等に渡り合っている。

「ふんっ！」

間合いの調整をしながら相手の出方を伺いつつ、体重をかけて叩き割る様に刃をぶつける。妖夢は大重量を一点に当てられて苦悶に満ちた表情を浮かべこそしたものの、力を両足に込めて耐え、一瞬の隙をついてサンカを押し返した。

妖夢は大きくバランスを崩して転倒しかけている彼の懐に潜り込み、がら空きになった胴体へ一太刀いれるべく横へ刀を薙ぎ払う。

「これで終わりですか？」

「まだまだー！」

サンカは非常に不利な状況に立たされていたにも関わらず、妖夢の動きを完全に読み切っており、後ろへと素早く飛んだため、ほんの数ミリ被服を斬られただけで済んだ。

空中で体を反転させて着地した際の余力で、敷き詰められた砂利が抉れていく。

(これで駄目か。なら)

体勢を立て直し、腕に力を込めながら上段に構えると、妖夢はもう一本の刀を鞘から抜いて防御の姿勢を取る。本能的な物か鍛練の成果かは不明だが、その判断は正しいと言えよう。

サンカは溜めた力を一気に解放し、素早い刺突を連続して繰り出してみせる。妖夢は連撃を防ぐ事は出来るものの、今度は反撃に出られる隙が少ないせいで、剣の指南を始めた頃とは立場が逆転し始めている。

「このー」

暫く防御に徹していたが、痺れを切らしたのか顔目掛けて迫ってくるサーベルの切っ先を、自身の刀で滑らせて狙いを強引に外させた。

再び後ろへ飛んで距離を取るサンカを捕捉した彼女は、自身の得意な間合いに入ろうと体を低くして迫るが、どういう訳かサンカは逃げることも避ける事もせず、左掌で自信を庇うようにしながら動きを止めてしまった。その様子はまるで、命乞いをしているように妖夢には見えた。

「そこまでー」

「へ?・・・ゴフツ!」

紫の号令が聞こえ、速度のついていた妖夢は狙ってか偶然かサンカの腹部に体当たりして制止した。彼女はすぐに距離を置いて荒い息を整えながら、両手に持った獲物を鞘に納める。

「お疲れさまでした。良い動きになりましたね。お見事です」

「ああ、うん・・・どうも」

しゃがれ声で適当な返事をしながら、胃の内容が出てこない様に堪える。妖夢は淡々と紫とのやり取りを終えると、ペコリと頭を下げてさっさと帰ってしまった。

「アイツめ、今度会ったら顔の皮を・・・サンカ、お水持ってきたわ。大丈夫？」

はたては冷たい視線を妖夢に向けながら何か良からぬ事を呟くと、打って変わって柔らかく明るい声のトーンでサンカにコップを差し出した。

サンカは痛みで震える手でコップを受け取って一気に飲み干すと、疲れた様子で大きく息をつき、瞼の上から目をグリグリと揉み解す。

実は稽古を始めた日から、既に10日が経過していた。

彼は今まで妖夢に勝ちたい一心で、眠る間も惜しんで勤勉に励んでいた。相当に無理をしているのは鏡を見る度に増えていくクマで知ることは出来たし、度々はたてに止められたりもしていたが、1日でも早く義弟を止めたいがために、全て承知の上でただひたすら実戦とシミュレーションを繰り返し、何度も体を切り刻まれながら剣の使い方を学習していった。

そして半分ほど狂いかけていた今日、初めて妖夢を追い詰める事が出来たのだ。最後の最後に手で防御してしまったのは惜しかったが、彼女に一泡吹かせる事が出来たので良しとしよう。

「お疲れ様、稽古はこれでおしまいよ。二人とも家に帰ってゆっくり休んで指示を待ちなさい」

落ち着きが戻って来たのでサーベルを鞘に納めていると、紫が遠い処から呼びかけた。ようやく二人きりの生活に戻れるからなのか、キラリとはたての目が煌めくのをサンカは見逃さなかった。嫌な予感がする。

「紫さん、お世話に――」

「行こうサンカ！早く早く!!」

案の定だった。彼女はサンカが紫に礼を言い終えるのが待ちきれず、背中から生えた黒い翼を羽ばたかせながら、彼を帰るために開かれた隙間の中へ光の速度で連れ去った。



「ただいまー！」

「た、ただいま」

夕日を背にして二人が家に帰ると、門の前に顔色の悪い権と文、それと数人の哨戒天狗達が待っていた。彼女達は突然空から現れた二人に驚きはしたが、すぐに焦った様子で取り囲むように集まって来て、何も無かったかと無事を何度も確認し、胸を撫で下ろした。

「お二人共無事だったんですね！取材から帰ってきたら皆居なくなっていて、私と権達でどうするか話し合っていたんですよ。ともかく何ともない様で良かったです！」

文に早口で状況を説明されたので、はたてとサンカは周囲を見渡し、空からでは分からなかった違和感に気づいた。

あまりにも静か過ぎるのだ。確かにこの時間帯は普段から人通りが少なく、いるとすれば暇人が飲み屋を渡り歩く酔っ払いくらいだが、そういった人影が全くないどころか飲み屋すら全て閉まっている。

更に道端には、たった今までそこで遊んでいたと思われる独楽やメシコが散らかっており、井戸の傍らには洗いかけの野菜が無造作に転がっていて、なにかただならぬ事態が起きた事を想起させた。

サンカは権からも話を聞いてみる。

「いつも屯してる駐屯天狗達は？何か連絡は貰ってないのかい？」

「いいえ何も。大天狗様も——」

権は何かに気づき、話を止め盾から刀を引き抜いて臨戦態勢に入った。それに釣られるようにして他の哨戒天狗達も次々と抜刀し、二人の遙か背後に睨みを利かせる。

突然どうしたのだろうか。サンカも目と首を動かして背後を見ると、里の出入り口の辺りから異質な動きで駆けてくる存在が目に入った。

68話 外道

沈む太陽を背に踊り狂うかの如く走ってくる人影は、普段は里の入り口の大門の前で警備をしている男の天狗だった。

彼は里に来たばかりのサンカに強い警戒心を向けていた人物だが、時折酒の差し入れをしている間に徐々に態度を軟化させて行き、現在では愚痴から笑い話までする仲になっていた。

そんな彼の表情が距離が近づくにつれて良く覗える事が出来る様になると、サンカは目に見えて怪訝そうな顔をした。

悪ふざけか、はたまた酔っぱらっているのか、迫ってくる彼の目は別々の方向を向いて焦点が合っておらず、更には無理に笑っているかの様に口角が吊り上がっており、涎をボタボタ垂らしている。服は小汚く、腕を振り回して走る姿はおよそ正常な思考をしているとは思えなかった。

「どうしたんだはたて？ 具合が悪いのかい？」

はたてにはその男の様子が、タタラの能力によって操られた妖夢と類似していると思えた。

特有の不快感を与える歪な動きは、彼女の脳裏に強烈な印象を植え付けており、当時の一挙手一投足が鮮明に思い出させる程だった。

はたては冷や汗が吹き出すのを感じながら、隣で警戒するサンカに上ずった声で如何にか事情を伝えると、彼は素早くスペカを取り出し、はたてを自身の背後へと隠した。

只ならぬ様子のはたてを見た文達もまた、それに倣って戦闘態勢へと移行する。

「止まれ！ 従わなければ、同胞であっても斬り捨てるぞ！」

一人が大盾を地面に固定して声を荒げながら警告すると、男は素直に立ち止まった。

盾越しにマジマジと観察していると、その体にはどうして今まで気が付かなかったのかが不思議な程の、大きな裂傷が幾つも出来ている

のが見て取れた。

一番大きい傷になると肉も抉れて無くなっており、下から白い何かが見え隠れしている。あの重傷で生きていたのだとしても、走ったりするのはまずできない筈だ。

あまりの異様さに皆が狼狽していると、男の体には目に見えて大きな変化が表れ始めた。頭と腹が不自然な程に膨れ上がり、眼孔は落ちくぼんで血を流し始める。それと共に空気は血生臭い物に変わり、不快さを感じる生暖かさを伴ってサンカ達を包んでいく。

完全に変化を終えた頃には、馴染みのある天狗の姿は無く、これまで地底や人里の近くで討伐してきた異形そのものになり果てた存在だけが、今にも抜け落ちそうな黄色い歯をむき出しにして唸り声をあげていた。

「生き残りはそれだけか？」

「！」

憎たらしく、耳にこびり付く嫌な声が聞こえたと共に、異形の隣に一瞬で男―タタラが現れた。

瞬きは一切していなかったにも関わらず、接近には全く気が付くことが無かった。もしこれが咲夜と同じく時を止める類の能力だとしたら非常に厄介だろう。

「もつ」と思っていたが、少し数が少ないなあ」

タタラのその一言が合図だったのか、異形が地の底から響く声を張り上げると、里中の家屋から異形になり果てた天狗達が一斉に溢れ出てきた。彼らはどれも欠損が酷く、もはや人型を成していない物まで混じっていた。

その中には覚えのある顔が幾つかあつたらしく、天狗達は放心する者、何故と泣き叫ぶ者、ぶつけようのない怒りに震える者と様々だ。

「ヒツヒツヒツ・・・腹が空きすぎて共食いしていたみたいだなあ？困った困った」

「里の女の子をあんな化け物に変えたのもお前か？」

「里の？なんだったか・・・」

サンカに尋ねられたタタラは、うーんと首をわざとらしく大きく捻ると、これまたわざとらしく声を上げた。人を苛つかせるのは相当に上手いらしいが、乗せられないためにも平静を保つために努力する。

「ああ、ああ、あの童か。実に楽しかったなあ」

吐き気を催す邪悪とはこの事だろう。語られた内容は正しく鬼畜の所業であった。

まだ幼気ない子供を如何にして怪物へと仕立て上げたのかを早口に自慢するタタラは、その場にいる全員の怒りを買うのにそう時間は掛からなかった。

「この外道が！」

椀が刀を振り上げて走り出そうとしたが、すぐにサンカに喉を強打されて呼吸を止められた上に、首の後ろを叩かれて気絶させられてしまった。

サンカは椀を文に預けて、帽子を深く被り直して持っていたスペカを仕舞うと、普段それらを収納しているポケットから真っ黒な紙を一枚取り出す。

黒い紙は普段使っているスペカによく似ていたが、彼の持っているどのスペカとも雰囲気やデザインが異なっており、傍に付きっ切りだったはたても、弾幕ごっこの練習に付き合っている文も見ることが無かった。

「文、皆を連れて逃げてくれ。ここは僕がやる」

「正気ですか？あの数が相手では―」

「良いんだ。急いでくれ」

「・・・分かりました。皆さん、撤退しましょう」

文はこれから起きる物事の邪魔になると判断してくれたらしく、椀を抱えたまま皆を率いて空へと登り、博麗神社がある方角へ飛翔して

いった。恐らくは霊夢を呼びに行ったのだろう。

サンカは残ったはたてにも逃げるように促すが、彼女は異形の大群を前にしても逃げることを断固として拒んだ。

「はたても逃げてくれ。ここで死なせる訳にはいかない」

「約束したでしょ？何があっても、絶対サンカから離れないんだから。貴方が死ぬ時は私だって……」

決心した強い口調で言うが、強く繋がれた手が震えている。きつとはたても大量の異形と対峙するのは恐ろしいのだろう。

「……絶対に離れないでくれよ。はたて」

「ええ」

タタラが嘲た笑い方をしながら姿を消すと共に、今まで沈黙を保っていた異形達が耳障りな叫び声を上げながら一斉に走り出した。

圧倒的すぎる物量をたった一人で相手にするのは到底不可能に思えるが、サンカは特に慌てる訳でも逃げる訳でもなく、淡々と黒いスペカの名を宣言した。

69話 怪物対怪物

本来スペルカードは、その時に思いついた光弾や光線の組み合わせや能力の特徴を生かした技を宣言し、使用するための名を記載しておくだけの物であるためそれ自体になんら効果はなく、言ってしまうばただの紙切れなのである。

サンカはこれらを弾幕ごっこ——即ちは実力主義を否定した決闘という、幻想郷におけるルールに極力則った方法で異変の萌芽を摘むべく作り上げて来たのだが、この謎の符はそんな特訓に明け暮れる日々突如として発生し、しかも符自体に何かしらのエネルギーを感じるという、全く持ってイレギュラーな存在だった。

「呪縛、常世の白彼岸」

符が溶けて無くなると、背丈の2倍近い大きさになった影法師から墨汁を垂らすように、影が枝分かれして伸びていく。影は里、更にはどす黒い血の赤を思わせる光を放っていた夕陽すらも飲み込み、完全な闇に風景を作り替える。

はたてが足元に冷たい感触を感じて顔を下に向けると、くるぶしの高さに妙に重く感じる水が流れていた。よく見れば川底は見えない程に深く、その中に朽ちた卒塔婆が立ち並んで、空にはやけに青白い三日月が浮いているのが確認できた。

「サンカ、これ・・・」

言葉を失った。こんな形で、ましてや空間をも変えてしまうスペルだとは予想外だった。一体どんな弾幕を放つのか想像もつかない。

サンカははたての声を聴くと素早く振り向いて彼女の口を手で塞ぎ、人差し指を自分の口に当てながら

「シッ」

と辛うじて聞き取れる大ききの空気が漏れる様な短い声を出した。不意を突かれた行動につい叫び声を上げそうになったが、口を塞が

れていたのもあって声は殆ど外に漏れていない。

(サンカ? 一体どうし・・・た・・・)

はたては手が届く距離にまで近づいた異形を無視し、終始無言を貫き通している彼を見て、静かにしてほしいとジエスチャーを送る意図を理解した。

月明かりのない夜でも強烈な存在感を見せる黄金色の瞳はその輝きを失っており、はたてを探すようにせわしなく動いていたのだ。恐らくは能力が発動している間は盲目になり、音だけが頼りの状況になつてしまうのだろう。互いに素早く動き続ける弾幕ごっこでは致命的な弱点だ。

彼は白く濁つたその目を睨り、はたてを安心させるべく薄つすらと笑つて見せたが、表情はとても悲しそうで、異形を攻撃するのを躊躇っている素振りすらあつた。

男天狗だつた異形は、そんな二人をせせら笑うかの如く大きく跳躍して真上から襲い掛かり、その鋭利な爪と牙で引き裂くべく迫る。

「グエッ!!ゲッ!!」

だがサンカの頭に爪が食い込むといったその瞬間、異形は下から飛び出して来た卒塔婆に撃ち落とされ、滅多刺しにされて絶命した。それを見た他の異形達は警戒してか足を止め、口々に唸り声を上げている。

「そうか、其処にいるのか」

サンカは音の出どころを確かめるために耳を傾けておおよその距離を把握すると、水中で列を成していた卒塔婆が静かに背後に現れた。

卒塔婆は朝日と見紛う強烈な光を発しながら特大の光線を左右から2回放つて薙ぎ払い、続けて濃密な弾幕を展開した。弾幕を構成する光弾や光線は数や大きさが普段の比ではなく、悪しきを断罪し、過ちを犯した者へ裁きを下す修羅の如く、絶対的に見る者を威圧的なま

でに圧倒する力強い鮮やかさがある。

はたては異形達がせん滅されていく間、炎の様に揺らめく光を放ち、後光を思わせる振舞いを見せるそれを見ていて、記憶を失う前のサンカの姿を思い出していた。

—— 受けた恩は返す。約束だ、僕はお前を必ず助けてみせる

あの一言は、何も無かったはたての人生を変えた。彼と初めて出会った時の事は一言一句覚えており、朝日に照らし出されたその姿は正に地獄に現れた仏のそのものだった。

「ギユイツー」

最後の一匹も断末魔と赤い霧だけを残して瞬く間に消え去ると、サンカは静寂が空間を支配し始める中能力を解除した。煌々と輝く後光も、月明かりが照らす空間も、徐々に薄くなって元の里の風景に戻る。

ただし異形達の姿はおろか、一緒に遊びながら外の事を聞いたがる子供達も、おすそ分けを持って談笑しに来るご近所さんも、初めて出来た友人達も、何処にもいなかった。

賑やかな筈の里も灯りのない無人の家屋だけが並び、打ち捨てられた風車が寂しそうに回っているのみの風景は、無惨な出来事を確かな現実として突きつけてくる。

「ごめんよ・・・ごめんよ・・・」

はたてが声を掛けようとすると、彼は血が混じった涙を流しながら静かに嗚咽し、何度も謝罪を繰り返していた。

余所者扱いではなく親しく対等な立場として接し、心を通わせる事が出来た彼らを消し去るのは、サンカにとって並大抵の覚悟では無かった筈だ。はたてにはその心中が痛いほど伝わってくる。

「サンカ、悲しむのは後に・・・」

サンカが破滅を望まない以上、彼の背中を押すのははたての役割

だ。

勿論殆どの里の住人が異形と化し、一人残らず殲滅されたのは悲しい。

だがタタラを止めなければ次は人里や地底等の人口密集地で同じ怪異を引き起こし、悲劇を繰り返した上に被害を拡大させてしまうだろう。そうなる前に、なんとしても奴を止めなければならない。

「ああ、分かってる」

視力が戻ったのを確認しはたてを見据えて互いに頷くと、家の中から持ってきた飛行装置を足に取り付けた。

これだけの蛮行を仕出かしたのだから、あの男を生かすつもりはない。

犠牲になった天狗達の無念を晴らすためにも、二人は文が向かった博麗神社へ急行した。

70話 深層

「しっかし、妖怪の山一大勢力とか言われてた連中が見る影もないわね」

霊夢は幾重に重ねた結界の確認と、不審者が近くに居ないか見張りつつ文に毒づくように言った。

就寝直前に大挙して押し寄せて来た天狗には驚かさされたが、遅れてやって来た文から話を聞いて、面倒ではあるが彼らの安全を確保するために強力な結界を張り巡らせていた。

この際金を巻き上げようとしたのだが、下手すれば幻想郷すら無くなりかねないこの状況でそんな野暮な事をするのはどうかと思いつつ留まった。幾ら金にがめつくとも、場くらい弁える。

「まあまあ、相手が相手ですし」

文は普段通りのらりくらりと持ち前の明るさと営業スマイルで流し、同胞達の治療の為に慣れた救急箱を受け取る。

幻想郷某所で作られた医薬品は良く効くと巷では大変好評で、軽い怪我や病気程度なら自力で治せるようにと救急箱を人里に売りに来る事もあり、それを購入して置いておく家庭は少なくない。

おかげで微妙な腕前の里お抱えの医者も過労で倒れることも減ったそうだ。

「椀、水を汲んできて貰えますか？この子を拭いてあげたいのです」

「は、はいー」

文が椀達を率いて博麗神社に来た時は、既に境内に危険を察知して里から逃れて来た天狗達が身を寄せ合っており、皆憂鬱な面持ちで憔悴しきっていた。

負傷している者も数多く居たが、持って来る事が出来た薬品や道具には限りがあるため、神社に備えてあった救急箱も文の自腹で借りつつ、より重篤な状態の者を優先して治療に当たっている。

「お二方は無事ででしょうか？」

権は暴れる子天狗の顔に付いた汚れを湿らせた手ぬぐいで拭き取りながら、この場に居ない二人を案じた。サンカに気絶させられた上でここまで連れてこられたが、冷静さを失っていた権を安全に離脱させるにはああするしかなかった為、彼に恨みはない。

「心配しなくてもサンカさんなら大丈夫ですよ。はたてもあの人がいれば安心ですし」

治療が一段落すると、文は神社の境内からやけに明るい夜空に伸びていく雲を見ながらそう言った。

空には映える紫の燐光がしっかりと確認でき、一目でそれが何者なのか分かった。

「文！権！」

「やっぱり無事でしたね・・・あの、変異してしまった方達は？」

地上に降り立ったサンカは静かに首を振ると、文から悔しさの入り混じった感情が一瞬だけ垣間見えた。どんな時でも樂觀的で飄々としている彼女でも、激しい後悔に苛まれているのだ。

実力者が揃って里を留守にしている間に襲撃され、守れた筈の民を異形に変異させた挙句自身らを倒すための道具として使われた光景は、彼女の中に測り知れない罪悪感を湧き起こさせ続けている。

「とりあえず二人とも中に入りなさい。こつちで対策を考えるわ」

「わかったわ」

鳥居から一步進むと、はたては肌が痺れる感覚を覚え咄嗟に身を引いた。後ろにいたサンカにぶつかってしまったが、彼は優しく受け止めてくれた。

結界が張られていたのを失念していたが、人外である二人が無理矢理通ろうものなら跡形も無く浄化されて黄泉に送られてしまう。内部に入るには術者に解除してもらうしか手段が無く、はたては賽銭箱に片足を載せて大幣を担いだ霊夢にさっさと解除しろと視線を送っ

た。

「分かっているわよ。ちょっと忘れてただけだから」

「ありがとう霊夢。はたて」

今の精神状態でタタラと戦うのはとても不味い。精神に乱れは気の乱れを意味し、生じれば能力や弾幕にも影響を及ぼしてしまうのだ。まずは一度小休止を挟んで落ち着こう。

サンカははたてに手を引かれ、再度鳥居を潜ろうとした。

―ベチャリ

液体が滴る音と共に、強烈な違和感がサンカを襲う。

片手に掛かる負荷が増えて目線の高さも急に低くなり、まるではたての手にぶら下がっているような感覚に陥った。彼女と繋いだ右手以外の感覚は無くなってしまったのか、四肢を動かす事は出来ず、やがて燃える様な痛みを覚えた。

「力を使いすぎたなあ？それではただの人間共と大差あるまい」

背後からタタラの声があるが、疲れているのか確認するのも億劫になってきた。サンカは泣き叫ぶはたてを不思議そうに見ながら、自然とやってきた眠気の波に身を委ねていった。



「嫌ああああああ!!!」

はたては左腕と下半身が喰われたように無くなって動かなくなつたサンカを抱きかかえ、半狂乱に叫んだ。鼓動は徐々に力強さを失いつつあり、本来彼に在るはずのない死がすぐそこで手招いている。

「貴様あー!」

返り血に染まりながらサンカから剥ぎ取った肉を咀嚼してるタタラに向けて、文は弾幕を作り出して攻撃する。

しかしタタラは極めて速い文の光弾を涼しい顔で容易く避けてしまい、鼻で笑っておどけてみせた。やはり時間を止めているのか、次の体勢に移るまでの動きや移動する軌道が目視できない。

「サンカ・・・サンカア！」

「文！サンカを河童の所まで運んで！」

血相を変えた霊夢が社から走り出して怒号を浴びせると、文は舌打ちをしながらサンカを引き剥がして沢の方角へ飛び立った。

霊夢は未だ発狂しているはたてを楯に向かって放り投げ、結界を張り直す。

「力が弱まってる今が好機だ。逃がすかよ」

「おっと、させないぜ」

文を追いかけようとするタタラの目前に極彩色の光線が射すと、タタラは涎を蛆と共に大量に撒き散らしながら空を仰ぎ、不機嫌な声を漏らした。

霊夢も見上げると、そこには月を背にミニ八卦炉を構えた魔理沙が箒に跨がっていた。彼女は笑顔でピースサインを送ると霊夢もスペルを取り出し、二人で胞子のような物を体から吹き出すタタラに攻撃を始めた。



—しっかりとしてください！サンカさん！サンカさん！・・・
声が聞こえる。此処は何所だろうか？寒くて息苦しいこの場所は？硝煙と血が入り混じった瘴気を充満させたこの場所は—

「山禍」
サンカ

名前を呼ばれて目を開けると、隣にいた男と目が合った。彼らは深い森の中、同じ意匠で統一された黒い被服を纏い、鉄製の笠を深く被っている。

「眠っておったか？そろそろ時間だぞ」

「・・・ああ、分かった」

黒い髪に人間らしい目を持つサンカは鬼を象った頬当を被ると、その手に持った身の丈程の銃に弾を込めた。

71話 未知との遭遇

未知の世界からやってきた文明を取り入れた人間は互いに殺し合い、国は混乱を極めていた。嘗て花街と謳われ栄華を極めた都市は見る影もなく、今や死体が無造作に転がり伝染病が蔓延する危険な場所と化している。

そんな乱世の中、天上の命により古い思想の象徴とされる人外を一掃し、人間が頂点に立つ近代国家としての基礎を築くための戦争が、密かに始まっていた。

「まだ来ぬか・・・サンカ、飴をくれ」

鬱蒼と茂る藪の中、叩きつけるような豪雨を浴びながら、男達は瞬きをするのを忘れ息を殺していた。サンカは今、ここを通る予定の人物を襲撃するために待機していた。

「取りすぎるなよ」

飴が入った包みを開けて差し出すと、男は2粒手にとって口に放り込んだ。

残った飴はあと2つ。また買ってこなければならぬ。

「まだ腕の事を気にしておるのか？お前ももう三十路になるといいうのに、嫁の一人貰ってはどうかなのだ？」

「余計なお世話だ。茶化してないで集中しろ」

麻布に包まれた左腕を軋ませながら悪態をつくくと、雨音に混じって遠くから人の歩く音が聞こえた気がした。隣の男にも聞こえたようで、飄々とした態度を一変させ辺りに意識を集中させている。

サンカは閉所や接近戦での扱いが劣悪なライフル銃を背中に回し、拳銃のレンコンのような弾倉を回転させながら弾の確認を行った。弾丸は5発満装填されており、いつ飛び出して襲撃しても弾が出ない事態は起こらない筈だ。

「先に行く。お前は援護を」

「承知した」

サンカはタイミングを見計らいながら藪の中から飛び出し、足音の主に銃を向けた。居たのは黒っぽい異国の服を着た妙齡の女で、黒い白目に黄金色の瞳でサンカの姿を捉える。

―間違いない。餓鬼だ。

「見つけたぞ、羅刹！」

「くっ!？」

5発全ての弾丸を撃ち込むが、弾は貫通せず体外に排出されてしまった。ハナから化け物相手に効くとは思っていないが、掠り傷一つつかないとは。予想以上の結果をこうも叩きつけられると慄いてしまう。

羅刹は目を見開くが、それが攻撃の前動作と知っていたサンカは、視線を外してサーベルを素早く抜刀し、降り注ぐ雨粒すら切断する速度で斬りかかった。

刃は音を立てて羅刹の腕に切り込まれたが、片手で使うために刀身を細く軽量に作られたサーベルでは薄皮一枚斬ることもできず、人間と餓鬼の力の差を感じさせる。

「そんな玩具で私を殺せると思っているのか！」

「人間を舐めるなよ」

右手に持っていたサーベルを左手に持ち替え、サンカはサーベルを振り上げて追撃するように叩きつけた。

羅刹は防げると思ったのか再び腕で防御したが、斬撃が加えられた瞬間に重量と威力が増した事で刃が骨まで達し、余裕たっぷりの表情が苦痛に歪む。

攻撃が効いているのが分かると、彼は満身の力を込めながらジワリジワリと骨を砕いた。このまま押し切れば腕を切断して体そのものに一太刀入れられる筈だ。更に体重をかけ、返り血に顔を赤く染めていく。

「ぐああああああ!!」

援護してくれと頼んでおいた男の叫び声だ。横目で見ると頭を押さえて呻いており、顔は雨か涙でグシャグシャになっている。

恐らくは羅刹の目を直視したのだろう。トラウマを思い出した事で発狂してしまい周囲が見えなくなってしまうていた。

やがて耐えられなくなったのか、男は自身のこめかみに銃口を付きつけて引き金を引いた。乾いた音を雨の中に響かせながら、脳漿の飛沫を上げて倒れる。

「馬鹿野郎が!!」

「よそ見!」

普段ならまず見せない隙を突かれ、サンカは強烈な蹴りをお見舞いされて木の葉の様に宙を舞う。彼は迫りくる地面に対して受け身の姿勢を取りつつ落下し、体勢を立て直す余裕も無いままぬかるんだ斜面を滑走していった。

「あと、少し・・・あと少し・・・」

土砂降りの雨の中、まだまだ幼さが残る少女は自身を励ましながら野草を摘んでいた。少女は木の枝と見紛う程酷くやつれていて、体中には火傷や切り傷、痣等が散見する。茶色がかった髪は艶を失っており、背中には一目で人間ではないと分かる黒い翼が、強烈な個性を放っている。

「い、急がないと・・・お父さんとお母さんに怒られ、ちやう」

とは言っても手元に積まれた野草の嵩はノルマまでまだまだ遠い。思い通りに動かせない指を叩きつつ、めぼしい物を千切っては藁で編んだ容器に入れていく作業を永遠と続けていた。全ては父と母に褒められるため、頑張ったねと言ってもらうためだ。

「・・・!」

と、彼女は動きを止めて耳を澄ませた。遠くから雨音に混じって乾いた破裂音が響き、何かが此方に向かって落ちてくる音が聞こえたのだ。

少女は岩陰に隠れて何が来るのか窺っていると、落ちてきたのは黒い服を着た男の人間だった。死んでいるのかピクリとも動かず、汚れた布に覆われた左手にはサーベルをしっかりと握っている。

腰から下げた物入からは珍しい西洋の医療品が散乱し、拾って売ればそこそこの銭になるだろう。

「ツ！・・・ゲホツ」

慌てて岩陰に顔を引っ込める。苦しそうな呼吸をし出したので生きていたようだ。男は衰弱しているのか荒い息を繰り返すだけで動く気配はない。

(ど、どうしよう。助けた方が?)

人の中には妖怪を狩る者もいると聞くが、放っておくのも出来ない。

そこで彼女は手ごろな枝を拾うと、恐る恐る男を突いてみた。これなら自分をおびき出す罠だとしてもすぐに逃げられる。

「大丈夫、かな?」

2、3度やってみて何の反応も無いのを確認すると、使えそうな医療品を拾い集めて手当てを始めた。

72話 回り出す歯車

「ん……う」

冷たい雨粒が顔に当たり、衝撃でおかしくなった思考が急速に戻り始める。痛みは全く無いのだが、立てないのでどこかの骨が折れたかしているらしい。

(厄日だな)

サンカはこの先どんな処罰が待っているのかと考えて、胃が痛くなった気がした。

決して失敗できないと散々釘を刺されていたにも関わらず、仲間を死なせて目標を取り逃がした上に、自身も負傷してこのザマだ。さつさと切腹しなければならぬ程の失態なのだが、サーベルも途中から折れて使う事ができず、猶更情けなくなる。

(自決用に小刀を持って来るべきだったな……ん?)

息が出来ない。顔に溜まった水を拭い取ろうと顔に触れ、頭に何か巻かれているのに気付いて、手を止める。薄く柔らかい素材で出来たそれは包帯で、手触りは普段持ち歩いている物に似ている気がした。包帯を巻いてくれた者は、今度は足の手当てをしてくれており、時々足に触れられる感覚があった。手で触れる面積が小さいので、どうやら子供らしい。

(地元の子に助けられるとはな。かたじけない)

片足を持ち上げて包帯を巻いている何者かに礼を言うべく上半身を起こすと、信じがたい光景を目撃してしまい言葉を呑み込む。片足を(下手くそながら)懸命に手当てしていたのは、敵対する筈の妖怪だったのだ。

妖怪はまだ子供で、背中から生えた翼からするに烏天狗か何かだ。性別は女で、顔は整っていて美人の部類に入るが、生々しい傷跡が多くて折角の美形を台無しにしている。

一言で言ってしまうえば醜いその天狗が、何故敵対している人間を助けたのか。不思議に思いつつ、声をかけてみる。

「おい」

「！」

何をしているのかと尋ねると、天狗は物凄い速さで距離を取った。動けないのを知らないのか、手頃な枝を持ってユラユラと振りながら威嚇している。

鍛えられた兵であるサンカにとっては滑稽に映るが、子天狗の表情は怯えており、近頃の人間がただ妖怪に襲われる存在ではないと理解している様子だ。

「そう怯えるな。取って食ったりはせん」

「・・・ほ、本当に？」

雨に消え入りそうな酷く弱々しい声だ。透き通っていて鈴を転がすような美しい声なのが非常に惜しい。

仰向けが辛くなってきたサンカが感覚のない左腕を器用に使って座ると、天狗が声を上げた。

「あ、足が・・・」

「足？ああ、これじゃ歩けない訳だ」

「痛くないの？」

「痛い？そんな感覚は俺にはない」

手当の途中で中途半端に包帯が巻かれた足を見ると、膝下の中間辺りから骨が折れて飛び出していた。なる程、これでは動けないのも当然である。

痛くないのは勿論やせ我慢ではない。生まれつき痛みを感じず、どんな怪我を負っても平気という体質のせいなのだ。おかげで随分気味悪がられたが、戦となればそれが利点になり、敵将をゴリ押しで打ち取った事も何度かあった。

「早く行け。仲間に見つかったら無事じゃすまない」

警告すると、名も知らぬ子天狗は何度か小さく頷いて飛び立っていった。子供だというのに自力で飛行できるだけの力を持っているのだから、人に似ているがやはり決定的に違う生き物らしい。

「おーい、無事かー!」

「ここだ! 足が折れて動けん!」

サンカは呼びかけを行いながらやって来る仲間に対して返事をしながら、何時までも天狗が飛んで行った方向を眺めていた。



それから数日後、彼は捕らえた人外達を収容しておく施設に居た。流石に重大任務を失敗してしまったので、早い噺が左遷されてしまったのだ。

命を捨てずに済んだのは、お偉いさんが義弟だったからだろう。かなり冷たく扱われたが、普段通りなので別に気にしてはいない。

(臭いな。掃除もしてないのか)

元々はこの国を支配していた將軍の命で作られた施設だった事もあり、中々に作りは凝っている。だが収容されていたのは犬や猫や良くわからない舶来の畜生共だったので、本来の用途で使われなくなつた今でも、鼻が曲がってしまう程の激臭が充満していて辛い。

国の予算を作つてまで保護する思想は、ご立派だが、蚊一匹潰すだけで島流しにしてしまうのはやりすぎだし、保護自体も人間の傲慢さ此処に極まれりで虫唾が走る。救いなのは次の將軍が比較的真つ当な思考だったくらいか。

「それでこんな辺鄙な所までねえ」

「よりにもよつて新大陸に逃げたらしくてな。手も足も出せないし屈辱だ。こんな場所に飛ばされるなんて・・・」

「新兵の稽古的にされなくて済んだのだから、良しとしなさい」
先導する老人は杖を突きながら、サンカの話しを聞いて苦笑いした。

結局羅刹は捕り逃した後、港に停泊していた貿易船に紛れ込んで遠い異国へと脱出してしまったと、伝令隊に聞かされた。もう追うことは二度と叶わず、下手に手出しすれば同族で殺し合いをしている余裕も無くなるだろう。

「丁度新しいのが来たらしい。見に行くかね？」

「ああ」

俄かに騒がしくなった外に出てみると、新たに捕らえられた妖怪や物の怪が自由を奪われた状態で歩かされていく所だった。

ヨタヨタと行進する列をボンヤリ眺めていると、その中に見覚えのある顔が混じっているのに気が付いた。薄汚れてきたびれた赤い服に、整った顔立ち。間違えるはずがない、数日前に治療を施してくれた子天狗だ。

「あの娘は？」

「若い衆の慰み物になるか、砕いて畑の肥やしといった所かね。精々人間様として生まれなかった自分を呪うが良い」

老人はいい気味だと笑い飛ばして何処かへ歩いて行ったが、サンカは不快感を伴いつつどうにか助け出せないかと思案していた。別に妖怪がどうなろうと知った事ではない筈なのだが、どうしてかその子供だけは生きてほしいと強く願い始めてしまい、頭から離れない。

「同情か・・・歳をとったもんだ」

彼は子天狗の後ろ姿を見送ると、思いついた計画の準備の為に、宛がわれた部屋へと向かった。

73話 選択

あの男の言うことを素直に聞いておくべきだったと、鎖に繋がれた子天狗は後悔した。

飛び立ちはしたのだが、無事に仲間と合流できたか気になってしまい、戻ってきた所を捕まってしまった。幸いにも乱暴こそされなかったが、麻袋を被せられて何処かも分からぬ場所に連れてこられてしまったので、家に帰ることもできなくなってしまった。

覚えている限りではあるが、現在に至るまで碌な目に合っていない。

仲間外れにされるので友達と言える相手はおらず、家に居れば親に頻繁に殴られる。親からの暴力は愛情表現だと教え込まれたが、よその家の子天狗達が手を繋いで歩いているのを見ると、何故か悔しくて仕方なかった。

(なんで私ばかり)

一体自分が何をしたのだと、蝋燭が照らし出す低い天井を仰ぎ、素知らぬ顔をして時間を進める世界への憎悪を爆発させた。

「やかましい鳥だな。焼き鳥にして……ん？なんだ、用事でもあるのか？」

外で見張りが何者かとやり取りしているのが聞こえ、叫ぶのを止めて聞き耳を立てる。

「どうやら相手は男らしく、最近何処かでその声を聞いた覚えがあった。」

「ちよつとな。ここに5両ある。やるから向こうに行つててくれ」

「お、今日はツイてるな。ありがとよ」

暫くして一人分の足音が遠ざかり、扉が鈍い音を立てて開く。

扉の向こうには小さなランプを持った男がいて、狭い入口を屈みながら部屋に入つて来ると、開口一番、

「窓もないのか?・・・酷いな」

と嫌そうに唸った。

男は西洋式の装備で武装しており、足音を殺して目の前まで来て屈むと、手に持ったランプを顔の高さまで持ち上げた。

思わず眩しさに目を細めると、彼は申し訳なさそうにランプを床に置く。

「お前、あの時の天狗か?」

「え?・・・」

俯いたまま上目遣いに声の主を確認すると、例の男の顔が煌々と灯りに照らされていた。胸をなで下ろし、無事で良かったと安堵の息を漏らす。

「何故助けた?殺されていたかもしれないのだぞ?」

男はとても不思議そうにしたが、それも当然だろう。彼らは立場上、数多くの妖怪や物の怪達に恨まれているのである。それなのに妖怪が憎悪の対象である彼の怪我の手当てをし、更にはその身を案じるなんて理解しがたい筈だ。

大人の前ではどうしても息が詰まるし、身構えてしまうが、それでも辿々しい言葉遣いで彼の疑問に答えた。

「だ、だって・・・苦しそうだったし、それに・・・」

「それに?」

「・・・誰かが、誰かが目の前で・・・し、死ぬのは、嫌だから」

「ふむ・・・うーん」

男はなにも読み取る事のできない能面顔のまま、底が見えない程の闇を湛えた目で考え始めた。その双眸は潤んだはたてを映していて、まるで心の中を見透かされている気分だ。

「そうか。ふむ」

暫し互いに沈黙したまま見つめ合っていると、男は唐突に右腕を上げた。殴られると思い、咄嗟に痛みには耐えるべく目を瞑る。

だが、殴られる訳でも叩かれる訳でもなく、頭を静かに撫でられる感覚を感じて目を開けた。男の暗く死んだ目と能面のような顔はなりを潜め、小動物を愛でる時の、とても優しい気な表情を浮かべていた。少し肌の荒れたその手は大きくて暖かく、どうしてかささくれ立った気分がとても安らぐ。

「感謝する。それと、お前の願いを何でも一つ叶えてやる。勿論出来る範囲でだが」

「え？」

「助けてくれた礼だ。もしあのままだったら、今頃野犬の餌になっていたからな。願いは――」

「帰りたい・・・お家に帰って、お父さんとお母さんに会いたい！」

「・・・逃がせと？」

しまった、と子天狗は顔を青くする。ついそのまま望みを言ってしまったが、捕まえた獲物を逃がすなんてお人好しでは無いだろう。

子天狗は怒らせてしまったらどうかと思いを巡らせていたが、男は慣れた手つきで錠を外し、汚れるのも構わずに片膝を着いて、そつと手を差し伸べた。

「承知した。その願い、叶えてやろう」

「ほ、本当にお父さんとお母さんに合わせてくれるの？本当にお家に帰してくれるの？」

「嘘を言っただうする。さあ、立てるか？」

誰かに心配されるなんて、誰かに手を差し出されるなんて、そんな事一度だって無かった。何かの罫かも知れないとは思ったが、今はただ、彼の傍らに居たかった。

子天狗は頷いて、あふれ出す大粒の涙を拭いながら、男の手を強く掴んだ。



「ね、ねえ、誰も私達を追いかけてこないけど・・・」

漆黒の闇が迫る空の下、二人は手を繋いで施設から抜け出した。外の風景は子天狗の記憶に新しく、男が持ち出した地図で家までの道のりも判明したため、道に迷う事は無いだろう。

何の妨害も無かったのが不思議だったが、男は

「皆やつつけたからな」

と軽く流してしまい、それ以上は語ってくれなかった。今まで気づかなかったが、夕焼けで見えるようになった彼の頬には、ベツタリと赤い粘着質な物が付いていて、まるで赤鬼を連想させる。

普段ならその風貌を見れば恐ろしいと思うだろうが、手を引かれてあるせいで妙な安心感があり、逃げようとは考えなかった。

—キユウ

張りつめていた緊張が解けたのか、何か食べさせろと腹が文句を言い出す。すると男は歩みを止め、懐から真っ白な包みを取り出した。

「口を開けてごらん」

「?・・・ッ!!」

言われるがまま口を開けると、男は包みの中から白い小さな粒を2つ取り出して放り込んできた。子天狗は驚いて吐き出しかけたが、その粒はとても甘くて、すぐに夢中になった。

「旨いか?」

「・・・うん」

「良かった。足しにならないと思うが、今はそれで我慢してくれ。もう少し歩いたら腹に貯まる物を食べさせてやる」

男は休憩がてら飴を頬張る彼女を見つめていたが、ふと思い出した

ように尋ねてきた。

「そういえば名前は？」

「ふえ？」

「名前だ。それくらいあるだろう？」

そういえばそんな物があつた気がする。名前で呼ばれた事は少なかったので忘れかけていたが、自分を自分たらしめているその文字列を、彼女は男に教えた。

「はたて・・・姫海棠はたて」

「良い名前だ。俺―いや、僕は箕作サンカ。約束しよう。僕は何があつても、君を守り抜いてみせる」

天狗を連れて部隊から脱走した彼は、もう元居た組織には戻れないどころか、追われる身に転じた事を意味している。そこまでも守り抜くと言いつつサンカに、誰かに尽くされた事のなかつたはたては一瞬で心を奪われ、気持ちが高ぶるのを感じ取った。

「どうしたんだ？顔が赤いぞ」

「な、何でもない」

鼓動が高鳴り、別の意味で息が詰まる。首を傾げるサンカに心の内を悟られないよう、はたては無くなりつつある飴を楽しむ事に専念した。

74話 コルリ

「これはまた派手にやってくれたな」

サンカとはたてが施設から逃亡した後、とある男が兵を率いてその地に現れた。語気からは怒りが読み取れるのだが、顔には無理矢理作られた薄っぺらい笑みが張り付いていて、とても不気味だった。

「犠牲者は全部で20人。これを一人で？」

「らしいなあ」

「タタラ殿の義兄は人間である筈……これではまるで……」

そこには凄惨極める光景が広がっていた。床はおろか天井まで血の海で、歩くと小さく漣が立つほどだ。

物言わぬ屍は点々と転がされており、ある者は急所を撃ち抜かれ、ある者は細かく切り刻まれている。

「まずいなあ。早く冗上を捕らえるか殺すかしないと、我々が駆逐されてしまうな」

不審な行動を取り始めた義兄を、羅刹をけしかけてまで監視し易い僻地に追いやったつもりが、僻地で監視を皆殺しにした挙句、捕らえた烏天狗を一匹連れて脱走してしまった。つくづく想定外の働きをする男だなと、男―タタラは嫌味を込めて唸る。

「タタラ殿。お言葉ではありませんが、彼の者は羅刹の討伐に失敗した男でございます。そこまでの力がある様には――」

「あれを甘く見るな」

鋭い眼光が部下を突き刺す。

サンカが羅刹を取り逃がしたのは必ず二人一組で行動する悪癖のせいであって、決して力不足だったからではない。彼は孤独を何よりも嫌うのだ。何故一人になるのを嫌うのかは不明だが、それが隙のない彼に唯一生まれる弱点であり、過去には仲間に取り込まれて負傷する事が何度かあった。

「督戦隊を編成しろ。腕の良い連中だけでな」

「承知いたしました。急ぎ手配いたします」

タタラはニヤケ顔のまま舌打ちをし、足元に転がっていた老人の頭を蹴り飛ばした。



「釣れないねお兄ちゃん」

「そうだな。もう少し待つて駄目だったら、違う獲物を探そう」

闇に包まれた山の中、二人は河原でくつろぎながら、仕掛けた釣り針に魚がかかるのを待っていた。

お兄ちゃん、というのは三十路を過ぎた彼には過ぎた呼ばれ方だが、止めるよう言っても聞かないのでそのまま呼ばせている。そのせいか警戒心も薄れたらしく、多少は二人の距離も近くなっている気がした。

(結局は自分可愛さか。我ながらなんと身勝手な)

今回の脱走は、なにもはたての為だけではない。自分も逃げたかったからこそ、計画を企てたのだ。

サンカは妖怪を狩るだけではなく、敵前逃亡した味方を撃ち殺すという、身内にすら怨まれる悪趣味な任務に従事させられる事が多かった。

拒否権はなかったと言えば聞こえは良いが、とどのつまり、心の奥底では自分の命が惜しいから逆らわなかっただけなのだろうと、今では思う。

—そんなある日、自分を先生と呼んで慕い、常に行動を共にした唯一の部下を、サンカはその手で殺めてしまった。齢12にも満たない彼を殺した時、すり減っていた精神がついに壊れ、とうとう自分が何と戦っているのかも分からなくなった。

そのせいか、今でもあの光景を毎晩夢で見るのだ。折り重なる妖怪達の死体の山の上で、もう戦いたくない、殺してくれと懇願する彼の

頭を撃つ夢を。

「お兄ちゃんにもお父さんと、お母さんがいるの?」

一人懺悔していると、はたてが何気ない質問をしてきた。子供らしいと言えば子供らしいその問いに、彼は疲れたように答える。

「勿論いたさ。でも、二人とも僕と義弟が戦に出てる間に妖怪に襲われてな。だから僕は妖怪狩りに・・・」

「・・・」

「ああ、別に妖怪が皆憎いつて訳ではないぞ。はたてみたいに優しいのもいるしな」

弁解はしたが、幼い少女は昔話を聞いて何を思っただろうか。

(子供には重い話だったか・・・気を悪くしていなければいいが)

「・・・お、お兄ちゃん」

「ん?」

はたての声を聞いて川面を見ると、糸の先が飛沫を上げながら右へ左へ走っている。紐をたぐり寄せると、大きめの魚が掛かっていた。これなら二人で食べるに不足はない。

「よし、飯にするか」

気分を変えるには食事が打ってつけた。下処理を済ませると、明るいうちに採れた山菜やキノコを背負った小鍋で軽く炒め、釣れた魚の切り身を並べて焼き目を付けていく。はたてはその様子を見逃すまいと、隣に座って真剣な面持ちで凝視していた。

「これ・・・私の分?食べていいの?」

「勿論だ。舶来の香辛料が入っているから、体も温まるぞ」

完成した料理をはたてに差し出す。食欲をそそる辛味を伴ったよい香りが、彼女の鼻をくすぐる。

はたてはおずおずと椀と箸を受け取ると、下手な箸使いで口に運ん

で咀嚼し、瞬く間に幸せそうな笑顔が広がった。

「フフツ、初めて笑ってくれたな」

心の底からニコニコしているはたてを見ると、サンカも緊張がほぐれたのか生欠伸が出た。最近はこのようにノンビリした雰囲気ですごしたのか生欠伸が出た。最近はこのようにノンビリした雰囲気ですごしたのか生欠伸が出た。最近はこのようにノンビリした雰囲気ですごしたのか生欠伸が出た。最近はこのようにノンビリした雰囲気ですごしたのか生欠伸が出た。

「そんなに旨いか？今まで何を食べてたんだ？」

「・・・糠とか野菜くずとかを、お母さんをお願いして貰ってた」

「母親も同じ物を？」

がつつきながらはたては首を横に振った。頼まなければ食事を出してもらえず、それも畜生の餌にするような物しかやらないのだから、サンカのぶつきらぼうな味付けの料理が旨く感じるのも不思議ではない。彼女の私生活は想像よりも酷そうだ。

「おかわりはあるから、好きなだけ食べると良い」

「うん！でも、これってどんな名前の料理なの？」

血色も良くなってきた彼女にそう聞かれて、サンカは言葉を詰まらせる。洋式の戦術や兵器の扱い方を学びに行った際に教えてもらった気がしたが、なんと云っただろうか。

「えーっと・・・何だったか。確かコルリって名前だったと思ったな」

「コルリ？変な名前」

はたては樂しげに肩を揺らしたが、この料理の正しい名前をサンカが知るのには、またしばらく先のお話である。

75話 サンカ秘密と子守歌

満腹になってウトウトし始めたはたてを見て、サンカは行水を勧めた。一応本人が目の前にいるので口に出すのは控えていたのだが、彼女は非常に臭いのだ。

このまま不潔なまましていると様々な問題も引き起こしてしまうため、自身の手でどうにもならなくなる前に体を洗わせたいし、傷の度合いを見ておく必要もある。

「お水冷たいから・・・やだ」

「寒いならお湯をかけてやるし、垢を落としたりら焚火に当たればいい。親に会うためにも、綺麗にしておけ」

渋るはたてに洗体用の糠袋を押し付けると、彼女は嫌々ながら手触りの悪い簡素な服を脱ぎ始めた。

言葉を失った。

始めて目にする彼女の体は、顔や四肢の怪我よりも凄惨で痛々しく、一部は化膿して黄色くなっている。これより酷い怪我は散々見てきたので馴れているつもりだったが、直視できずに思わず目を逸らしてしまった。

「お兄ちゃんも・・・」

「あ？お、おお。そうだな、そうするか」

我に返ってはたての方へ向き直る。そういえば今まで自分の顔や手も血濡れだったのを忘れていた。

彼は服を脱ぐ前に左腕を隠していた麻布を取り払うと、肘から先を丁寧に外して大切そうに地面の上に置き、慣れない手つきで服を脱いでいく。それを見ていたはたての表情がみるみる凍り付き、息を飲むのが、暗がりでもわかった。

「お兄ちゃん、それ・・・」

はたては砂利の上に横たわる腕を軽く突いた。左腕は一見すると

分からないくらい精巧に作られた木製の絡繰りで、指は親指含めて4本しか無く、関節の隙間からは歯車が光を反射して暗く明滅を繰り返す。

それに加え、以前に骨が飛び出てしまった彼の片膝下は一本の棒になっており、まだ慣れていないのか時々身じろぎをして楽な体勢をとったりしている。

見上げてみれば、焚火に照らし出された肘の付け根には金属製の覆いが被せられ、そこからはみ出たコードが風に揺られていて、まるで違う生き物のように見えた。

「近くに砲弾が落ちた時に一緒に吹っ飛んでな。どうやって動いているのかわからないが、不便だから河童から奪った物を取ってつけたんだ。この片足も、この間の怪我が治せなかつたから付けた・・・いいか？皆には内緒だぞ？」

はたては腕が取れたのがショックだったらしいが、サンカの冗談めかした一言を聞いて頷き、川に静かに浸かって全身をくまなく洗い始めた。

（そうだよな。こんな恰好じゃ俺の方が化け物だ）

人型から大きく逸脱した姿は見るに堪えなかつただろう。サンカはサツと血を洗い流し、約束通り適度な温度に沸かしたお湯を使って、彼女の痛んだ髪を丁寧に洗ってやった。



「ふあ・・・」

「眠いか？もう少し待っててくれ」

垢が落ちて綺麗になったはたては、焚き火で暖を取りながら欠伸を何度もして睡魔と戦っていた。というのも、サンカが椿油を痛んだ髪に塗り込んで馴染ませる作業を繰り返しながら、櫛でクセを治しつつ手早く纏めているからだ。時間はかかるが、元の美しい髪質を蘇らせ

るために手間は惜しまない。

「できたぞ。中々可愛いじゃないか」

改めて触れてみると、艶と良質な手触りが戻っていた。背中の中真ん中まで掛かってしまう程に伸び放題だった髪は肩の高さに切り揃えられ、左右に分けて紫の帯紐で纏めてある。

彼女は可愛いと褒められたのが嬉しいらしく、眠そうにしつつも機嫌も良さげに翼をパタパタさせた。

「さあ、疲れただろう。ゆっくり休め」

「うん……」

体の手当ては明日朝にする事にして、眠るために焚火を最小限の火力にまで落とすと、周囲の闇が深まる。火そのものは完全に消えていないので、心地よい温かさや明るさが空気を伝って来て睡魔をより一層強くした。

はたてが横になると、寝かしつけるために何となく子守歌を歌ってみる。うろ覚えだし下手ではあるが、心を込めて歌っていると、いつの間にか寝息を立て始めていた。

(やはりめんこいな)

寝姿はとても愛くるしかったがどこか寂しそうで、自然と仏心が出てきてしまう。もし今頃家庭を持っていて戦と無縁な生活を送っていたとしたらと考えると、なんとも歯がゆい気分だ。せめてこの娘だけは幸せになってほしいものであると、サンカは願った。

「止めてーいや、嫌ー」

はたて眠ってからどれくらい経っただろうか。彼女がうなされ始めたのを見て不安になり、思わず顔を覗き込んだ。瞬間、彼女の頭が顔面に向かって勢いよく叩きつけられ、首が変な方向を向く。

「い……あれ?あれ?」

「起きたか。心配したぞ」

「お兄ちゃん？顔押さえてどうしたの」

「気にするな。それよりどんな夢を見ていた？」

鼻血が出ていないか確認しつつ訪ねると、はたてはビクリとして首を横に振った。サンカは言いたくないのだなと詮索せず、気を紛らわそうと目の前の焚火を弄りながら、一気に醒めてしまった頭を落ち着かせる。

「・・・ね、ねえ。お兄ちゃんは私の事を嫌いにならない？殴ったりしない？」

はたての突飛な質問に目を丸くしつつ、真面目に考えながら回答した。

「嫌いも何も、ほんの少しの時間しか隣にいないしなんともな・・・けど、僕は弱い相手を痛めつけるのは好きじゃない。これだけは約束する」

「・・・私、お兄ちゃんが好き。沢山褒めてくれるし、いい子だつて頭を撫でてくれるから」

嘘は嫌と、ニコニコとしながら彼女は言う。可愛げのある笑顔を見て喜ばしいのだが、何故か背筋に悪寒が走った。風邪でもひいたのだろうか。

「・・・どうにも冷えるな」

「え？ちよつ!？」

「寒くてな、こうすれば温かい。嫌なら止めるが？」

「・・・ううん。このままがいい」

はたてを抱き寄せて横になるが、他意は断じてない。彼女の体温は冷え切ったサンカの体に熱を送ると共に、何をしてもしも凍り付いたままだった心の中を、少しずつ溶かしていった。

76話 アケビ

目覚めると、サンカは既に起きていて何やら煮込んでいる所だった。彼が添い寝してくれたお陰か、両親に殴打される悪夢は見ずじみ、忘れてしまいはしたものの、とても幸福な夢を見られた気がする。ボンヤリと送られて来る視線にサンカが気づくと、彼は少しだけ笑顔を作り、おはようと挨拶をした。顔が熱くなるのを感じる。

「顔を洗っておいで。傷の手当てをしたら朝餉にしよう」

指差す方を見ると、朝日に照らされて輝く川があった。手で水を掬ってみると、水は悴んでしまう程冷たく、顔を洗えば意識もすっかり覚醒して気持ちのよい目覚めとなった。これで如何にか1日頑張れる気がする、はたては息をつく。

(殴るのは嫌いって言ってたし、やっぱりお兄ちゃんは優しいな……)
彼と出会わなければあのまま殺されていたかも知れないし、人生初めての☒良い出来事☒を作ってくれたのも彼なので、その点でも感謝している。本当なら何か裏があるのではないかと勘ぐるのが普通であるが、誰からも必要とされず不幸な目に会い続けていた彼女は、唯一救いの手を差し伸べ、尽くしてくれる彼に惚れていた。

(もつと、もつともつとお兄ちゃんと……)

将来の伴侶になる為にも、あらゆる手段を尽くし、片時も離れさせない努力をするだけの価値は十分にある。今は異性として意識する素振りを見せていないが、なんとしても振り向かせたい所だ。いざとなれば力で屈服させて――

「顔は洗ったか？朝餉が出来たから、こっちにおいで」

「あ、うんー！」

サンカの呼ぶ声を聴き、はたては滲み出た黒い感情を押し込め、笑顔で駆けていく。その日の朝日は、普段より妙に大きく見えた。



適切な治療のおかげか痛みもひいてきているらしいので安心だが、残念ながら片翼が使えなくなってしまった。これでは暫くは飛べない筈なので、彼女もさぞ辛い思いをしているだろう。

「包帯は緩くないか？痒かったり、痛かったりしないか？」

「全然平気だよ。最初は怖かったけど、痛くなかったし・・・」

「そうか・・・2、3日すれば傷も治っているだろう。包帯もその時までは取るなよ？」

目の保養になる美しい山を背に、落ち葉を踏みしめながら荒れ道を行く。遙か昔に誰かが歩いただろうその道で、はたては見慣れた植物を目にして足を止め、先に行くサンカを呼び止めた。

「お兄ちゃん」

「どうした？どこか痛いのか？」

「ううん、あれ」

指差す方へ視線を向けると、色とりどりの紅葉に混じって、風景とは場違いすぎる鮮やかな紫色の果物に目を奪われた。中央から左右に割れて顔を覗かせる果肉は雪のように白く、とても甘く良い香りを放っている。

「アケビか」

珍しいなとサンカが呟く。その果物は何度か口にしたことがあるので良く知っており、大量の種が含まれているのが難点だが、極めて美味で代表的な秋の風物詩だ。かなり立派な大きさなので、きつと食べ応えもあるだろう。

サンカは再度歩き出そうとしたが、はたてはアケビを見たまま動くとはしなかった。

「どうした？あれが欲しいのか？」

「うん」

「はたて、そんな余裕は無いんだ。急がないとー」

一応追われる身なのだと言置かれた状況を話すと、彼女はとても残念そうにうなだれた。歩くように促してみるがその足取りは頼りなく、時折名残惜しそうに振り返ってはアケビを見ている。

（食べ盛りなのは結構なんだがな・・・）

いくら急かしても、これでは時間を食うだけだ。甘やかすのは良くないのだが、ここは望み通りの物を与えて納得させるしかないだろう。あれだけ食べておきながらまだ食べたがるのは、彼女の境遇のせいか、はたまた女子だけが持つ別腹という臓器のせいなのかと、サンカはため息をついた。

彼は鉄笠をはたてに被せて肩車すると、道を引き返してアケビの真下に立って背伸びをした。彼女は肉の代わりに空気が詰まっているのかと思うほど軽く、左程苦にはならなかった。

「二つだけだぞ」

「！」

気分が弾みだしたのがパタパタと顔の横で動く足で手に取る様に分かった。見上げると、はたては必死に小さな両手を上に伸ばし、実をどうにか挽ぎ取ろうと悪戦苦闘している。

（・・・ッ！いかんいかん。時間は無いんだ）

愛らしいのでもう少し見ていたい気もしたが、ノンビリしていられないのでサンカはグツと堪えた。感情を押し殺して我慢しなければならぬのは中々辛い。

「採れたー！」

屈んで降ろしてやると、はたては取ったばかりのアケビから汚れを軽く拭き取って差し出してきた。自慢がしたいのだろうと思って適

当な感想を述べるが、彼女が受け取ってほしそうにしているのに気づいて、一応訊ねてみる。

「くれるのか？」

「うん。お兄ちゃん、朝ご飯食べてなかったから・・・」

食欲が無かったので自分の分まではたてに食べさせたのだが、それがはたてには空腹を我慢しているのではないかと不安だったようで、彼女なりに気を使ってくれていたらしい。サンカは差し出されたアケビを受け取って感謝の意を伝えると、頭を撫でてやった。はたては撫でられている間恍惚の表情を浮かべ、頬を赤くする。

「はたては優しいな。お利巧さんだ」

「えへへ・・・」

はたてが照れくさそうにはにかむと、サンカはドキリとした。遙かに年下の子供なのでなんとも思わないのだが、年相応の愛らしさと不思議な気品を両立させたこの表情はすごい。包帯が目立っていないければ、さぞ美しかっただろう。

「それじゃ、早速」

くすぶる気持ちをよそに、せっかく採ってくれたのだから気持ちを無為にするまいと、アケビの果肉を口に含む。他人からの好意で物を貰うのが久しぶりなせいか、ただの果物がその時ばかりは格別な味に思えた。

「・・・お兄ちゃん」

「なんだ？」

「私、私お兄ちゃんのお嫁さんになる！」

アケビの種を吹き出す。恋愛感情を抱かれているとは思ってもなかったが、子供の言う事なので真に受けず、適当に話を合わせておく。

「そうだな、あと130年したら考えてやろう」

「・・・私は本気だよ？」

「そうかそうか」

「お兄ちゃん私を馬鹿にしてるでしょ！」

しまった、適當すぎて墓穴を掘った。サンカは小さく舌打ちをしながら、彼女に小指を差し出して渋い顔をする。

「・・・約束は守ってやる。それでいいか？」

「本当に？絶対守ってよ！」

「わかったわかった」

指切り拳万、と約束事のまじないを唱える。サンカはこんな平穩な時間がいつまでも続けばいいなど、自分でも分からないうちに顔を綻ばせていた。

77話 旅は徒然

二人は山を抜け、とある街の茶店で甘味を楽しんでいた。急ぎではあるのだが、丸一日通して歩き続けたせいかはたてが不服そうにし始めたので、機嫌をとるため、そして休息をするために立ち寄ったのだ。

「このお団子、柔らかくて美味しいね」

「ああ、そうだな」

「おにい・・・サンカ、眠そうだけど大丈夫？」

「駄目かもしれん」

はたてがホクホク顔で団子を頬張るのを眺めつつ、サンカは目を擦りながらうつらうつらとしていた。

彼自身も寝不足気味なせいか頭がよく動いておらず、この状況で野犬か狼、追剥ぎに襲われでもしたら一溜まりもないだろう。

そこで、人気が多い場所である環境を逆手に取り、敢えて此処で休息を取る事にしたのだ。遅くてもあと1日で目的地に到着するので、その前にこの鉛のような疲れを取りたかったし、いい加減固い地面とおさらばしたかった。

「宿はとつてあるから、今日はそこで休むぞ。あと少しの辛抱でお前は家に帰れる」

そう言うと、はたては小さく頷いた。

格好を見た者は皆息の根を止めてきたが、念の為お互いの服を新調し、はたての翼を麻布で隠してあるので、仮に見つかったとしても言い訳をして彼女を逃がすことができる。黒っぽい特徴的な被服も街に入っすぐ売り飛ばしたので、見つけ出すのも困難だろう。

― 勿論、戦闘になったとしても負ける事は決してないのだが。

「食べ終わったか？行くぞ」

「あ、待って」

食べきったのを見計らって会計を済ませようとすると、はたてに制止された。彼女は代金を受け取ろうとしていた娘へと駆けていく。

「えっと、その……、ごちそうさまでした」

「まあー」

勇気はいるが、歳が近そうな相手であれば話せると判断したのだろう。自分よりも小さい子供が茶菓子の礼を言うのを見て、娘はお盆で口元を隠しクスクスと笑った。

「とつてもお利巧なお子さんですね！御父上の躰が良いみたい」

「ああ、ははは……」

他所から見れば父親に見えるのか。サンカは背後で爆笑している客に舌打ちをしつつ、頬が緩みきっている娘へと代金を渡して店を出る。

「まったたく……人が増えたな。逸れるなよ」

「う、うん」

気を取り直して、闊歩する人々を縫うように通りを歩く。整備された風景は一見すると綺麗に見えなくもないが、うつすらと腐臭が漂っていて、簀巻きにされた死体が荷馬車で運ばれていくのを何度か見た。細い路地に目を向けると、乞食が転がる死体から金目の物や被服を剥いでいる。

聞けば最近になって異形が現れるようになってらしく、その犠牲になった者達なのだという。夜に出歩かないよう箝口令も出ているが、それを無視して出て行く愚か者が後を絶たないとの事だ。

はたても外に出なければその心配もない筈だが、一応言っておくに越したことはない。

「いいかはたて。夜になつたら外には出るなよ。何か聞こえたり見えたりしても、絶対に宿から出ちゃ駄目だ」

「うん……」

「……浮かない顔だな。どうした？」

「やっぱりここ、人がいっぱいいて嫌」

はたては道行く人に怯えた眼差しを向ける。確かに彼女には辛いだろうが、この道を通らないと旅籠へは行けないので妥協はできない。逸れないよう手は繋いでいるが、汗ばんでいる肌の感触からしてストレスになっているのは間違いないようだ。

「もう少しの辛抱さ。ほら、頑張れ」

サンカは少しでもはたてを安心させるために、彼女の手を強く握り返した。



「着いたぞ。布団は敷いておくから、ゆっくり休んでくれ」

二人が通された部屋はそこそこ広く、部屋の片隅には木組みが赤色に塗られた行灯が置かれていた。窓は通りと反対側に位地しているため、障子を開けば紅葉に彩られた美しい山が一望できる。

(ええと、ここか?)

サンカはゴソゴソと押し入れから布団を取り出して、行灯の置かれている場所へと持って行く。本来ならここで働いている者の仕事だが、彼らが布団を敷いてくれるまで待つていられない。

一方のはたてはと言えば、フカフカの布団に埋もれてはしゃいでいる。やはり子供は元気だ。

「そうだ、包帯を変えないとな」

無事に布団も敷き終わり、襖が閉まっているのを確認すると、包帯を片手に手招きした。膿抜きも多少はやったが、また溜まってきているかもしれないので、剥がした拍子に部屋が汚れないよう注意する必要がある。

「痒くはないか?痛みは?」

「ううん。大丈夫」

何度目になるか分からないやり取りを交わしながら、汚れた包帯を解く。その下には痛々しい傷が・・・無かった。

糸はそのまま縫われているので何所が怪我をした場所なのかは分かるのだが、それにしても綺麗に傷跡が消え去っている。天狗は人と比べて治癒能力が高いとは聞くが、他の天狗も皆こうなのだろうか。考えていても始まらないので抜糸すると、傷は完璧に分からなくなっていく。

「凄いな。少し手当てしたただけなのに、もう治ってる」

感嘆の声を上げると、はたては意外そうに首を傾げる。

「お兄ちゃんはずぐに治らないの?」

「人は怪我を治すのに時間がある。僕もこうだったら良かったんだが」

今は無き片足を、これまた今は無き左手で摩ってみせる。それを見たはたては哀しい表情になり、その日は眠るまで片時も傍を離れようとはしなかった。

78話 季節外れの蛍火

人が支配する時間から魑魅魍魎が支配する時間へと移ると共に、商店や飲食店に掲げられた提灯や暖簾が片付けられ、完全な闇に包まれる。街を行く人々の喧騒は消え去り、風が運んできた落ち葉が時々壁に叩きつけられる音だけが、部屋に響く。

「ん．．．」

冷たい月の明かりが照らす中、お茶を飲み過ぎたせいかな、はたては真夜中に起きてしまった。

時刻は丁度丑三つ時。もう一度眠ろうとしてみたが、目が冴えてしまっていて眠気は一向にやっ来て来ず、一人寂しい思いをする。

心細いので、隣で寝ているサンカを強く揺すってみたが、彼が起きる気配はなかった。昼間に見た時はかなり眠そうにしていたので、すっかり熟睡してしまっている。

「明かりは．．．あった」

やはりお茶のせいなのか、そうこうしているうちに催して来たので、廁へ行って用を足すために小型の提灯に明かりを入れる。独学ではあるが、夜中に外へ放り出される事もあったので、火の付け方から使い方まで知っている。仕方なしに嫌々覚えた知識がこんな形で役立つのはなんだか複雑な気分だ。

「うう、寒い．．．」

冷たい床板に体を震わせつつ廊下を渡り切った彼女は、肥溜めに落ちないように気を付けながら用を済ませ、改めて冷え冷えとした廊下を渡る。

夜空を見ると、大きな満月が浮かんでいて、それを眺めながら歩いていると、どこまでも追いかけられているような感覚に陥る。それが楽しいと感じていたのか、それとも不思議だと感じていたのかは分からないが、少なくとも孤独感は薄れていた。

(夜に外に出ちやいけないって言つてたけど、そんなに危ないのかな?)

ふと気になつて塀に囲まれた庭から外を覗くが、冷たい風が吹いているだけで何の気配も感じない。天狗である自身が危険な目に遭うほどの脅威が、本当に居るのだろうか?

(きつと大丈夫・・・だよな?)

体が冷えてきたのを感じ、部屋に戻ろうと薄暗い廊下の奥へと視線をやつた。すると、廊下の奥に何か光る物がフワフワと浮いているのが見え、目を細める。

大きさからすると蛍だろうか。だが今は秋も中旬、季節外れも良いところだ。

「なんだろう?・蛍さんかな?」

手をそつと伸ばすと、光球は空気に押し出されるように動き、その場で旋回したりまっすぐ飛んだりしてはたてから逃げていく。はたては不規則に飛び回る光球に段々と夢中になり、部屋に帰るのも忘れてトテトテと追いかけまわした。

息切れして止まると、光球も手が届かない範囲で停止し、誘うように近づいては遠ざかる。

「待てー!」

今度こそ捕まえてやる。寝ている人も居るのでなるべく小声で、足音も極力消すために摺り足で追いかける。するとはたては、こんな時でも周りに配慮している自分がどうにもおかしくて笑えて来てしまった。

やがて光球は玄関の戸の隙間から外へ出て行ったので、はたても後を追うために戸を大きく開いて飛び出すと、光球ははす向かいの長屋に置かれた水甕へ不安定に着地した。

「捕まえた!」

疲れた様子の光球が動かなくなったのを見計らい、誤って潰さないように注意をはらいながら、光球を手でそつと包んだ。

暫くは指の隙間からホンノリと熱のない光が漏れていたが、次第にそれは弱まっていき、しまいには何の反応も無くなる。

殺してしまっただろうか。安否を確かめる為に慌てて手を退けるが、何もいない。

「消えちゃった?」

螢は中型の甲虫だ。間違えても指の隙間から逃げられる筈はないし、何かが触れる感覚で分かる筈だ。

では鬼火か狐火だったのだろうか。しかし双方とも山の中を集団で飛び回っている場面しか見た事がないので、それとも違うだろう。なんにせよ興味は急激に失せたので、面白い物が見れたと、心の引き出しへと押し込んだ。

「帰ってお兄ちゃんにも聞かせてあげな……い……」

周囲を見渡し、顔色が蒼白になって凍り付く。あれだけキツく言われていたのに、追いかけるのに夢中で外へ出てしまった。怒られる前に急いで部屋まで戻り、サンカの布団へ潜り込まなければ――

「!」

尋常ではない悪意を背後から感じ、動きを止める。これが件の妖怪なのであれば非常に危険な状況だ。寒い筈なのに汗が噴き出る。

「はたて」

サンカの声を聴き、緊張の糸が一気に緩む。悪意も一瞬で消えたので、きつと思いい込みで恐ろしい物がいると感じただけだろう。そう思いながら、はたては振り返った。

「お兄ちゃん?びつくりさせな、い……で……」

背後に居たのはサンカではなかった。

代わりに居たのは異臭を放つ巨大な肉の塊で、下部は大きく裂けた口が大部分を占めており、あまりの醜さから、違う次元からやって来たのではないかとさえ思えた。彼方此方から生えた手足は虚空を掻き、充血して真っ赤になった目がはたてを捉えている。

「ッ！！」

叫んだつもりが声が全く出ていない。異形はそんな恐怖に震えるはたてをあざ笑うかのように、その巨体を緩慢に震わせ、サンカの声で支離滅裂に喋りつつ、徐々に口を開き始めた。凄まじい血生臭さと、赤ん坊の頭ほどある臼のような真っ白い歯が脳裏に焼き付く。

(誰か・・・誰か!!)

空を掻いていた手が一齐にはたてへと延びていく。嫌だ。死にたくない。まだ彼と、まだ好きな人と――

「助けてよお兄ちゃん!!」

絶叫すると同時に、雷に似た凄まじい轟音が響き渡った。反射的に閉じてしまった瞼を開くと、何が起きたのか大口を開けていた怪物は途端に苦しみだした。

上を見ると、宿場の屋根の上から煙をたなびかせている人物が立っている。

「絶対に動くな。弾が当たるぞ」

「お兄ちゃん！」

今度は正真正銘の本物だと喜びながら、涙声でその人物の名を呼ぶ。月に青白く照らし出されたサンカは銃を構え、怒りの形相で怪物を捕捉していた。

79話 修羅の如く

さて、どうしてくれようか。

怒りに任せて遊底を引ききると、高熱を帯びた薬莖が勢いよく排出され、屋根を伝って落ちて行つた。サンカは転がり落ちたそれを目で追いつつ、胴欄から新しい弾丸を取り出して銃に込め、乱暴に遊底を押し戻して射撃準備を整える。

(あの娘に手は出させない・・・傷一つつけてなるものか！)

瞬きや呼吸、その他邪魔になる物の全てを止めてぶれと隙を減らし、一寸先の闇へ狙いを定める。

へたり込むはたての前で踊るようにもがき苦しむ肉の塊は、元は何かの、例えば狐や猿等の霊だったのだろう。あの奇怪な見てくれは、片っ端から人間を喰らい続けた結果、人が大なり小なり持ちうる業を受け止めきれなくなり、やがてそれらに吞まれた結果出来てしまった成れの果てなのだ。

本来なら人目に付かない山奥に居るべき存在だが、何かの弾みによつて人間の味を占めた事で街まで降りて来てしまったのだと予測できる。もし仕留め損ないでもすれば、今後数百年にかけて災いをもたらす筈だ。遭遇してしまつたからには逃がす訳にいかない。

「ギイイイイイ!!」

「うるさい」

頭に直接響いてくる耳障りで不快な奇声に苛立ちながら発砲し、鼻に付く硝煙の臭いを嗅ぎつつ、間髪入れずに次の弾を手取る。

基本的に物理的な攻撃は物体を透過してしまふ霊体を倒す事は出来ない。だが力を増強した事で実体を得た霊には銃弾が良く通るので、遠慮なく鉛玉をお見舞いできた。

サンカは残弾を確認しつつ、何所が頭かも分からない異形へ集中砲火を浴びせる。

「ゲアアアアア!!」

「む」

10発目を打ち込んだ辺りで、青白い光球がポツリポツリと現れ始め、異形を包んだ。螢火を思わせるそれらの光球は徐々に数と光を増し、サンカ目掛けて音も無く接近してくる。

「ほう。こんな事もできるのか」

異形は予想以上に力を付けていたらしい。サンカは驚いて感嘆の声を上げると共に、弾幕を形成できるのかと感心した。

弾幕は大量の霊力とそれを制御できる高度な技術が無ければ展開できず、こんな格下も良い所の存在が使つてくるとは思ってもいなかった。

良く見れば天狗の様な名有の妖怪と比べれば見劣りするし、遥かにゆっくりとした動きではあるが、弾幕としてはしっかり機能している。まだ操作は不慣れらしいが、放置して能力を意のままに使えるようになれば脅威となるので、ますます野放しにしておく訳にはいかなかった。

サンカは射撃を中止して立射姿勢を解くと、屋根伝いに走りながら弾幕を回避する。光弾が着弾した瓦は粉々に吹き飛んで頬を傷つけるが、彼は怯む事無く銃を異形へ向け、揺れを補正しながら発砲した。ダムツと鈍い音を立てて弾丸が引っ掛けるように貫通すると、異形は勝てないと悟ったのか、弾幕による攻撃を中断して敗走を始める。

サンカはそれを見逃さず屋根から飛び降り、背後から容赦なく追撃を加えながら距離を詰めていく。一発、また一発とその身に穴が開く度に悲鳴を上げるが、彼は慈悲を与えず、暗い闇を湛えた瞳にそれを映しながら、銃身が赤く焼き付いたライフルの銃床で殴打しつつ、サーベルで何度も切りつけた。

「この程度か。弱い弱い」

やがて虫の息となったのを確認すると、彼は顔に付いた血を拭い取り、サーベルを納刀してはたての元へと急いだ。彼女の表情は暗くて

窺い知れないが、怪我等は特にしていなそうだ。

「はたて」

「お、お兄ちゃん!!」

名前を呼びつつ顔が見える距離まで近づくと、はたては顔中が涙やら鼻水やらでベツチヨリ濡れていた。サンカは気にすることなく彼女を懐に迎え入れ、悪い意味で目立つ翼を麻布で隠し、軽く頭に手刀を入れた。うぐつ、と声上がる。

「馬鹿者。あれだけ出るなど言ったのに何で出たんだ」

「・・・ごめんなさい」

「分かればよろしい」

「夜中になんの騒ぎだ!やかまし・・・うわっ!」

「なんだこりゃ!?!」

銃声で目が覚めた住人達が出てきてしまった。幸いにも異形は絶命していて動く気配はなかったが、誰かに見られる前に死骸を処理する事は叶わなかった。

追っ手も話を聞きつけてやってくるだろうし、仕方ないので彼等に処理を押し付け、騒ぎに乗じてこの場を離れる事にする。

「おっさん、何があったんだ!」

「何でもないから、男共を呼んで外まで運んで燃やしてこい。また動くぞ」

冗談混じりで脅すと、話しかけてきた若者は慌てて誰かを呼びに走っていった。これで夜間の外出も自由に出来るので、彼らにとってもいい方向へ物事が進んだはずだ。

(結局眠れなかったな)

今の自分はさぞ酷い顔をしているのだろう。目頭を押さえながら、サンカは不機嫌そうに唸った。



「まったく、何時まで悔やんでるんだ。事情は分かったし、目を離れた僕も悪い」

「で、でも……」

無事に街を出たはたては、げっそりしているサンカを見て強い罪悪感と恐怖を抱いていた。気にしてないの一点張りだが、どうしても親の影がよぎってしまうのだ。

サンカは何か察したのか、寝ぐせの立った髪を手で潰す。

「過ぎた事だ、そんなに暗い顔をするな。次は僕もはたても気をつけておけばいい」

「……うん」

「まだ不安か？」

「……ううん。大丈夫」

「うむ」

頭をワシャワシャと撫でる。叱りはするが、強く叩いたり声を荒げたりは決してしないサンカを見て、はたては自分の両親とは違うと思っただ。

どんなに些細な失態でも重箱の隅をつつくように糾弾し、思い通りにならなければ痣が出来るまで殴り続ける。そんな親と比べて、本心からと容易に想像できる優しい叱責は、耐えに耐えて凝り固まった彼女のシコリを消し去っていた。

80話 汝は鬼神なりや

「んゝ．．．」

「あんまり顔を近づけていると疲れるぞ」

はたては風景には目もくれず、紙に書かれたひらがたと睨めっこを続けていた。実は苗字をどう書くのか聞いたのだが、漢字どころかひらがなの読み書きも出来ない事を知り、こうして文盲で苦勞させない為に勉強させているのだ。

最初は嫌がるかと思つたが思いのほか熱中しているので、サンカは分からない文字を教える以外は口を挟まず、より勉強に集中できるようにおぼつて移動する。

(まさか寺子屋に行つたことがないとはな)

彼女は頭がいい。数分もせずにある程度の文章を読めているので、将来は立派な天狗になるだろう。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、これなんて読むの？」

顔の前に紙が広げられ、視界が遮られる。こうして間近で見ると、大量に書かれた文字は呪いの文か何かに見えてしまい、思わず顔をかめてしまう。

はたてはそんなサンカに対して教えてほしい一文字を指し示しており、解答を心待ちにしているようだ。

「これか？えーと．．．ああ、これは、ゝだ」

「ゝゝって言うの？．．．わかった！」

理解が出来たのが余程喜ばしいのか、キヤツキヤと声を上げて背後ではしゃいでいる。

これが本来の性格なのであれば、随分と抑圧していたのだなと思えるくらいには明るくなった。怯えもすっかり無くなっていて、初対面の時と比べると印象ががらりと変わっている。なかなか好奇心旺盛で無邪気、そして途轍もない愛くるしさは、引き締めていないと頬が

勝手に緩んでしまうくらいだ。

(可愛いな。子供がいる親というのは、こんな気分なのか?)

これだけ懐かれてしまうと、どうしても別れるのが惜しくなってしまう。恐ろしい事にも、ただ一緒に居られる時間を伸ばしたいが為に、彼女の両親を葬ってしまおうと画策している自分さえいるので、自制が効いている間に自己暗示を繰り返す機会が多くなった。

(俺は、俺はどうすれば……)

否、悩むべきではない。所詮は人間で追われる身なのだ。高望みも大概にしておくべきだろう。

「ねえお兄ちゃん」

「……ん?なんだ?また分からない文字があったか?」

「ううん。あれ」

自問自答を止めて不思議そうに指差す方角を見やると、そう遠くない場所で何かが光っていた。光の発生源は動いているらしく、チカリ、チカリと明滅を繰り返している。

「まずいー」

サンカはほぼ反射的にはたてを振り落とし、左腕で急所を防御した。直後、鈍い音と共に強い衝撃を覚え、遅れて乾いた竹を割るような音が山に響き渡る。

聞き慣れたその音は、間違いなく自分が所持している新式銃の発砲音と同一だ。ただし、距離は本来の有効射程のおよそ倍。鑑みるに、地形や風向きさえ味方につけた射手だと判断でき、そんな腕の良い人物を雇える組織は、考えなくてもすぐに想像がつく。

「うええ……」

「泣くのは後だ。逃げるぞ」

顔から地面に突っ込んで半泣きになっているはたての手を引いて、

射線の外へ出るために急な斜面を駆け降りる。発砲音から割り出した距離からすると、義弟は相当優秀な人材をかき集めたらしい。

はたても険しくなった面持ちでどんな状況か察したのか、恐怖に脅え、不安そうな顔をしている。いざとなれば戦いは避けられないが、はたして丸腰で人を殺した例のない彼女を守りきれぬだろうか。

（狙っているのは俺かはたてか両方か、いずれにせよ難儀だな。けど・・・）

追っ手が一人だけとも限らない。サンカは耳を澄ませ、全ての感覚を森と一体化させるように広げていく。聞こえて来るのは木々が風で揺れる音、川のせせらぎの音。そして――

「チイツー！」

視界の端に鈍色に光る物が迫るのを確認し、咄嗟にライフル銃で防御する。衝突と共に火花を散らしてライフルの銃身が歪み、生身の右腕が悲鳴を上げる。

「箕作サンカだな？その命頂戴する！」

斬りかかってきたのは黒服を着た男で、容姿は餓鬼の特徴を有し、顔に刻まれた大きな傷跡が印象的だった。

二人は暫し睨み合いをした後、サンカが男の凶器を弾き飛ばし、がら空きになった腹部に蹴りを入れようと足を上げる。だが男はそれよりも早く脇腹に拳をぶち当て、攻撃を不発に終わらせた。お互いに適切な間合いを取るために後ろへ飛びのく。

「餓鬼か。厄介だな」

「とぼけるでない。貴様も似たようなものであろうて」

「お前と一緒にされたくはない。俺は人間だ」

まるで応えていないと分かり、男が手を挙げて合図した。すると、木の後ろや岩の物陰から同様の格好をした男らが現れ、一斉に刀を抜いた。皆人間らしく、数は6人ほど居るため、単独で相手をするには

分が悪いかもしれない。

「・・・はたて。これを持って離れている。いざとなれば教えたとおりに使え」

「う、うん・・・」

彼女ヘケースに収まった拳銃を渡し、銃身が拉げたライフルを捨ててサーベルを抜刀した。その刀身は街を出る前と比べると大きく異なっており、刺突に適した軽量で細身な型から、斬撃に適した日本刀型へと変わっていた。

「復讐心や忠義を捨てて、敵である妖怪を生かすのか？」

「どうでもいい。俺は虐殺を楽しむお前らに辟易してるんだ。これじゃ俺の親父とお袋を喰った野郎と大差ない」

「崇高な我々が下賤な妖怪共と同じだど!? 戯言を抜かすな!」

なんとなしに発した言葉が癩に障ったのか、餓鬼の配下らしい男が指示も待たずに一人で斬りかかる。だが彼は特に動じず、相手が刃を振り下ろすより早く、最小限の動きで腕と首を同時に切り落として無力化した。返り血が顔を赤く染めていく。

「成程、その覚悟は本物らしいな・・・切り捨てろ」

異質な気迫が空間を支配した状態は、かくも息苦しいのである。

強い殺気を読み取ったサンカの目から光が消え、能面を想起させる冷たい表情へと変化した。はたては肌が粟立つのを感じ、気づかぬうちに数歩後ずさる。

「ようやく護る相手を見つけたんだ。誰にも奪わせやしない!」

確かなる覚悟を胸に、彼は鬼神の如き咆哮を上げた。

81話 舶来の剣

彼らは逃亡者の身体的状態を考慮し、それに合った戦術を想定していた。ただの人間、ましてや義手義足という大きなハンデがある以上、発揮できるであろう力はたかが知れており、数人でかかればすぐに勝負がつくと楽観的に考えていたのだ。

だが現実とは想定とは大きく異なっていて、見通しが甘すぎたとすぐに痛感させられる事となった。

「なんと優雅な・・・あれが異国の剣術だと言うのか？」

「見惚れている場合か！気をしっかり持て！」

凜猛にして優美。その言葉がピッタリな程に、彼の太刀筋は洗練されている。剣を振るう時に生じる無駄は極限まで削ぎ落とされ、足の運びから呼吸まで計算されつくした動作は、神前で舞を披露しているかのような堂々とした美しさがあり、殺陣という言葉に疑問符が付いた。

更には敵に余計な苦痛を与えないよう的確に急所を狙って即死させているのだが、狼等の肉食獣が獲物を仕留めるような荒々しさは決してなく、寧ろ繊細な印象を与える攻撃は、その場にいる誰もが魅了されている。

「綺麗・・・」

おぞましい妙な気はちらほら漏れ出ているのだが、それすらも相俟って危うい儚さを覚えてしまい、殺し合いの最中だというのも忘れ、はたてもついつい見惚れてしまう。戦は血生臭く陰険な物だと考えていたが、こうも不快にならない戦も有るのだろうか、彼女は子供ながらに思った。

「ばっ、化け物がああ！」

「・・・」

刀を真っ直ぐ構えて呐喊してくる敵を前に、サンカはサーベルを一

且納めて目を瞑り、柄に手を掛けたまま意識を指先へと集中させる。全ての音が遠ざかり、自身の心音と呼吸が大きく聞こえ、直にそれすらも聞こえなくなると、より意識だけが鋭角になって行く。

(遅いな)

誰かが言っていたが、時を斬れるようになるには二百年は掛かるらしい。人間にはまず達成不可能な領域であるが、この事象がもし刻を斬るといふ物なのであれば、人外が気の遠くなる修行を重ねている間に、既に達成していた事になるのだろう。

あと少しで切っ先が顔に突き立てられるその刹那、刀を振り上げた敵は、サンカの目前で崩れ落ちていった。

ほんの一瞬の出来事ではあるが、彼は能力を使つた訳では無く、その攻撃の瞬間を見ていた者達が認識するよりも遥かに速く動き、首の皮一枚を残して斬り伏せたのだ。

「配下の者は皆死んだ。後は大将首の貴様だけだ」

息を整えると、刀身に付着した血糊を振るい落とす。岩に腰かけていた餓鬼も、余裕綽々といった具合で観戦していたのだが、現在は陰しい面持ちでサンカを睨みつけている。

「なかなかやりおる・・・敵ながら天晴れだ」

餓鬼は襲い掛かって来るサンカの後ろへと攻撃を躲して回り込み、振向きざまに彼の顔を掴んで口を大きく開く。サンカは腐臭を嗅がされて嫌な顔をしたが、内部で揺れ動く小さな火を見ると顔色を変えて、顔面を掴む餓鬼の腕を切り落として頭を下げた。

ボウツ、と轟音を立てて周囲が明るくなる。背後に尋常ではない熱を感じ、飛び散る火の粉に肌を焦がしながら、周囲が文字通りの焦土と変わって行くのを見て、餓鬼の能力を知る。

「火焰・・・そうかお前が針口か」

炎を吐き出し終わるタイミングを見計らい、顎を蹴り上げて隙を作

りつつ、間合いを取って相手を視界に収めた。はたてが無事か気になつて見てみれば、彼女は木の上の方へ逃げており、餓鬼―針口を動揺した目で見下ろしている。

「名を知っているとは、貴様も勤勉な」

「黒い嘶はよく聞いている。逃がすと後が面倒だ。ここで倒されてもらうぞ」

「面白い。やってみろ人間風情が！」

腕を再生させて再び炎を吐き出す。逃がさない工夫のつもりか先程と比べて火が左右へ大きく広がっており、横へ逃げるのは愚策だ。

そこで、サンカは炎とは逆の方向に逃げつつ、岩を盾にして体を小さくした。直接焼かれはしないが、周囲が熱い。

(頭を狙えるか? いや、サーベルじゃ無理か)

強い生命力を持つ餓鬼を倒すには頭を一撃で消し飛ばすか、能力を使わせて疲弊させたところを倒すかの二択しか存在しない。可能であれば後者が望ましいが、相手の霊力がいつ尽きるか不明瞭なので、前者しか選択は無い。

だが、遠距離から攻撃しようにも銃器は預けるか棄てるかしてしまつたので肉薄せざる終えず、体を焼かれる覚悟で挑まなければいけないだろう。であれば、奥の手を使ってみるのも手だ。

(これつきりだから使いたくはないんだが・・・やるしかないか)

サーベルを納めて義手のカバーを外し、内部に張られている赤い紐に指をかける。機会は一度だけ、外せば後は無い。

「見つけたぞ! 丸焼けになるがいい!」

覚悟を決めると、頭上から声が出た。すぐさま仰向けになつて左掌をまつすぐ突き出し、指の隙間に針口を捉えた。その口には火がくすぶり、いつでも火焰が吐き出せる準備が整っている。

(落ち着け。確実に当ててるんだ・・・今だ！)

充分に引きつけてから紐を引っ張ると、けたたましい音を立てて掌から散弾が撃ち出され、針口の顎から上が柘榴のように弾けた。義手にビビが入り、だらりと指が垂れさがる。

(当たった！)

体を捻って早急に起き上がると、針口の死骸が粉々になった肉片と共に落ちて来た。針口はジタバタと暴れていたが数分して大人しくなり、みるみる溶けて消え、気づけば静寂が戻っていた。

思い出したようにダメ元で指を動かそうと試みるが、射撃の反動で異常が生じたらしく、一本たりとも動かすことができない。直す手段はないので付け根ごと腕を外し、膝の上に置く。

「ポンコツめ・・・」

「お兄ちゃん！」

「・・・はたて、悪いが手当してくれないか？片手が使えないんだ」
駆けてきたはたてに義手を持ってユラユラと振ると、彼女は半泣きで手当てをしてくれた。何度も謝られたが、腕の一本を犠牲にして彼女が無事なら本望だ。

(もうすぐお別れか・・・)

彼女を送り届けたら、次は何をしようか。サンカは針に糸を通そうと格闘するはたてを見ながら、気づかれないように憂鬱な声を漏らした。

82話 はたての駄々

「あと数刻で里に着くから、そこでお別れだ。見送りは門の前までしてやろう」

そう告げると、はたては中身が無くなった左側の袖を強く掴んで立ち止まり、首を大きく横に振った。

親と会う気が失せたのかと思っただがどうやら違うらしく、別れれば二度と会えなくなってしまうのではないかと考えてしまい、不安になつて起こした行動だった。

説得を試みるが、彼女は何を言っても聞こうとはしてくれず、一緒に住もうと駄々をこね始めて話にならないし、押し問答を繰り返しているうちに泣き出しそうになる手で手に負えない。

「やーだー！ずっとお兄ちゃんと一緒にがいい！」

「そうは言っても。まいったな、僕は天狗達と生活は出来ないぞ？」

「じゃあ、お兄ちゃんはこれからどうするつもりなの？」

「それは、その……」

潤んだ声で痛い所を指摘され、苦しそうな顔で別れた後かと頭を抱える。確かに彼女とはずっと一緒にいたい。それは同じ気持ちだ。しかしながら、天狗からすれば野蠻極まりない種族である人間、それも妖怪を狩り殺す事を生業にしていた男を受け入れてくれるとはとても思えない。例え彼らが妖怪ではなく同じ人間だったとしても、身内を殺めたかもしれない危険人物を受け入れて共存しようとは考えないだろう。

そんな環境下の元、全方位敵だらけで孤立無援、それも四六時中付け狙われる生活を送れるだろうか。口だけで言うなら易いが、一生追い回されるのはかなり堪える。寿命で迎える死よりも、嫌気がさして自ら人生に幕を閉じる方が速そうだ。

「どうするっ…行く当てはないから……いやしかし……」

どうしようかと何度も呟きつつ、額を指で叩きながら右へ左へとウ

口ウロする。それを見るやいなや、彼女はニツと口角を僅かに上げ、腕を強く引つ張った。転びそうになったのでバランスを取るために前のめりで2、3歩歩くと、はたてが振り返る。

(っ！・・・このチビ助！)

してやられたと思った。彼女は嘘泣きでサンカを動揺させ、本心を引き出させたのだ。誰から教わった訳でもないのに、何所で覚えて来たんだらうか。

「やっぱりお兄ちゃんも寂しいんだ〜？心配しなくていいよ？私がお兄ちゃんの場合を作ってあげる。ついて来て〜！」

更に腕を引つ張られる。抵抗しようものなら引きちぎれてしまいそう。そうならない為にも、サンカは彼女の歩幅に合わせる。

「お、おい」

「大丈夫だよ！ちよつと怖いけど、私がお父さんを納得させるから安心してて！」

「いや、あのな・・・」

「駄目なの？お嫁さんになる約束だつてしたんだから、絶対に傍に居てくれるよね？それとも・・・私の事、嫌い？」

今まで死線を何度も潜り抜けて来たが、肌が粟立つくらいのも極めて強烈な悪寒を覚えたのは初めてだ。彼女は年相応の子供らしく笑ってこそいるが、目は笑っていない上に光がなかった。声も心なしか威圧的で、本当に子供なのかと疑わしくなる。

腕を掴む彼女の手には力が少しづつ入っていき、ミリミリと音を立てて締まっていく。血流が悪くなったのか、掴まれた部分から先が青くなり始め、あつという間に死人の色へと近づいた。

(はたてが怖いのか？この俺が？)

寒気として発現した感情が恐怖心だと気づくのに、そう時間はかからなかった。それまで抱きもしなかった恐れはジワジワと体を支配

し始めており、終いには思わず死を覚悟してしまった。

「どうなのお兄ちゃん？ねえ？ねえ？」

「わ、わかった。今回は厚意に甘んじよう・・・手を緩めてくれ」
「やったあ！」

力を緩め、今度は心の中から笑ってみせた。寒気も消え、サンカの知る愛らしいはたてがそこに居る。

「早く大人になりたいなあ。そうすればお兄ちゃんと・・・」

人間が妖怪と婚約関係になったという話は文献にも残っているが、それにしても余りに歳が離れすぎてから後悔しないうちに考え直した方がよい。言いたかったが鼻歌まで歌い始め、軽く跳ねるようにして先を行くので言うに言えなかった。それにまたあの目を向けられると想像したら、自然と出る声も出なくなる。

しかし、親にはなんと伝えるつもりだろうか。直球で約束（達成できそうにないので守る気は最初からないのだが）事を伝えて家に置くように懇願するのであれば、とても状況がまずくなる。年端もいかぬ子供を誑かしたとなれば、最悪頭からボリボリと食われるかもしれない。生きたまま食われるのは願い下げだ。

（面倒な事になったな）

たまに聞いた彼女の私生活からすると、親は相当なロクデナシの可能性が高い。いざとなれば自分だけでなくはたても守れる自信はあるが、騒ぎを大きくしないためにも武力で制圧する真似は控えるべきだろう。

右手とは反対側の手で頭を掻こうと腕を上げ、義手が無いことを思い出して溜め息をつき、利き手である右手で頭を掻く。

「お兄ちゃん？」

はたてが呼んでいる。サンカは何でもないと目で返し、彼女の赴くままに荒れ道を歩いた。



「やはり強い。が、まだ能力は使えんか」

二人が通り過ぎた後、松の木が膨らんで人型になり、やがて人間らしい質感になる。一目見たら忘れないであろう嫌なニヤケ面は、万人に不快感を与えるだろう。

「あの天狗が兄上を変えたか・・・喰らうまで楽しみだ」

涎をボタボタと垂らす。男は手にしたライフルを呑み込むと、風景に溶けて消えた。

83話 落日の下に

とうとうたどり着いてしまった。堂々たる風格を漂わせる漆塗りの大門をくぐり抜け、松明が煌々と照らし出す里へ二人は踏み込む。石畳が敷かれた大通りに宿や茶店が並んでいるのは人街と同様だが、規模がどれも巨大で、往来する天狗達には活気がある。当たり前ではあるが、彼らには皆黒い翼か白い尻尾が生えていて、そういった物のない、所謂人間らしい姿をした存在はいなかったし、かと言っておどろおどろしい風景という訳でもなかった。

(なんとというか、思っていたよりも普通だな)

はたてに手を引かれながら、サンカは麻布の隙間から周囲を伺う。彼は人間であるため、話を通す前に正体が露呈して騒ぎが起きる事を考慮し、暫くは麻布を被ってやり過ぎす事に決め込んでいた。本当ならこんな場所に長居はしたくないのだが。

「ん？おい、そこ」

道端で飲んだくれていた天狗達から声を掛けられ、その中から一人の男が徳利片手に千鳥足で歩み寄って来た。まさか早々に正体がバレてしまったのかと思つてサーベルに手をかけたが、男はサンカには目もくれず、隣にいるはたてを見て目を丸くした。

「おお、はたてじゃないか！今までどこに行つてたんだ?!」

「あ・・・お、叔父さん」

呼び止めた烏天狗ははたての親戚だったらしく、彼女はどもりながらもやり取りを始めた。酷く怯えているのが気かりだが、その親戚が手を出す気配は今の所無いので傍観に徹しつつ、警戒は強めておく。酔っ払い相手なのでなかなか話は終わりそうに無い。

(しかし、一体これはなんの匂いだ?)

サンカは暇を持て余しつつ、辺りを漂う香りを嗅ぎながら眉をひそ

めた。しつこい脂の匂いからすると肉を焼いているらしいが、それに加えて形容しがたい臭気も感じ取れる。彼らが吸っている煙管が発生源らしいが、煙草にしては匂いが違い過ぎる――

「なる程・・・兄ちゃん人間なんだな、ついて来いよ」

思考を遮られ、顔を上げる。男はニタニタ笑いながら親指で薄暗い路地裏を指し示し、先に歩を進めていった。はたてに聞いてみれば、事情は理解したと反応した所から考えるに、一緒に説得してくれるらしいとの事だ。

(何かくさいな)

嫌な予感はある。だがこの場で油を売っていても仕方ないし、一人で行かせるのも一抹の不安があるので、後を着いていく事にした。

幸いにも路地では旅路で訪れた街のように死体は転がっていないかったが、何かしらの病に犯されたらしい者達が、莫塵の上で今にも事切れようとしている。しかし、如何にも息絶え絶えな様子にも関わらず、何故かその表情は明るく、不審な挙動をしている者もいるのが妙に引っかかった。

「着いた着いた。さあ入れ」

訝し気に路上の者達を観察していたが、路地が急に広くなり、とある屋敷の前に出た。屋敷は一目で分かる高級そうな造りであるが、周辺の重い空気もあつてか不気味な雰囲気を漂わせており、立ち入るのを躊躇してしまう。

「歓迎するぜ兄ちゃんよ。でだ、知ってる事全部話してもらうぜ」

叔父が態度を一変させた。同時に後頭部へ強い衝撃を受けて膝をつくと、皮膚が切れたのか、生暖かい感触が首筋を伝って滴り落ちて行く。サンカは騒ぎが大きくなるのも辞さず、反撃のため拳銃を抜き取ろうと腰へ手を伸ばした。

が、伸ばした手は普段拳銃を下げている場所を素通りした。おかし

いと思つて手元を見ると、ある筈の拳銃がケースごと消えている。そういえばはたてに預けたままだったと思ひ出したところで、首を人間の比ではない握力で締め付けられ、意識が混濁し始めた。呼吸ができないのもあつて体も満足に動かせず、ただただなされるがままだ。暗くなつてきた視界の先には、自身の2倍の巨軀を持ち、筋骨隆々な腕に返り血を付けた男の天狗がいる。

「は……たて……」

サンカは叔父に押さえつけられて泣き叫ぶ少女の名を呼びながら、暗黒の世界へと意識を落とす。



「このクソガキがあ！」

怒号と共に風景が一回転して床に叩きつけられる。両親がいる部屋へと連れてこられたはたては、体中に青痣を作っていた。叔父は彼女を放り込んだ後、母親から阿片膏を受け取つてさつさと帰つてしまったし、母親と言へば、暴行を受ける娘には目もくれず、紫煙をくゆらせ、鬱陶しそうに小判の枚数を数えている。

そして今、はたてに暴行を加えているのは彼女の父親であるが、はたてには血のつながりはなく、本当の意味での父親はとつくの昔に死んでいた。

「どこ見てんだああ!？」

顔に蹴りが入るが、はたては鼻血を出しながらも泣きそうになるのを堪え、父親を睨みつけた。サンカを家で匿うお願いをするつもりだったが、家主の父親は酒に酔つていても話なんてできないだろう。

「チツ……ガキがなんて目をしやがる」

父は初めて見る娘の反抗的な態度に怯んだのか、唾を吐きつけると

部屋を出て行く。

(・・・お兄ちゃん)

はたては二人に対し、生まれて初めて強い憎悪と殺意を抱くと共に、連れ去られたサンカの身を案じた。あの図体の大きい男は親の何方かが雇ったと思われるので、この屋敷の座敷牢辺りに閉じ込められている筈だ。

親の言動や常識が必ずしも当たり前ではないと、サンカと過ごした短い時間でうすうす察していた。それでも彼多少は残っているだろう親の良識を信じて此処まで来たのだ。だが―こんな男を父として慕っていたのか、こんな女を母として慕っていたのか。今となっては自分までも憎たらしく、恥ずべき存在だと感じてしまう。

(こいつらのせいで・・・)

はたては顔に付いた唾を拭きとって起き上がり、我関せずの母親へと軽蔑の眼差しを向け、自力で手当てを始めた。

84話 返り討ち

座敷牢にて、サンカは自由を奪われて拷問にかけられた。拷問は小一時間続いたが、サンカがあまりにも無反応過ぎたせいか天狗達の方が消耗しており、流血しっぱなしの彼を置いて小休止を始めていた。

「どうだ人間の拷問は？」

「胴の皮半分剥いで両足を挽ぎ取っても、うめき声一つ上げやしねえから気味が悪いいや。本当に人間なのかよ」

「じゃあエレキテルは試したのか？あれで痛がらない奴は・・・」

電気を流したって無駄だぞと、声には出さずに重たい瞼を開けると、牢の外で烏天狗が二人いるのが見えた。

表皮を剥がされたせいか体の右半分に不快な感覚を覚えたし、オマケに左側の視界が消えていたが、これもすぐに慣れるだろう。

（残忍な真似をしてくれるな、全く）

はたてなりの良心で連れてこられたので彼女を攻める気は全くなく、寧ろ初めて出会った時とは真逆の立場だなど考えるくらいには樂觀だった。あの時と違おうとすれば、腕が天井から吊るされていないのと、連れ出してくれる相手がいなくらいか。

「笑ってやがる。さっさと殺しちまった方が良いと思うんだが」

「親方様が情報を吐かせろって言ってんだ。我慢しろ」

お前らが知りたいような事は何も無いぞと首を小さく左右に振るが、意図は伝わらなかつたらしい。二人は腫物を扱う態度を取りながら格子戸を開けて出て行くと、代わりに虚しい静けさがやって来た。

・・・（あの娘は無事なのか？）

自分の状態よりも引き離された相手の事ばかり考えてしまう。

腕が飛ぼうが顔の皮を剥がれようが、後先の残っていないこの自分がどうなろうと知った事ではない。こんな人間一匹よりも、未来への

道のりがまだ続いている天狗少女―即ちはたてが生きているのかが気になるのだ。

なんとか無事を確認したいが、もし彼女が先に三途の川を渡っていたらと想像すると、残った手の震えが酷くなってしまう。赤の他人に對してこれだけ入れ込んでしまうような事は後にも先にもないだろうが、これが恋なのだろうか。

(・・・そんな訳ないだろう。さっさとここから出ないとな)

大人しく死を待っていても仕方ないので、脱出する術を思いつく限り試してみるべく行動に起こそうとすると、天板が外れる音が聞こえた。音を立てた正体を知りたいが、生憎明かりを持っていかれたせいで何も見えない。鼠だろうか。

「人? いったいどこで?」

鼠ではなかった。声からすると男で、まだ若年特有の青臭さがある。サンカが得体の知れない相手に注意を向けると、男は小さな明かりを灯し、姿を露わにした。

彼は上から下まで真っ白な出で立ちで、色素の薄い獣の耳と尻尾からするに、希少性の高い白狼天狗だろう。うる覚えだが、(馬鹿馬鹿しいが) 不老不死の効能がある丸薬の材料だったと記憶している。

「もしや・・・巷で噂の妖怪狩りとお見受けいたします。力をお貸しいただきたい」

「誰だ?」

「別に名乗る程ではありません。我々はこの屋敷の主を捕えるためにやってきました。ですが、我々だけで達成するには今一つ困難を極めております。そこで此処から出た後の安全を保障する代わりに、少々我々にご協力をお願いしたいのです」

「取引か? いいだろう。だが此方からも条件がある」

「何でしょう?」

全く臆さずスケスケと交渉をする彼に興味が湧いたらしく、微笑ん

でずいっと顔を近づける。サンカは遠慮せずに条件を要求すると、彼は「善処する」と快諾して錠を外してくれた。

「丈夫な物は持っているか？棒状なら何でも構わん」

「これでよければ」

やや大ぶりな刀を差し込まれると、サンカは刀身を柄から外して足に突き刺した。天狗が渋い顔をするが、ふらつきながら立ち上がる。

(待っていてくれよ。今助けに行くからな)

「つたく人使いが荒い主人だこつて。もうちよつとマシンな—」

彼は見張りの天狗が錠を外して一人で入って来たのを確認すると、背後から音も無く忍び寄って口を押え、全身の力を込めて首をへし折った。牢に引きずり込み、痙攣している男から短刀を奪い取ってもう一人が戻ってくるのを静かに待つ。

「おーい煙草を忘れっ!」

短刀を喉笛に差し込んで掻き切る。彼の者の目には光が無く、顔に掛かった血を拭い取った。



はたては親に身を清めるように強要され、濡れた体を丹念に拭き上げていた。あの親なので絶対に何かあるに違い無いが、今は指示に従っておきつつ、隙を突いてサンカと共に出て行く算段である。相手は甘く見ているので、容易く手玉にとれるはずだ。

「ん?」

服を着ようと着替えの入った籠に手を潜らせると、硬いゴツゴツした物に触れる。取り出してみると、サンカから預けられた拳銃だった。寝る間際に何時も彼がやっていたように、見様見真似で弾倉をクルクルと回転させると、弾丸は満装填されていていつでも発砲可能な

状態にあり、軽く教えられたとおりの操作をすれば、確実に弾が出る筈だ。

「おい、いつまでやってるんだ？客が待つてるんだよ」

「・・・はい」

母親の声だ。ブカブカではあるが、はたては拳銃を収めたケースを服の下に隠し、俯いたままその場を後にする。

「なんだ待ちきれなかったのかい？ほら行きな」

頭を掴まれて無理矢理振り向かされると、サンカを殴りつけた男天狗が立っていた。体臭は臭く、嫌に息が荒い。

「アンタの望み通りの物だよ、今晚はソイツを好きにしている。金はそうねえ・・・10両でどう？」

男は提案を了承したらしく、はたてが逃げるよりも早く腕を掴み、布団が敷かれた座敷に引きずりこむ。服を乱暴に脱がせようとしてくる男に抵抗するが、圧倒的な体格差がそれを拒む。

「やめてーやめ・・・」

はたては噛みついたり叩いたりしたが、何かが切れる音を聞いて急に頭が冷え、どうすればこの状況を脱する事ができるのか自ずと理解した。

抵抗を止めて腰の位置に手をやると、気を良くした男が自分の服を脱ぎ始めた。その間冷静に拳銃の撃鉄を指で起こし、ケースから引き抜いて動きを止めた男へ容赦なく発砲する。はたての目に光はなく、闇よりも暗い色を湛えている。

「ひっ、ひいひいひい!!」

男は銃で反撃されて頬を負傷すると、声にならない声を発しながら床を這って逃げ始めた。巨体という身体的特徴が仇となり、その足取りは非常に鈍足だ。はたては半裸の格好のまま男の前に回り込むと、

撃鉄を再度起こして銃口を額に押し付ける。

「わ、悪かった！殺さないで——」

そして彼女は、引き金を引いた。

85話 裁きの鉄槌

カチン、カチン―

硝煙の臭いが立ち上り、銃が弾切れを知らせた。それでもなお劇鉄を起こして引き金を引き続けるのは、積年の怨み辛みを溜め続けた堪忍袋が決壊したせいだろう。

やがて行動が無意味と悟ったはたては、穴だらけの頭から血を流して死んでいる巨漢の天狗を一瞥し、拳銃をケースに納めてあられもない姿になった格好を正した。

掌がジリジリと痛み、熱を帯びているのが分かる。子供が使うには大振りな拳銃だったせいで、反動を上手く吸収できなかったのだろう。手首にヒビが入っていないければ良いのだが。

「・・・気持ち悪い」

初めて誰かを殺した感想だった。彼女の目の前で横たわる肉の塊には生命の鼓動は感じられず、その蠟細工のように冷たい体を赤い水溜まりが囲んでいく過程を見ていると、とてもさっきまで生きていたとは思えなかった。

と、爆発していた感情が素面に戻りだした途端、自分の行いが急に怖くなり、はたては力なくへたり込んだ。返り血に濡れた両手は強張ってしまつて満足に動かせず、どうしてか寒くて仕方ない。呼吸は自然と乱れ、息が出来ない。

更に時間が経過して死体の硬直が始まると、命ある者を殺した、自分の同類を殺したという事実がとても重くのしかかってくる。今まで後悔ばかりしながら生きていたが、こんなにも強い懺悔をした例はあつただろうか。

（お兄ちゃんは・・・こんな・・・）

サンカもこんな重圧に耐えながら人を殺していたのだろうか。彼の剣捌きが儂くて悲し気な理由が、はたてには何となく分かった気がした。

「まだあの人間は見つからないのか！阿片が狙いやもしれん！捕らえ次第殺せ！」

憎たらしい怒号が耳に入り、現実へ引き戻される。声が出た方へ目をやると、障子が乱暴に放たれ、父親がドカドカと床を踏み鳴らしながら立ち入り、部屋の惨状を目にして目を見開いた。父親はすぐに血まみれのはたてへと詰め寄ると、髪を鷲掴みにして引っ張る。

「痛いっ！」

「来い！あいつ等はてめえが狙いなんだ、盾にすりや手出しは出来ねえ！」

音を立てて何本かの髪が引き抜かれていくが、はたては咄嗟に掴んでいる腕に噛みつき、怯んだ隙に抜け出した。

なんとかして脱出したいが、外へ出ようにも窓にはめ込まれた格子がびくともしないし、唯一の出口である襖も父親が立っついて出られない。拳銃も弾を撃ち尽くしたので、まさに万策つきた状況だ。

「ふざっけんな！」

噛み痕が付いた手を摩り、相も変わらず汚い言葉ではたてを罵っている。浅はかで暴力を振るうくらいしか脳の無いこの男は、所詮は実の娘を潰しの効く道具くらいにしか捉えていないらしいかった。

殺す気で丸太のような腕を振り上げ、血走った目を見開いてはたてを睨みつける。

「このガキが！調子に乗ってんじゃねえ！」

この世で一番憎い相手が、この世で最後に残した言葉であった。

父親は背後から障子諸共頭蓋を叩き割られ、断末魔さえ上げる事も叶わず、あっけなく死んだのだった。散々罵詈雑言を吐いていた顔は柘榴の如くパツクリと割れていたが、飛沫の臭いは鉄臭くて似ても似つかない。

はたてが吐き気を堪えると、壁の向こうにいる何者かは壊れた障子

を蹴破つて部屋へ立ち入り、痙攣している死体に馬乗りになつて鉞を突き刺した。

対象が反撃してこないのを確認すると、遠慮も無しに鉞を振り下ろし続け、座敷が骨を砕く音と飛び散る肉片で満ちていく。

「よくもっ！俺の足をっ！鳥畜生がっ！」

振り下ろす度に憎悪の籠った男の声が上がる。その声の主は、現状ではたてが誰よりも信頼できる人物の声だ。

「お兄ちゃん！」

呼びかけると、男は鉞を振り上げた体勢で動きを止め、顔を上げた。踏み込んだ拍子に横倒しになつた蠟燭によつて映し出された顔は確かにサンカだったが、右半身の皮が引き剥がされている上、視力を失つたらしい左目が白く濁っており、ただの人間であるにも拘わらず、まるで地獄からやつて来た鬼を思わせる容姿へ変貌を遂げていた。

「はたてか？」

名前を呼ばれて背筋に冷たい物が走り、意図せず数歩後ずさる。化け物というのは、本来は今のサンカを差す言葉なのだろう。どす黒く粘着質な殺気を身に纏い、怪物と何ら遜色ない気迫を振り撒く姿は、最早はたてが知っている優しい面影を完全に失っていた。

彼は原型を留めない程損壊させた死体に鉞を突き刺し、脅えるはたてを指して体を左右に振りながら歩き出した。両足は義足の代わりに刀がそのまま差し込まれており、据わつた目の奥底では怒りの念がくすぶっている。無理矢理連れて来られ、惨い仕打ちをされれば当然の反応だ。もし捕まれば、そのときは――

「びっ、いめ・・・なや」

謝罪しかけると、彼は言葉を遮った。

「謝罪はいらない。こうなったのははたての希望ではないのだろう？
であれば、恨む相手が違う。それに約束したじゃないか。何があつて
も守るとな・・・はたては今までの分も幸せになるべきだ。俺が死ん
でも、絶対に不幸にさせてたまるか！」

近くにいるだけでも身を蝕まれそうな強い殺気や気迫は次第に薄
れ、元々の雰囲気に戻ったサンカが、残った右腕で頬を撫でてくれた。
すると、悲しくも無いのに涙が溢れ出てきてしまい、自分でも止めら
れなくなってしまった。

彼は額をはたての額にくつつけて、静かに笑う。

「まったく、相変わらず泣き虫さんだな」

「・・・泣いてないもん」

「そうかそうか。はたては強いな」

「お戯れ中失礼・・・お二人とも外へ向かってください。ここは危険で
す」

哨戒装束を着た白狼天狗が窓の外から顔を出す。どうやらゴロツ
キ共と乱闘を繰り広げているらしく、内外が騒がしくなってきた。

「承知した。さあ行こう、長居は無用だ。歩けるか？」

「うん」

初めて会った時と同じく、片膝について残った生身の右手を差し伸
べる。彼女はその温かく血の通った手を取り、憎悪の対象だった肉塊
を残し、共に部屋を後にした。

86話 夜明けの里、新しい日常にて

明くる日、屋敷ははたての忌々しい記憶と共に焼け落ち、黒々とした炭になっていた。彼女の母親が見られては困る物を隠蔽するために火をつけたらしく、めぼしい悪事の証拠品は徹底的に破壊しつくされ、悪逆非道の限りを尽くした当人は持てるだけの金品を抱えて雲隠れしていた。

叔父や雇われていた天狗達も訳ありらしく、どさくさに紛れて逃亡を図ったか、大人しくお縄になるかに二分されたが、どちらも家主を心配する者は皆無だった。巷に阿片を蔓延させた罪の他、余罪も含めて厳しい罰が下されるとは、白狼天狗の談である。

「待たせたな。お祈りは済んだか？」

白狼天狗に背負われてはたてを迎えに行くと、彼女は焼け跡の中で何処かから摘んできた彼岸花を供え、手を合わせていた。

本来、死者への弔いに毒のある彼岸花は無作法極まるのだ。もしかしたら意味を知っていて嫌がらせのつもりでやっているのかもしれないが、そこまでひねくれた性格ではないし、まだ物も知らないことは良く分かっている。彼女は彼女なりの善意のつもりでやっているのだろう。

はたては手を合わせるのを止めると、天狗の背中越しに欠伸をするサンカの方を向く。

「終わったよ。行こう、お兄ちゃん」

「うむ・・・それにしてもこの足、もっと良い治療法は無かったのか？」
膝から下が無くなった両足を見て不満を漏らす。治療と尋問（と言う名の陳謝と軽い雑談）を同時に行ったのだが、足に突き刺していた刀を引っこ抜かれ、縫合が間に合わないからと火で炙って焼き留めし、軟膏と包帯で処置された。自身の足が焼ける臭いを嗅いで旨そうだと呟いたのは、一生の不覚である。

白狼天狗は苦笑いしつつ、はたての歩く速度に合わせて歩き出し

た。見栄を張って啖呵を切った相手に氣遣われているのだから情けない。歩くのもままならない体でどうやって彼女を守るのだと、サンカは齒ぎしりした。

「確かこの辺りに・・・ああ、彼方ですね」

阿片中毒者が一掃された路地を抜けると、茅葺屋根の家の前を、天狗達が埃を被った家財道具一式を抱えて忙しなく走り回っていた。

少々年季が入っているが、庭付きで広いので住めば快適だろう。屋根にも梯子無しに天狗達が登って作業していて、日常的に飛んでいる彼らにとってはなんて事は無いように見える。

「ここが新しいお家？」

「そうだ。今日からはたてと僕が住めるように、この人をお願いしたんだ」

「どんな無理難題を言い出すのかと思つていましたが、この程度であればお聞きしますよ」

彼の言う通り、この空き家は二人の為に整備されている。確保する予定だった人物を殺害してしまうという想定外の事態が起こったが、討伐に貢献した功績を称え、お偉方が休める場を気前よく用意してくれたのだ。傷が癒えるまでという条件付ではあるが、人間相手には破格の対応である。やはり白狼天狗の力添えもあるのかも知れない。

「ご苦労様です。お寛ぎになられる前に甘酒は如何ですか？暖もとれましょう」

「貰えるか？この娘の分も頼む」

「わかりました」

一人の天狗が足元に置かれた鍋から甘酒を湯呑に注ぐと、サンカとはたてに差し出した。はたては軽く会釈して受け取り、小さな樽に腰掛け、息を吹きかけながらチビチビと飲んでいく。

サンカも背中から樽に降ろしてもらってから口に含むと、華やかな香りが鼻から抜けていき、クドさのない甘みが広がる。これは都でも

中々お目にかかれない上品な味わいだ。薄めの味なので、幾らでも飲めるだろう。

「悪くないな。旨い」

「ありがとうございます。良い酒粕から作った、自慢の逸品なんですよ・・・しかし、本当に痛みを感じないのですね」

壁に寄りかかると、白狼天狗は湯呑をくゆらせる。痛覚がないという先天的で珍しいこの病は、天狗の間でも見た事がないらしい。

皮と目を捕られたのであれば、常人であれば激痛の余り会話はおろか、身動き一つできないのが普通だ。生憎常人の言う普通が何を基準としているのか彼には分からないが、少なくとも人からも妖怪からも異常だと認識されているらしかつた。

嘲笑すると、空になった湯呑みを脇に置いた。陶器製なのでひっくり返した拍子に割らないか心配だが、他に置けるような場所は無いのでやむを得ない。もっとも、壊したところで大した額にはならないだろうが。

「殺し合いが本業の俺にはお誂え向きだ。普通の人間として生きれるかは知らんが」

「・・・心中お察しします」

「よしてくれ、気遣われるとかえって辛い。はたて、先に部屋に行っているから、ゆっくり飲んでいてくれ」

「う、うん」

掃除をしていた天狗達に付き添われながら、家へと入る。カビ臭い気もしたが、せっかく開けてくれたのだから贅沢は言わない。

「あの、サンカさん」

白狼天狗に呼び止められ、視力を失った方の目で背後を見る。当然だが、暗くて何も見えない。

「我々だけではあの者の討伐は困難でした。改めてお礼申し上げます」

「・・・礼を言うべきは俺の方だ。助けがなければ、その娘も俺も死んでいた」

深々と頭を下げて奥へ消えると、焚き火から舞い上がった灰が甘酒に浮かび、一呼吸おいてから底を指して沈んでいった。



「はたて、ちよつとこつちに来てくれるかな？」

はたては堅苦しさを覚える口調が幾分か柔らかくなつた事に目を丸くしつつ、言われた通りにサンカの元に向かう。彼は縁側に座布団を敷いてボンヤリと庭を眺めていたが、片腕と足が無くなつた達磨同然の姿は痛々しく、背中だけでも無言で何かを訴えている気がしてならなかった。

サンカははたての姿を認めると、哀し気に微笑みながら自身の膝を軽く叩き、上に座るように促した。彼女は太腿の上に座ると、ジツと顔を見つめた。やはり白く濁つた目が気になってしまい、左、右と交互に瞳を動かす。

「・・・気になるかい？」

照れくさそうに言われ、はたては遠慮気味に首を縦に振つた。サンカは残つた右腕で後ろから抱き締め、疲れたように声を漏らす。

「今日は傍に居てくれ。悪い夢を、はたてが酷い目に遭う夢を見そうなんだ・・・」

「・・・いいよ。ずっと傍にいてあげる。ずっと、ずっとずっと」

珍しく弱気で、日頃の振る舞いからは想像もつかない願いを、幼き少女へ乞う。彼女は最初こそ戸惑いの色を見せたものの、今の心境を理解し、慈愛に満ちた言動で彼を迎え、そつと頭を撫でた。

人肌とはこんなに温かかったのだろうか。それとも、甘酒で酔っているせいでそう感じるだけだろうか。二人は揺れる白い彼岸花を見つめながら、そつと目を閉じた。

87話 博麗の巫女

草木も眠る丑三つ時。例の白狼天狗に呼び出され、新しく拵えた義足を鳴らしながら静まり返った里を出た。彼ら人外達が生き残る術を知っている人物から指示があつたらしく、これからとある神社へと向かい、その巫女と話を通しておもしろい。

「して、俺は何をすれば良い？」

不機嫌さを隠しきれないサンカが、徒党を組んで歩く天狗に尋ねる。旅の間は碌に睡眠をとっていなかったので、願いを無視して就寝したかったが、居候している身の、それも大の大人が子供の前で駄々をこねる訳にもいかず、渋々従った形だ。

一人家に置いてきたはたてはといえば、後を追って飛び出したりしないよう、近所に住む女天狗に無理を言つて見張つて貰っていた。それでも、サンカからすれば彼女が目の届く範囲に居ないと気が気でなく、寂しくないだろうかと不安になってしまふのである。血縁はおろか種も異なるが、親バカっぷりは遺憾なく発揮されているので、早く用事を済ませて帰りたいのが彼の心情だ。

「最新の戦術や兵器を学んだ貴方様の知りうる情報と意見が必要なのです・・・話をするだけですから、それは不要なのでは？」

義足に焼け跡から回収した黒焦げのサーベルがぶつかって金属音を立てる。刃が潰されて鉄棒に成り下がっているが、肌身離さず持ち歩いた愛用の一品なので、腰にぶら下げておかないとどうも落ち着かない。

「これが無いと手持ち無沙汰だな。どうか許してくれ」

「はあ・・・」

「しかし博麗神社か・・・待てよ、確かかなり距離があつたと思うが？」

はたてを案じつつ、サンカは疑問を訂す。地図で見る限りでは、片道で日が真上に乗ってしまう距離の筈だ。夜間の間に済ませて戻る

と聞かされているが、どうやって移動時間を短縮するのだろうか。

「心配ご無用です。空を飛ばば一瞬ですから」

「うん？それって——」

羽交い締めにされて瞬時に高空へと飛び立ち、状況を理解した頃には雲より高い位置を飛行していた。空を飛ぶのはある意味貴重な体験ではあるが、同時に足が地に着いている有り難さを認識する羽目になった。こんな目に会うのはこれっきりにしてほしいと、サンカは顔には出さずに願う。

「さあ、着きましたよ」

言われて下を向くと、低い山に辛うじて視認できる鳥居が見える。朱色の鳥居は小さな明かりに照らされて闇の中に浮かび上がっており、そこだけ異世界から現れたようだった。天狗達はそれを目印に一斉に降下し、広い境内へと降り立つ。

「あー、やっと来た。遅いわよ」

「申し訳ありません。急いで来たのですが」

膝に伝わる地面の感触と体にかかる体の重さに安堵していると、ぶつきらぼうかつ、柄の悪そうな巫女が天狗とやり取りを交わし始めた。彼女が噂の巫女なのであれば、想像よりもかなり若い。

それに加え、脇から胸の横まで大きく露出した破廉恥極まりない格好には、目のやり場に困ってしまう。神聖な職に就く者がこれで勤まるのだろうか。

（これでは花魁と大差ないではないか。近頃の若造はこれだから・・・）

「ちよつとアンタ、何か失礼な事を考えてない？」

「別に何も考えてなどいない。貴様の妄想だ」

「なら目を見て話さないよ。やましいわね」

悪態を散々つくくと、気が晴れた巫女は大幣で肩を叩き、顎で指図して社へと入って行く。サンカは冷めた目で後ろ姿を拝みつつ、はたて

はあんな粗暴で品の無い女のようにはなつてほしくないと強く願った。

「で？その片輪（欠損身障者）は何で連れてきたの？」

片輪と呼ばれてムツとしたが、睨みつける程度に収めておく。天狗が事情を説明すると、むくれた顔で冷たくあしらわれていた。

「まーた紫の差し金ね・・・私は霊夢。見れば分かると思うけど、この博麗神社の巫女よ。ま、この名前は初代から受け継いだ名前だけど」
覚えのある名前だと、サンカは顎に指を当てて首を捻る。確か人外に味方する人間で、なにやら珍妙な妖術を使う小娘がいると小耳に挟んだ覚えがあったが、それが目の前のはしたない女だとは信じがたい。噂では攻撃が当たらないとか、空を飛べるとか言われている。

「アンタ、妖怪狩りらしいわね。残念だけど、怨みを買って過ぎてるアンタはお願ひされても連れて行けないわよ」

「連れて行く？どこへだ？」

「幻想郷、妖怪も神も人間も、全てが平和に暮らせる理想郷よ。私はこっちの世界と幻想郷を分け隔てる境界を張る役割があるの。ともかく、アンタは幻想郷には連れて行けない」

残念だけど、残念と微塵にも思っていない調子で言われた。自身は取り残される覚悟くらいはあるが、はたては見ず知らずの土地で、たった一人でやっていけるだろうか。友人も家族もない彼女が、周囲に受け入れられる保証はないのだ。

とはいえ、寿命に絶対的な差があるサンカと共にいたとしても、それはそれで不幸になるだろう。ならば同族と共にタタラが手出しが出来ない所に置き、平和に暮らしてもらった方が良い。記憶も時間が風化させてくれるだろう。

「・・・俺はあの娘が、はたてが何事もなく平穏に暮らせれば文句はない。それを実現するためなら、何だつてしてみせる」

「あらそ。じゃあ・・・」

大幣を押し付け、霊夢が鋭い眼差しで睨むと、親指が自然とサーベルの護拳に掛かり、抜刀の姿勢をとった。意識しなくとも斬りかかる体勢へと入るのは、第六感が彼女を危険視したからである。次の行動次第では、この社の中が赤くなるだろう。

天狗達が固唾を飲む中、霊夢はサンカから微かに放たれている殺気に臆する素振りも見せず、凜とした声で命じる。

「貴方も闘いなさい。彼らを救うためにもね」

なんだその程度の事かと、安堵したサンカはサーベルから手を放して笑った。

「言われなくともそうするさ・・・承知した。お前の案を聞かせてくれ」

88話 新たな出会い

天狗の里へ戻る頃には日が昇り切っており、夜露に濡れた草木が朝日を反射して光輝いていた。

サンカは家に置いてきたはたてが気がかりなのもあって、一緒に朝食でもという白狼天狗からの誘いへ丁重に断りを入れ、風すらも置き去りにする勢いで長屋へと駆け戻り、引き戸を開ける。

「ただいま・・・って、誰だお前は？」

「あやや？この人は・・・」

玄関に座っていたのははたてではなく、黒い髪をおかっぱに切り揃えた女の子だった。

はたてと同じ年くらいだろうか、まだまだ幼い容姿で、突然入って来た人間を前に、つぶらな目をパチクリさせてサンカを見つめている。

小さな両手にはレンズの填まった装飾付きの木箱を大切そうに抱えており、突然現れた見知らぬ人間を警戒しているらしく、視界から箱を隠すように遠ざけていく。別に取り上げたりはしないと伝えると、疑いの目を向けながらも再び箱を膝の上に乗せ、挙動を注意深く観察してきた。

「それは・・・もしかして写真機か？」

おずおずと、しかし自慢げに少女が頷く。異国ではカメラと呼ばれている箱は、その場その時の風景を絵に収める事が出来る人間の発明品である。たった一つ買うにも平民が一生かけて稼いだ給金が必要なくらいの、非常に高価な代物のだが、それが価値が分からないであろう幼い子供に抱えられて目の前に置かれているのだ。こんな物を買う与える親は相当娘を溺愛しているらしく、はたてとは真逆の人生を送っているのだと一目でわかった。

「おに・・・サンカ！何所に行ったの？」

はたてが奥の部屋から顔を出す。一人にされて泣いていないだろうかと思つたが、案外平気そうだ。足にしがみついてきた彼女に手土産として唐菓子の入った包みを渡すと、カメラを携えた謎の少女について尋ねる。

「お友達か？」

「うん！文ちゃんって言うの！すっごく物知りなんだよ！」

「そうか。はたてがお世話になったな。礼を言うぞ」

「は、はい・・・」

文と呼ばれた少女は消え入りそうな声で返答し、俯いて箱に突っ伏してしまった。人見知りする性格らしく、見かねたはたてが部屋へと連れて行く。

「はたて、後で話がある。時間を空けていてくれ」

遊びに集注してしまう前に呼び止めて伝えると、お手玉を持った彼女は上機嫌ながらも曖昧な返事をした。初めて出来た友達に現を抜かしてしまうのは仕方ないのだろう。

（もう、顔も見れないのか）

共に居られるのもこれで最後になると考えてしまい胃がキリキリと痛むが、自分の選択は間違っていない。これしか最適な策が無かつたのだから――

サンカは二人の笑い合う声を聞き、一人無意識に唇を噛みしめた。



「あれ？文ちゃんは？」

「もう帰ったよ。また遊ぼうって言ってたぞ」

夕餉の支度をしている土間に、寝ぼけ気味のはたてが顔を出す。遊び疲れた彼女は文と共に昼寝を始めたが、文は日暮れ前に南蛮菓子を持たせて自宅へと返した。

ここの子供たちは皆礼儀正しくしつかりしている。どこぞの脇巫女のようにはならないでほしい。

「はたて、話なんだけど・・・」

いそいそと部屋へ戻ろうとする彼女を、鍋に入った食材を突きながら呼び止める。嘘を吹き込むのは好みではないが、そのまま伝えて後を着いて来られても邪魔になるので、納得しそうな内容に改変してから口に出した。

「明日の朝に出掛けるから、大人しく家で待っていてくれ。暫くは帰れないと思うけど、その間はお隣さんが面倒を見てくれるようにしておくよ」

勿論顔を見るのはこれが最後なので、帰ってくる予定はないしそもそも出来ない。置いていかれるのだと理解したはたてからは何時ぞやに覚えた悪寒が放たれ、粘り気を帯びたドス黒い気配を纏った足音が近づいていく。

が、あの時とは違って畏怖してはならない。己で決めた事をねじ曲げる気は毛頭ないし、そもそも彼女を守るのが目的なのだ。しつかりしろと気を引き締め、恐怖心を押し殺す。

「そこで、はたてには宿題をやってもらおうと思うんだ。期限は僕が帰ってくるまでで、お題は花言葉」

足音が止まった。気配も少し変化したようだ。何か言われる前に畳みかけなければ。

「花言葉は、花につけられた象徴的な意味を持つ言葉なんだ。庭に彼岸花が咲いていただろう？あの花が持つ意味を調べてほしい。その意味が、僕からの想いになるから」

「・・・想い？」

「口で言うのは・・・その、恥ずかしくてね」

早口で舌を噛みながらまくし立てる。気取っているので我ながら

虫唾が走るが、勉強と言う名目で意識をお題に向けさせて時間を稼ぎ、事情を悟った頃にはお互いに手の届かない場所にいるという寸法である。どうせ二度と会えなくなるのだから諦めもつくだろう。

「本当に帰って来てくれるの?」

「はたてに嘘をついた事があるかい?心配する必要はないよ」

「……うん」

「さあ、部屋で待っていてくれ。もうすぐで夕食が出来るから」

気配が遠ざかるのを感じ取り、サンカは汁が煮詰まった鍋を火から下ろし、別の鍋を取り出そうと屈んだ。

「絶対に戻って来てね」

小さく聞こえた気がして廊下を見る。視界には角部屋へと入っていくはたてのなびく髪がチラリと見えたのみで、特別変化はない。

聞こえた声を気のせいと解釈し、新しい鍋を取り出して材料を突っ込む。

「……責めてくれて構わないさ」

どうやら薪に生木が混じっていたらしい。その後ははたてを寝かせるまでの間、風景がやけに滲んで見えた。

89話 蝗軍

重く陰鬱な暗雲立ち込める昼下がりに、号令に付随して足並みを揃えた兵達が前進を始めた。それはまるで田畑を喰らい尽くす蝗の大群を連想させ、周囲は蹂躪され尽くし、通った後には何も残されていない。

膨大な数の新式兵器と戦術を備え、目につく物を手当たり次第破壊していく様子は、人間の強さと狡猾さを誇示すると共にその愚かさをも示している。

「用意整いました。何時でもいけます」

何も知らずに前進を続ける敵を離れて見物していると、白狼天狗が声を掛けてきた。彼はずさんに手入れされた大刀と紅葉があしらわれた防盾を装備しており、何時でも敵陣に飛び込める万全の状態をとっている。

「うむ．．．しかし、弾幕が使えない者がこんなに居るとは」

後方に目をやると、武器の手入れや遺書を書き綴る天狗達がおおり、一人が視線を感じたらしく手を振った。

彼らにも使えそうな武器をあるだけかき集めて持たせているが、飛び道具は旧式で粗悪な火縄銃から一部の天狗のみが行使できる弾幕、近接武器は錆びた小刀から薙刀までと玉石混交状態である。目的が撃滅ではなく足止めなので引つ張り出した武器でも心強いが、所詮は素手よりはマシの域だ。役に立つかは神と彼らの腕が決めてくれるだろう。

片手が使えないサンカの代わりに、白狼天狗は小さく手を振り返す。

「貴方方との戦いで数を減らしましたからね．．．今では数える程度しか」

口をつぐみ、申し訳なさそうに目を伏せる。サンカは当然の意見だ

と水に流しつつ、新調した義足から小さな金属音を立てて座る。

すると白狼天狗は時間を潰すためか、文が撮ったらしい写真を見せてくれた。映っているのはまだまだ小さい赤ん坊で、はたてには無い大福のような真ん丸加減と、小さな狼の耳が愛らしい。聞けば二月前に生まれたばかりだそうで、やんちゃっぷりに日々手を焼いているそうだ。

「名前はなんと言うんだ？」

「椀と言います。将来は立派な白狼天狗になつてほしいと思ひまして」

「良い名前を付けたな。大きくなつてからが楽しみだ」

「・・・この選択に後悔はしていませんか？彼方側にいれば官軍になるのは確実。それを投げ捨ててまで、何故賊軍である我々の味方をするのです？」

神妙な面持ちで言うと、理解できないといった具合に首を振った。多少の疑念と差別心が垣間見えたが、心配しているつもりなのだろう。サン力は敵の様子に睨みを利かせながら、小さく笑い飛ばす。

「なんて事はない。ただ約束を守るためだけに此処に居る。あの娘・・・はたてとの約束のためにな。生憎細かい事を考えるのは苦手であるし、それに――」

「それに？」

「敵が多ければ多い程、強ければ強い程、後の時代にも名を残せる。あの娘にも自慢出来るつてもものさ。理解はされないだろうが」

らしくない強がりだとは思ふ。四肢の内唯一残った生身の部分が情けなく震えており、先程から抑えるために力を込めている。戦を続ける為封じ込めていた人間らしさを解き放った序でに恐怖心も蘇ったのか、死の淵へと赴くのがとても恐ろしく、逃げ出したい気分にもなった。勿論、はたての無事が保証できなくなるので実行に移す気は更々ないが、それでも怖い物は怖いのだ。

「射程に入りました。指示を」

「・・・」

「サンカさん？」

「・・・あ？ああ、よし。1番から4番、放て！」

天狗の耳がピクリと跳ね、番号を当てがわれた者達が銃を撃つ。弾丸は遠方の兵の頭に命中して赤い霧を噴出させ、足並み揃えた隊列を崩し——ていなかった。

元を辿れば、金に釣られて集まってきた連中の寄せ集めで編成された部隊。所詮は烏合の衆である。一度でも調子が乱れば芋づる式に指揮系が崩壊し、同士討ちすら始めてしまう危うさがあるのだ。だが、ハチの巣を突いた状態へと変貌する訳でもなく、取り乱す事無く味方の亡骸を踏みつぶし、粛々と前進を続けている。

「どういう事でしょうか？まるで応えていませんよ？」

白狼天狗が驚きの声を上げるが、そんな事はサンカにも分からなかった。考えられるとすれば餓鬼が能力を使用しているくらいだが、見た所戦列には加わっていない。

とすれば、双方に節目となるこの戦を見届けるために参加しているであろう義弟の護衛にまわっている筈だ。用心するに越した事は無いが、一度に投入できる数はそう多くはないし、精々2体が限度だろう。

「これは憶測だが、本当に討つべき敵は此処に居ない」

「いない？」

「あの人間達は恐らく操られている。どんな手を使っているのかは知らんが、餓鬼が絡んでいるのは間違いないだろう」

「なら私が探してみましようか？千里眼が使えますので・・・」

「頼めるか？」

「分かりました。失礼しま——」

白狼天狗が身を乗り出そうとした瞬間、銃弾が肩を貫いた。彼は顔をしかめながらサンカを下敷きにするが、うめき声一つ上げずに堪え

ている。

「くっ！」

「傷を見せてみる。応急処置を・・・」

傷口を抑える手を退かすと、猛烈な腐臭がした。肉は溶けて緑色のまだら模様が浮き上がっており、明らかに腐敗が始まっている。サンカは驚愕の表情のまま、傷の周りを小刀で削りとって捨てた。

「おおい人間さん、こりやいったい」

「俺にもわからん。指が惜しければ触るな」

方言の強い天狗が指を慌てて引っ込めた。

銀ならまだしも、ただの鉛玉は妖怪の肉は溶かさない。この弾は見覚えがあり、しかもある人物の手で作られた特別製のものだ。これを用いているということは、読みが半分当たっていた証拠にもなる。

「まさか大将首も居たとはな。少しはやるようになったか」

凶弾が飛来した方向を睨む。その先には、不愉快なニヤケ面をした男がいた。

90話 兄弟喧嘩

昼下がりの里を一人の少女が駆けていく。紫色の帯紐を風になびかせ、躓いて膝を擦りむき、泣きそうになるのをひたすら堪えて走るのは、誰のためなのだろうか。

「あれ？はたてちゃん？」

被写体となる花の構図を決めあぐねていた文が顔を上げ、声をかける。不思議そうに急ぐ訳を尋ねてみたが、はたては訳を話す余裕も無ければ、親友も眼中に無いらしく、無愛想にも黙って素通りしていった。

「ちよつとはたてちゃん！落とし物！」

落とした質の悪い紙を拾い上げ呼び止めようとするが、彼女は既に里の外へと飛び立った後だった。今日は1日里の外に出てはいけなさと大人から口うるさく言われていたのだが、親族のいない彼女には知らされていなかったのだろう。

何となく紙の裏側を見ると、写真に見紛う程の見事な絵画が描かれていた。絵の内容は以前玄関で鉢合わせした人間が真っ黒い影と睨み合っている構図で、引き込まれてしまうような妙な臨場感があった。

「文ー、ちよつと来てくれるー？」

「あ・・・うん」

遠くで親が呼んでいる。文は太陽を指で遮り、どこまでも澄み渡った蒼穹を見上げていた。



多少の訓練で効果的な制圧戦を展開できる銃砲や、その場の風景を紙に収めて保存できる写真機。人外達には到底思いつかないし、(一

部分例外を除いて）それ程器用でもない。それだけの高度な技術がありながら更なる力を求めて貪欲に躍進を続け、新たに得た力を試すように、畏敬の対象だった神や妖怪に牙を向く。

人は誠に奇妙な生き物である。遠い昔に持てる力を捨てて知恵に頼ったのに、捨てた力を再度得るために知恵を使っているのだから。

「久しぶりだな木偶の坊。少しはやるようになったか？」

「酷い言い草だな、兄上。いつから知識でも能力でも劣っているお前がこの俺を見下せるようになったんだ？」

サンカが立ち上がって憎悪をむき出しにすると、タタラは肩を揺すって笑った。久しぶりの再会となったが、二人に間にあるのは感動よりも、互いを塵として蔑む感情だった。

「彼らは国から立ち去り、自ら幻想の存在となることを決めた。これ以上の殺生は必要ないはずだ」

無意味な説得だと思うが、戦わずして用が済む確率がゼロでないのなら、やるだけやってみてもいいだろう。そんな思いとは裏腹に、タタラは義兄の声掛けを聞いて一笑に付し、道化のようにわざとらしく大げさな動作で反論した。

「何を言っているのかわからんな。我々は人間を害する朝敵を駆除しているのだよ。手を抜かず、弱っている間に殺さねばまた増える。害虫のようにな・・・いや、知性がある分、虫けらよりも厄介か？」

言動から何まで全てが相手の感情を逆なでしてくるのは、ある種の才能だろう。虫と比較されたのが癪に障った天狗達は、銃に弾を込めて発砲した。

が、タタラは微動だにしなかった。隣にいた兵が身を挺して盾となり、弾丸は掠りもしなかったからだ。被弾した兵は当然倒れるが、その表情は痛みを感じていないのか明るく、周囲の者は助ける素振りも心配する様子すら見せない。

「なんだあいつら!?仲間がどうなっても平気なのか?」

天狗がどよめくが、それも当然だろう。感情が無く無機質で人形のような兵達は、人外以上に人外らしい。

「阿片を使つて俺の真似事か。小癩な真似を」

「痛みを感じない兵は強い。だが、阿片ではないな。もっと別の物サ」
手刀を静かに下ろすと、雑兵の間を縫って人とも妖怪ともつかぬ存在が、何所からともなくわらわらと沸いて出てきた。数はおよそ10体程で、頭髮は無く肌色は白く、真つ黒な眼孔の中に金色に光る瞳が浮いている。地獄から這い上がって来たと言わんばかりの禍々しい悪意は、妖怪達でさえもが忌み嫌う亡者の証だ。

「あれが・・・餓鬼」

数多くの同胞を屠った仇を初めて見たのか、白狼天狗が固唾を飲む。サンカも想定外の数が投入されていたのを知って動揺を隠しきれず、暫し硬直していたが、即座に正気を取り戻し鉄くずになったサーベルを引き抜き、下段に構えた。タタラが天を仰いで雄叫びを上げ、餓鬼が一斉に走り出す。

「あの脇巫女も結界を張り終えただろう。お前達は退け。数秒でも俺が時間を稼ぐ」

「無茶を言わないでください!あの数を相手に戦いを挑むなんて!」

「無茶は幾らでもして来たさ。そもそも俺が死ぬのは前提の筈だ。今更どうなろうと構わん」

敵が迫り刻々と猶予が無くなる中、背を押して帰れと促すが暖簾に腕押しである。あれがどれだけ恐ろしい相手なのかは前もって伝えたのだが、白狼天狗は勿論、誰も従つてはくれなかった。

「正気か貴様ら。死ぬのが怖くないのか?」

一足先に飛びかかってきた敵をサーベルで撃ち落とす。

勇気があるのは大いに結構だが、彼らにあるのはどちらかと言えば

無謀だ。餓鬼と一戦交えた事が無いから無理もないのだが、引き際を見極めず戦おう等愚の骨頂である。

白狼天狗は真剣その物な眼差しで懇願した。

「武人である貴方がそうであるように、死すべき時に死ななければ、それに勝る端が我々にもあるのです。どうか」

「・・・後悔しても知らんぞ」

ああ言えばこう言う。融通の効かない連中ばかりだなと、サンカは舌打ちしながらも笑う。主張を曲げない天狗達の意向に半ば折れると、餓鬼の集団に対抗するべく武器としての機能を失った獲物をその手に保持し、総員抜刀の指示を飛ばした。

「死なば諸共だ、俺から離れるなよ。行くぞ！」

「はい！」

今、一人の人間は消えゆく者達の為に、消えゆく者達は一人の人間の為に、最後の戦へとその身を投じた。

91話 痛み

人と妖怪が入り混じった戦は規模こそ小さいものの、過去に起きた大戦と比較しても遜色ない凄惨さを極めた。

銃が使えなくなれば刀や棍を、刀が無くなれば手足で、それすら無くなれば顎さえも己の武器にして戦い続ける。お互い一人でも多く道連れにしようと躍起になり、一人、また一人と死に絶えて行く有様は、常世に存在しうるあらゆる負の感情が濃縮され、正に地獄絵図の様相を呈していた。

しかし、数を減らしているのはあくまでも弾避けの人間だけで、主力であろう餓鬼とそれを指揮しているタタラは未だ五体満足、それも無傷の状態を維持し続けており、かなりの強敵であると認めざるを得ない。

(弾が通らない・・・当然か)

対妖怪用の兵器として製造されただけの事はあるらしく、肉体もかなりの強度を誇っている。通常兵器で対抗するのは、やはり厳しかったようだ。

「援護を！」

「承知しました！」

刃の無いサーベルで防御をしつつ、義足に取り付けられた刀剣を展開し、回し蹴りの要領で接近してくる敵を軒並み斬り伏せた。背後では白狼天狗が指揮を執りつつ、弾幕を展開して援護を行う。皆は指示通りに動いてくれるが、それでも数的不利は覆すに至らず、敵は倒しても倒しても沸いて出てくる。戦線は崩壊しつつあり、突破されるのも時間の問題だろう。

「キリがないな。虫けらはどっちなんだか」

珍しく息が上がっているなど、自身の異常に気づく。理由は明確で、まだ両足の感覚に不馴れな事と、新しい戦い方に順応しきれてい

ない事が原因なのだ。こうなってしまうては、赤い血が流れている生身の足だった頃が懐かしい。

隣まで寄ってきた白狼天狗に背中を預け、次に襲ってくる相手を見極める。

「雑兵の数は減っていますが、まだまだ予断は許せませんね。ですが、手薄になった大将首は討ち取りやすいかと」

「上手くいくと思うか？周りは餓鬼だらけだぞ」

「やらないよりはやって後悔した方が良いかと」

「それもそうか・・・俺が道を切り開く。しっかりついて来い!!」

二人はほぼ同時に走り出した。餓鬼も意図を察知して追いつがるが、他の天狗達に妨害を受けて（瞬時に排除されるので微力であるが）動きが鈍い。サンカは集まってくる雑兵を蹴散らしつつ、憎たらしい薄笑いを浮かべる愚弟の懐へと潜り込み、続いて到着した白狼天狗と共に急所目掛けて刺突する。やはり避ける素振りは見せず、我関せずといった態度だ。

（貫った！）

勝利を確信しほくそ笑んだが、切っ先は見えない力が働いたのか的外れの方向へと逸れてしまい、がらんどうになった腹部に極めて重い鉄拳を受けてしまった。地面を転がり、同じく投げ飛ばされてきた天狗の下敷きになる。

（攻撃が見えない？いや、そんな速さで動ける筈が・・・）

一切の構えをとらない状態から放たれた拳は、同じ人間が放てる技とは到底考えにくい威力と速力を有していた。サンカは咳き込みながら覆い被さっている白狼天狗を退け、愕然としながらタタラを見上げる。

「ふん」

彼は悪巧みをする顔をしながら、指をパチリと鳴らした。

突然、強烈な違和感を覚えて腹部を押さえ、顔を苦悶に歪ませて嘔吐する。これまで味わった事がない感覚は苦痛と呼ぶに相違無く、消えた四肢の断面すらも、形容しがたい猛烈な感覚を伴いながら、心臓が鼓動する度に脈打っている。

「っ!？」

なんなのだこの感覚は。今までこんなを味わった試しは――

(――まさか!?)

未知の感覚の正体、それは痛みだった。常人からすれば不調があれは必ず感じる正常そのものの反応だが、体質的にあらゆる痛覚を持たない筈のサンカが痛みを覚えるのは異常に違う。

彼は突如として発現した痛みに戸惑いながらも、歯を食いしばってどうにかサーベルを手を取った。立ち上がるが、間に合わせにこしらえた粗悪な義足の取り付け部が肉に食い込んでおり、激しい痛みを伴っているがために真つ直ぐ立てない。

「木偶の坊が・・・俺に何をしやがった」

息を切らしながらも、はたてには決して聞かせなかつた地の底から響く声で威圧する。タタラは畏縮してしまうような反応も示さずにおどけてみせ、人の失敗を指摘するように嘲笑う。

「言っただろう？真似事ではないとなあ・・・お前は一体いつから自分が特別だと錯覚していたあ？」

粘着質な音を立てながら涎を撒き散らし、タタラの口が耳の後ろまで裂けて大きく開く。口内には黒ずんで欠けた歯が疎らに生え、その隙間を蛆が這い回り、喉の奥には青みがかつた丸い球体が顔を覗かせている。およそ人とも妖怪ともつかぬその不気味な姿は、サンカを心の底から畏怖させた。

「なんだお前は・・・一体何者なんだ!？」

質問に答えず、金属を引つ掻いたような甲高く耳障りな声が発せられる。すると、後ろから白天狗に拘束され、強制的に俯せの体勢を取らされた。右肩の骨が嫌な音を立てて外れ、尋常ではない痛みを味わう。

「ぐっ・・・があ!!」

『もうカビが廻ったかあ。ヒツ、ヒヒヒ』

意味が理解できない。カビとは、古い蜜柑やパンに生えてくる緑色の綿毛だろうか。

状況を理解しているのかと毒づこうと天狗を見ると、彼の眼球は左右別々の方向を向き、口から血の泡を吹いている。体も腰の位置から上下が逆を向いており、一目で何かされたのだと察した。天狗はタタラの声を使い、饒舌に語り出す。

『我々は人々の畏れが作り出した怪異そのもの。嘘を百度つけば真になるように、言霊は畏れを呼び、畏れは実体を形作り、実体は更なる畏れを呼び起こして広がる』

『お前たちが生み出した怪異は、転写と複製を繰り返し、無限に増殖するのだ』

戦いの音が止む。嫌な静寂が戦場を支配し、人、人外、死体さえもがサンカを目指して歩き出す。表情は千差万別だが、目は別々の方向を向いていて状態が異常なのは一致している。

サンカは生きているかも死んでいるかも分からないその集団を見て、親から聞かされた昔話を思い出した。

92話 忌むべき物

名前では呼んではいけない。父親からはそう教わっていた。

その怪異は何所にでも存在しうる、魑魅魍魎でも神でも、まして人や獣でさえも無い全く別の存在。誰がいつから語り始めたのかは不明であるが、元を辿ればちっぽけで害をなさない非力な存在だったのだろう。

怪異は人々が長い間畏怖をもって接した事で力を増強し、やがて人や物の怪に憑りついて命を喰らい尽くし、もぬけの殻となった体を乗っ取り、異常な食欲から獲物を求めて彷徨い歩くようになってしまった。

人々は次第に被害が出始めた事で、増長し過ぎた怪異へ対抗する為に武器を取って戦いを挑んだ。そして長い時間をかけて怪異を封じ込め、再び安寧を取り戻すに至るが、何かの拍子で復活する事がない様に異能の一族の監視を付け、完全に失活するまで今も封じ続けている――

今まで寝る間際によく聞かせてくれる御伽噺だと思っていたが、その怪異が目の前に居て、妖怪達が使う能力以上に異質な力は、紛れもない現実である。

『まさかもう一度外に出て肉を喰らえるとはなあ……これも全て、あの天邪鬼のおかげだなあ?』

タタラは口を動かしておらず、持てる力の全てでしつかりと拘束している天狗が話しているのだが、これがどんな手品か耳ではなく頭に直接声が響いてくるのだ。

彼は痛みに悶えるサンカの様子を一瞥すると、血生臭い息を吹きかけて挑発しつつ、反応を楽しみながら周りを時計回りに歩き出した。サンカは声を絞り出しながら、恐ろしい風貌に変化した義弟だった者へと問う。

「何が……お前は何が目的だ?」

『俺の望みはあらゆる物全て喰らい尽くし、無からもう一度世界を作り直す事だ。その為には、貴様の父母が持つ能力が必要だと考えた。だからこんなチンケな入れ物に収まり、人間の真似をしてお前達に近づいたのだ。生きたまま喰らってやる為にな』

「親父とお袋を食う為・・・まさか!」

『気づくのが遅いなあ。そうとも。あの二人を殺したのは俺だ』

長年追い続けていた仇は自分だと自ら打ち明けると、タタラは気味悪く引き笑いをしながら、腐敗した自らの顎を引きちぎって投げ捨て、真上から踏みつけた。湿った音を立てて骨が砕けるが、傷口から流れ出したのは血ではなく、ネバネバした黒い液体だ。それをみる限りでは、確かに本人の主張通り人ではないらしい。

蛆にまみれて腐臭を放つ肉塊を凝視するサンカをよそに、タタラは悦に入ったまま、声を発する天狗達は泡を吐き出しながら話が続く。

『だが・・・俺は能力を獲られず、今日まで腐敗する肉の中で時間を浪費し続けるザマだ。何故だか解るか?とつくの昔に別の器へ能力を移していたからだ』

話によれば、歳を重ねる毎に老いて弱まる一方だった二人は、制御が難しくなった能力が邪な者に悪用されるのを危惧し、物心がつく前の無垢な赤子―サンカへと受け継がせたい。同時に結界術をかけておく事で狙われるのを防ぐつもりだったようだが、ただの人間程度まで下がった霊力では中途半端な物しか作り上げられず、痛みを感じない特異体質は、その術が完璧で無かった為に生じた副産物だったのだ。

しかしながら、不完全でもタタラの手出しを許す程結界は生温く無く、弱体化した状態で迂闊に触れようなら体が消し飛ぶ程度の強さは残っていた。

そこで彼は能力でサンカの一部記憶を改変して妖怪狩りに所属させ、数人の手下に監視と封印の無力化を行わせると共に、自身は捕らえた人外を捕食しながら機会を窺う事にしたのだ。

不幸中の幸いだったのは、オリジナルの餓鬼を使わずとも、戦地か

ら回収したサンカの左腕を元に、異国の術で餓鬼を錬成出来た事だろう。腕に残留していた極々微量の霊力を暇つぶしに複製して練り上げただけなのだが、餓鬼達は予想以上の働き振りでタタラに貢献してくれた。

更には、サンカが連れ出した子天狗が放つ妖力によつて結界が弱まり、自らは軽く妖力を当てるだけで無力化する手間も省けたのだから、何から何まで大助かりという訳である。

『あのちつぽけな天狗、あれはお前に触れても不思議と浄化されなかつたなあ。面白そうだ、あ奴も後で喰らうとするか』

「・・・はたてに指一本触れてみる。その首をねじ切つてやるぞ外道が！」

サンカははたての名前が出た途端怒り狂い、噛み殺さんとする勢いで吠える。すると、弱弱しく光る小さな球が数個現れ、数秒経つて虚しく消えて行った。タタラは驚きはしたが、サンカも何が起きているのか分つて居ないと知ると、すぐに余裕を取り戻した。

『なけなしの生命力を使って光弾を生成しようとするとは・・・フン』

タタラは彼のささやかな抵抗を一笑に付し、鼻先を思い切り蹴り上げた。骨が砕け、鉄の臭気と共に鼻腔をドロリとした物が伝い、悶絶する。

『まあいい。安心しろ、すぐに胃袋の中で再会させてやる』

タタラが白目を剥いて身を震わせる。すると、押さえつける天狗ごと呑み込むためか、正面から左右へと体が割れ、胴体からも無数に生えた鋭利な牙が露わになり、あたかも中世の拷問器具のような体を成した。

もはや人の面影など無いに等しく、妖怪が可愛く見えてしまう程の異形っぷりだ。反撃する手段を思いつくだけ探してみるが、恐らくは全て無駄な足掻きに終わるのだろう。やたらと幸運だけが強い傾向にあるなど思っていたが、こんな帳尻合わせが来るとは思ってもみな

かった。

「……はたて」

ふと名前を呼ぶ。習慣付いていたせいなのか、或いはこの期に及んで救いが欲しかったからなのかは分からない。それでもサンカは無意識に、いつものように彼女の名前を呼んだ。

「当たって！」

直後、地響きと共に落雷のような音が轟いた。眩い光に照らし出されて世界が白むと、拘束を解かれたサンカは投げつけられた人形のように跳ね跳び、誰かの腕に抱えられて漸く制止した。

93話 現世への帰還

操り人形達が灰燼と化す中、タタラは皮膚が燃え落ちる痛みにも苦しみながら、有利に進んでいた戦を台無しにした妖怪を廃除するべく、老人の様にしわがれた両腕を空へ伸ばした。

その先にはサンカを抱きかかえた一人の子天狗が滞空していて、露骨にも敵意を向けている。

見かけ上は幼子だとしても、あれは数百年近くを生きる化け物なのだ。情け容赦はいらない―彼がそう考えていたかは定かでないが、邪魔立てしたはたてに対して憂さを晴らさなければ気が済まないのは、間違いないらしい。

力を込める素振りを見せると、ピシツ、という皮が切れる音を微妙に鳴らしながら、両腕が飢えた蛇のようにくねりながら伸びていく。掌からは口だろうか、黄ばんだ歯がビツシリ並んだ開口部がカチカチと開閉を繰り返し、はたてを喰らわんとしている。

「近づくなーこの化け物!!」

はたての罵倒と共に伸ばした手が紙を裂くように両断され、再び灼熱の閃光に身を焦がす。当たりどころが悪かったせいか、2度目の攻撃に身体は耐えきれず、タタラは溶解を始めた肉と骨を目の当たりにしながら動きを止めた。

着地し、呻き声を散発的に発するサンカを安静にできる場所に降ろす。手を繋いで歩いていた時は背が高く見えたが、胴と頭だけになっってしまった今でははたてとそう変わらない背丈だ。

動揺しながらも、生と死の狭間に置かれた彼を起こそうと、強く揺する。

「ねえ、お兄ちゃん!起きてよ!ねえ...ねえってば!」

呼びかけに対し、サンカはうつすらと目を開ける。しかし、その双眸はたてを捉える事なく揺れていた。試しに手を振ってみたものの、何の反応も示しておらず、目としての機能が失われているのは明白

だった。

「なんだ。着いて来てたのか・・・困った娘だな、君は・・・」
「！」

掠れて聞き取りにくいものの、頬に触れる手に対して反応を見せた。彼は咳き込んで血を数滴吐き出し、必死の形相で継るように口を動かす。

「済まないが介錯を頼めないか。絞め殺すだけでいいんだが」

「・・・やだ・・・そんなの嫌！お兄ちゃんが死んだら・・・私っ・・・私はず・・・」

はたては弱弱しく叱りつけて首を大きく横へ振り、彼の口を塞ぐように胸元まで抱き寄せて強く抱きしめた。サンカは困り顔で小さく微笑むと、今際の言葉を少しづつ紡ぐ。

「まさか君に助けられるなんてね・・・なあはたて。もし、人生が2回あつたら、僕はもう一度はたてを好きになって、もう一度一緒に・・・」
「・・・お兄ちゃん？」

待っても、二度と彼が口を利く事は無かった。力は抜け、生きた証である熱でさえも消え、瞳孔は開き、生命の波動を感じさせない冷たさを伴っていく。

「やだよ・・・私を独りにしないでよ！お兄ちゃん！」

認めたくない。無駄だと知りながら何度も起こそうとしたが、動く気配は無かった。

「はたてちゃん！」
「！」

肩を掴まれ、強い力でサンカから引き剥がされる。ドキリとして振り向くと、そこには文がいた。里から勝手に抜け出したはたてを心配し、大人達の目を盗んで追って来たのだ。

文は事情を理解しつつも、はたてを宥めて里へ連れ戻そうとする

が、はたては頑なに拒否を示す。

「待ってよ！お兄ちゃんも連れて行かなきゃ―」

「この人間さんはもう死んじやったの!!・・・私達だけでも帰ろう。じゃないと、はたてちゃんの為に戦った人間さん、悲しむと思う」

放せと暴れる彼女を一喝し、鴉天狗の中でも最速を誇る文は飛び立った。里がこの地から切り離されるまで猶予がないので、早急に戻る必要があった。

文に掴まれてなす術も無いはたては、遠ざかる愛する人の遺骸を目に映し、一際大きく泣き叫んだ。枯れ果てた喉から発せられる声は、あたかも本物の鴉のようだった。

なんだ？一体どうなってる？

サンカは自身の置かれた状態に疑問を呈した。確かに死んだと思ったのだが、何故か肉体の中から文に連れられて去りゆくはたてを見ている。

薄ら寒さをおぼえる重たい肉体は微動だにしない。唯一目線だけは動かせたので、戯けの極みであるタタラの方を見ると、肉塊になりかけの彼が僅かに動いていた。

すぐに襲ってくる事は無いと思うが、はたての攻撃で散り散りになった肉が自走して戻っていくので、時期に活動を再開してしまうだろう。

「お？まさかまだ生きようとしているのか？」

頭に下品な女の声が響く。それらしい人物は確認できないが、サンカは動かない口の代わりに頭の中で自嘲気味に返した。

（あの世で門前払いされた。殺生を続けた奴は、良く訳の分からない化け物に食われるのがお似合いだな）

「本当にそうなのか？お前、無自覚に生きたいなんて思ってないか？」

(何を根拠に?)

思考を読んだ事に驚きつつも、理由を尋ねた。

「自分の体を作り替えてるからさ。その黒い目からすると、次の転生先は餓鬼か?」

(は?)

世界に霞みが掛かり、ぐるりと体が回されるのを感じた。目の濁きを覚えて瞬きすると、近代的な天井と、不安に満ちた表情の文がいた。

「目が覚めました!」

「よおし!」

喜ばしそうにするにとりの声だ。とすれば、此処は彼女の工房になるのだろう。いつの間に連れてこられたのか分からないが、そんな事よりも左ひじから先、及び両膝から先の感覚が無いのが気がかりでならない。

「思ったより元気そうね。霊力を流し込むだけで延命するなんて、流石だわ」

「紫さん」

ボロボロになった紫が現れる。サンカはそれを見て何かを察し、目つきが鋭くなった。

「早く此処から出せ。あの娘が、はたてが待ってる」

「サ、サンカさん?」

「心配かけたな。もう、俺は大丈夫だ」

口調が激変した事に文が驚く。紫も同様だったが、すぐに頷いて河童達に指示を飛ばした。

94話 戦闘

霊夢は霊力を練り上げながら、無差別に攻撃を続けるタタラを注意深く観察していた。

人によつてある程度の法則性のある弾幕は、パターンを記憶できれば回避は容易い。実際、タタラの単調で変化に乏しい弾幕は記憶も容易で、1回も見れば最適な攻略法が頭に浮かんだ。

襲いかかる光球の群れを紙一重でかわし、自身に追従する陰陽玉から、至近距離で光弾を浴びせる。しかし、彼女の放った攻撃はタタラの手前で光と威力を急速に弱めて失活してしまい、風前の灯火の如く虚しく消えていく。

勝負が始まって数回同じ事の繰り返しをしているが、いくら此方が仕掛けても、タタラを取り巻く緑色の霧のような物に阻まれ、痛手を負わせられない。

紫の情報では、剣等の実体がある攻撃でなければ通用しないらしいが、そもそも手元にあるのはお清めした針程度で、考えて使わなければあつという間に手も足も出なくなる為、隙を作るにも弾幕に頼らざるを得ないのだ。

霊夢は欠けた月の浮かぶ方角を見上げ、溜め息をつく。

(頼みの綱があんなんじゃ、どうしようもないわね)

サンカが戻ってくるまで時間を稼げれば良いと紫から言われているが、あの様子では命を繋ぎとめるまで間に合わないだろう。行き先から考えるにおよそ何をする気なのか見当はつくが、もし上手くいかなかったら、あれをどうすれば良いのだろうか。

(そろそろ来るかしら)

ヒキガエルの鳴き声に似た音を聞き取ると、赤く発光する光球を平坦に敷き詰めて壁を作り、防御の姿勢をとる。直後に爆発音が連続して発生し、壁に少しだけヒビが入った。持ち応えはしたが、次の攻撃は防ぎきれぬだろうか。

「まったく、よくもあんなのを幻想郷に入れてくれたわね。鬱陶しいったらありやしないわ」

愚痴を言いつつ大幣で肩を叩きながら待ち受けていると、背後に殺気を感じて回避を行いつつ、大幣で急所を防御する。

「スペルカード、夢想ー」

スペルを宣言し、背後をとった者へ弾幕を叩き込もうとしたが、霊夢は途中で攻撃を止めた。殺気に向けてきた相手は人型を逸脱した怪物ではなく、ミニ八卦炉を構え、血走った目で睨みつける友人だったのだ。

「魔理沙!？」

腕を蹴り上げると、八卦炉から極大射程のレーザーが打ち出される。頭上を通り過ぎた光の柱は土を巻き上げ、砕けた石や土が顔に当たって頬を切った。魔理沙はミニ八卦炉を投げ捨て、霊夢に襲い掛かる。

「ふざけてる場合なの!?!ちゃんと相手を見なさい!」

攻撃を軽く往なすと、ヨタヨタと足をもたつかせながら倒れた。霊夢が顔を覗き込むと、彼女は酩酊しているのか焦点の定まらぬ目をしており、起き上がりながら再度掴みかかって来た。

「いい加減にしなさい!」

明らかに様子がおかしいが、歯向かうなら容赦はしない。印を結んでから大幣で顔を引っ叩き、怯んでいる隙に護符を押し付けて自由を奪い、邪魔にならない場所へ転がした。緑色の粘着物が撒き散らされる。

改めて境内の方を見る。幸いにも効力を保っているらしく、弾幕をしつかり弾いて天狗達や境内を守っていた。

一安心ではあるが、勝負が長引けば長引くほど効力を失う代物なの

であまり呑気にしていられない。手早くカタを付けなければいけないだろう。

「やるしかないわね・・・スペルカード、結界・光と闇の網目」

見かねた紫がスペルを唱えると、現れた大玉の光球から光線を放ち、タタラの動きを阻害させる。そこへ小さな弾幕をバラまいて薙ぎ払うが、やはり微塵も利いていない。しかしながら、自由に動けないのは霊夢にとって好機だ。

針を投擲する。針は額の真ん中を正確に捉え、風切り音を立てて飛翔していく。

『グゲツ』

奇声と共に鈍い音を立てて見事命中した。ぶつけた箇所は粉々になっており、頭からは血ではなく悪臭を放つ液体を流し、心なしか頭蓋が変形したようにも見えた。物理攻撃はかなり効果的なのだろう。

霊夢はタタラの殺気が増幅したのを感じ、再度針を投擲しようと袖の中に手を入れる。

『・・・冥獄・明星虚空』

閃光。直後に鈍い痛みが駆け巡り、紫共々鳥居まで弾かれたように飛ばされる。

霊夢は結界に焼かれる前に能力を使用して空へと上昇し、紫は隙間を開いて逃げ込んだ。タタラは暴れ狂う鼠花火のように、四方八方に向かつて弾幕を乱発する。

「くっー！」

濁流のように滅茶苦茶に襲い掛かる攻撃の中、改めて針を投げて攻撃する。だが、その針は割って入った魔理沙に遮られ、彼女の胸に深々と突き刺さった。

確かに動きは封じたはず―霊夢が面食らうと、投げつけられたように魔理沙が不自然な姿勢で体当たりしてきた。同時に焦げ臭い臭気

が鼻孔に流れ込む。

「まさかアンタ・・・スペルカード！夢想転生！」

諸共弾幕を浴びせるつもりだと気づき、彼女を蹴り飛ばして射線から排除し、僅差でスペルを発動した。宙に浮いた状態の彼女には弾幕は直撃せず、まるで透過するような挙動を見せており、どれほど強大な力であっても、彼女の能力の前には無意味に等しいのだと証明しているようだった。

あらゆる物から宙に浮く。それは正に、霊夢の真骨頂なのである。

「アイツに何をしたの？答えによつてはタダじゃおかないわ」

『ヒツ・・・ヒヒ・・・答える義務は—』

タタラの姿が忽然と消える。攻撃が効かない事に恐れをなして逃げたのか？霊夢が肩の力を抜こうとしたその時、既にタタラは次の行動へと移っていた。

『スペルカード。冥符・インドラの矢』

95話 一人の英雄

境内を覆う結界の上で行われている決闘は狂氣的なまでに激しく、時々衝撃波によって大気が震えた。結界が効力を保っているおかげで傷を負わずに済んでいるが、もしこの結界の傘が無かったら、下に居る者達は光の奔流に打たれて、骨も残らないだろう。

サンカが連れて行かれてしまっただけの時間が過ぎたのだろうか。多少落ち着きを取り戻しはしたが、それはどうにか正気を繋ぎ留めているに過ぎない。情けないが、自分を鼓舞していなければマトモで居られないのだ。

加えて、普段なら鮮烈で美しい弾幕は、風景も含めてモノクロかつ単調に見えていた。自身も弾幕を展開して霊夢や紫の援護をしているのだが、それすらも色が消え失せ、僅かな濃淡で色の違いが区別できている程度だ。

(サンカ……)

永遠に続くと思えてしまう時の中で、はたては攻撃の手を緩め、この悪夢のような状況の行く末を思案した。もし延命の為の処置を施しても、あのまま目が醒めなかつたら……そんな悪い予想ばかりが浮かんでは消えを繰り返し、彼を幻想郷に引き込まなければ穏やかに過ごせたのではないかと、自身を更に追い詰めてしまう。

(また私のせいで……なんでいつも)

冷静さを失いながら懺悔を始めると、ドゴツと鈍い音が木霊し、意思とは無関係にビクリと肩が跳ねる。霊夢の方を見ると、花火の様に小規模な爆発が断続的に続き、標的を見失った光弾が地表へ降り注ぐのが見えた。

大きさも様々なそれらの光弾は、景観を整える為に植えられた木や、整備された参道を見るも無惨な瓦礫の山へと一変させ、天狗達からどよめきや悲鳴が上がった。正しく遊戯の範疇を超えた威力の強さを物語っており、これが遊びではなく正真正銘の殺し合いを目的と

した殺伐な物なのは明らかだ。

「いい加減封印されなさいよ!!」

陰陽玉を纏った霊夢が、毒蛾の様におどろおどろしく霧を撒き散らすタタラを猛追し、一騎打ちを仕掛けている。若干霊夢が圧している気がするが、息が上がり始めているのか隙が増えており、攻勢が逆転してしまうのも時間の問題だろう。遠巻きでも力を消費しているのが良く分かった。

「はたて、気をしっかり持ちなさい」

気を取られていると、隙間から紫が顔を出した。彼女は普段通りの飄々とした態度を装っているが、若干の焦りを隠しきれておらず、逼迫しているのが伝わってくる。

「彼はあの程度じゃ死なないわ。傍には文と藍をつけているし、なにも心配する必要は……」

語りかけているが、話は右から左へと抜けて行き、頭に入ってきた。彼女は何をしてもだんまりを決め込んでいるはたてに業を煮やしたのか、両肩を掴んでその鋭い目線を合わせ、強い口調で言い放った。

「しっかりしなさい。彼と……サンカと一緒に居たいんでしょう？ 貴方も闘いなさい。彼が帰ってくるまで、奴を押し留めるのよ」

此方が不利と悟っていたらしく、攻撃を止めてしまったはたてへと続けざまに都合の良さそうな言葉を並べて激を飛ばす。紫がこれだけ感情的になるのも、そうそうは無いだろう。

はたては肩を掴む手を乱雑に払いのけると、自分の頬を数度叩いて雑念を殺し、やけ気味にスペルを唱えた。

「スペルカード！ 連写・ラピッドショット！」

鱗状の小さな光弾を撃ちながらタタラに接近すると、携帯が音を立

て、ファインダーを模した複数の画面が囲むように現れた。はたては携帯に備えられたカメラに相手の姿を収め、シャッターを切る。

撮影された空間に赤い電光が走り、タタラの片腕を弾き飛ばす。タラは意外そうにしつつも2撃目を避け、反撃として螺旋状に回転する光線で十字砲火を浴びせる。

「こんなもの……!!」

三度目の攻撃も避けられはしたものの、はたての携帯はすぐに次の撮影の準備が始まり、数秒して準備が整った。彼女は憎い相手を追い立てながら、再度ファインダー内に姿を収めようとする。

「ぐあっ!!」

苦悶に満ちた声―霊夢が目の前を焦げ臭さを伴いながら落ちていく。予想よりも早く消耗していたらしく、タタラが外した攻撃に運悪く当たってしまったらしい。

「アンタの弾幕なんか……これっぽっちも……」

なおも虚勢を張り続け、立ち上がって強大な敵を見据えるのは、性格なのか或いは博麗の巫女としての立場故なのだろうか。霊夢は傷だらけの体に無理に力を入れ、立ち上がって飛び立とうとした。

そんな彼女が癪に障ったらしく、タタラうなり声を上げる。同時に霊夢の胸の前で小さな何かが光ると、彼女は弾かれたように後ろへ飛び、灯籠に背中を打ち付けて動きが止まった。境内を覆っていた境界が効力を失って霧散していくのを見るに、残っている力も使い果たしたのだろう。

「霊夢―」

『人の心配をしている場合かあ?』

スペルを唱えようとするも、既にタタラは目と鼻の先に移動しており、はたてが行動を起こす前に首を掴まれてしまった。喉が締めまり、息が止まる。

「がはっ！」

『まさかあの時の天狗が目の前に現れるとはあ……あの男への見せしめに此処で喰らってやろう』

顔が左右に割れ、黄ばんだ牙を露わにする。食われる前になんとか逃げ出そうと足蹴にするが、タタラの体から新たに生えてきた腕に取り押さえられ、完全に封じられてしまった。頬に牙が刺さり、いよいよ呑み込まれる段階となる。

(嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ！)

数秒先の未来を予測し、はたては見開いた目に恐怖の涙を浮かべた――その時である。

「スペルカード。冥符・一閻魔王の飛礫」

赤黒い小さな針の雨がタタラの右半身を引き裂き、血の飛沫さえも一呼吸の内に蒸散させる。スペルの特徴はサンカの使用する黄泉御霊に似るが、格段に威力と速さが勝り、慈悲を微塵も感じさせない圧巻の光景は、正しく閻魔の捌きであると言える。

「この弾幕……もしかして！」

世界に色が戻り、胸の奥底から湧き上がる喜びを覚えた。彼女は見たのだ。月が照らす夜空に、一筋の線が伸びて行くのを。

96話 希望の明星

『馬鹿な、致命傷の筈だ!!何故平然としていられる!?!』

タタラは消失した半身を新たに作り出しながら、はたてとの間に割って入った紫色の燐光を放つ男に向かって吠えた。

男は闇に溶け込む黒い装束を身に纏っていて、月光に薄っすらと照らし出されたその両足と左腕は、無機失にも金属質な色合いを帯びている。

人間の体躯としては相応しくないその巨大な腕は、人とも妖怪とも異なる不自然さと奇妙さを併せ持っており、推進機と舵が組み込まれた両足は白色で、紫色のラインが幾何学的に走っていた。

男はタタラを凍てつくような、殺意を孕んだ表情でねめつけていたが、再生に手間取って暫く攻撃してはこないと分かると、不意に被った帽子を取った。振り向いて呆け顔のはたてを視線に捉えると、黄金色に輝く目を瞬かせて小さく微笑み、その手に収めた帽子を振って軽く会釈する。

「ただいま、はたて」

その言葉を聞くや否や、緊張が綻び、嬉しいやら驚いたやらで思わず声が出てしまった。生と死の狭間から帰還したサンカは、河童の元へ連れて行かれる前と比べて漂わせている雰囲気はやや異なっていたが、黄金色に発光する瞳や、純白の髪は依然変わらない様子で馴染み深い。

「サンカー」

名前を呼ばれた彼は喜々とするはたてに苦笑いすると、彼女に2、3歩歩み寄り、唯一喪失を免れた手を使って頭をワシヤワシヤと撫でた。髪越しに伝わる体温は氷のように冷ややかだが、はたてだけに向けられた温もりは確かに感じ取れるし、何より大きな手が心地よい。

はたては今が戦闘中という事も忘れて頬に朱を浮かべ、嫌がることなく緩み切った表情でその所為を受け入れた。仄かに香る匂いや

纏った空気に込められた思いは、強い安心感をも覚えさせる。

「待たせてごめん。寂しかっただろう？心配かけたね」

優しい声色で尋ねられ、謝らなくていいと首を大きく横に振って否定する。五体満足では無いにせよ、また生きて会えたのだから不服はない。

「サンカさん！」

「椛ちゃん……そうか、大きくなつたなあ」

意味深な物の口振りだなど、二人の元へやって来た椛が首を捻る。天狗とは言え、たった数時間で大幅に成長したりはしないのだ。はたしても不思議そうにサンカを見つめている。

『死に損ないがああ!!』

暫しの夢から引き戻されると、急速に回復させたのが仇となったのか、より人型から姿が遺脱したタタラが、怒り狂いながら両腕を伸ばして襲わんとしていた。サンカは気づいていないのか、はたてと話すのに夢中で何もしないようだ。

「危ない！」

はたては血相を変え、迫りくる脅威を排除するべく大急ぎで妖力を練り上げようとする。一撃で致命傷を与えてくる攻撃は、幾ら餓鬼と言えど二度目は耐えられる筈がない。そこで彼女は、自身の弾幕を少し弄つてやれば、その場凌ぎの防壁くらいは作れるだろうと考えたのだ。

だが、サンカは彼女の不安をよそに、伸びて来た腕をいとも容易く捕らえて枯れ枝を折るように握り潰し、肩から先を引きちぎって叩き捨てた。腐臭を放つどす黒く粘着質な液体が飛び散って、頬を汚す。

『ぐああああ!!』

「……敵を見下し過ぎる癖、昔からなにも変わってないな。お前の悪

い癖だ」

肩越しに振り返って吐き捨てる。殺気に向けられた訳ではないのだが、まき散らされる殺意に気圧された棍が尻尾の毛を逆立てて顔を青くする。彼女は彼を慕ってこそいたが、この時ばかりは恐怖した。

サンカは棍の感情を酌むと、その身を翻してサーベルを引き抜いた。寒々しい鈍色の光沢は、視界に入れるだけで両断されてしまいうな凶暴性を秘めているかに見える。

「……サンカ？」

彼ははたてからの奇異の視線に気づくと、再度微笑みを向けてから帽子を深く被り治した。

「大丈夫だよ、僕はもう十分助けられたから。だから――」

凍てつく程の寒さを覚えて肌が粟立つ。はたてが自然とサンカから離れると、彼は両足の飛行装置を最大出力状態になるまで力を込め、サーベルをまつすぐに構えた。彼の口が言葉を紡ぐ。

「だから今度は、俺がはたてを護るんだ。あの時のように！」

今まで蓄えていた全ての力を解放して踏み出し、燐光を纏って飛翔した。彼は強大な相手に臆する事も恐怖する事も無く、ただ正確に弾幕を避けながらタタラの喉笛だけを狙って猛然と突き進む。

「もしかして、サンカは記憶を……？」

その考察は確実に当たっているだろう。事実、標的を打倒さんとするその姿は、英雄として彼女の前に現れた時と全く同じだったからだ。

本当の意味でようやく帰って来てくれた。はたては神に祈る様に両手を合わせ、彼の勝利を願った。



サンカは間合いに入ると同時に刺突したが、タタラが新たに生やした腕で防御したせいで、弾かれて狙いが反れてしまった。

だがしかし、初弾が回避されてしまうのは織り込み済みだったらしく、カウンターの拳を振り上げて来たタタラに対して義手で防御を行い、がら空きの脳天に踵を落として頭蓋を粉碎した。奇声を発して悶えるタタラに、サンカは追い打ちをかける。

『この馬鹿猿がああああ!!』

数度殴打していると、唐突に風景が白んだ。それから少し遅れて衝撃が全身に広がり、じきに焼き付くような痛みがやって来てつい呻いてしまう。弾幕を真正面から受けてしまったらしく、少し焦げ臭い。

「なりふり構わずか。堕ちたもんだ」

サンカは改めて距離をおき、頬から滲み出た己の血を拭き取る。

嘗ては痛覚が存在しないのが有利な点であったが、今は人並みに痛みを感じるし、昔の様に文字通り捨て身の戦術も取れない。それに自身の身だけでなく、はたて、並びにその他諸々の身を案じながら戦うというのは、中々に難しい。

「仕方ないか・・・些か癩だが」

そう言ってサーベルを収める。サンカはより一層険しい目つきになると、スペカを取り出した。

97話 逆転

霊夢は目を覚ますと、グチャグチャになった参道や、完膚無きまでに破壊しつくされた灯籠を見て憂鬱になり、誰にぶつけるでもなく悪態をついた。異変が起きなければその日を暮らす銭にも困窮しているのに、彼らには周囲への配慮というのを知らないのだろうか。

ゴウツ―

頭上から吹き付けた強い圧を受け、自然と体を竦める。それからやや遅れて鈍く重い音が山に反響し、続けざまに猿のような奇声を上げる何かが降って来た。落下の衝撃で参道は更に荒廃し、顔めがけて飛んできた破片で頬を切る。

「どんだけ後始末を面倒にさせるのよ」

ポツリと愚痴ると、黒い服に身を包んだ男が音も無く降り立った。男は格好とは真逆な真っ白な髪と肌色で、とても寒々しい色合いだ。

男が未だ晴れぬ煙へと機械仕掛けの手を向ける。義手の指先に設けられた砲口に光が灯ると、光は鋭利な刃物を連想させる条線となつて放たれ、一度収束した後放物線を描いて降り、広範囲に散りながら炸裂する。

「この程度じゃ死なないのだろうか？隠れていないで、さっさと出てこい！」

サンカの声だ。眠りこけている間に戻って来たらしい。

以前見た時と比べて大きく姿が変わっていたので一見すると誰か分からなかったが、とりあえずはきつちり動いているようだ。多勢に無勢、難なくタタラを仕留められるだろう。

立ち込める煙の中の人物は彼の呼びかけに応じたのか、景観を鮮やかに彩る光線の間を縫って、円錐の形をした緑色の飛礫を飛ばして来た。飛礫はサンカというよりは霊夢を狙っていたらしく、彼の脇を高

速で通り過ぎようとしていたが、結界に阻まれて跳弾し、目標を見失ってあられもない方向へと飛んで行った。

「久しいな、脇巫女。今のお前は何代目だ？」

「んなっ!？」

サンカが振り向き、霊夢を呼ぶ。開口一番に脇巫女と言われて軽いショックを受けたが、それは間を置いて怒りへと変わった。瀕死の所を逃がしてやったというのに、その言い草と偉そうな態度はなんだ。

霊夢は大幣をサンカに向けて苦言を呈したが、彼は戦力に成り得ない巫女と言いつ争いをする気が無いらしく、面倒くさそうに手をヒラヒラさせ、起き上がった敵へと勇んで向かっていく。

「アンタねえ!!」

「止めなさい霊夢。吠えたって何にもならないわよ?」

「うっさいー!アンタは口を挟まないでよ!」

紫が隙間から上半身を乗り出して窘めた。面持ちから焦りは消え、飄々とした余裕のある笑みを湛えている。

霊夢は口をへの字に曲げて悪態をつき

「事が終わったら絶対に退治してやるわ」

と、殺意溢れる語気で呟いた。それを聞いた紫は頬杖を突き、ある種の警告ともとれる言葉を宛てる。

「そう、なら勝手にしなさい。もつとも、今のアナタじゃ絶対に勝てないと思うけど……ね」

「どういう意味よ」

「あら?分からなくて?」

反応を楽しむように扇を口に当ててクスクスと笑う。やはり腹の内が見えない相手はやりにくいと、霊夢は思った。

もったいぶるなという霊夢からの圧を読み取った紫は、光の暴風雨の中を何の対策も無しに、多少の被弾も覚悟で突き進んで行く彼の者

の後ろ姿を見つめながら、目を細めた。

「宗教の思想は違うと思うけど、仏教でいう所の業と輪廻転生の概念は知っているわよね？」

それくらいなら多少は分かる、と霊夢は生返事で応えた。

業とは、過去の行いによって発生した因果により、巡り巡って苦楽が生じるとする考えである。輪廻思想については、業に結び付けられ、前世での行い次第で六道の何れかの道が決まり、転生するという現象が永遠に繰り返されるといいう世界・生命観だと遠い昔に教えられた。

少なくとも神社で巫女をしている霊夢にとっては眉唾であるしどうでも良いが、それがサンカを封印するのが困難だとする理由と、何の関係があると言うのか。

「そうね。大多数の人間は知らず知らず、無意識に自らの業で自らの処遇を決めてしまう。どれだけ得を積んでも、業や輪廻を制御するのは並大抵の事ではないわ……でも、彼はそれらを完全に支配し、自身だけでなく、他人が迎える結末や処遇をも自由に選べてしまう権利がある。何故なのか分かるかしら？」

「……まさか」

「自らを縛る最後の輪廻を断つか或いは……信じましょう、彼が求める行く末を」

幻想郷の命運はサンカが握っている。紫は百年越しの戦いを見届けようと、何処か似た二人を視界に入れた。



『やはりその能力、この俺にふさわしい!!喰われて養分となれ!!』

四肢が乱立し体は裂け、既に人型ですら無くなったタタラはなおも起き上がり、自身の能力を完全に理解し、受け入れたサンカに吠えた。それは単に、動物的な本能に従っているからなのか、或いは大いなる

野望の為に我を忘れて見境が無くなっているのか。生きる事への只ならぬ執着を見て、彼は冷たく感情を読み取れない声で罵倒する。

「道を踏み外してまで欲を満たしたいとは、度し難いまでに醜いな。それにしてもその能力……確か、へ菌を操る程度の能力だっただか？人の畏れがなければ存在できない、貴様らしい陰気臭い能力だな」

『ほざけええええ!!』

声とも獣の咆哮ともとれる怒声を発し、タタラが這いつくばった姿勢で迫ってくる。それに対し、サンカはスペカを向けて宣言した。

「そんなに食いたいならたららふく食べ。スペルカード、雷華・百鬼若松の構え」

大玉の光球とそれに追従する小さな鱗光を数発放出すると、タタラは吸い寄せられるように近づいていく。

二回程スペルを使って解ったのだが、緑色の霧Ⅱ菌を散布している間は相手の弾幕を吸収して自分に還元できるらしい。質の悪い力だが、サンカはそれを攻撃に利用してみてもどうかと考えたのだ。

そしてその判断は、すぐに間違いではないと判明する。

『ゲゴツ!?!』

タタラが黒い液体を吐いた。一度に吸収可能な量の上限を超過した霊力が体内で暴走し、内側から蝕んだのだ。使い方を誤った薬が毒となるように、膨大な霊力は強力な毒になったのである。

「お前が生きられる時間はとうに過ぎた。利子を払ってもらおうぞ」

サーベルの刃先をタタラに向けたサンカは、自身を死刑執行人に見立てて、ゆっくりと確かな歩みを始めた。

98話 終戦

タタラは鼻先に向けられたサーベルを前にして、形勢不利に陥った状況を覆す余力がまだ残っていた。大量の霊力に中てられはしたが、まだカードは此方にあるのだと、サンカに語ってみせる。

『それで勝ったつもりかあ?』

タタラが握り拳を作って空虚を手練り寄せると、憔悴しきった魔理沙が真上から呐喊してきた。彼女は八卦炉の砲口をサンカに向け、いつでも攻撃が行える状態に入っている。タタラのしたり顔を見るに、見知った相手、それも女であれば手出しできないと履んだのだろう。サンカは義手で八卦炉の射線上から自分の体を隠し、身を屈めて防御の姿勢を取った。間を置かずに弾幕ごっこでも使われた極大のレーザーが発射され、大気が揺らぐ程の尋常ではない熱量を伴って着弾する。

相も変わらず火力が高い。瞬く間に義肢の表面を溶解せしめ、指の駆動に深刻な影響を与え始めた。このままではやられてしまう。

「……のー」

動かない義手を生身の手で掴み、角度を少しだけずらしてレーザーを反射させた。サンカは両足の飛行装置の推力を最大まで上げ、光の柱を散らせながら魔理沙へと体当たりを敢行する。

「不空羅索」

腹に鉄拳を叩き込むと共に能力を行使して菌を吐き出させると、ぐったりしてもたれ掛かって来た魔理沙を霊夢の方へと投げ飛ばす。霊夢の腹に直撃したのか、

「うっ」

とぐぐもった短い声が上がった。

(しまった。邪魔だが投げるべきではなかったな)

『天符・インドラの矢あー!』

当たり所が悪かっただろうかと思っていると、不意打ちのつもりか、タタラが新たな弾幕を生成した。丸太くらいの太さの矢がサンカを中心にして展開され、音が遅れて聞こえてくる速さで襲いかかる。

「舐めるな」

サンカは地面スレスレを高速で飛行しつつ、舵を細かく動作させて一切の攻撃を回避していく。完全に覚醒する以前なら耐えられなかった過度な負荷も、餓鬼としての強靱な肉体を手に入れてからはどうという事は無い。弾幕を退けつつ、自身が得意とする間合いへ入る。

「射程距離だ。接近戦なら弾幕は使えまい!」

壊れかけの義手に備わる4本の指先から、光線を発振・集束させてひっつき、肉を溶断した。高濃度に圧縮された霊力を浴びたタタラは、吸収する事も叶わず、切断面がケロイド状に爛れる。

斃せる。確信し、トドメにサーベルをタタラの額へ突き立てようとした……その時だった。

ボンツ―

後方からの爆発音。突き上げる衝撃が大腿骨から頭部へと伝わり、サーベルを落としかける。

今ので内臓を損傷したのか、意思とは無関係に大量の鮮血を吐き出す。重力を生み出す飛行装置は沈黙し、数度弾みながらグシャリと音を立てて墜落した。チラリと見えた両足は黒焦げになり、太腿にはその破片が幾つも突き刺さっていて、見るからに痛々しかった。

「ぐうあつー!」

強かに体を打ち付けるが、勝機を逃すまいとその手にした得物を投擲する。サーベルは空気を引き裂いてタタラへと向かうが、無数の腕に弾かれてあられもない方向へと飛んで行ってしまい、決定打とはな

らない。タタラはニタニタと笑うと、地に伏したサンカの髪を掴んで引き起こし、四肢を拘束して宙づりにした。

『惜しかったなあ？……ここまで追い詰めたのは褒めてやるが、貴様じゃあ俺に勝てんぞお？』

「はあ、はあ……確かに満身創痍で、死に体の俺一人じゃ勝てないさ。だが……形は違えど予定どおりだ。はたて!!」

決死の呼び声に呼応してタタラの背中を刃が貫き、切っ先が胸へと抜ける。外したかに思われたサーベルははたてが受け止めており、タタラの意表を突く形で襲撃したのだ。

サンカは義手の肘から上腕部を引き抜き、折りたたまれていたピツクをこめかみに向けて突き刺し、崩すように素早くかき回した。緊急用に拵えさせただけの事はある、タタラは二段構えの不意打ちを全く予見できていなかった。

『ぎゃああああ!!』

「サンカから……サンカから離れる、この化け物!!」

はたては柄を両手で握り、青筋が浮かぶ程に力を入れて袈裟に斬り捨てる。流石は妖怪なだけはある、サーベルが負荷に耐えられず根本から折れ、刃先が回転しながら近くにあった灯籠に突き刺さってしまった。

タタラは断末魔の叫びが一際大きな声を挙げ、最期の悪足掻きとばかりにサンカの頬を爪で歯が確認できるほど抉り取り、漸く力尽きた。数百年に亘って人外の者を脅かし、人間に恐れ戦かれた存在の、余りにあつけない最期だった。

「ぐえっ」

拘束から解放されたサンカは頬の痛みを歪め、思わず傷口を押しさえた。体はボロボロであるし、今なら霊夢はおろか椋にさえも容易く殺められてしまうだろう。

「サンカ！」

「……はたて」

しわがれた声を聴いて、はたては柄だけになったサーベルを手放し、力なく首を垂れるサンカを起き上がらせる。悲しいかな、ただの人間と同等程度しか残っていなかった力を、辛うじて生きられるギリギリまで使い果たしたせいで、彼女の手を払いのける気力も体力も無くなっていた。

ザリザリ―砂利を踏みしめる音が耳に障る。重力に任せるまま顔を向けると、霊夢が大幣と護符を携えて近づいて来ていた。回復を終えていたらしく、服が煤けている以外は健常そのものだ。

はたては自身の体を盾にし、弾幕を展開しようと携帯を構える。

「別にアンタ達をどうこうする気は無いわよ。用があるのはそつち」

弾幕勝負をする気はないと示すと、一瞬でタタラの死骸を護符で包み、私怨も込めて大幣で引つ叩いた。彼女は面倒くさそうに肩を鳴らし、その他大勢にあれこれ手伝わせながら、死骸を境内の中心へと引き摺っていく。

「それを……それをどうする気だ？」

「アンタの仕事は終わり。後始末は私がやるから、アンタは社で休養を取りなさい。言っとくけど、変な事したら封印するからね」

さっさと行けと顎で指図し、紫さえ居なければ、と呟くのが聞こえた。餓鬼を前にして手を出すなど余程キツく言われたのだろう。その納得いかなそうな態度が、サンカには何故かおかしかった。

「フフツ」

「サンカ？」

「何でもない。それよりお腹が空いたな。はたて、何か作ってくれないか？」

「勿論よ！食べたいた物は何でも言って！」

夜が明け、山の間を登り始めた太陽が闇を照らし出す。その光景

は、二人が行動を共にし始めた時に見た、あの風景に似ていた。

最終話 まどろみにて

タタラは霊夢と紫の手によって嚴重な封印術を施された上、骨も残らず焼却された。強力な生命力を持っていたので無力化できるのか憂慮していたが、不死では無いので灰になってしまえば復活は出来ないと紫に教えられ、胸を撫で下ろした。人外達も悩みの種であり憎しみの対象である存在が消えた事で、枕を高くして眠れるだろう。

異変解決後、天狗の里では生き延びた天魔が皆を率いて再建を始めており、勢力こそ衰えはしたが、近々復興を終えると聞かされている。サンカも回復次第帰還する予定だが、その暁には壮大な宴会を催すつもりだと言う。無類の酒好きが多い天狗達である、どんな目に遭うかは想像するに容易い。

そして当のサンカはどうしているのかと言うと、季節が移り替わった現在でも、未だ博麗神社に身を置いていた。母屋の一室を借りて新たな手足が生えてくるまで療養しているのだが、全快するにはまだまだ時間が掛かると痛感する毎日である。再び自由に空を舞うのは暫く先になりそうだと、彼は見舞いの品を強奪しに来る霊夢を前に悔しかった。

(今日も来たか)

接近する気配に気づき、表紙がボロボロになった本を閉じて姿勢を正す。文とはたてが特ダネと称してサンカの活躍を記事にしたせいだ、見舞いと称して連日客人が訪れるのだ。

例を挙げるならば、単なる談笑の他、記録をさせてほしいと頼みに来る変わり者や、餓鬼に対する呪詛を吐き、決闘を申し込みに来る者(霊夢に叩き出されるが)等。それでも寝たきりが続く退屈極まりないこの生活では、暇な時間が潰せて有難い。

「どうぞ」

返事を聞くや否や、二人を隔てている障子が外れそうな勢いで開け放たれた。早朝の冷たい空気が部屋に流れ込み、吐かれる息が白い靄

となつて空へ溶けていく。

遠くに望む山々は美しい紅葉を湛えていたのに、今では寒々しい枯れ枝を伸ばすのみであり、本格的な冬の到来を視覚的にも訴えてくる。

来訪者を見ると、紫を基調とした装束を身に纏い、同色のリボンで長い髪を縛つてツインテールにしていた。彼女はサンカの姿を捉え、再会を喜ぶ笑みを見せ、明るく弾んだ声で話しかけてきた。

「おはよっ！具合はどう？」

「おはようはたて。まあ代わり映えはないかな。いつも来てくれて悪いね」

「良いの！私が好きで来てるんだから」

はたては朝刊の配達を終え次第、日が落ちるまで毎日付きっ切りで身の回りの世話をしてくれている。左手と両足が喰われているので仕方ないのだが、まるでヒモになったみたいで、あまりいい気分ではない。だが彼女からすればサンカを独占し、頼られるのが嬉しくてやっているらしいので、そこを気にしても仕方ないだろう。

華やかになった空気に、サンカは心底幸せそうに口元を緩める。

「隣、座つてもいい？」

「ああ、構わないよ」

「ありがと！つと、その林檎は？」

「これかい？夜明け前にフランとメイドさんがお見舞いに来てくれたんだ。紅魔館で採れたんだってさ」

「ふーん」

枕元に置いてあつた真紅の林檎を手にとると、はたては神妙な面持ちで匂いを嗅ぎ、表面をしげしげと観察する。不満げに頬を膨らませているのは、自分以外の女に物を貰ったからだろうか。

「なあに？どうしたの？」

林檎への興味が失せたらしく、視線に気づいた彼女はずっと顔を

近づけた。こうして間近で見られるのは関係が進展した今でも慣れない。

何でもないと思魔化そうか考えたが、美人になったねと当たり障りない一言を伝えると、彼女はやめてよと恥ずかし気に俯いた。

「……ねえ、サンカが私に出した宿題って、まだ覚えてる？」

はたてが照れくさそうに質問してきた。そういえば別れ際に花言葉調べてもらおうとか、そんな約束をしていた。二度と会えなくなると思悟して出題したが、実際はこうして再会しており、ここは答えを聞いてみても良いだろう。

「白い彼岸花の花言葉だったね？ちゃんと覚えてるよ。それじゃあ、答えを聞こうか」

「うん。白い彼岸花の花言葉は2つあって、一つは「また会う日を楽しみに」。もう一つが「思うは貴方一人」。どう？」

「正解だよ。言いつけを守ってくれたんだね」

「好きな人からのお願いだもの、当然じゃない？でも、サンカって意外とロマンチストなのね。それとも、ちよつと気取ったの？」

「ははは、案外面方かもしれないね……ああそうだ、僕からはたてに贈り物があるんだ。宿題のご褒美だと思って、受け取って欲しいんだ」「贈り物？」

サンカは懐から手のひらに収まる小さな箱を取り出し、はたてに差し出す。丁寧に梱包された箱は過去に魔理沙の家で目にした代物で、あしらわれたリボンの端が戦いで少しだけ焦げてしまっていた。

箱を受け取ったはたては促されるがまま、不思議そうにリボンと包みを取り去り、露わになった蓋を開く。

「これって……」

入っていたのは指輪だった。一点の曇りもなく磨き上げられた白銀に輝く指輪は、派手さこそ無いが良い仕上げが成されており、外界の店で一目惚れした指輪と瓜二つだった。

「はたてが欲しそうにしてた指輪を、にとりや魔理沙に頼んで作って貰ったんだ。オリジナルは向こうに置いて来ちゃったからさ」

「……」

「それと、外界において指輪を意中の人に贈るのはっ!?」

はたては言葉を遮り、唇を重ねた。薬を飲まれた時とは違って優しい接吻で、思わぬ不意打ちにサンカは赤面し、脈を速める。それは彼女も同じようで、尖った耳の先までも紅潮していた。互いにとって、今日は忘れられない一日となったようだ。

「こういうのずっと憧れてたの。最高のプレゼントをありがとう、サンカ!」

「ど、どういたしまして」

「ねえ、結納は何時にする? 私は大安の日が良いわ!」

「いやいや、気が早くないか? けど、それなら——」

夢に見ていた平穏で健やかな日常を、これから二人は共に歩んでいく。天狗と人間の奇妙な物語は、まだ始まったばかりだ。

—終—

おまけ 奇妙な話の裏側

紫は幻想入りしたサンカの処遇を決めかねていた。このまま置いておくにしてもその力はあまりにも強大であるし、もし悪用されでもしたらたまったものではない。紫単独で制圧するのも十分可能であるが、その場合は痛み分けになるだろう。

一応はたてに懐いていて、それ以外の天狗達にも気前よく接しているので放任してこそいるが、餓鬼なのだから有無を言わず処分してしまえという声も多く、短絡的に考えるのであれば殺すのが一番良い選択と考えられる。

だが長期的に考えた場合、必ずしも害になるとも言えないのだ。もしまたタタラのような霊夢でさえ手を焼く相手が現れた時、こちら側の切り札としても使えるだけでなく、能力の特性においても一線を画す彼を手元に置いておけば、平時においても抑止力として期待できる。恨みを持つ相手に度々襲撃されるとは思うが、そう簡単には死なないであろうし、問題とはならないだろう。

(結果的に運よく収まったけれど……)

実は、サンカとは外界で一度会った事がある。幻想郷を切り離す際に、人間を裏切つて妖怪側に加担した男がいると小耳にはさんで顔を拝みに行ったのだ。

だが、そこにいたのは餓鬼の特徴を備えた男―サンカで、四肢が千切れ飛んでいるにも拘らず、報復にやっつて来たはたての母親を殺害し、その死肉を食っており、最早人ですら無くなっていた。

あの時はさっさと帰ってしまったが、長い年月が過ぎたある日、幻想郷に迷い込んだサンカを見て、とても驚かされた。容姿も雰囲気も大きく異なっていたのも勿論要因であるが、あんな怪物然とした異形が目の前にいるひ弱な青年と同一人物だとは、今も信じがたいくらいだ。

そんな事情もあって餓鬼の唯一の生き残りは彼だとばかり思いこんでいたが、実際の生き残りは羅刹で、彼自身はその能力で肉体が変

質したに過ぎなかった。

はたてに關しても、何度制裁を加えても博麗神社に忍び込んで隙間を開こうとする奇行に悩まされていたが、まさか餓鬼と化したサンカを引き込む為にとつた行動だったとは思ってもよらず、同時期に正邪の手引きで侵入を目論んだ餓鬼羅刹の存在もあつて、精神的疲労はピークに達した。

結果的にサンカや霊夢達の働きによってある程度の解決は見込めたが、大量の死者の処理等まだまだ課題は山積みで、今年の冬眠はお預けになるだろう。

「それで、どうなさるのですか？」

藍が九本の尾をユラユラと揺らしながら、水入らずの一時を過ごす二人を隙間越しに眺める主に問うと、主は考える素振りも無く、即決で判断を伝えた。

「一先ず保留とするわ。今の所歯向かつてくるでもないし、鴉天狗との約束を反故するのめね」

何しろ中途半端を嫌う閻魔まで巻き込んだのだ。誠意をみせなければ連日抗議を受ける羽目になるし、駒として扱われた（現在進行形で使われているが）サンカも良い気分はしないだろう。

紫の答えを得た藍は表情が幾分か和らぎ、承知しましたと深々頭を下げて部屋から出ていく。

「輪廻を廻る程度の能力、を持った男、か……あの子はたても随分と酔狂な選択をしたものね」

運命があるとすれば、これも何かの廻り合わせなのかもしれない。紫は二人の間に存在する因果を想像すると共に隙間を閉じ、温みを帯びた空気を内包した部屋を後にした。